

奇譚クラス

新しい風俗文獻誌

7月号



1963・7

奇譚クラス

7月号

定価二百円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



日本版
サド侯爵悦虐絵巻

21枚組
15枚組
10枚組
5枚組
1枚組
（本誌の大きさ）
略号「さ9」

の一般書店にては一切販売いた
しませんが是非直接お申込み下さ
るようお願い致します。
内容はサド侯爵と自称する或る
億万長者の青年が、その巨大なる
富を背景として、美貌のうら若き
女性を飼育し訓練し、嗜虐すると
いう華麗にして熾烈なサド・スト
リーの完全絵画化であります。



連続吊り責フォートの決定版、未発表の秘蔵版

梨花悠紀子吊責写真特集

A5判 (21×15㎝) 感光紙焼付
八枚一組 五〇〇円 (送共)

A5判 (21×15㎝) 感光紙焼付
八枚一組 五〇〇円 (送共)

全身をくるぐる巻きに
余りの強烈さと刺戟の

第一集(逆エビ吊り)
両手首は後手に括られて、曲げた両足首と共に逆エビに緊縛された梨花嬢の肌には深々とローブが喰い込んでいる。ギリギリ、ギリギリと滑車を引き上げるとううう、と、思わず彼女の口から悲鳴が洩れ、じりじりと全身が浮き上って、苦悶の表情が彼女の顔面から、次第に足の

第二集（逆胴吊り）

ヒートツという悲鳴も口にかまされた猿ぐつわによつて、くぐもつてしまふ。繩は徐々に滑車によつて巻き上げられて頭を下にした全身は宙に浮いてきた。二の腕に、太股に、胴体にひどい程埋れてしまふ縄目。宙ぶらりんとなった裸身が吊り縄を中心として、ゆるく回る。時間が経つにつれて苦痛が次第に増してくるが、彼女はまだ頑張っている。

凄絶！とおきの未発表吊り責め写真の秘作、ここに堂々発表乞御期待

Mフオト・シリーズ(分譲品)粒選り新版写真紹介

先月号でMフオトの分譲品の発表をいたしました、やはり予想した通り、お申込みは非常に多くS派の新作の分譲を発表したときに比べて、十分の一にも達しない有様でした。理由はいろいろあることと思いますが、とにかく結果的には需要が少いので、一応ここに発表したものを以てお求め頂きたく新作の追加を中止して当分様子を見ることにいたします。分譲打ち切りになりますといけませんから是非お早い目にお申込み下さるようお待ちいたします。

股責の地獄

略号

(まそ)

大手札 四枚一組 五〇〇円

大塚啓子、高田 一

男の首の上に、どっかりとまたがり、股で責める大塚啓子嬢の新作をここに発表いたします。啓子嬢の股の間に挟まれたM男が首の上に馬乗りになられて、獅子鼻を指先で押されてあぐらをかくさされ咽喉を両太股で力いっぱい締めつけられるなど、大切な男の顔が女の太股によって、さんざんになぶられ辱められ上から侮蔑の目で眺められるといったMファン待望の女上位のポーズ。

犬の生態

略号

(そろ)

大手札 三枚一組 三〇〇円

絹川文代、杉 早夫

犬になった人間が絹川文代嬢によつて、どのようにいたぶられるか。マゾヒストの愛読者杉早夫を用いて実験したフオト。

足の味覚

略号

(そは)

大手札 三枚一組 三〇〇円

絹川文代、杉 早夫

ふっくらとした白い素足が犬奴の口に差し出される。ペロペロと如何にも美味しそうに舐める光景肉づきのよい足指の表情がMの味覚をそそる。

長靴は悶ゆ

略号

(そに)

大手札 四枚一組 四〇〇円

絹川文代、高田 一

革の長靴を穿いた絹川文代嬢の暴虐の下に呻吟するM男。長靴フティツシュのMにとって、これほど刺戟的で心を揺さぶる趣向はないだろう。

灰皿の男

略号

(そほ)

大手札 四枚一組 四〇〇円

絹川文代、高田 一

灰皿を持って仰向けに寝ころんで捧げている男の上に跨って坐った絹川嬢が悠然として煙草をくゆらせている。煙草の灰は男の顔に胸の上に、容赦なく落ちてくる。

足舐の構図

略号

(そへ)

大手札 四枚一組 四〇〇円

絹川文代、小沼正三

真白い絹川嬢の足が乱暴に小沼の口の中に押し込まれる。この汚辱に耐えて、素足の指の股を舐めつくすMの生態。

縛りの過程

略号

(そと)

大手札 四枚一組 四〇〇円

絹川文代、高田 一

後手高手小手首縄に絹川文代嬢から縛られるM男。やがて身動きの出来ぬ厳しい縛しめに観念した彼が女王様のお尻の下になって喘ぐ有様を刻明に描き出したM派縛られマニア垂涎のフオト。

使役の凌辱

略号

(そち)

大手札 四枚一組 四〇〇円

絹川文代、高田 一

ハイヒールを戴いて女王様の真白い素足におはかせする使役の凌辱に、嬉しさをかくすことのできない奴隷が、嬉々として奉仕するのを冷然として見下している女王様の美しい視線。

なぶり者

略号

(そり)

大手札 五枚一組 五〇〇円

絹川文代、高田 一

犬のようにチンチンをしてお菓子を買った男、首に犬輪をつけられて鎖を引っぱられながら顔を足蹴にされる男。平伏した頭を土足で踏みにじられる男。女王様のお尻の下で椅子となつていつまでも、よしとお許しがでるまで辛抱する男。なぶり者のM男の生態があまりとところなく活写されている。

おいしい足

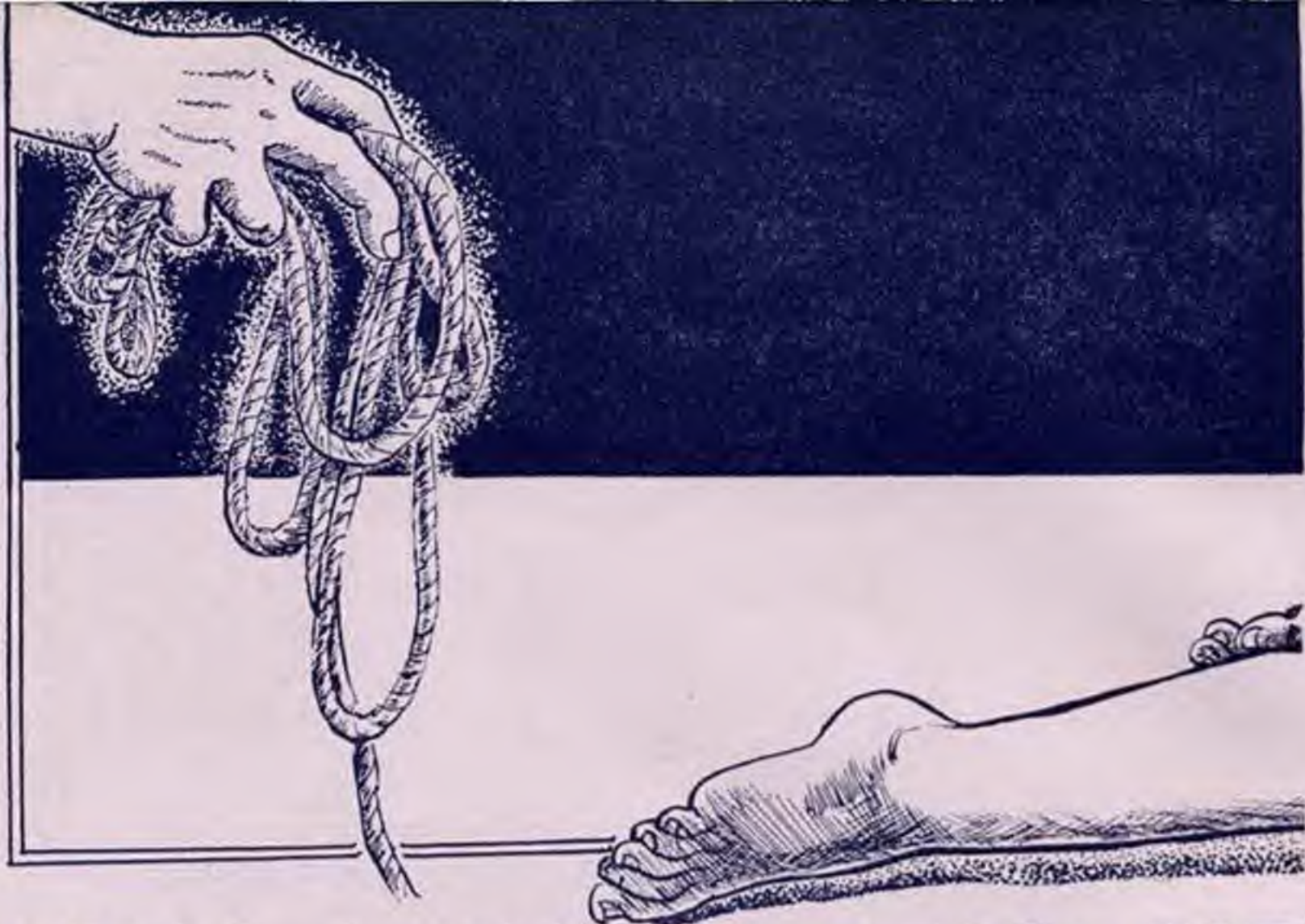
略号

(そぬ)

大手札 四枚一組 四〇〇円

絹川文代、小沼正三

女御主人様の美しい素足を舐めさせて頂くことの大好きな犬は、這いつくばって、出された御主人の指先を丹念に舌で舐めてゆく。



奇譚クラブ 七月号

目次

特選グラビヤ・セクション

一 ヤ

諱観とロマンの期待……………絹川文代
 凌辱料理の調理台……………梨花悠紀子
 柔肌の起伏……………大塚啓子
 破られた下着……………大塚啓子
 首枷の悦虐風景……………四方清美
 手首とくさり……………絹川文代
 鉄枷と鉄鎖……………梨花悠紀子

アイデア画「オラン・ウータンの檻」……………四馬孝・画

鼻責マニヤ〔美貌・汚辱〕……………四馬孝・画

女体切腹〔勇婦・割腹〕……………滝れい子・画

鞭打の法悦境……………四馬孝・画

這い寄る蛆虫……………四馬孝・画

女性自刃「落城の姫君」……………四馬孝・画

エビガニの恐怖……………梨花悠紀子

麗身ポーズ十二態……………絹川文代

全身緊縛の表情……………大塚啓子

マゾ・フォト……………小沼正三

犬になりたや愛犬に……………梨花悠紀子

縄目にあえぐ豊胸……………梨花悠紀子

悦虐いろは絵巻……………佐々木ツトム……………(34)

△愛読者通信△ かそけき願ひ……………柴島 令子……………(41)

「奇譚三十九夜」物語 (第二十六夜)……………辻村 隆……………(42)

私の無惨絵……………芹沢 伊保……………(53)

田園手帖 △被虐愛さんげ△……………万田 不仁……………(54)

(吊責) 見たり聴いたり試したり……………阿久津 猛……………(66)

【読者体験記】 ボクの痺ダンギ……………江田 彰……………(68)

悲愴美の世界 殉国処女譜……………中康 弘通……………(72)

浣腸漫記 △某月某日△……………栗瀬 長……………(81)

「縛り過程の較差について」……………牧 高志……………(86)

ゴムマニヤ通信……………古村 俊一……………(92)

「告白」悦楽の園……………柴山 武……………(94)

鼻のフレリユード 鼻の国……………平 伏人……………(94)

花と蛇 (第四回)……………島 ヒロシ……………(103)

△読者の告白△ フェチシスト行状記……………団 鬼六……………(106)

女相撲熱戦譜……………並原 睦夫……………(112)

△手記△ 女相撲結成顛末記……………女素舞マニア……………(114)

マゾヒズムへの孤独な願望……………岡平 吉夫……………(116)

(告白) 襦袢への郷愁……………福田 久文……………(123)

奇妙なお礼参り……………多摩 宏……………(123)

〔緊縛研究講座〕縛り方教室……………大 中 忠……………(134)

長篇SM小説 宇宙のどこかで……………柴利 好……………(142)

△読者体験記△ ある彷徨……………佐治 麻造……………(146)

映画「私は死にたくない」について……………岩崎美佐子……………(153)

絹川文代さんへモデルとしての美貌……………遠藤 一……………(164)

読者通信……………逢坂 太郎……………(166)

……………………………………………………(170)

画の大きさ A5判

(21 纏×15 纏) 感光紙焼付
六枚一組 五〇〇円、略号 (か6)

一、組上のいけにえ、(台上でエビのように二つ折りにされた全裸の女体に今まさに加えられようとする浣腸器の悪魔のような跳梁をじっと耐える彼女。)

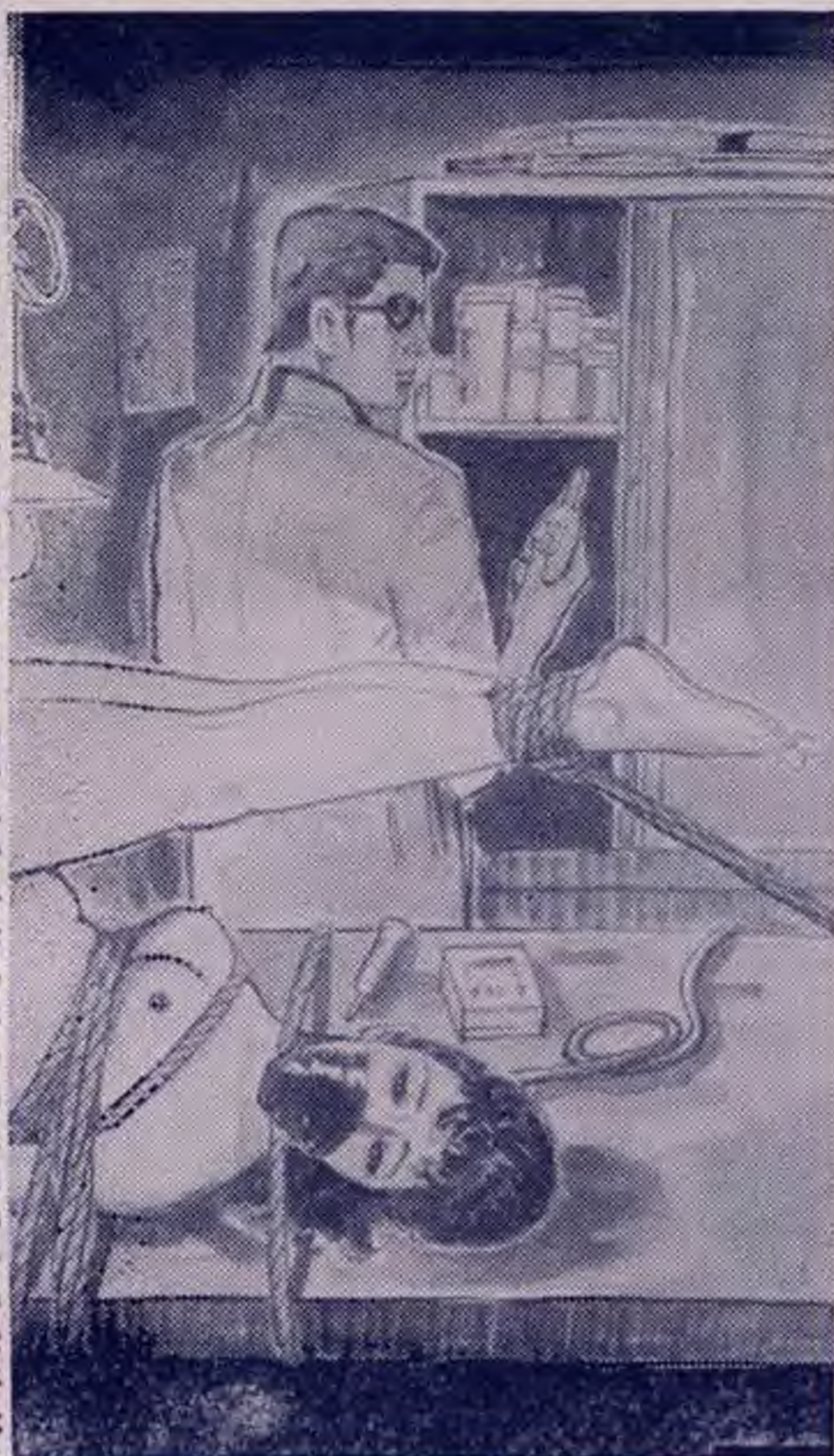
二、高圧空気浣腸、(百ワットの電光に明るく照らし出された女体に、高圧ポンプの先から、空気がドンドン送り込まれる恐怖が鮮やかに描き出される。)

三、蛙腹の注水実験、(手と足を鎖に吊られて宙に浮いた白々とした女体。その鼻孔にはイルリガートルの嘴管が水をどくどくと腹の中へ注ぎ込んだ。)

四、浣腸責の最高頂、(竹の棒によって、両足を八の字に開かされたイケニエは、目の前にある恐ろしい器具に、思わず全身を硬直させてしまった。)

五、排泄に耐える、(豊満な張りきれぬばかりの女体を一本の柱に宙じばりにされて、浣腸の洗礼を受けた彼女が便器を前にして耐えに耐えぬく悲壮感。)

六、奇妙な便器、(彼女の体内には、五〇CCのグリセリンが注入されて荒れ狂っている。奇妙な型の便器が彼女の使用を待って、あざ笑っている。)



四馬孝・案並に画

女体浣腸嗜虐場面図

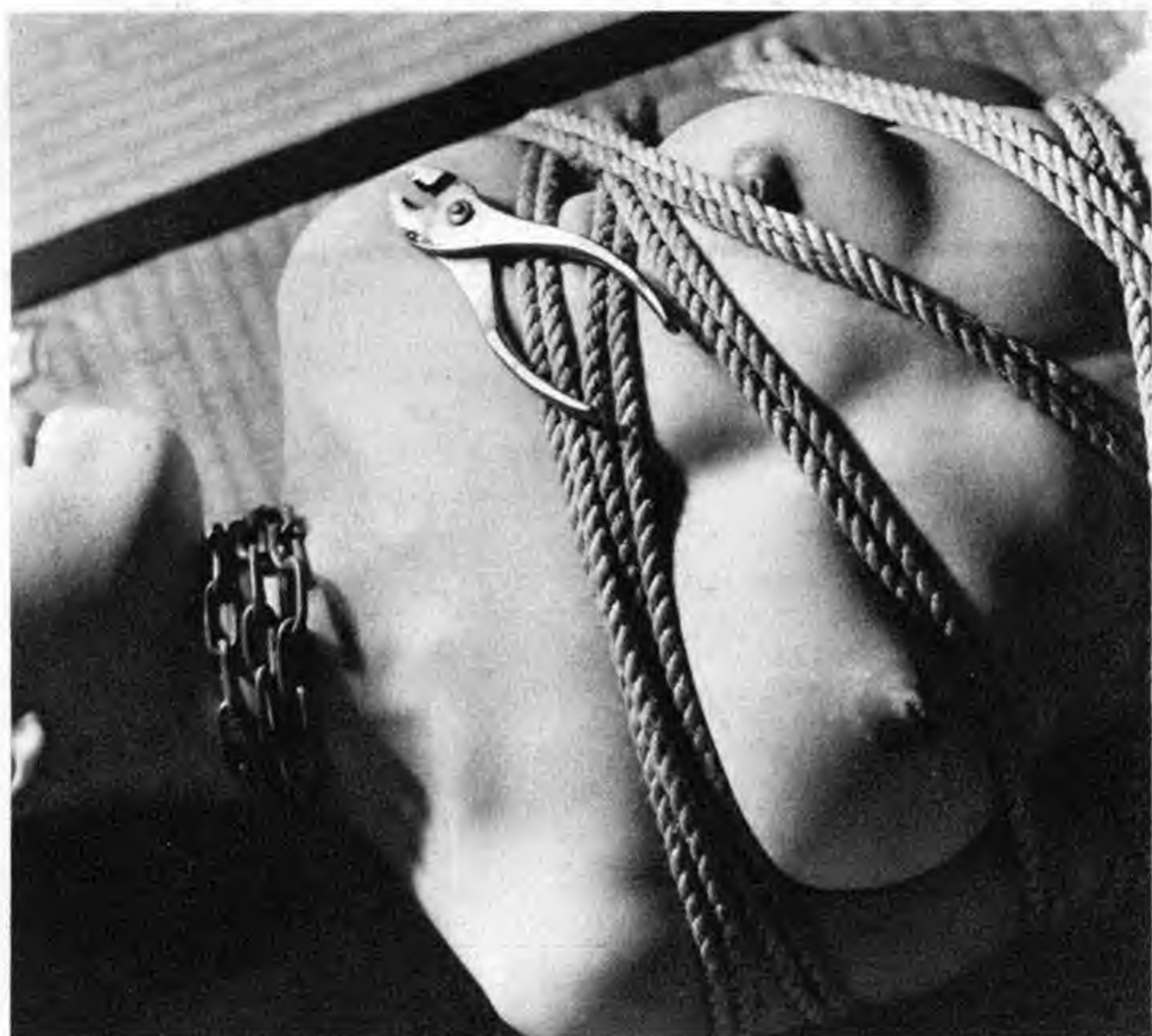
(うら若き麗人、強制的に浣腸を施される図)

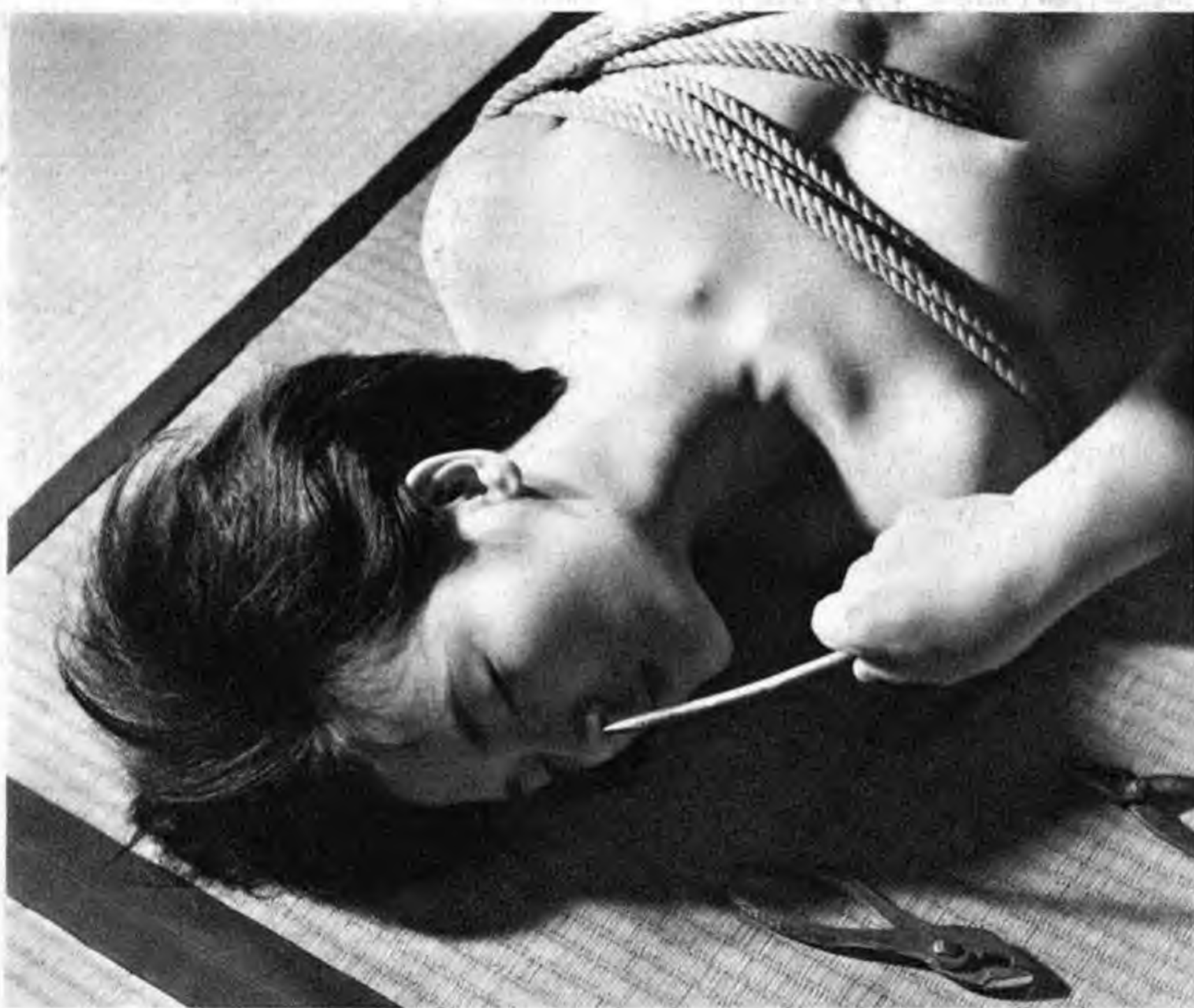


◎浣腸愛好者のために、特に浣腸を主題としたショッキングな場面ばかりを四馬孝画伯の豊富なアイデアによって描面して貰った力作揃い、従来兎角口絵から締め出され敬遠され勝ちだった浣腸のテーマを、ここに見事に完全に絵面化されました。

女性性に対する浣腸について大きな関心を抱いている方々から、の久しい間に亘っている要望も、いせろいとの制約のため成果を得るまいと、この一端でも満足して見果てぬ夢の一端に四馬氏を煩わす、頂こうと、夢の一端に四馬氏を煩わす、数々の変化ある姿態、背景、小道具等によって、美しい画集として完成して頂きました。浣腸マニアの方々は勿論のこと、Sマニアの方にとっても、非常に興味がある画面の展開がたのしみです。どうか、浣腸マニアのたすきに、特に作成したこの画集を、引続いて刊行するためにも、御支援下さるようお願いいたします。

















オラン・ウータンの檻

四馬孝・画







勇婦割腹

瀧れい子・画



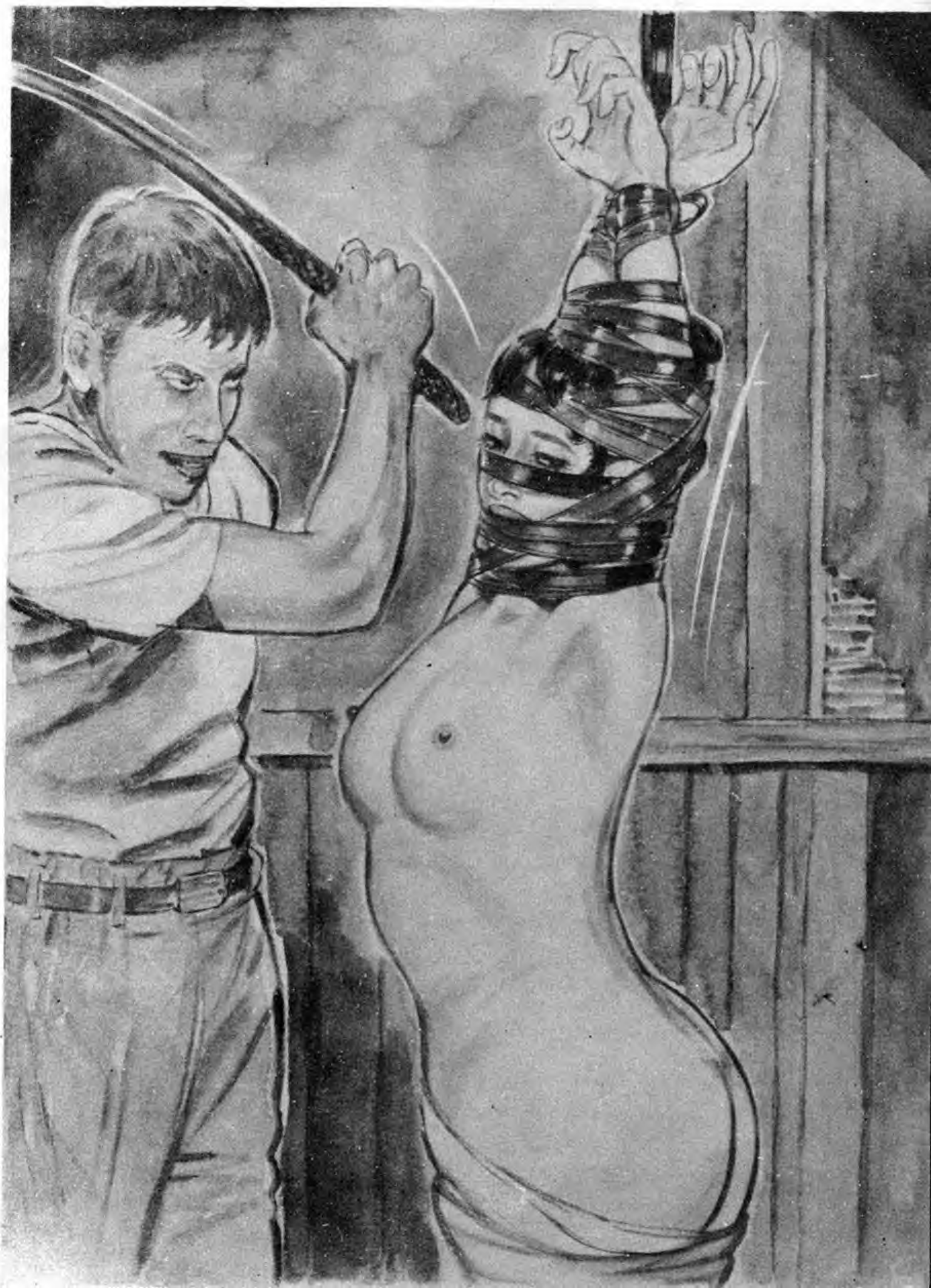
腹切の介錯

瀧 子・画



鞭打の法悦境

四馬孝・画



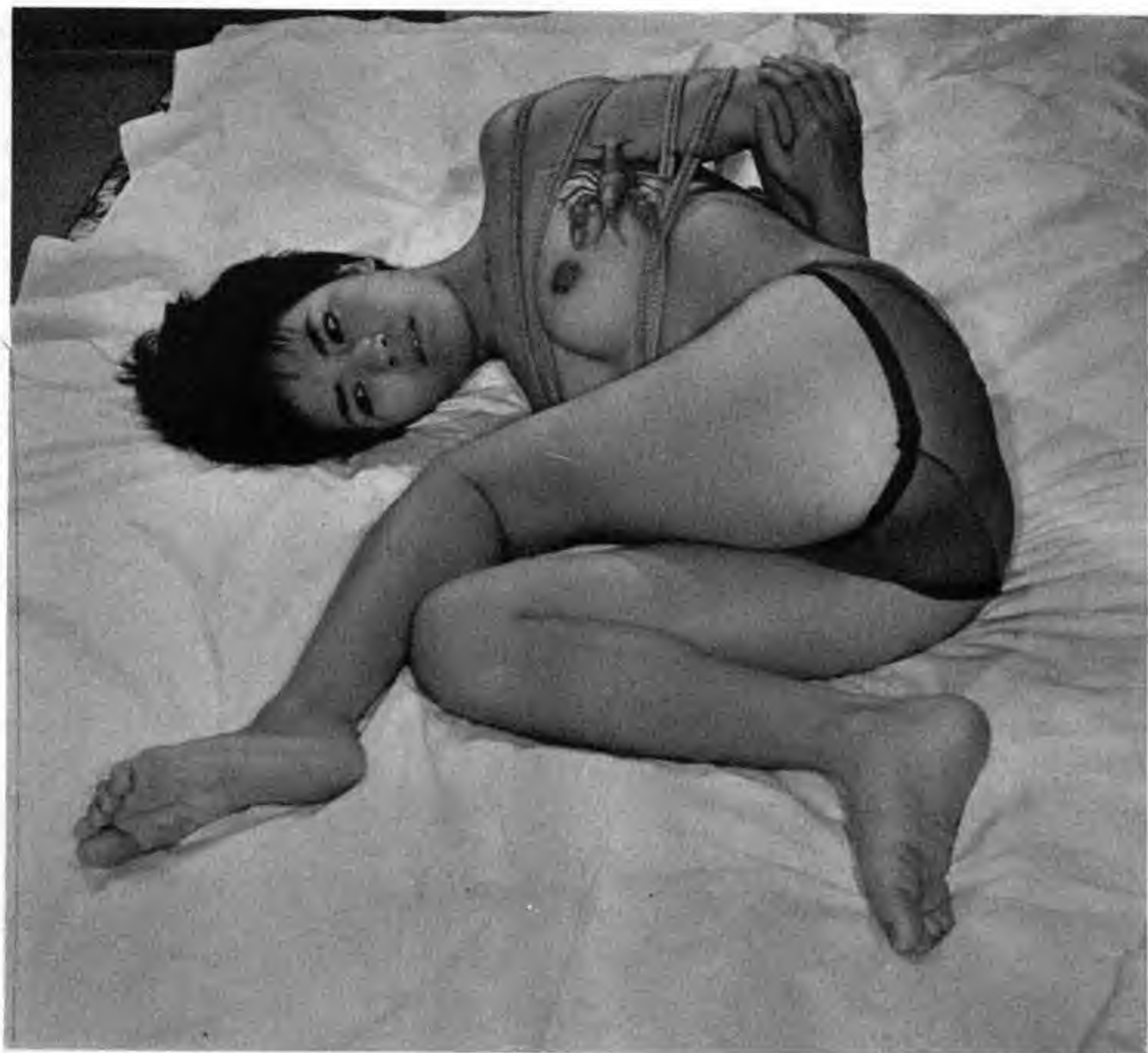


這い寄る蛆虫

落城の姫君

四馬孝・画







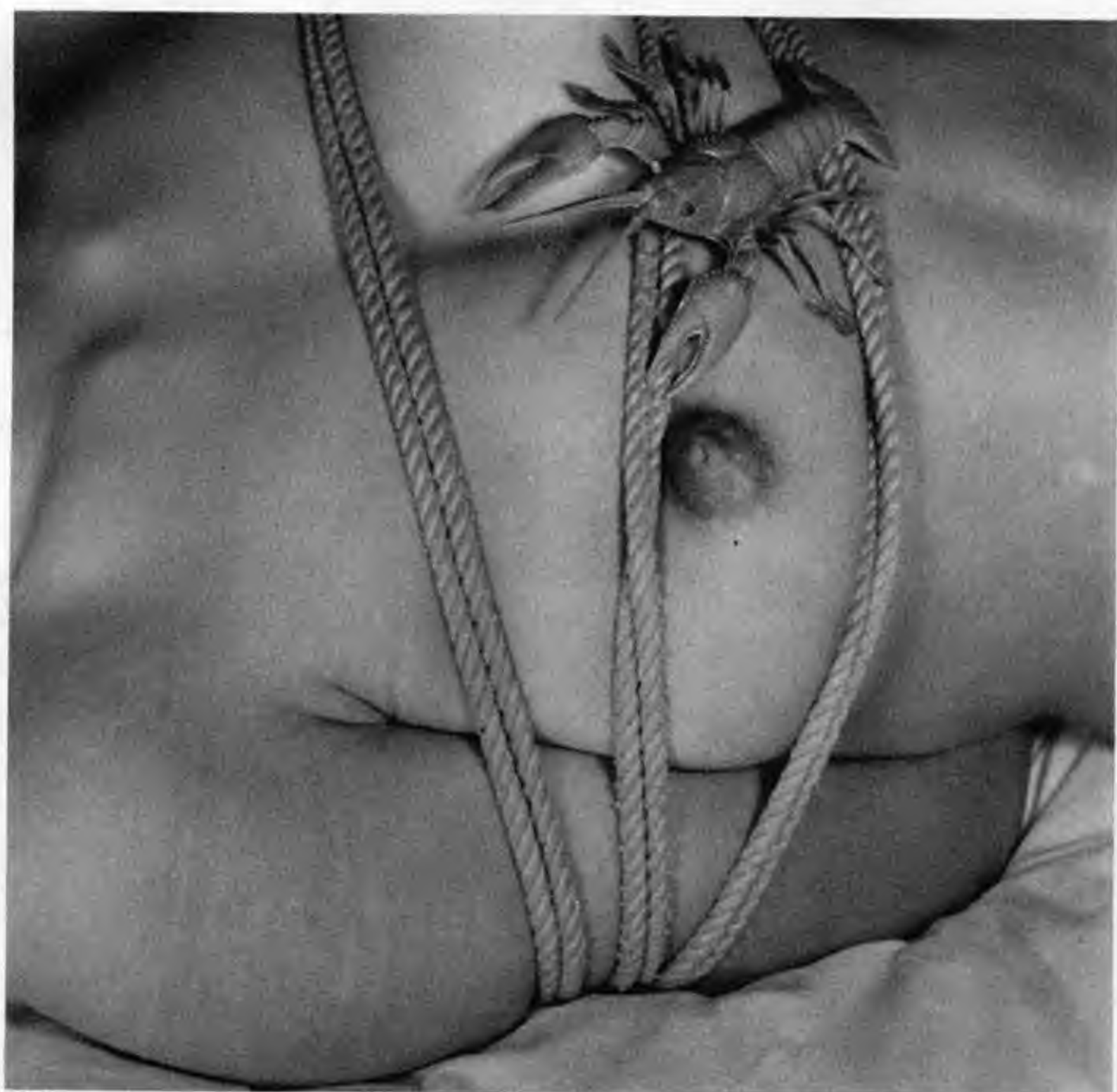












あられもなき争闘



新しい風俗文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1963年 7月号

(第17巻 第7号 通刊 第178号)



奇クに捧ぐ私のアイデア

悦虐いろは絵巻

佐々木ツトム

序

(い) 一寸先は闇 (二枚)

これは私の幻想であり、秘めたる願望でもあるのですが、もしこれが、絵になり奇クを飾るのを見る事が出来たら、とたんに私は死んでもいいとさえ思うのです。

ああ、何卒この夢が実現致しますようにと祈りつつ、この拙いアイデア、悦虐いろは絵巻を奇クに捧げます。

憧れの女の汚れた不潔な下着で目かくし、猿ぐつわ、それに両手両足を細紐で緊縛されて、その上、更に大柄なその女に馬乗りに組み敷かれ、重圧を加えられて悦に入っている男。

なまめかしい四畳半の女部屋、戯れか？ 真剣か？ とまれ、マゾの男にとっては正に

悦虐天国であろう。

しかし、ああ、これは一体どうした事ぞ、女の右手にはかくし持った双刃の短剣が、まむしの牙の如く血に餓えて、男ののど笛を狙っている。

復讐か？ 男は知らず！ 女の眼に獐狂な殺気が満ちてきて、次の瞬間は血みどろの地獄図絵が展開する。苦悶にのたうつ男のもたえを女は肌にじかに感じながら、恍惚となっている。

(ろ) 隴を得て蜀を望む (三枚)

やさしい美女から、生涯一度であろうところの花の接吻を恵まれた醜貌老衰の癩病の乞食が、それで満足すると思いの外、美女の肉体を求めて弄ぶの図。

場所は深夜の山寺の荒れ果てた本堂、醜怪な化物の如き老乞食が、あと余命幾ばくもない自暴自棄から、その情炎の赴くまま美女を犠牲に選ぶ。

おぞましい中に漂う妖気、病におかされてくずれかかった両手の指が、美肌の乳房にかみかかり、可愛い口をこじあげ、ルビーのような舌をつまみ出して、いじくり回したり、膿みただれた口が美女の口をおしふさいだりする。

美女は屈辱と怒りに、麗顔を引き歪め、苦痛と憎悪で必死にもがいて、醜怪な老獣の魔手からのがれんとしたうち回っているが、徐々に自由を奪われ、乞食のいけにえとなっていく。

これを三段階に描く。

(は) 張りつめた弓はゆるみ易し (二枚)

女相撲の余技、肥満の大兵、満身に力のはり切った如何にも、女豪らしい女力士が舞台の中央で大の字になって寝ころび、その腹の上に白をのせ、二人の美しい娘力士に餅をつかせている。(一枚)

この一枚は、どこの女角力の興行にもあるありふれた場面だが、二枚目が無残な地獄絵なのだ。どうしたはずみか、張り切った腹の筋肉がゆるんで、白がやわらかな腹部にむこたらしくめり込んで、女力士の目鼻口から、凄惨な血がとび出して、ウスの中の白い餅を紅に染めている。(一枚)

(に) 憎くまれ子世にはびこる (一枚)

年具米の強引な取立てに応じきれない百姓の若者達を水牢ならぬ、肥溜の桶の中につけて悦にいる代官の美しい妾。

「コヤシが不足で不作だったそうですね。よ

いよい、私がよいコヤシを存分に掛けてあげましょう」

残忍な微笑をうかべ、腰元達に命じて、肥桶の中に首までつかった百姓男達の頭上へ、次から次へと交代で黄金の雨を降らして、浴びせてやる図。

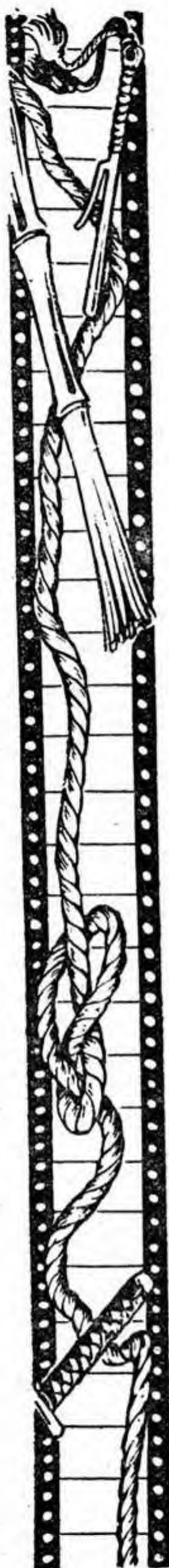
出番を待つ数人の侍女たちを配し、汚辱にのたうつ百姓の若者達のおさましい姿を、妾と共に酒をくみ交して座興にする代官。

(ほ) 豊年は二夜つづかず (数枚)

豊年祭の夜、祭ばやしの聞える田舎料亭の奥二階。座敷が床ごとぬけ落ちそうな豪華な悦唐大尽遊び。

風体こそ一応整ってはいるが、どこことなく洗練されない百姓の中年男三、四人、豊年に有頂天となってプレイに興じている。

■広い座敷に膝まで埋まるかと思われる程ぶ厚く敷きつめた白砂糖の上に、裸体(白又は赤の腰巻一枚だけ)の芸者達の女闘プレイ。勝った女には、大枚の賞金が出るというの



で、いずれも必死になって争う立業、寝業にも一層力が入る。赤い腰巻の裾もあらわに、乱れた女が、白腰巻の大柄な女に、むんずと組みしかれて下から必死に抵抗する。

組みしいた女は、右手で相手の咽喉くびを押さえつけ、左手で白砂糖をつかんで下になった芸者の口の中へ捻じ込んでいる。

流れる汗は白砂糖に吸い込まれ、その辺の砂糖がねばねば、べとべとべとついて大変なことになっている。反則を犯した女を、数人の女達がよってたかって、べとつく砂糖の中に押し倒し、身体中に砂糖をまぶし、顔の上からもふりかけている。

お金が足りなくなった三人の百姓男達が、女連中からリンチを受けている。汗にまみれた砂糖を男達の身体に所きらわずなすりつけ中には勇敢な女は、砂糖まみれになった男の上に馬のりになって、酔っぱらった挙句、小用を足している。

(へ) 下手な考え
休むに似たり (五枚)

国際秘密プロレス・ショー。

白人女対日本娘。寝業の猛闘が続いて、大柄な白人女が小柄な日本娘を有利な態勢でむんずと組み敷く。

組み敷かれた日本娘は、如何にしてこの劣勢を優勢にもって行くか思案の表情なるも、よい考えが浮ばぬと見えて、あたかも休息をしているかの如く見える。相手の白人女はその間に万全の態勢をかためて、その遅ましい腕は、日本娘の咽喉輪にかかって、絞め殺そうとしている。

驚くほど巨大な臀部が日本娘の乳房を圧している。汗にまみれた大根のような足が、すんなりした胴を蛇のように巻き込んでしめつけている。

(と) 年寄りの冷水 (四枚)

日本娘の劣勢に、憤懣やるかたなき見物席より敢然飛び入りの挑戦は目鼻立ちこそ整って居るが白髪まじりの初老の男。(一枚)

しかし相手は大兵の専門レスラー。若い頃とった田舎相撲の大関で腕におぼえのあるらしいこの男も、忽ち組しかれて苦境に陥る。

(一枚)

女は馬のりになり淫虐な微笑をうかべつつ老人の頭部に尻をおしつけ呼吸や心臓をはかり乍ら死なない程度に、秘密ショー特有な強烈な刺激を、男に加えんとする。(一枚)

男は氣息えんえん、女はかきにかかって、

ますます露骨に責めつける。(一枚)

(ち) 忠臣二君に仕えず (七枚)

絶世の美童を寵愛して居た美しき奥方、大奥で暗殺される。下手人は妖艶なお部屋様。美童、奥方の屍骸に泣きすがる。(七枚)

お部屋様が、美童に求めて居る。妾の恋に従えというわけ。美童かたくこぼむ。忠臣二君に仕えず。(一枚)

お部屋様、強引に美童を力づくでも手に入れようとする。(一枚)

忠義な美童は舌をかみ切ろうとしたが果さず、その舌をお部屋様のためにコウガイで挟まれて引き出される。

「そんなに舌をかみなければ、私がかんで上げる！」

口の外に挟み出された美童の舌に歯を立てて、力まかせにかみ切る。……地獄絵巻。

(一枚)

(り) 量過ぎれば袋破る (二枚)

妻を溺愛する男、夜半に妻の人間便器を志願し奉仕するが、大量の為口中にあふれ、さすがの彼もみじめな醜態！。(一枚)

ぐったりとなった夫を、妖獣と化した新妻

は残忍な微笑をうかべて尚も厭きたらず尻の下に敷く。(一枚)

(ぬ) 盗人の昼寝

(八枚)

貧故に盗賊になり下ったようないかにも氣力のないみすばらしい男、昨夜の大仕事のつかれで白昼ぐったりと、うち伏して熟睡して居る。(一枚) そのあばら家をおそったのは女目明し。もって居る十手で寝て居る男の頭を血の出る程強打!(一枚)

あっとおどろいて起き上ろうとする所を又一撃(一枚)のけぞる所をおどりかかっておしたおし馬のりになる。早くも男の手首に捕縄がからみついて居る。(一枚)

乳闘、兩人衣服乱れ、女目明し、乳房や太ももあらわに男をおさえこんで居る。(一枚) 男の目に血が入りいちぢるしく闘争の自由を奪われ(一枚)そこを又一撃、半死半生にしてしまう(一枚)弱る所をがんにがらめにいましめる(一枚)

(る) 畳を摩す

(十枚)

女の軍隊の夜襲! 斬込み夜襲は日本のお家芸であったが、そのお株を奪われた形。此の場合不意をつかれたのは、少数のつかれ果てた日本敗残兵。敵は新手のたくましいソヴェートの女部隊、銃剣と軍刀をふりかざし阿修羅の如く斬込んで来る。おしよせる波の如し!(一枚)

月青白く仲天にかかって居る、その下で展開される地獄風景! 白兵戦、組うち、ザンゴーの中の血の地獄!

組しいた女兵ののど首をしめつけて居る日本兵の背後から銃剣をつき通す別の女兵の凄惨な形相。(一枚)

弱り果てた日本兵が大柄なソビエト女に組しがれ軍刀でのどをえぐられて居る(一枚)軍刀で日本兵の首を斬り落す女将校。(一枚)

日本刀を足でふみつけられた日本兵が首をむごい形でしめ上げられて居る。(一枚)

あうむけにころがった日本将校の顔を軍靴がふみにじる。目も鼻も口も踏みつぶれて居る。(一枚)

強烈に奮戦けなげに一人奮闘して居る若武者の背後から一太刀あびせた女兵。(一枚) 全滅に近い日本軍を前に更に、残酷絵巻がくりひろげられる。

奮戦した若き将校の肉を、奪い合って喰って居る風景。(一枚)

之は強い男の肉をたれば強くなれるという、迷信に基づく行為である。

サジスム性の強い女将校が相手を半殺しにし鬪殺しにする。(一枚)

恋人を日本軍の為に殺された女兵が復讐にもえ頻死の日本兵に残酷行為を加えて居る。(一枚)

かって日本兵に辱かしめられた女将校が未だ生きて居る日本将校の男根を切断し月にかざして凱歌を上げて居る。(一枚)

其の他目を覆う女のサジスム!(数枚) 畳を摩す、という意味には二通りあるよう



だ。一は敵のとりでにせまる事、一つは其の技術がほとんど必敵する事。

(を) 終をつつしむ (一枚)

新婚夫婦の甘美な悦虐プレーが終を告げ、もともとつましやかな内気な妻は、先程の興奮を差ろうかの如く、消え入る風情でしばらく夫に従って居る。(一枚)

(わ) 我田に水を引く (十枚)

日照りがつづく、百姓達は水の奪い合いをする事がある。男手の不足なある部落は自分の田に水を引いた為、隣村との争となる。

百姓女達の集団闘争絵巻が二手に分れて展開する。一つは水を引いた田んぼの中にせめ入った女達がふみちらそうとするのを、そうはさせまいと組みとめて合戦となる。一つはかわいた田んぼの中で砂ほこりをまき上げての猛闘である。

一人の女が泥田に足をとられて尻もちをつき、起き上ろうとする所に他の女がおどりかかって、むしゃぶりつく(一枚)しかし之も泥に足をすくわれ前につんのめる所をすかさずたくましい泥だらけの両もの間にその首をはさみこみ泥の中につんもぐす。(一枚)

カンカン日の照りつけるかわいた田んぼの中で一人の女が組しかれ陸に上げられたフナのように、かわいた口を苦しげにパクパクさしてもがいて居る。その上に馬のりになった一人の大きな女は、片手で相手の髪をつかんでおさえつけ片手にすくった泥の一かたまりを、「そんなにのどがかわいたなら、之でもおのみよ」と強引におしつけようとする。それに別の女がむしゃぶりついて居る。しかしその女の背中にも一人の女がつめを立てて、しがみついて居る。(一枚)

大兵の女が小柄な女の両足をもって泥田の中を引きずり廻して居る。(一枚)

さかさになって顔をつっこんだ女の上に馬のりになって立ちはだかつて居る。(一枚) 其の他。

(か) かんたんの夢 (数枚)

龍宮城で浦島太郎は、いろいろなものを見た。そして浦島太郎は死ぬまで忘れる事が出来ない怪奇な悦虐風景も見たかも知れない。こう目をつぶると、神秘的な海底にその不思議な悦虐風景が幻のように浮んで来る。之はその一駒である。

顔は美女、体は蛙、足は蛸の異形な怪物：

：しかし妙になまめかした生物が二匹、レスリングショーを展開する。顔は白人女と日本娘である。八本の足には無気味な吸盤が無数について居て、相手の首、胴、股、胸、所きらわずからみついてすいつき、しめ上げる。見物は主として浦島太郎と乙姫とその輩下、舞台は、龍宮城の海底庭園の草むらの中。

草むらの中では、二匹の妖艶な怪物が血みどろの死闘を展開して居る。喰い干切られてその辺にただよう白い足二三本：日本娘の方がくい干切られて居る。白人女の顔のたこは大柄な体で有利、相手を圧倒し足からたべ始める。小さい方はだんだん喰われて行く。

(よ) 用心に歯あり (五枚)

「うわなりうち」の絵である。女三人：。若い女と中年の女：それに、立会女。三人の大兵肥満の女を中肉中背の女が組しいて、何んとなくほっとした安堵の表情の立会女。(一枚)

しかし下になった三十女は、歯をむき出して上になった若い女の乳房に顔を近づけて行く。(一枚)

次の場面は形勢逆転、乳房にかみつかれた女は悲鳴を上げてのけぞるのを、はねかえし

てのしかかる三十女、乳房にかみついた齒は
今度は相手の肩に深くかみついて居る。(一
枚)

のたうち廻る相手の上に、おっかぶった中
年女は夜叉の形相で所きらわず齒を立てる。
それを呆然とながめる立会女。(一枚)

(た) 他人の飯の骨がある (数枚)

女牢の悦唐絵巻。負けん気らしい新入りの
美女が古参の女囚達に、責めさいなまれて居
る。はりつけのように、両手両足を四人の女
囚におさえつけられ大の字に四方に引っぱら
れて居る美女の首の上に馬のりにまたがった
牢名主(四十女)、左手にお腕をもち、片手
で美女の鼻をつまみ口をあけさせて居る。
(一枚)

苦しげに口をあけた美女の顔のそばにその
お腕を近づけたむけて居る。お腕の中の固
形物が美女の口の中に流れこむ。(一枚)

もがくのを両ももの間に顔をはさみしめつ
けて動かさず、口にはみ出るのを箸で強引に

おしこむ。(一枚)

(れ) 礼に始まり礼に終る (数枚)

濃艶な女の柔道。白人娘と日本娘の国際試
合、兩人微笑すら見せ、つつましかに礼を
交して居る。(一枚)

戦闘開始!

うでは日本娘の方が小柄ながらも数段勝っ
て居る。忽ち日本娘は一方的に試合を進めて
行く。白人娘の襟をつかんで先に寝ころびか
ける日本娘(一枚) 白人娘もつりこまれて日
本娘におし重なうって行ったが、忽ち喰うか喰
われるかの激戦になる。(一枚)

日本娘の体が廻転したかと思うと、白人娘
はおさえこまれ日本娘の袈裟固が美事に決ま
る。(一枚)

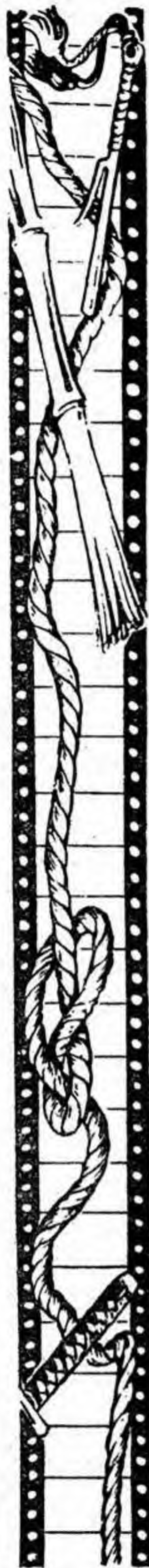
と次に日本娘は、相手の右肩に体をすりよ
せて行くと、白人娘の寝ころんだような体と
斜めに交叉した形になり日本娘の右うでが、
白人娘の右腋の下を、くぐって強く上方にこ
じ上る。之は肩固めである。(一枚) 日本娘

の右うでが左腋から奥にさしこまれ、白人娘
の肩の関節が外れる程のはげしいうづきに妖
艶な顔が凄愴に引歪む。(一枚)

巧妙な動作で日本娘は上四方固にうつる。
白人娘はおさえこまれ下になって上から日本
娘が逆になつておさえこんで居るのだが、白
人娘の顔面は日本娘の胸にうづまって、窒息
しそうになつて居る。しかし此の時はだけた
柔道着からのぞく日本娘の乳房に白人娘の唇
がふれる。白人娘はとっさの策で、その乳首
を口にくわえる。(一枚)

此の奇襲に日本娘の力がぬけて行き、のが
れようとあせるが唇はすいついたようにはな
れない。形勢次第に逆転して行く。急に白人
娘が攻撃にうつり日本娘は女性として一番は
づかしい横四方固めに攻め立てられる。(一
枚)

少し詳しく説明する必要がある。白人娘は
此の場合日本娘の右横側にすりよって接近し
自分の右うでをのばして相手の両股の間から
差入れて相手の左股下から出して左横帯を握



指を内にしてにぎり両足は相手の左横腹に接して体を十文字に日本娘になし肢部を自分の肢部に接して顔を横にし、しっかりかためるのである。油断であった。完全にかためられて居るので日本娘はのがれる事が出来ない。白人娘のうでがはげしい圧力でせまって来るのだ。戦終つて兩人しとやかに一礼する。

(一枚)

(そ) 宋 裏 の 仁

(数枚)

宋の裏公が泓という川のほとりで楚の成王と戦つた。其の時、公子目夷は敵の軍勢が全部川を渡り切らず陣立の整わない前に討つてかかろうと主張した。所が裏公は

「君子というものは、人の困つて居るような所につけこんで、人を、苦しめるものではない」と言い張つて、大將達の幾度かの勧めをしりぞけ敵の陣立を整えるのをまつて居た。

さて君子的態度のホコリは満足させられたが戦争はめっちゃめっちゃにまけて裏公は股にきずを受けるやら部下の守衛どもは全滅するや

ら散々の態で退却しなければならなかった。そんな事から世間の物笑の種になって、無用のあわれみを、宋裏の仁というようになった。

そこで私の幻想は次のような場面が、うかんで来るのである。

秘密ショー、男女プロレスに、始めて出場した男、相手は大柄でも所詮は女、美貌の苦悶に歪むのに、憐れみを感じ手加減したい戦を進む。がしかし相手は女レスラー、得たりとつけこまれ、果は忽ち苦境に陥る。(一枚) 残忍な女レスラーは容しやなく、責め立て大胆露骨に男を辱しめる。(一枚)

男はのがれんともがくが、女はそうはさせじと男をぶかっこうな形に床に這わせ、上のりかかり、相手の急所に触手をのばして苦しめる。(一枚)

秘密ショー特有の残酷絵巻、男責めのシーン展開す。(一枚)

最後のとどめをさすように、女は男の顔の上に大きなお尻をのしかけ重圧を加える(一枚)

(枚)

(つ) 月とすっぱん (三枚)

戦国時代、巴御前のような女武者が、草むらの中で若き初陣の美貌の武者を組しいてその喉笛にかみついて居る。(一枚)

之は中年の女武者が、戦場で若がえりの秘法をひそかに用いて居る図である。苦痛のあまり、のがれんと、もがきのうち廻るのを強力に、おさえつけ乍ら女武者は若武者の下腹部に鎧通をつき立てる。(一枚)

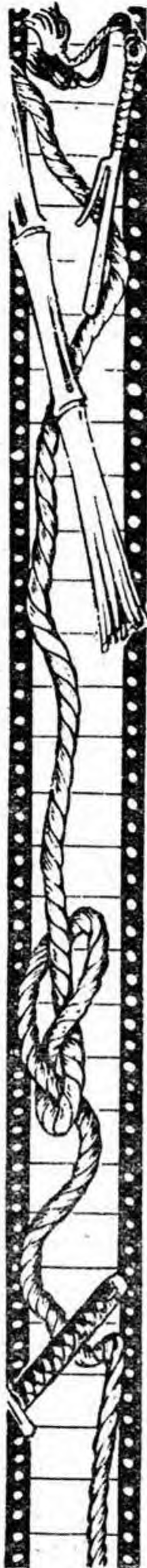
尚もすっぱんの如くすいについて、吸血の残酷を、月光が神秘的に照して居る。(一枚)

(ね) 寝 耳 に 水 (二枚)

大きな牝牛と仔馬がけんかして居る。

仔馬は元気よく牝牛にいどみかかったが、腹を角でつかれて横たおしになる。(一枚)

すかさず、牝牛が巨軀をのしかけ、大量の尿をあびせて居る。尿は仔馬の耳に入る。仔馬はのたうち廻つて苦しがつて居る(一枚)





愛読者通信

かそけき願

柴島 令子

私は本誌の極く新しい読者です。初めてお友達のE子さんに奇譚クラブという雑誌を見せていただいたのは、昭和三十八年三月二十一日のことでした。確か、臨時増刊NO 3で昭和三十五年一月十日発行となっていました。

私とE子さんとは高校時代、同じクラスで一番気の合った友達です。高校を卒業した私は只今或る会社の事務員で二十才です。E子さんは私と同じ学年でしたが、一つ上の二十才で短大に通っています。だから、E子さんとは、日曜祭日以外、夜しか逢う機会はありません。

私は両親がなく、叔母の家に厄介になっています。叔母一家は私に大変やさしく親切にして下さいますが、私はいつまでも厄介にな

っているのが心苦しく、出来るだけ早くお金を貯めてアパートでも借りて独立したいと思っています。

私はいつも世の中の事を考え、不思議に思います。人間は何故、生きているのか、毎日毎日働いて、食べて、一体何のために生きているのか、そんな事を思うことがあります。

然し人間は生きているからこそ、楽しみも悲しみも、いろいろ判るのです。私だって、生きているからこそ、こうして文章を書くことも出来る。確かにおもしろい事です。又私は世の中に生きている一人の人間として、楽しまなくては、生きている甲斐がございませ

るのです。私も本誌の一愛読者として、少しお喋りさせていただいても構わないでしょうか……。

私は女性を縛った写真を拝見しましたが、特別にどうという反応はございませんが、昭和三十八年六月号(昭和三十八年六月一日発行)の第一グラビヤ『夢幻の構想』の様な写真、とても私の胸に刺さりました。私はモデル嬢館典子さんが好きになりました。

美しいばかりでなく、何処か良家の令嬢といった街でよく見かけるタイプの館さんが縛られているのが、私の胸に異様な興奮を起させます。館典子さんのお写真は、先に挙げた雑誌にも『麗艶』と題してグラビヤを飾っておりますが、あの姿より、この館典子さんの『令嬢夢幻の構想』の方が好きです。口に猿轡、ワンピースの上から縛られた感じ、両脚の曲げた恰好、何といっても、あの澄んだ目がよかったと思います。

私も一度、この館さんのように、洋服のままで、或は着物のままで縛られてみたいと考えたりしますが、それも所詮私のはかない空想に過ぎないかもしれません。せめて、自分の書いたものが、本誌の片隅にでも載せていただければ、と願うばかりです。

「奇譚三十九夜」物語

△第二十六夜▽

辻村 隆

都心から離れたワイン氏の宅——。庭に花片が満面に散りしいて樹は既に葉桜です。

ワイン氏御自慢のホームバーで、ホステスの夫人の手捌きも器用なシェーカーの振る爽やかな音が、限りなく続いて、八人の退屈男は一樣に、快よい酔いに浸っておりました。

「莫迦に遅いんだね、彼女——。ひよっとすると道に迷っているんじゃないかな」

ライカ氏が、腕時計を見て、スバル氏に声をかけます。

「そんな筈はないんだがね。約束の四時半までには、もう半時間はあるよ。君、そうせき給うな——」

ライカ氏が案じるのも無理はないのです。スバル氏（辻村隆）が第二十四夜で約束した通り。今日は彼のいざないによって、水本茂

美嬢が、特別に退屈男達の為に、緊縛のモデルになる事を納得したからです。ライカ氏御自慢の、古色蒼然たるライカが彼の膝元で、時こそ来れと待ち構えているのも、如何にも物々しくも、今日にふさわしいシーンです。天狗のめんめんが、キャノン、ペンタックス、ニコン、ミノルタ、プロニカなど、三脚やライトと共に、あちこちに転がっているのも、彼等の今日の意気込みの種を物語っているようです。

「ターミナルは相変らずの凄い混雑振りだね。花見客や行楽の人々の懐ころを狙って、スリがうようよししてゐるって話だよ——」

彼女を待つ焦燥感から気を外らす様に、パイプ氏が真顔で人々を眺めて云いました。

パイプ氏の言葉が終るか終らないとき、定刻を十分許り遅れて、

待望の水本茂美嬢は到着しました。

「さて、皆さん。御待ち兼ねの、水本茂美さんが、約束違わず現われましたので御紹介します。」

小柄な水本さんは、真赤になって、もじもじとし乍ら、それでもペコリと頭を下げました。

人々の喜びと嘆声のどよめきのうちに、スバル氏は尚も言葉を続けました。

「ワイン氏の御好意で、彼の私室を解放して頂けるそうです。取り敢えず、お一人一回ずつ順序にくじを引いて、水本さんに、緊縛ポーズの構成をして頂きます。準備がよければ、私室へお移り下さい。」



写真 (A)

ますように——。」

テキパキしたスバル氏の応待で、待ち構えていた人々は、ワイン氏の先導でぞろぞろと私室へと移って行きました。以下はその日の撮影会のいきさつをスバル氏が手記風にまとめたものです。

第六十話 水本茂美、再び登場

水本さんを口説き落すのには、大分手間がかかった。十カ月許り前、始めて水本さんを撮ったあと、すぐ引続き塚本君に紹介して、海老縛りなどものにしたのであるが、其の後彼女の結婚問題が起って、私も二三度連絡したが、絶えて返事はなかった。

折角、ニューフェイスとして売出すつもりだったのに、僅か二度で姿を消した彼女に、私は愛惜措く能わざるものがあつたが、彼女自身のことでもあれば、深追いもせず、いつしか忘れるともなく忘れていたのである。

今年の二月の末頃、その水本さんから突然電話がかかってきた。久闊は省くとして、

「……ところで君の結婚問題、どうなったの?——」

「ああ、あれ。おじゃんよ……。二度や三度の見合がうまくゆかないからって、別段くよくよしないわ。そのうち又、いい人が見付かるかも知れせんわ——」

「割切ってるんだね。ところで急に何か用?」

「用って程のことじゃないけど、其の後随分御無沙汰ですもの。梨花さん、その後御元気?」

「音沙汰なしだけど、彼女の事だから気がむけば、ヒョコッと電話してくるかも知れない。ところで若しよかったら一度撮らない?」

「……」
 「詳しい事は逢った時、話するけど、陽気もよくなったし、いいだろう？——」

「……………」

微かに「ええ」と聞えた様であったが、私の空耳ではなからう。
 「じゃあ、いいね。場所は何処にする？」

写真 (B)



私達は兎も角も一度落ち会う約束をして別れた。
 その約束の日——、私達はミニの、とある喫茶で、本当に数カ月振りに出逢ったが、撮影会の事は仲々に切り出せなかった。塚本君を紹介した時も、最

初は随分ガツカリした様子であったから——

「辻村さん、お連絡しなかった訳わかる？」

「さあ」

「今だから判っきり云えるけど、あの時、私をはぐらかしたでしょう。それであの日帰ってから、何だか辻村さんが狩る人に見える。私独り角力してる見たいで自分が惨めになりましたわ——」

(この事に関しては、三十七年十一月号に掲載の「マゾヒスト水本茂美の登場」をもう一度読み直して戴ければ幸甚であります)

私は彼女とのあの日の出来事を回顧してみた。實際燃え立つ想いに水をかけた私は、彼女に対して返す言葉もない。

「今更弁解めくけど、私は何処迄も、モデルとそれをとる撮影者と云うだけの関係でいたかったのだ。そこに感情や気分を挟むと、私は貴女を他人に紹介したくなくなる。貴女の緊縛の写真を誌上に発表したくなくなる——だから、どこまでも割り切っておきたかったのだよ。狩る何とか水臭いとかとられちゃ残念だな——」

「辻村さんの持論は分っています。けれど、所詮は感情の動物ですわ。モデル商売でない私が、そんな気になったからと云って、それを咎めるのは無理ですわ」

こんなやりとりの続く限り、到底撮影会への誘いは無理である。

「会社を辞めたんだってね？」

「ええ、どうせ臨時か見習でしたから、未練はありません。今の処浪人」

「月に一度、好き者の会合があるんだよ。お偉方が多いから、就職の世話がてら紹介してあげようか——。その時、常連の撮影会するけど御礼も出るし、どうせ非道いことは絶対出来ない連中だから、

頼まれてくれないかね。恩に着るからさ」

「……………」

返事はないが、否とも見えなかった。くどくどしくなるし、私のそんな頼み口上を、茲に綿々と書く必要もないので省くが、とどのつまり彼女は渋々承諾した。

私に恥をかかせない様、当日必らず約束を守ってくれる事をくどい程念を押して、私は夕食を御馳走してやり、その夜は別れたのであった。

それだけに。今日、すっぱかしもせず時間通り、地図に書いてやったワイン氏の宅を訪問してくれた事は、私を痛く感激させた。下手なメーカーは、以前で懲りているから、私は水本茂美にその化粧をなすが儘に任せておいた。

既に素顔をだす度胸を、彼女は持っていた。さして、おめず憶せず、私に導かれる儘に、ワイン氏の私室に入ってきた彼女は、春のよそおいの、華やかなワンピースの裾を払って横坐りになり、顰の広い帽子をかぶった儘、部屋の中を見廻していた。

豪華なステレオ、携帯用のトランジスター、テレビーそして厚いカーテンの向うには、ワイン氏夫婦のベッドルームが隠されている筈であった。

撮影の位置を考えて見たが、彼女をとり巻くのならいざしらず、八帖のこの間に八人もの退屈男が入れば、自ずから撮る位置が制約されてくる。

ステレオをバックにするか、床を背にするしか手段はなさそうである。彼女が物憂げに着換えを始めようとした時、ワイン氏を先頭に待ち兼ねていたメンメンが、どやどやと雪崩れこんできた。

「そうだ。そこを一枚ーハイ、こちらをむいて」

気の早いライカ氏が、うずうずしていたのか、彼女のポートレートを早い処ストロボで一枚とってしまった。(A・ライカ氏写す) 困った様に水本さんは私を見る。それをさりげなく無関心によそおって、私はワイン氏とヒソヒソ話をする。内容は何もないが、時間を稼ぐ為の方便に過ぎない。

あきらめた様に彼女は帽子をぬいだ。すべてスバル氏と話合いの上で、了解済のことと思っている連中は遠慮がない。

ライトの位置をきめる者ー。ファインダーを覗く者ーその肩越しに、水本さんの姿をむさぼる様に見つめる者等々……etc.



写真 (C)



写真 (D)

「先ず初歩から行きましよう。ネ、皆さん」

ナイロン氏が誰にとまなく呟いて、おもむろに彼女に近寄り出した。いつと出したか、一条の真新しい細繩をもつて――

彼女はピクリと体をちぢこめた。

「ね、いいでしょう。さあ

……」
大勢の注視を浴びて、水本茂美は声もなく、又しても私に訴えるような眼差しを投げる。それを無視して、私はナイロン氏に眼顔でサインを送る。勿論OKのサインを――

ナイロン氏はそれに勇を鼓して、トランジスター型の二の腕を、柔かくうしろに廻した。

あきらめた様に、彼女はなすが儘になっている。ワンピースに数条の繩を巻いて後手に縛り、さあと云わん許りにナイロン氏は後退する。パチリパチリと、眩しいライトの焦点を目掛けて、いくつかの異質音のシャッターが殺倒する (B ナイロン氏代表で提供)

「次はボク――」

いつもは控えめのステッキ氏が、珍らしく自ら買って出ると、彼女の繩を解き、キラキラと白光を放つ細い鎖で軽く、彼女の両手を後手に縛した。

「チョイト顔をこちらに捻じ曲げて下さいよ――いいですね」

こんな平凡なポーズにも、一同は等しく佳境に入って行くのだった。(C ステッキ氏写す)

「今度は私の番ですよ――」

ゴルフ氏は頬を紅潮させて一同の前にずいと出ると、手にした細引で輪をつくり、それを首にはめて、本縛りにし始めた。

「チョイト待った――」

パイプ氏の声に、ゴルフ氏の手は一瞬とまった。

「どうした？」と云いたげな眼に、パイプ氏は声を小にして、

「そろそろ脱いで戴こうじゃないの――。お嬢さんの大切な服を台無しにしちゃ悪いからね。そうでしょうスバル氏？」

「タイミングとしてはね。しかし面前でかい？」

「ストリップ――こんな言葉、レディの前で失礼だけど、何ていうのかな。段々に一枚一枚ぬいで行く処を、カメラに納めておきたいんだよ――」

「ホイホイ。厄介な御注文ですな。水本さん、構わない？」

「……………」

うつむいた儘、彼女は寂として声もない。全身が羞恥の塊まりに化しているに違いない。少し無理とも思ったが、羞恥の皮を剥ぐ、これは一つの手段でもあろう。敢えて強引に、私はそれを承諾ととった。

「いいそうだ。じゃあ、ワイン氏が、その介添として、一枚一枚ぬがして行くのを手伝って貰いましょう」

「ええッ、私がかい——」

「そう、奥さんがうしろで真剣ににらんでいらっしゃる。益々いいね。そうでしょう。奥さん——」

私はわざとからかう。

「ええ、いいですとも、二三日前から凄ごく張切っていたんで御座いますからね。是非そうしてやって下さいよ。でないと、そのとばっちりが私にくるに違い御座いせんわ」

テレ乍ら、ニヤニヤしてワイン氏は洋酒の匂いをプンプンさせ乍ら、水本さんに近づいた。

「じゃあ、御指命によりまして、私がそのう、ストリじゃなかった脱ぐのを手伝うことになりましたので、悪しからず。」

「いいえ、自分で脱ぎますわ」

水本さんは、少々不貞腐れた云い方で、腹を据えて、乱暴にワンピースの裾をまくり上げ、くるくると太腿から巻き下して靴下から脱ぎ出した。

ワンピース、シュミーズ、乳当てのパット、裾をひろげるパニヤそして最後にパンティ一枚になり、うつむき加減の顔に、瞬間、羞恥の躊躇が走ったが、思い切ったように、一同に背を向けて、一気に足から外して、手早くクルクルと丸めて、ワンピースの下に差し

込んでしまった。

彼女の傍らで、挙手呆然と、為すこともなくワイン氏は、そのさまを見つめているだけであった。

一同のカメラが、ヌード化して行く、水本さんに集中攻撃した事は云う迄もない。

撮らなかつたのは、斯く云う私（スバル氏）とワイン氏だけである。ワイン氏のカメラを持たされていたワイン氏夫人までが、人々の形勢に押されて、思わずファインダーを覗き、数枚のフィルムを費消した様であった。

「さあ、お待ち兼ねのボクの番だ——」

ヌードになった水本さんにズカズカと近寄ったゴルフ氏は、お預

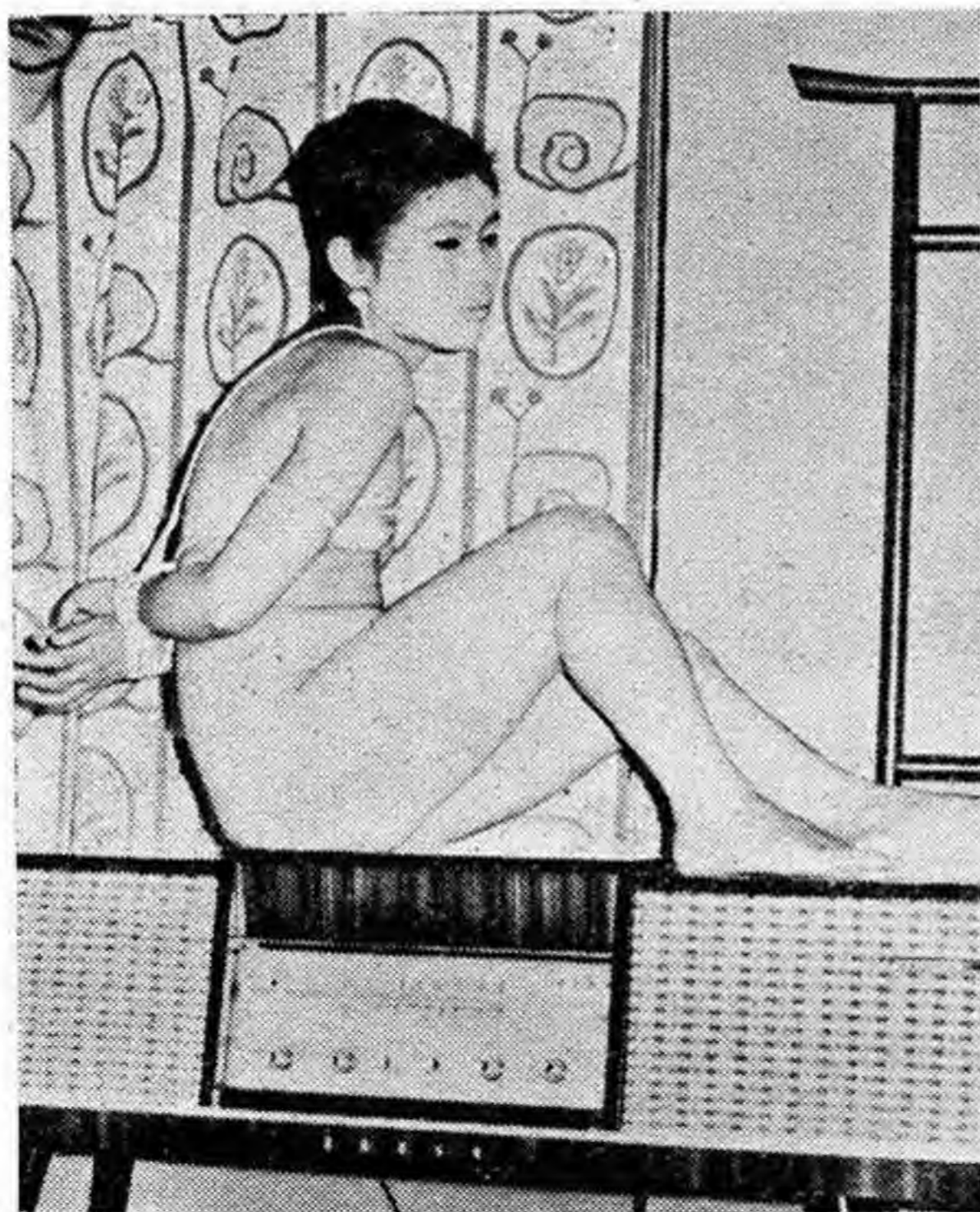


写真 (E)

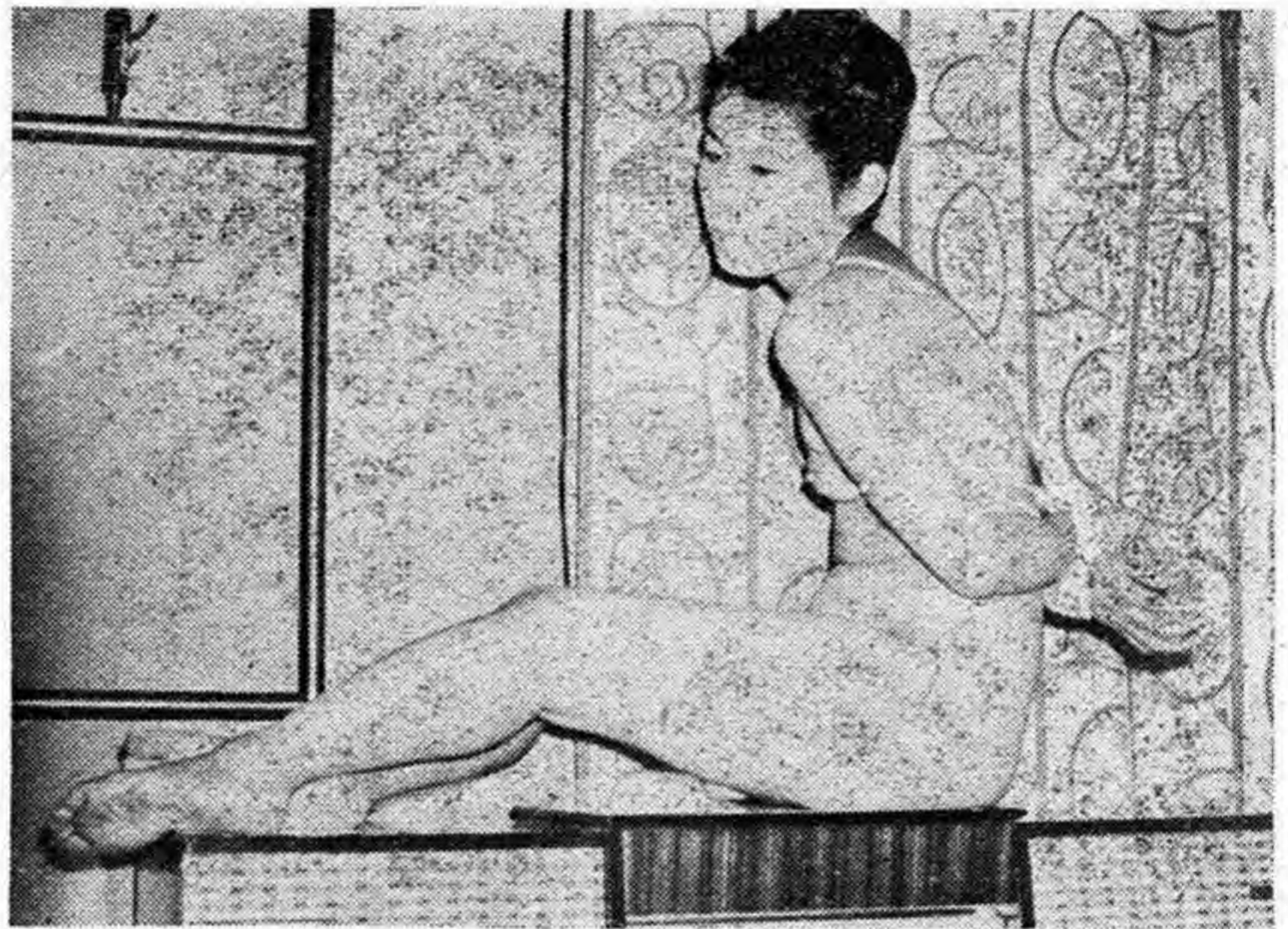


写真 (F)

り方に歴々と現われていた。

「仰向けにシーツの上に寝転んで戴きましよう。ね、それがいいねみんな……。そこで心持ち足を拡げて——そうそう」

水本茂美、本来のマゾの血がじわじわと蠢動を始めたのか、彼女

けの犬が、猛然と餌に喰いつくように、彼女の乳の辺りで八の字型に交叉させた縄を、うしろに廻して、しなやかな彼女の両手を、必要以上にぐるぐる巻きに縄目がふくれ上る位に縛り上げた。

彼の意馬心猿の気持が、その縛

は衆人観視の中で、言われたポーズを平然ととった。

十人の瞳がそれに集中して、私も大急ぎでカメラを構える。

もうこうなると、誰彼なしに手が伸びて彼女の体を右へ左へと反転させ、さまざまのポーズをねらって、容易に彼女の縄を解こうとはしない。撮るのに一生懸命である。(Dスバル氏写す。一部カットはやむなしと了承されたい)

ワイン氏が、急に彼女の体を抱き上げた。

「おいおいどうするんだい」

人々はガヤガヤと騒ぎ立てる。それに応えず、彼は軽々と彼女の体を横抱きにした儘ステレオの上にヒョイと降した。

「ステレオと、縛れる美女って構図で——如何」

「O・K。O・K」

カメラの一斉放射。

(Eワイン氏写す。Fゴルフ氏写す)

「私も一遍触らして下さいよ——」

ドクター氏が遠慮勝ちに申し出た。

「刺激が強すぎて肝臓に悪いんじゃないかな」

ライカ氏がひやかしたので一同はわっと湧き立つ。事実、ドクター氏は数カ月前より肝臓を悪くし、いつも出席はするが、殆んど発言もせず、いつも控えめに聞手に廻っていたのだった。

「お手柔らかにね、後生大事だから」

笑いに囲まれてドクター氏は、落ちついた面持で近寄った。

ステレオから降されていた水本さんは、フト疲れた表情で、ドクター氏を見上げた。

縄を解き終ると、ドクター氏は改めて縄を片手に、一方の手で、

彼女の手首を掴んだ。その手がいつしか脈をとる手になっている。

「おや、脈が早いよ。君、少し疲れたんじゃない？」

「ええ、少し」

「いけないね。じゃあ、奥で一服し給え——酷使はいかん、酷使は——」

名医は稍々むつかしい顔になった。

「流石にドクター氏。お診立てつきだね——」

人々の間に再び笑いが渦を巻いた。

少憩後——再び開始。

ドクター氏は、彼女の両手、両足を前で一緒に縛り、その縄を首に廻した。辛うじて臀部でかじをとるが、無理なポーズは、すぐ、スローモーションで、ゴロリと横転する。横転したポーズは場所によって様々に変化し、一見違った縛り方に見える。

水本さんとは見れば、もうどうにでもなれと云った面持でニコリともしない。大体笑顔の少ない娘だが、今日は尚更にふくれているかに見える。

プロクサー・レンズで近写する者。写す人々の姿をも含めて、人々より数歩下り、撮影会の様子を写す者——。大急ぎでフィルムを入れ換える者——、いやテ



写真 (G)

ンヤワンヤである。

(G・ドクター氏撮す)

ドクター氏について、パイプ氏がその緊縛のポーズをやや変型し再び皆はそれに群れた。疲労の表情が、水本さんの表情を徐々に濃く塗って行く。一対一の場合と違って、もう少しもう少しと、一回の緊縛ポーズの、静止の状態が非常に長いからである。

パイプ氏のポーズで、足の縄を上にも吊り上げたポーズで、どうやら水本さんも辛抱の限界を感じた様だ——。

(H・パイプ氏撮影)

近写していたナイロン氏に、水本茂美は遠慮し勝ちの声で、

「腕が痛いんです」

と囁やく様に云った。

ナイロン氏はハッと我に返って、
「一度解いて上げ様じゃないか——。水本さん、随分草臥れている様子だよ」

その声で人々も、ホッと平静に戻った。モデルの条件も考えずに、余りにも自分本位で夢中になり過ぎていた事に気付いたからだった。

「どう、誌上に発表出来そうなものある？」

「全然ないね。オフリミットの作品許りだね——」

私の問いに、ライカ氏は間髪を入れず答え

た。

「あるよあるよ。ポートレートが一枚。最初にいきなりパチリとやったやつさ——」

ワイン氏がまぜっかえした。

「兎も角、芸術写真じゃないんだから、皆んなねらうところは同じと見えるね。併し、せめて、一枚ずつは発表してもらいたいね。でないと、折角の撮影会の意義がないよ」

私の提案で、しからばと、メンメン大急ぎで現像し、無難なるものを各自一枚ずつ持ちよる事に衆議は一決した。

「どうだい、もう少し……」

ワイン氏が物足りなげに口を切る。

「水本さん、いい？」

私の問いに、彼女は黙々とうなづく。

もともとマゾヒストの水本茂美である。次々と休む間もなく、人々の面前に被縛の体を曝した今は、既にマゾの血がそれを希んでいるのではなからうか——。

「じゃあ、衆議一決。スバル氏に日頃の腕前を発揮して貰って、最後にズバリ、非公開用の凄いやつをお願いしようじゃないか——」

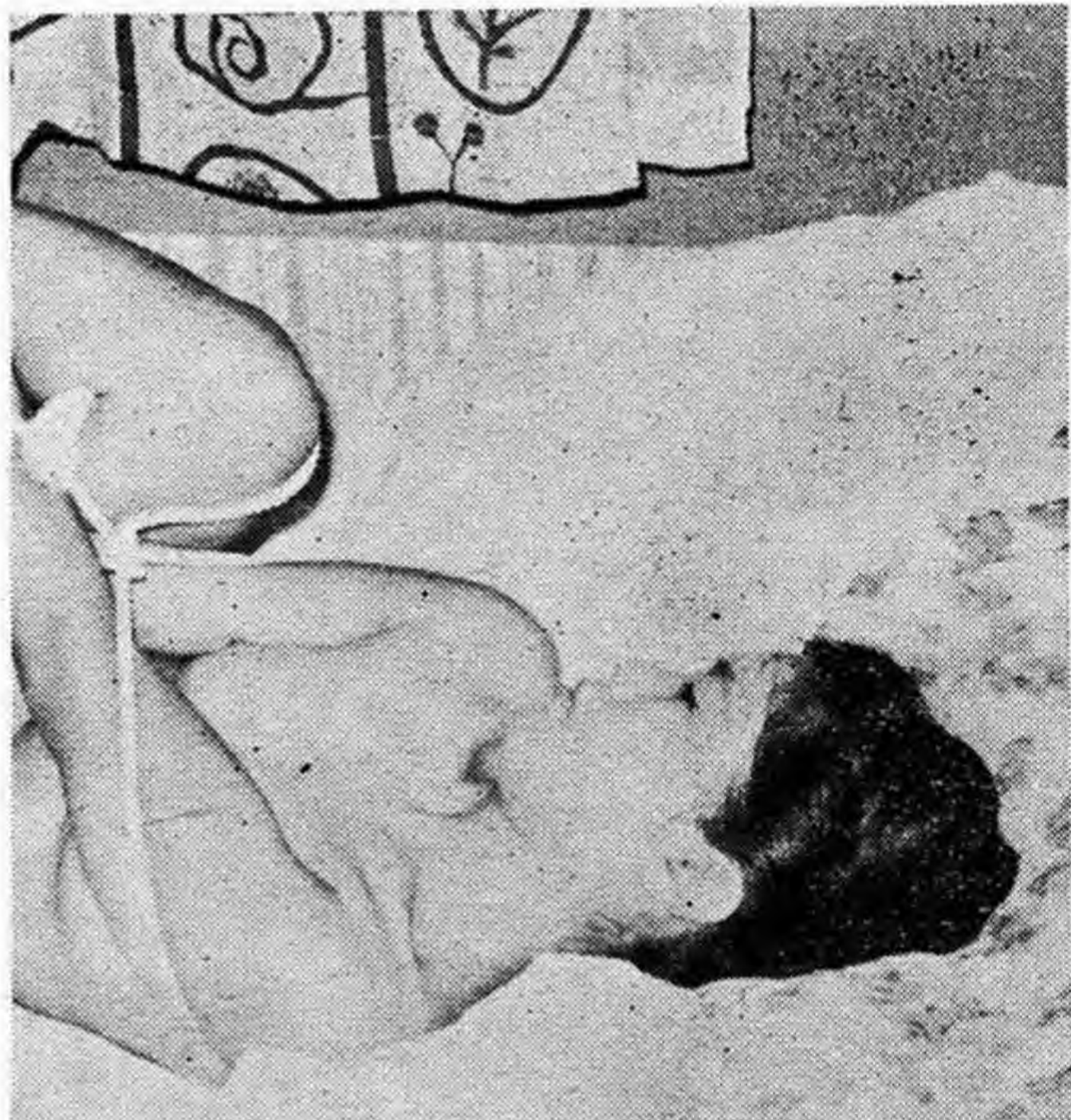


写真 (H)

ステッキ氏は一同の暗黙の意見を纏めてその提案した。

なる様になれ——。そんな態度で、覚悟したように彼女は私をまじまじと見上げた。

こうした多人数の中で、ついぞ、厳しい緊縛をした事のない私であったが、彼女なら納得してくれるだろうと、私はサービスの気持もあって腹をきめた。

カメラを操作する事に汲々として、人々は彼女に、ワイン氏の差出した、唯一本のロープだけで緊縛に終始していた。

「ワイン氏——、もう外に縄はないの？ 何しろこの細縄一本だけじゃ、幾ら構図を考えたって限度があるからね——」

「そうそう、うっかりしていた。写真をとる事にすっかり心を奪われちゃって、肝心なことを忘れていたよ。おい、例のバッグをすぐ

持って来いよ——」

ワイン氏は慌てて、そう細君に命じた。ワイン氏夫人が、やや照れ気味にポストンバッグを持ち出して来たが、誰の目にも、それが彼等夫婦の、愛の緊縛に用うる愛用品であることが一眼で知れた。水本茂美に用いたのは、買いたてのゴワゴワした荷造用の細縄であったのだ。

縄は使いなれた、柔かみの出たしなやかみのある方が縛り易い。ポストンバッグの中味は、手垢と汗と脂で、相当にしなやかになっ

た数条の縄で占められていて、一束、赤と黄色の布ぎれを燃ってつくった、皮膚を傷つけないように作られた太縄は、まぎれもなく夫人手製のものと見て違いなかった。

私の視野の外に夫人の注視を意識し乍ら、私はその赤と黄のんだら縄をとり上げた。縄の中央で輪をつくり、彼女の首にそれをはめ、時間をかけて、菱形にきっちり、彼女の体を後手に締め上げていった。腰で結んだ縄を、股へ通して後手につなぎ股縛りにすると、水本茂美はやや悶えた。その姿勢で腰を落させ、足をうんと左右に開かせて、頃合の棒で両足を棒の尖端に縛りつけた。足の縛りは縄でなく、巾広い真田紐を用いた。

「この部屋では全然吊せないね——」

私は天井を見上げて呟やく。合板でピッタリと天井をはったこの部屋には、吊るにふさわしい梁も棟も鴨居もない。

「何しろ今どきの建物でね。こんな時は至って不便だがね——さて……」

ワイン氏は思案投首に首をひねった。

「応接間に梯子をお立てになつては」

夫人が口添えする。まるで経験者の口振りである。

「そうそう、あれがいい。ボク一人じゃとてもじゃなかったが、今日は加勢が沢山だから出来るだろう——」

「貴方——」

夫人がワイン氏の言葉をたしなめた。一同は何となく、自分に思ひ合せてニヤニヤする。

「応接間の天井は高いんですよ。それで金属製の折畳み梯子を立てると殆んど天井に届くんですよ。丸太棒の長いのに吊って、一方を

梯子にかけ、片一方を皆で持上げて、足継ぎか机に上って、天井の下にある。換気用の廻転窓の枠にかければいい。どう……」

「迷案迷案——」

退屈男達はすっかり若やいで、掛声と共に、寄ってたかって、水本茂美の小柄の体をつぎ上げると、ワッショイ、ワッショイとおみこしか、掠奪者もどきに、廊下を通過して、家の玄関わきの応接間へと担ぎ込んだ。

日頃は箸より重いものを持ったことのない連中が、実にまめまめしく、誰かが適当な丸太棒を持ち込み、二つ折りで脚立にもなる金属梯子を運び込んできた。

マントルピースを背にして、部屋の壁面に梯子を立てると、二三人がさも愉しそうに、水本茂美の両脚を上げた棒を、太い丸太の中央に、縄でくるくる結びつけていた。

「準備 O・K——」

誰かの声で、二人掛りで丸太棒の一方を持ち上げた。私は縛られて眼をつむって、為すが儘になっている彼女を背から抱き上げた。

「こちらも上げるよ——いいね」

こうした私の抱き上げた水本茂美の体が、足を上にして、丸太棒が、梯子と、廻転窓の枠にかけられた。ステッキ氏の応援を求めて頭上高くかかげた彼女の体を徐々に離れて行くと、頭は下って、両足は開いて丸太棒に固定された儘、ものの見事に、私達の面前に、開股逆さ吊りのポーズを露呈した。

私はアップにした彼女の髪を両手を挙げて解きほぐす。床上一米有余の処に彼女の頭はある。髪は垂れて両足に喰い入る紐の痛みに彼女は唇を噛み、眉をしかめている。併かしその眼元には、何か快

よげな、会心の被虐の想念が浮んでいる。

「これで鞭打ち出来れば満点——いうことなしだがなあ——」

ナイロン氏が思わず本心を吐露した。これは誰しもの思いであったかも知れない。

カメラの放列——後手に縛った背面はとれないが、前方から真向に、この被虐の極をとるメンメンの顔は、激しい昂奮にかき立てられていた。

△一度掲載したいフォトだが、いいものをほど掲載出来ない——。

これが市販雑誌の悩みでもある。どうだ、あの水本茂美の陶然たる顔は。被虐者は、その対象が多ければ多い程、尚更、被虐感に陶酔するものだ▽

三分—四分—五分

長い逆吊りの姿勢に、みじろきもせず、マゾヒスト水本茂美は、いつ果てるとも知れない退屈男達の慾求に、宙間に逆吊りの裸身を曝していた——。

× × ×

元のホームバー。満ち充ち足りた表情で、人々は十数分前の、あの感激に弾み切って、グラスを挙げておりました。

少々、蒼褪めた堅い表情で、服装を整えた水本茂美がここへ姿を見せた時、人々は一斉に感謝といったわりの優しい眼で、彼女を迎えたのです。慰勞として手渡されたマネーが幾許であったかは云々する必要ありませんが、それは充分に彼女の努力に酬うべき金額であった筈です。

にこりともせず、約束を果して彼女は、私に

「今後、お目にかかるかどうか、ちよっとしたショックで、気分の

整理がつかないので判りませんが、貴方とは段々と気持の上で縁遠くなる気がしますわ。私も所詮、貴方にとっては単なる一モデルに過ぎないってことが、やっと判りかけましたわ。さようなら」

伏眼勝ちに、口早に云うと、誰にともなく頭を下げて、彼女は夫人の案内でホームバーを出て行きました。

灼きつく様な十六の瞳を背に感じ乍ら。

「よかったよ。よしっ、来月も亦、写真の例会と行こう。ここ当分フォトで勝負しよう。」

ワイン氏はホストの責を果して、こう然と皆に呼びかけました。日は落ちて、黄昏の風に、残りの花片が、又ひとしきり、白く、窓辺に紛々と散らついて、春の淡雪の様にヒラヒラとして行きました。

(おわり)

東浦ひかる「黒フンドシの女」分譲中

第一組

尻に喰い込む黒フン

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

略号「とし」

むっちり肉のついた豊かな尻の割目にぐっと喰い込む黒フンドシの有様に焦点を合せた三枚のフォトによって、禪マニヤの夢を刻明に描き出しました。全裸よりもあらわな黒フンドシの羞恥にむせぶ姿に御期待を。

第二組

股に喰い込む黒フン

大手札印画紙焼付

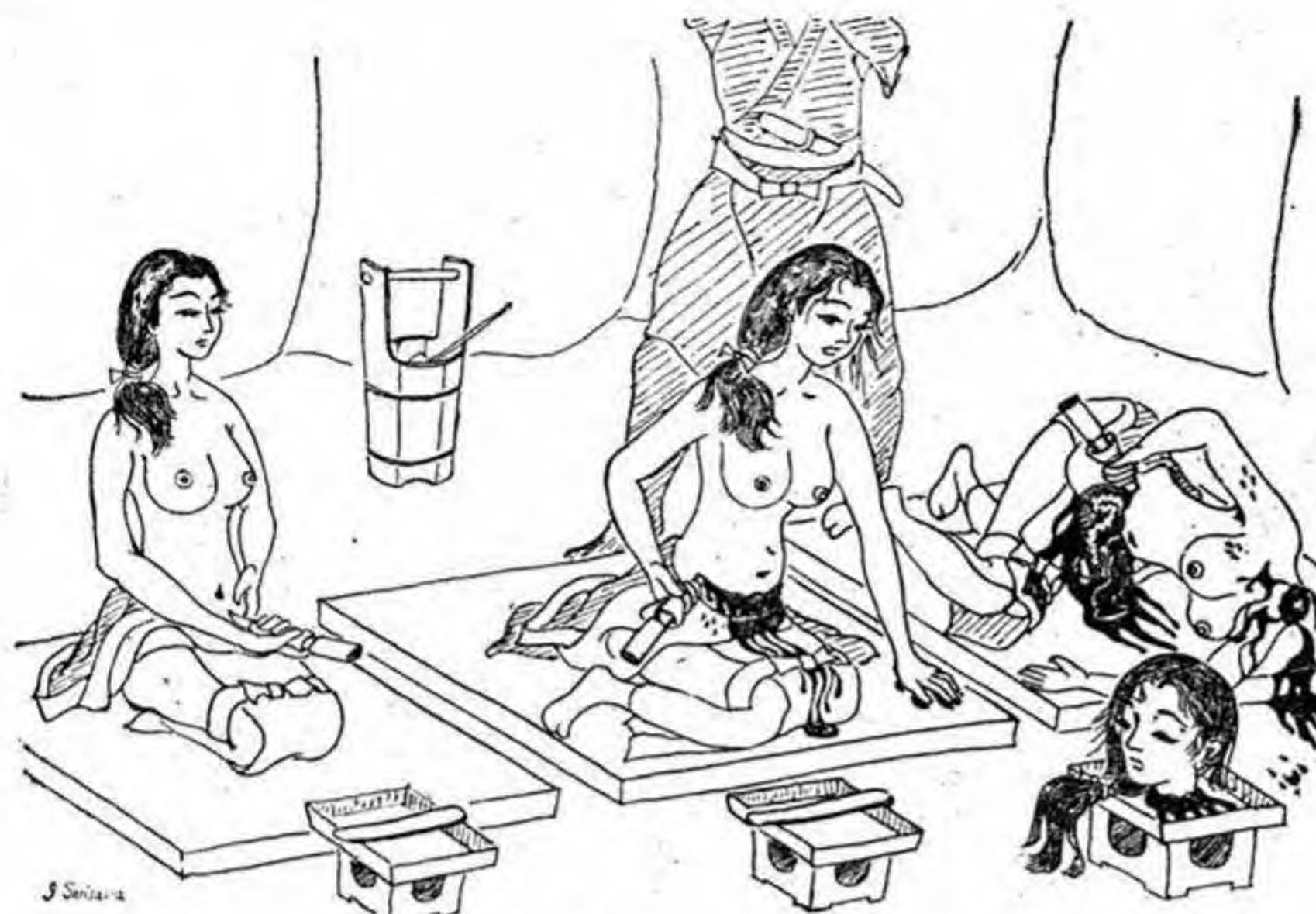
三枚一組 三〇〇円

略号「とひ」

ぴったりと股のつけ根まで極めて短か目に締められた黒フンドシの締め具合を、正面から十分に股を開いて禪マニヤの方々のごらんに入れようという、まことに稀な禪フォトのサービス品三態。

私の無惨絵

芹沢伊保



私の無惨絵に対する趣味は、同封しましたような可憐な少女の覚悟の切腹の場面なのです。

私はこのような美少女の切腹場面を描くとき、胸が思わずドキドキとして自分でも、その鼓動がわかる位のショックを受けます。

殊に斬られた生首が三宝にうやうやしく載せられたところや、刀で打首にされて、血しぶきを挙げているところなど、凄惨なものが好きですが、しかし、これはあくまでも美しく幻想に描かれていなくては興味がありません。

首のない亡骸、自らの手で切りさばいた下腹部からは血汐と共に大腸がうねうねと溢れ出ているといった姿態には、自分がまるでそのような姿になっているかのような錯覚で興奮いたします。

ほん、数分前までは血の通った生々の花の蕾の乙女が、今はもう冷たい骸となっている。この美しい哀れさが、こよなく私の胸をうつのです。現実ではどうか知りませんが、私は幻想として、美しいもの



に映り、そうして倒錯と深淵の中へと誘い込んでくれるのです。

拙い絵ですが、私の夢に描く無惨絵の御鑑賞を得たら幸いです。

田園手帖

—被虐愛ざんげ—

万 田 不 二

川柳の仲間だった大鳥さん、某地で相当名の売れた芸者の子で、粹な句を作った大鳥さんが元気だった頃、二月はじめのある寒い晩でした。句会の後で、池の端の小料理屋へ寄った大鳥さんと私は、一杯やりながら当日の社中の誰彼の句を恣に品評して、それをお酒の肴のようにして頗る上機嫌でした。大鳥さんと私は年は違いますが、社中では御神酒徳利と言われた程の仲で、抑若い私を江戸趣味の世界に引込んで、洒落本や古川柳の妙味を教えてくれたのは大鳥さんでした。そして、その間に何時か川柳に託つての遊び仲間と

言う風にもなって、ある面では言わば共犯意識によって、結ばれている仲間でもありました。

で、その夜も酒盃の間に、社中の先輩諸氏のマンネリズムを扱下すなど、大いに話に花が咲こうとしていたのですが、私は折から入って来た若い女客にふっと気を取られてしまったのです。

そのひとは、灰色のコートに赤と紺のチェックのマフラをして、松葉杖を突いていました。いい仕立の背広を着た弟のような学生風の男と一緒にした。私はちらちらと、そのひ

との着いたテーブルに眼を遣って、漸く油の乗ろうとする大鳥さんの饒舌に対して、生半可な相槌を打っていました。

「あんた、あの店にいた松葉杖の女のひと、知ってるの？」

鴨南蛮を食べて、その小料理屋を出てから私たちは広小路の喫茶店に立寄りました。その椅子に坐ると、直ぐに私は大鳥さんに問われました。

「いいえ、全く知らない人です」

「でも大分気にしてたようじゃないか、御執心のもとは何だい？」

大鳥さんの細い眼が、悪戯っぽく光りました。

「いや、そのネ、僕はと言うのか松葉杖を突いた綺麗な人に惹かれるんですよ」

「ほほう、あんた足の悪い人は嫌いだって言ってたネ、同病相憐れまずの筈じゃなかったの？」

「ええ、そこが勝手なもので、美人となると違うんです。何時か横須賀線の窓から松葉杖突いた少女を見てうっとりしたことがあります。戸塚と保土ヶ谷の間の桃島の径でした。美少女かどうかは遠くてよく解らなかったんですが、路谷虹児の絵みたいな感じで……」

「へえ、成程ネ、抒情的な風景だネ、君のセンチメンタリズムにぴったりではあるが……」

そう言って、大鳥さん、一寸黙っていました。

「実は僕も松葉杖の女を知ってるんだ。いや、昔のことだけだネ、僕は田舎で大学の受験準備をしていたんだ……」

大鳥さんは暫く過去を懐かしむように眼を閉じ、思入れよろしくの体あって、さてそのエピソードを話してくれました。

もう初老に近い大鳥さんは、淡々と散文的に話の筋を喋っただけでしたが、私は聞いて

いるうちに例の夢想癖が俄に動き出して、頭の中に濛々と幻想の霧が立込めて来るのを覚えてきました。私も幼年時代の歳月をそこで過ごした田園の生活、その光と風と雨の記憶が生きて蘇って、その夢幻の濃いムードのなかに何時の間にか一人の松葉杖をついた女の姿が鮮かに浮かんで来るのでした。

大鳥さんと別れて都電に乗った私は、電車が早稲田終点に到着するまでに一篇のショートストーリーを組立てて、深い夢想の楽しみに浸ったのでした。それは、私がうちへ帰って原稿用紙をひろげなければ、砂原に書いた文字がやがて風に消されてしまうように日常性の底に埋没する儚い情念の戯れに過ぎなかったのかも知れません。

泉下の大鳥さん、私の舞文曲筆を知ったらモデル問題で怒るでしょうか、いや、何々大笑するか、そうでなければ精々微笑を浮かべるくらいのところでしょう。何故って大鳥さんは仲々隅に置けぬ風俗文献の蒐集家でもあったのですから。

利雄は大学の入学試験に落ちた。

「あんた小説ばっかし読んでるからよ。私立大学に入れないなんて情ないじゃないの、もしま年も駄目だったら働かせるわよ」

三味線の音締をしながら母親は勝気そうな眼を見張った。将来小説家になる心算だった利雄は、多くの作家が巣立っている伝統あるその大学の文科に是非とも学びたくて、一年浪人して勉強することにした。

「まあ、もっと身にしみて勉強してみなさいよ、それにはネ、大体こんな雑音の多いところじゃ無理よ、田舎へいきなさい、兄さんに頼んであげる」

母親はきっぱり言いわたした。母親は抱えを三人持つ芸者屋の主で、自分もお座敷を勤めている、きびきびした芸達者な妓で、土地では評判のいい姐さんであった。

田舎の古い傾きかけた百姓家へ行って、一年間受験勉強を続けることは、利雄には大へん辛いことに思えた。しかし、英語も数学も力不足な自分がこの儘芸者屋の二階の一間で、三味線や太鼓の音を聞きながら参考書を読んで、その間母親の眼を偷んで飯より好きな小説も読み、時々活動写真を観たり、と言う塩梅式では来年もしくじる虞のあることは充分考えられた。

利雄は教科書や参考書類をトランクに詰込んで田舎へ発った。半玉の初丸が駅まで送って来た。利雄は眼の大きい、小麦色の肌のこ



の娘が好きだった。

「さよなら、あまり勉強して病気になるらないでネ」

汽車が動き出すと、気障っぽいと思ったが、窓からハンカチを振って別れを惜しんだ。

だ。初丸の帯の黄色が眼に残った。汽車が本式に走り出して、窓を閉めようとしたら煤煙が眼に入って、指に唾をつけてそおっと除ろうとしたが、その小さなごみは容易に除れない。矢鱈涙が出るばかりで、利雄は最初から

何かげんの悪いような気がした。

古い港町から出る軽便鉄道に乗換えると、車内は可成り混んでいて、だっぺだっぺと言う子供の頃親しんだ訛が一度に耳に飛込んで来た。線路の両側に続く広々とした田園、遠くの低い山並、何時来ても平凡な、平和な風景が雨催の重たい曇天の下に展開される。利雄はこれからの月日が妙に心細く思遣られ、淋しかった。と、前の車輛からこちらへ移って来た背の高い男が通路の中程に立止まって

「やア、利ちゃんじゃないか」

と、大きな声を出した。度のきつそうな眼鏡、青い髭の剃りあと。利雄ははっとして腰を浮かせ、ぴよこんとお辞儀した。急いで席を譲ろうとしたが

「いい、いいよ、遊びに来たの？」

男は座席の時掛に無造作に腰を下ろして、利雄の顔を覗きこむように見た。彼は港町の中学校の教師をしている香河堅児であった。彼は地主で利雄の伯父とは小学校の同窓生、竹馬の友の頃から今も親しい友人だった。

「ほう、そうか。つまりそれじゃア島流しだね、まアみっちりやり給え。こっちは受験準備にはいい環境だ。刺戟がなさ過ぎて却てはおっとしちやうかナ、ハハハハ、ま、落着いたらうちへおいでよ、何なら勉強見てやってもいい、ハハハハハ」

堅児は、利雄の入試落第の件を聞くと、人の良さそうな笑声と共に親切に言ってくれた。

子供のない伯父夫婦は、利雄を快く迎えた。伯母は祖父の居間に利雄を入れた。

「ちっと暗えがここが静かだ。田舎じゃうめえもんもねえし、おいねえだろうが辛抱して周章でずにやんナ」

利雄は生れて間もなく里親に預けられ、それからこの伯父夫婦に引取られて、この家で七歳まで育てられた。その間はまた利雄の母親の苦闘時代であった。

部屋は六畳間で、床の間の脇に和綴の本の詰まった本箱がふたつ並んでいた。放蕩者で親譲りの山林や田圃を粗方手放してしまった祖父は一生を茶屋遊びと、金春流の謡曲、旧派の俳句など楽しんで面白おかしく送った人だった。利雄の幼年時代の黄ばんだ記憶に、この部屋で中風で寝たきりの彼の老いさらば

えた姿があった。

当座、利雄は何か落着かず、裏山を歩いたり、文房具を買いにいくと言って、港町へ出掛けて一軒しかない活動写真の小屋に入ったりしたが、やがて六畳間に籠って勉強を始めた。藤棚に藤の花が薄紫の花房を垂れて、軒に燕が頻りに出入りしていた。

ある日曜日、利雄は堅児を訪ねた。堅児の家は門前に非常に大きな柳の木があって、村では柳屋と呼ばれていた。利雄は田舎にいた頃、もう亡くなった堅児の母や堅児に可愛がられて、随分この家に遊びに来たものだが、母親と暮らせるようになってからは時偶法事などで田舎へ来ても、そんな時は何かせわしなくてついぞ、ここを訪れていなかった。

広い庭のひさご型の池に緋や白の鯉が悠々と泳ぎ、池のほとりには見覚えのある百日紅の木があった。モンペをはいた小柄な女が庭を掃いていた。堅児の妻の蘭だった。

堅児は二階の書斎で調べものをしていただけだった。

「利ちゃんは小説家志望かネ」

話の間に堅児は微笑して聞いた。

「それじゃ何でもよく見ておかないとネ。花柳界と言う環境なんか、厭だナと思うことも

あるだろうけど、よく観察しておく必要がある。それから、こっちの農村の生活だってそうだよ」

堅児の言葉に利雄は素直に頷いた。右翼的な色彩の濃い中学校に学んだ利雄は四年生の時、文学好きの級友たちを語らってガリ版の同人誌を出した。その結果クラスの硬骨漢たちに三文文士と嘲られ、級主任の教師から睨まれた苦い経験があるだけに堅児が小説を書くこととすることに理解ある態度を示してくれたことが嬉しかった。書道に造詣のある堅児の書斎には拓本が多く積んであった。

利雄は時々、堅児を訪ねて勉強を見て貰った。

「数学の苦手は兎も角、英語はもっともっと頑張らなきゃいかん、何かひとつ外国語をマスターしてゐることは、文士になる為にも必要だよ」

堅児は内心利雄の出来の悪さに気落ちしたようだった。小説の話では元気のいい利雄も堅児の出題した代数や英作文の問題が出来なくて身の縮む思いがした。

梅雨近いある晩、利雄のノートを見た後で堅児が言った。

「君、夜、僕んとこ来るのもいいがネ、どう

せ一日中勉強出来る身分なんだから午前中か午後うちへおいでよ。勿論僕は学校へ出なけりやならんから見てもやれない。それで、菖子にネ、面倒見させるから、離れへいき給え」

菖子——利雄は、その名を聞くと何故か胸が締まるような気がした。

堅児の妹の菖子には、利雄は幼ない日から何だかこわい子だと言う感じを抱いていた。

香河の家へ遊びにいった、堅児やその母親に甘えて巫山戯まわっている時でも、ふと菖子のきつい眼差に逢うと、ひやっとして体が硬張るようだった。だからと言って利雄は菖子に意地悪をされたり、いじめられたりしたことはない。菖子は利雄の思い出のなかで、庭の草花に水をやっていたり、部屋でひとりオルガンを弾いていた、或は麦稈帽をかぶって捕虫網を手に使っている髪の毛の長い大人びた少女であった。その菖子は師範学校時代のある夏の終りに、村境の、土地では普通山と言っている丈高く草が生い茂り、深い沼などもある丘陵地帯へ写生にいった、錆びた鎌を踏んだ。傷口は深く、破傷風菌が入った為に悪化し、遂に港町の病院で右足を膝の上から切断してしまった。それから後はひどい憂鬱症に陥って、ひと頃は気がふれたと言う噂も

流れる程だった。そんな噂——師範学校も中退して、自室に閉籠り、時折夜更けに松葉杖に身を託して屋敷の周囲を散歩していると言った菖子の消息を偶その時分法事で帰郷した母親から利雄は聞かされた。少しの怪我でも大騒ぎする臆病な利雄は何より菖子が受けた大手術の模様が色々想い描かれて、体の震えるくらいのそれはショックであった。

庭下駄を敷石に鳴らしながら堅児は利雄を離れへ連れていった。

「菖子、利ちゃんを連れて来た」

堅児は縁側から大声で言った。少女時代の菖子しか知らない利雄は顔を合わせる前にもう気弱くも胸騒ぎがして、その儘引返したくなった。

菖子は二十四、五歳に見えたが、年よりは派手な華やかな柄の着物を着て、豊かな長い髪に黒いリボンを結んでいた。兄に似た大柄な体格で色が白く、眉が少し濃過ぎるくらいだった。朱塗りの机に向って何か書いていた。

「いらっしゃい。兄さんから、お話聞いているわ」

菖子はいっこり笑った。白い歯並の間にプラチナがスタンドの灯にきらり光った。利雄

は訳もなくこわいひとと言う先入観と、かの大怪我以後の暗い風聞などから後込みしたのだが、意外に明るい菖子の笑顔を見て、ほとと肩のしこりのほぐれるような気がした。

床の間に錦に包んだ琴と、ガラス箱に入った大きな京人形があった。菖子が描いたものか水彩の淡い風景画が壁にかかっていた、その下に古びたオルガンがあった。利雄は昔のそのオルガンの音色を思い出した。反対側の壁は高い書棚で隠れていた。既にこの家に古い蕎麦漬の多い、不様に肥えた梅と言う中年の下女がお茶と塩煎餅を持って来た。堅児はこれからすべて妹に任せたとと言う気が、直ぐに書斎へ戻っていった。

「利雄さん、これ飲まない？この間学校時代の友達を送ってくれたの、自家製ですって」

菖子は立って、書棚の一番下の棚から赤黒い液体の入った瓶を取出した。切った方の足には義足をつけていて、少し跛をひいた。

「葡萄酒よ。私ネ、毎晩寝る前に飲むの」

菖子は梅を呼んで、グラスを取寄せた。アルコールに弱い利雄には、そのへんに赤い色が薄気味悪く、一寸空想癖が刺戟されて、菖子は何やら怪しい酒をすすめる魔女のようにも見えるのであった。

勉強の仕方など菖子の方針を聞かされて、
帰りがけに堅児の書斎に寄ると、彼は習字を
していた。

「菖子はネ、教え出すと熱心だから少々きつ
いかも知れんよ。でも利ちゃんは大入りい
らついでいける。前に喧嘩しちゃった奴がい
るんだ」

堅児は一寸苦笑した。

「しかし、一年の我慢だよ。きっと力がつく
よ、何と言っても菖子は僕と違って暇がある
からナ、その点適任さ。本人も何かと気がま
ぎれるし……いや、なに結局君の為になるこ
となんだ、少し脂をしぼられるんだネ、ハハ
ハハハ」

利雄は不意に優しい先達を失った心持で心
細くなった。

菖子の離れは、香河の屋敷の南の端にあっ
た。裏はずっと田圃続きで、釣師の間ではよ
く知られている△△川を越して軽便の駅に通
じる路が遠く望まれた。

「蛙がうるさくて寝られない程よ」

菖子は喉の奥で低く笑った。最初二、三回
は菖子は穏やかな家庭教師のようにさらっと
した教え方であった。窓際にある栗の木に花
が咲いて、その青臭い、どろっとした臭気が

八畳の部屋一杯に立込めて、利雄の頭を疼か
せた。利雄は、横坐りのような恰好で、脇息
に肘を突いて、じっと訳読に耳を傾ける菖子
の眼が熱でもあるかのように潤んで来るのに
気付くと、兎角たどたどしい訳し方になり勝
ちだった。隻脚の菖子は、利雄が慣れるに従
って、姿勢を楽に崩して、片手を懐に差込み
片手を後について些かだらしない恰好もする
ようになった。間もなく

「利ちゃん、よほど努力しないといけない
わ、少し学校で遊び過ぎたわネ」

などと、づけづけいうようにもなった。利
雄は堅児の注意を思い出して、今にもっとひ
どく叱られるのだと思った。

香河の菖子が利雄の受験勉強を指導してく
れると聞いた伯父は喜んで挨拶にいった。堅
児は伯父と馬が合うらしく将棋をしたり、酒
を飲んだり、小百姓に転落した今はまた何か
と力になることも多かったようだ。

梅雨があがると、俄に暑い日が続いた。近
廻りしても田圃道から高みにある香河の家ま
で登っていくうちに利雄は汗ばんだ。

「机の上の紙に問題が書いてあるから、やっ
てごらんさい」

大きな麦稈帽をかぶって、菖子は裏庭で写

生していた。カンバスを見たまま利雄の顔も
見ずに言った。朱塗りの机の上の、文鎮を乗
せた洋紙に、よく削った鉛筆で印刷したみた
いに綺麗に問題が書いてあったが、そのあま
りの丹念な書きようが利雄には何か異常に感
じられた。代数は難かしくて歯が立たず、英
語も単語の意味は解ったが、文法的にややこ
しく、うまく訳せなかった。菖子は仲々部屋
に戻らない。裏の方で鶏の鳴声が出て、梅が
犬でも追っているのか頻りに罵っている。利
雄は考えあぐんで、壁の風景画や近頃柱に懸
けた能の女面に見入ったりしていたが、余程
経って庭の敷石を突く松葉杖の音がこつんこ
つんと聞えた。

「どう？ 出来たでしょ、やさしいから」

菖子は草色のスカートをふわっと広げて、
利雄の傍に坐った。直ぐに用紙を手にした菖
子の体から日向臭い匂いがした。

「駄目ネ、応用が利かないのネ」

利雄を貶むより寧ろ憐れむような声であっ
た。利雄は菖子の視線を額に熱く感じて、気
弱く俯いていた。自分の不勉強を棚に上げ
て、堅児の言葉に甘えたことを後悔した。義
足をつけていない菖子は片足でびよんびよん
と跳ねて縁側の簾椅子に腰を下ろした。黙っ

て庭の松葉牡丹を眺めている。利雄は学校で教師に叱られた時のように次第に気が滅入って来た。暫くして菖子はゆっくりと言った。「刺戟を与えなくちゃいけないんだわ。ネ、

今度から出来なかったら罰を与えるわよ。例えばネ、単語のスペル一つ間違えたら、そうねエ、そう、顔に墨つけることにしようか、お正月の羽子突きみたい……ネ」



菖子の白い頬に微かに嗜虐的な翳が走ったことに利雄は気付かなかった。菖子の鞭撻にもかかわらず利雄は次第に浪人生活中陥り易い倦怠、無気力の淵に身を沈めていった。母親から小遣が届くと、俄にそわそわして港町にいった、活動小屋に入った。また、本屋には必ず寄って、新刊の小説本を買込んで、夜更かしをして読耽った。作家志望で、三流の私大に入ったクラスメートの相良から真紅の表紙の同人雑誌を送って来た。利雄は三十二頁のその雑誌を繰返し読んだ末、俺にもこのくらいの小説は書けるんだと思った。小説を書くには大学の文科を出ることは問題ではない、東京へ帰って来ないかそんな相良のハガキを貰うと、受験勉強に倦んでいる利雄には、それは好ましい餌のような誘惑であった。「ほらほら、利ちゃん少しおっちょこちよいだから計算を間違えるのよ」菖子は鉛筆で、こつこつ利雄の頭を叩いた。それから水彩絵具のパレットを開けて、利雄の顔に○や×を書き入れた。利雄は顔に

歌舞伎俳優のような限取を描かれてもにやにやしている程に菖子に押れ出していた。菖子の手で顎を抑えられて、絵筆の先でちょいちょいと顔に悪戯書きされるのが、それが菖子により親しくなるはずにもなったし、利雄はその性格の一面であるおどけ振りを発掘しては菖子のご機嫌を取り、菖子が白い歯を見せているうちは気安く甘えているのだった。

盆が来て、港町に相撲の幟が立った。利雄は菖子に誘われて観にいった。菖子は余程相撲が好きらしく、木戸口で買った番組表にいちいち勝負のしるしをつけながら熱心に見入って時々歓声を発していた。利雄は同じ並びの席に、土地の顔役らしい赤ら顔の旦那が連れて来ている芸者の一人がうちの半玉の初丸に似ているので、その方に気を取られて屢視線を向けていた。出羽ヶ嶽が登場すると、客席の間をうるさく廻っていた物売りも荷をおろして跼んだ。が、カリエスに悩むこの巨人は自分の胸程の力士にあっさり寄切られてしまった。

相撲が跳ねてから菖子が港町の親戚を訪ねたりしたので、帰りは夜遅くなった。

「兄さん残念がってたわ、相撲の方が面白いのに」

松葉杖を突かずに義足で来た菖子は暗い田圃道をゆっくり歩きながら言った。堅児は蘭の里からよばれて夫婦で遊びにいらっていた。駅を出る時は、同じ方向にいく人々が十人程いたが足弱の菖子は忽ち取残された。

「菖子さん、疲れた？」

「ええ、一寸」

菖子は立止まって、額の汗を拭いた。雨気を含んだ風が出て来て、遠い空で稲妻が閃めいていた。利雄は少し躊躇ったが、思い切ったと言った。

「ねエ、おぶっていいとか？」

「まあ。いいわよ、子供じゃあるまいし」

利雄は勝気な菖子が怒るかと思ったが、思いがけなく弱々しい声音で、菖子の不自由な体が急に可哀相になった。

「もう誰も通らない。ね、おぶおう、雨が降って来るかも知れないし。第一僕眠くなっちゃった、このところ猛勉強してるから」

「うそ、小説読んでる癖に」

利雄は闇の中で頭をかがいて、菖子の前に跼んだ。背負って見ると菖子は大柄なだけに重かった。

「わたし、これでも着痩せする方よ、重たいでしょ」

「なあに平気、平気」

菖子を負うて歩き出すと間もなく利雄は後めたい気持ちになった。利雄は花柳界育ちだけに早熟であった。男と女のこととは早くから知っていた。中学校でも三年生の頃から授業中に机の下から下へ時々あの写真が廻されて来た。利雄は大方外人のものが多いその写真のどきつきさを嫌悪せずにはおれなかった。而も嫌悪の果に観念的に知っていることへの好奇心が漸く募るのも感じていた。それがどうしようもない鬱屈した感情にまでならなかったのは母親やうちの抱えたたちのさらっとした肉欲を抽象化してしまうような日常の起居だった。四年生になると、クラスの軟派はひそかに遊廊に遊んだ。利雄も何度か誘われたがいく気にはなれなかった。利雄は美しい、いっそ他愛のない恋愛物語を好んで読み、一方作家の自伝的な小説などで、その作家が童貞を失った折の経緯や感想にひどく興味を持っていた。愛読していたストリンドベルヒのそれに関する憂鬱な感想など忘れられなかった。

「あ、流れ星」

菖子が呟いた。少女のような声だった。村境の貧弱な橋を渡ったところにある浅い竹藪の傍で一休みした。菖子の着物が夜目に白く

顔がまたほの白かった。利雄はじっとり汗ばんだ自分の体が甘酸っぱい女の匂いに浸されているような気がした。こんな星のない暗い晩、菖子を背負って砂漠のような処を何処までも歩いていきたいと思った。美しい女に侍童の如く仕えたいと思った。菖子のしっとりした柔らかい重み、それは不思議な歓びを利雄に与えてくれた。

川から施餓鬼の太鼓の音が聞えて来る午後、菖子はミスの多い利雄の英作文を調べながら提案した。

「今度はネ、顔へ墨や絵具を塗る代りに私をおぶって、私がもういいって言うまで、この部屋の中を歩くのよ。どう、この方がこたえそうネ」

利雄は先日夜のようにならぬ菖子を背にして、八畳の部屋中をぐるぐる廻った。浴衣着の菖子の熱い体が利雄の背中を火照らせた。利雄は明るい部屋の中だけに段々息苦しくなり、悪事を働いているような気がして来た。

「あら！ どうしたの？ 菖子さん」

西瓜の盆を持って来た蘭がびっくりした声を出した。菖子はすっと利雄の背から降りて「罰よ。あまり出来が悪いからなの、本当は石を背負わせてあげるんだけど、私が石にな

ったげたのよ、フフフフ」

菖子は事もなげに笑った。別に恥ずかしげな様子もない。

「いやな奴、黙って入って来たりして……」母屋へ戻る蘭の後姿へ菖子は憎らしげに言った。菖子にはある種の嗜虐性があるらしく、この「罰」が気に入ったようで、利雄がよろけて倒れるまで容赦なく背負わせるようになった。

「フフフフ、ああ面白い、到頭参ったわネ」

菖子は足がもつれて俯せに倒れた利雄を押え込むようにそのまま上体の重みを預けていた。外は雨が音立てて降りしきり、部屋の中は青暗く、黄昏のようだった。菖子は起きようとする利雄を尚もきつく押え込んだまま、くすくす笑っていた。洗いたての髪につけた油の匂いが濃く利雄の鼻を蔽った。

「さ、今度はお馬になんない。おんぶよりか、ずっときくわよ、フフフ」

激しい雨の音で、利雄には菖子の言葉がよく聞き取れなかった。

「お馬になるのよ」

もう一度耳許で言われて、利雄は菖子の顔を仰いだ。その強く光る眼に昔の少女時代の菖子が思い出された。そんな事実もないのに

その頃菖子にひどくいじめられた覚えがあるような気がした。日頃母親に幽痒がられる気弱な利雄はこの女の先生にも従順だった。菖子の太腿で胴中を縛と締めつけられて、利雄は暗い座敷を這い廻った。女盛りの体の重量に利雄の背は撓い、両膝が擦剥けたように痛んだ。

「一寸待って」

喘ぎ出した利雄の背を下りて、菖子は姿見の絹の蔽いを除った。

「姿見に向って進むのよ、さア少しギャロップしなさいよ、お馬らしくないわ」

再び利雄の背に跨った菖子の命ずるがままに人間馬は、青白い鏡の面にその切なげな姿を大きくしていった。利雄は荒い息をして喘ぎ喘ぎ、前に母親が抱えと話していた、ある待合の鏡の間のことを思い出した。港町へ出た帰りに汽車の中で堅児と一緒にあった。「どうだい、大分しぼられてるらしいネ。でも力はいったろ」

堅児は二百十日の近づく稲穂の波に眼を細めながら利雄の肩を軽く叩いた。何時か菖子をおんぶしているところを見られているだけに蘭が何と告げているか、利雄は顔が赤くな

「ある日、菖子には来客があった。髪の毛の長い、ルパシカを着た若い男だった。」

「掛違つて出逢わないけど、この人よくうちへ来てるのよ、旗田さん。画家でもあり、文学者でもあり、フッフ、それから……」

「もういいですよ、ハハハ」

男は気取った手つきで、オールバックの髪を掻揚げた。これを皮切りに旗田と利雄は度々菖子の部屋で搦合った。その都度利雄は次の四畳半の簞笥や鏡台、それに古い婦人雑誌が山をなしている部屋に移らねばならなかった。旗田は隣村の素封家の次男坊で、東京の某私立大学に学ぶ傍らなにがしの画塾へも通ったそうで、油絵がうまいと言う評判であった。彼は利雄が次の間で菖子が出した英文和訳の問題と取組んでいると、何やらひそひそ低い声で頻りに話した。そのうちに菖子が利雄の聞いたことのない蓮葉な声を挙げて笑うので、利雄の気持はともすれば乱れそうになった。八俺はやいてるのか知らん、利雄はにがいのものが口に溜って来るのを感じた。

利雄は答案を書きあげてしまったが、隣室の旗田と菖子は途断れることなく話込んでいく。菖子は時々操られてもしたかのように奇矯な声をあげた。それは低級な芸者か、酌婦

のようで、利雄は菖子のそんな面を知ったことが悲しくさえあった。答案の出来たことを告げるのも何か憚られたが、おずおず声をかけると、菖子は笑いながら出て来た。顔を赤くし、襟元に片手をやっていた。

「どう、今日は？」

菖子はそれでも丁寧に答案に眼を通した。

「いいわ、今日は刑罰なし。お客さんだからネ、じゃ、また明後日」

菖子の上機嫌なことが、利雄の気を悪くした。つまらなく田圃道を歩いていく利雄の耳に遠い威銃の音が伝わった。

月日は速かに経って、朝の冷たい大気を震わせる百舌鳥の声にも、夜半の細々と鳴く蠅の声にも利雄は今更のように怠惰な勉強振りが反省させられるのであった。うちのことにも懐かしかった。去年の秋の、稲穂の簪をさした初丸の顔など思い出して切ない、甘い気振になった。

「利雄さんの角帽姿を早く見たい」

と言った初丸の笑顔を見る為にも大学に入らなくてはならないと利雄は我武者羅に参考書の頁を繰り、機械的に英語の単語を暗記しようとして試みるのだった。菖子は少々へんなところのある女だが、何としても学力は確かな

ので、このひとに頼る他ない、利雄は菖子の部屋へ精動した。

「あなたもっと慣用句を覚えなさいや駄目よ」

菖子は利雄を叱った。それから何時ものように利雄を馬にしたが、何時になく腰掛け乗りになった。

「ちゃんと乗らないの？ 落ちるよ」

そろそろ這いながら利雄は訝しんだ。

「ううん、今日はネ、私お花なの、フッフ」

利雄はそう言えば何時もの菖子と違う匂いがするような気がした。真赤な花びらが頭の芯に開いたかのように頭が痺れそうだった。勿論それはそう言うことに過敏な年頃の故で教えられなければ何も解らないのだが。

「もういいわ、降りる」

菖子はあっさりと利雄を許した。利雄は背中から重荷が除れてほっとしたが、また物足りない気もした。利雄は近頃白のような菖子のお尻の下に圧しひしがれる夢を何度も見ていた。それは夢と言うよりは半睡状態裡の心の底に蠢く願望のような半ばは自覚的な妄想のようでもあり、誰にも言えぬ恥ずかしい心の秘密だったが……夢の中の菖子は、利雄を捻じ伏せて、白い喉を見せて仰向き、高らかに笑った。そして腿の間に利雄の顔を挟んで

強く締めつけた。それから今度は松葉杖の先に槍の穂先を括りつけて、それで利雄を追廻し、ついに抑えつけて背中にくさりと突立てたりした……。

菖子は柿を剥いて利雄にすすめた。そして地主の妹らしく今年の米の出来具合など話したが、ふと気付いたように笑って

「ハハハハ、こんな話、利ちゃん興味ないわネ、今日は面白いもの見せたげる」

と言って、書棚の傍の鍵のかかる小さな本箱のガラス戸を開けて、積んである本の間から一冊の薄い画帖を取出した。

「ごらんなさい。まアポンチ絵のたぐいだけど……」

差出された画帖の頁を何気なく繰って、利雄ははっとした。絵は墨絵のもの、淡彩を施したものの、あくどく塗立てたものなど様々だったが、画面は一樣に腰元風の女や奥方風の女が荒縄で緊縛した男を弓の折れや鞭を揮って責め虐げている場面ばかりであった。それも女は絵によって髪型、顔、衣裳が違っていたが、男は全部粗末な筒袖の着物を着た達磨に手足をつけたような中年男であるのが利雄の注意を引いた。

「達磨さんみたいだね、この男」

利雄は菖子がどうしてこうした絵を描くのか、またどうしてこんなものを見せるのか判断のつかぬままに聞いた。

「そうよ、その男、達磨みたいな男だった。

昔、うちにいた下男がモデルよ」

「へえ、可哀相に」

「可哀相なことあるもんですか、そいつは私が小さい時、わるさをしようとしたんですもの……」

菖子の眼がきらりと光った。画帖の最後の頁の図柄の淫虐さに利雄は息を飲んだ。

利雄は幼年時代からおびえ易いたちであった。雑誌の口絵や挿絵などで戦場の悲惨な情景とか、磔刑のむごたらしい有様を描いたものを見た晩は殆ど必ずと言っていい程おそろしい夢魘に襲われた。殊に利雄は女が縛られたり、斬られたりする場面を描いたものを見ると気色が悪くなった。元来利雄は血の臭いのするようなことは厭な性分だった。同じく残酷なものなら寧ろ毒婦が男を刺殺したり、毒藥を盛って、男をのた打ち廻らせると言っただけの方がまだしもよかった。菖子に達磨に似た下男の話聞いた夜、利雄は勉強机に向ったが、あの画帖の残酷な、そして淫らな印象が頻りに頭に浮かんで、ややもすればそ

れは怪奇なイメージを形造るのであった。しかし、そのうちに堪らなく眠気がさして、何時か利雄は机に倚って居眠りをしていた。

……ふっと気付くと、利雄はもう荒縄で手足を厳しく縛られて転がされていた。驚いたことには、あの画帖の達磨男と同じ筒袖の着物を着せられていて、体も達磨のように肥満しているものであった。四辺を見廻すと、そこは菖子の離れのごたごたした四畳半だった。何が何やら解らず、茫然とした利雄にはこれが現実とも夢とも判断がつかなかった。やがて隣の部屋に人の気配がして、旗田と菖子の声が聞えて来た。——うまく毘にかかったネ。

——細工は粒々よ、積年の怨みを到頭晴らす時が来たわ。——焼鰻よく灼けよ。——うんもう少し。今日こそ、烙印をつけてやるわ。

——さぞ喚くだろう。——あなたも手伝ってネ。襖が開いて、狩衣のようなものを着た菖子が雑兵風の出立の旗田を従えて、灼熱した鰻を片手に入ってきた……

利雄が眼を覚ますと、裏山に秋風が騒いで家中しーんとしていた。

冬のはじめ、港町の活動小屋へ行って、帰りは終電になった。同じ車内にレンガ色の外套を着た旗田がいた。小柄な可愛い感じの和

服の女が傍にいた。利雄には女が誰なのか解らなかったが、極めて親密そうで、二人は利雄の下りるひとつ手前の駅で下車した。霧のながれる駅の灯に女の横顔が白かった。その女のことは、二、三日後の夕餉の時、何気ない伯母の話で解った。

「菖さんもあれで仲々いい話もねっぺ。旗田さんがよく来るって言うけど、旗田さんも天堂さんとこの美枝ちゃんと話が纏ったらしい」

天堂は、利雄も名を聞いている隣村の旧家だった。利雄は菖子が旗田を好いているに違いないと思っていたから何か急に菖子があわれになった。

十二月半ば、うっすらと初雪が降りた。利雄は何か浮き浮きして、今年最後の心算で港町へ出た。鄙びた遊廓の大きな瓦屋根に積んだ薄雪が午前の日差に輝いていた。例によって古本屋を覗いたり、活動を覗いたりして駅に戻ると空がまた雪でも降らしそうにどんより鉛色に曇っていた。年用意の買物に来た人々などで可成り混んでいる待合室の隅に意外にも菖子が腰掛けていた。

「おや、どうしたの？」

「うん、女学校の時の友だちの病氣見舞に来

たのよ。大分悪いの」

菖子は愁わしげに答えた。

汽車が走り出すと、またちらちら雪が降って来た。村境の橋を渡った時、向うから花嫁の列が静かに進んで来た。ひらひら粉雪の舞う田圃道を花嫁は、紋服の若い男が差掛ける傘の中で、俯きがちに歩いて来る。背が高く、擦違う時うなじの白さが印象的だった。

「綺麗だなア」

利雄は振返った。

「利ちゃんも早く大学を出て、あんないいお嫁さんを貰いなさい」

菖子の言い方に一寸皮肉なものを感じて、

利雄はそっと年上の女の横顔を窺うと

「いいお嫁さんを貰うのよ……旗田のように……」

終りは呟きのように低い声だった。

「旗田さん、結婚するの？」

知っている癖に利雄は聞いた。ふと意地悪い気になったのだ。

「そうよ、来春ネ、あんなだって伯母さんか誰かに聞いて知ってるでしょうに」菖子はややしよげた風を隠さずに利雄を睨んだ。雪が勢を増して来たので、利雄は洋傘を菖子に貸し、自分はマフラで頬冠りして、わざと雪片

を学生服につけながらずんずん歩いた。

「シモーヌよ、雪は、そなたの頸のように白い、シモーヌよ、雪は、そなたの膝のように白い、シモーヌよ、そなたの手は雪のように冷たい、シモーヌよ、そなたの心は雪のように冷たい」

利雄は上田敏の訳詩を口誦んだ。

「随分で機嫌ネ、でもそんなのは利ちゃんよりもっと大人の詩よ。ねエ、もう少しゆっくり歩きなさいナ」

寒い風の中で菖子は汗ばんでいるらしく顔が上気していた。

「うちへ寄って遊んでかない？ 今日勉強しなくていいから」

伯父の家の方へ走る畦道のところで、菖子は妙に優しい声で利雄を引止めた。

離れの部屋へ戻った菖子は直ぐ梅に晩の利雄の分の食事を用意するよう言付けた。炬燵に入って、珍らしく菖子は白樺派の話など仕掛けて来たので、利雄は忽ち水を得た魚のようになり得意になって、その文学的知識をひけらかすのだった。菖子はこの部屋で初めて逢った晩に飲ませた葡萄酒の瓶を持出して、利雄にすすめ、自分も何杯も飲んだ。こんな甘ったるいものをよくもああ飲めるものと利雄が

吊責

見たり

聴いたり試したり

阿久津 猛

一、見たり

叔母の経営している『サロンS』の裏にあるSの代理マダムK子の住居を私はある用事でおとずれた。

K子は家に居ないのか、いくら声を掛けても返事がないので、隣りに住む外人夫妻に用件を頼もうと思って、隣で顔見知りと言う気安さから声を掛けようと、何の気なしに横の窓を少しあけた。私の目に写ったのは、その外人夫人の意外な姿だった。全裸で手足を一緒に縛られて鴨居から吊り下げられ、口は風呂敷のような物でふさがれていた。

そんな光景が眼に写った瞬間、私は戸を閉めて逃げる様に窓辺をはなれた。胸はドキドキして顔はほてり、少時の間放心状態

でいた様におぼえている。後日K子にその件を話したら、毎度の事で夫婦喧嘩の時はいつもだそうで、凄いい時には足を開いて逆吊りにして水を掛ける（私は浣腸責かと推察したがマニヤかどうか不明）でも一時間程すると二人で一緒に買物に出掛けるのだから、アレはアレでいいんでしょう。だって――。

二、聴いたり

電気工事店に務める私は或る日作業連絡の為現場に行った。連絡する係が午後に来ると云う事なので、昼休みを現場の人達と雑談した。

常雇工ばかりでなく臨時の人夫も六名程きていた。話題は例の如く女性の話の花が咲き、その中でも三十才位の男の話が交っ

内心驚いていると、菖子は大声で梅を呼んで炬燵に炭を加えさせた。間もなく炬燵の火がかつたと熾って、強いられるようにして飲んだ葡萄酒の酔も手伝って、利雄は体中が熱くなり、顔は火でも出そうに火照って来た。「この前見せた画帖でも見せようか？ あの後また傑作があるのよ」

にやり笑って菖子は立った。利雄の頭にあの達磨男の淫らな苦悶図が一瞬鮮かに浮かびあがった。画帖を手にした菖子は何かいそいそした様子で炬燵に足を入れようとしたが「あッ、痛い、痛いわ」

と、急に顔をしかめた。火と酒で陶然としていた利雄はびっくりして顔をあげた。

「痛いわ……この義足、もう代えなきゃいけないんだわ、擦れるのよ」

菖子は後向きになって、義足を外しかけたが、直ぐにくるりと向き直った。

「あ、一寸利ちゃん、あなた私の切口見たかない？」

と、菖子は思掛けないことを言った。薄っすらと微笑んで、眼が鈍く光っていた。その言葉の意味が解らないようなぼやとした表情で、利雄は菖子の赤らんだ顔を仰いだ、そこへおしかぶせるように、はっきり

ていて特筆すべき話であった。

赤線がなくなっても夜が寂しいなんて事はない。俺も此の間は変な女と一緒にになった。その女、春は売らないが身体を虐めるのなら何をして良いと云って、くるくるっと服を脱いで裸になり、サア縛ってサアブツて、くすぐって、と云うんだ。変態だね、俺はこう云う事は好かねえから小遣を少しやって別れたが、先様を喜ばして、俺の方はダシにつかわれて、ゼニを取られる様なもんだ。

私達にはマニヤとして垂涎の話であり、神様のような女にみえるが、その女に会わせてくれとは、とても私にはいえなかった。つけ加えておくが、その女は、どこで手に入れたか昔十字軍が出征の際に妻に残した様な物をつけて施錠してあったそうである。

三、プレーしたり

毎月のKKグラビヤや本文によって、私は自縛自演を深夜に行うが、屋内のプレーにももの足りなくなった或る休日に、白昼のプレーを狭山丘に求めて行った。

自縛の吊責で、身体を宙に浮かして、その姿態をカメラに納めて、種々と考えたアイデアをプラン通り実行していた。私は猪吊りとなって青空を眺めカメラのセルフの音を聴いていた時、突然ガサガサと雑木のゆれる音がして、中年の農婦が出てきた。

私はとんでもない姿を見られてしまった。あわてて私は縄を抜けようとするが中々抜けられず手足をもがいた。農婦は「ドウシタンダネ」と云って傍へ寄ってきて私を助け下ろしてくれた。

私は文字通り全身が真赤になった。農婦にいろいろ説明した。なんとか納得して貰い、少しの紙幣を握らせて、その後のプランを実行した。

笑い乍ら私を縛ったり解いたりしていた農婦も、終り頃になるとファインダーを見ながらいろいろ指示までする様になった。

はずかしがりやの私が白昼人前で縛られたのは始めての事であり、今手元にフオートになって残っている。今になって考えて見ると羞恥の伴ったプレーが最高であると想う。

「私のネ、足の切ったところよ」

菖子は言い直した。利雄はざぶり水を掛けられた程にぞっとした。既に菖子の気持がこじれていたこと、それに些か酔ってもいることに今更気付いて当惑した。

「いいよ、そんなとこ見せて貰わなくても」利雄は浮足立った。

「そんなとこ？ そんなとこ、見てごらんなさいナ、そら」

義足を素早く外した菖子は、片足でひと飛びに利雄の傍に寄って、後込みする利雄の肩に両手をかけた。

「残酷なものよ。参考の為に一度見ておきなさい、フッフフ、綺麗なお嫁さんを見た後だから尚見せてあげるんだ、そら、よくごらんなさいナ」

菖子の手に入力が入り、利雄は脆くも仰向けに押倒された。その上に踞んだ菖子の着物の前が割れて、気味悪くすべすべした太腿の切断面がびったり利雄の額に押付けられた。着物の裏地の燃えるような緋と、生温かい青白い腿の匂いと……利雄は額に円い烙印を押されて、ユリシイズを惑わせた魔女のような婦人に誘われて、小暗い湖の藻の茂みの中へ沈められていくような気がした。(おわり)

〔読者体験談〕

ボクの禪ダンギ

江 田 彰

ボクが禪にとりつかれたのは小学校低学年の夏、川へ遊びに行った時からである。ボクの家から電車で約一時間かかる処で子供の遊泳場として有名な処である。ボクはランニングシャツとパンツのくつついた水着をつけさせられていた。その頃は今思うと信じられないのだが、黒い三角禪だけで泳いでいる大人が実に多かった。ボクはそれが禪と云うものであることを知り、何か気になった。泳げないので砂で遊んでいると、廿才位の男が二人仰向に寝ているのに気がついた。何気なく傍へ寄って見ると濡れた黒い小さな三角禪をしていた。ボクは強い衝撃を受けて動けなくな

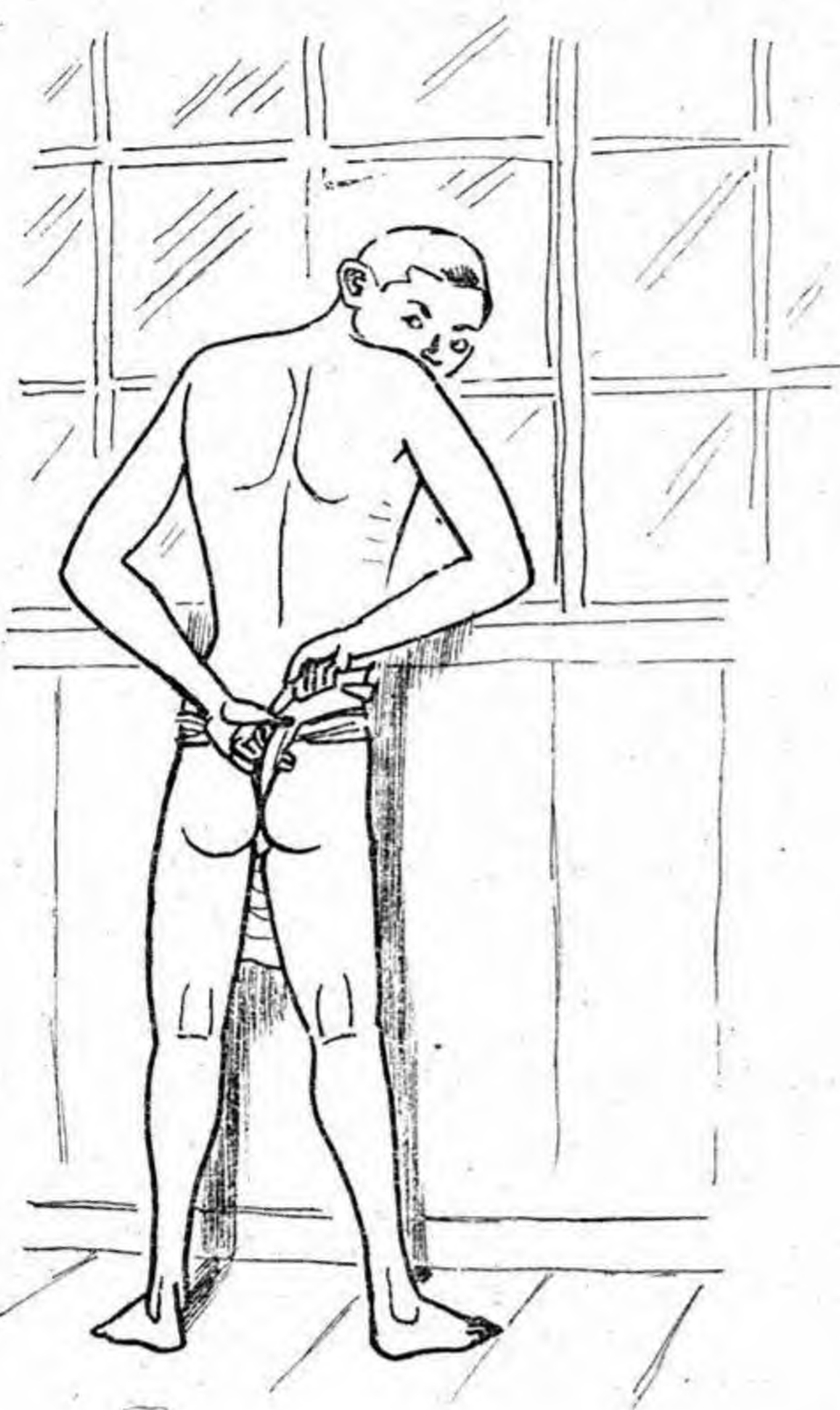
って其処にへたり込んでしまった。二人は急に立上り相撲を取るようになつて争っていたが、砂の上に倒れて脚をばたばたはじめた。ボクは何か見えてはならぬものを見ていようような気がして急いで走り去った。

その晩、風呂場で手拭を細長くたたんで股に当てて見た。手で強く圧迫したり股をくぐらせた尻の方を強くひっぱったりした。ボクはイキがつまる程ハツとした。その時以来、禪と云う言葉を耳にするだけでもボクはショックを受けるようになってしまった。

その後の記憶は定かでないが、学校から以外にその川へ行くこともなかったと思うし、

禪についての思い出はない。

中学一年の夏、体操は水泳であり六尺のしめ方を習った。ボクが禪と云う言葉をはじめて口にした時でもある。晒の何米かを半巾に折り肩から前にたらしめて股下をくぐらせ腰の処で腹を一まきし、肩にのこした部分を前に二重に股をくぐらせ、先の端と尻の上でよじって左右の腰にまきつけるのである。左右両端が横腹の同じ位の処におさまらぬとやり直しをやらされる。ボクは同級生の六尺を見ているうちすっかり興奮してしまった。学校時代は何もスポーツはやらなかった。従ってこの間は白紙である。



就職して又暫く時が経った。何年振りかで中学時代のその友達Kに出遇った。彼は一度遊びに来るように誘ってくれた。或る土曜日訪ねてみたら、彼は臥っていた。腫物が出来たのだと云う。何処だと云うと妙な笑顔をしてお見してくれ、膏藥がとれているかもしれぬと云い蒲団をまくった。彼はネマキの前を開けると下は何もはいていなかった。臀部に小さい腫物があって絆創膏ははずれていた。

暫くしてKに治ったから一緒に飲もうと誘われた。仕度くが出来るまで風呂に入ることになった。彼がぬぐ時に見ると小さい細い禪をしていた。

彼はボクの体を隅から隅迄洗ってくれた。そしてボクに彼の体を洗うことを要求した。ボクには他人の体を洗うことは初めての経験だし、洗ってもらったことも記憶がうすい位だったからもう夢中だった。

風呂から上って彼は又禪をしてドテラをひっかけた。飲んで喋り出したのは、どうしてもっとと学生時代に互に深く知り合わなかったかと云うことだった。ボクはどちらかと云えば頭腦的な仕事に専心するのでスポーツは殆ど知らないし家庭的にも孤独だったから、性的には全く無知に等しかった。

その晩、泊ることにして二人は寢床にころがった。彼は宿のくれた手拭を、縦に二つに裂いて小さく結び合せ即席の禪を作ってくれた。少し短か過ぎて六尺のようには行かぬので、腹のまわりをキッチリしめ残りを尻から股間を通して前ひもにかけ出来るだけ強く緊めて尻の縦帯によじて留めるのである。彼は二本続きの日本手拭は、二つ作れる最も安直な禪だと教えてくれた。ボクの禪は短いので尻に喰込むようにキツかった。

翌朝目を醒ますと丁度彼は尻が裂けてしまいうそうに強く禪をしめている処だった。ボクがぼんやり眺め乍ら声をかけると、彼はボクの掛蒲団をはねのけ、ボクに起るように云った。ボクは職場へ出掛け彼と別れた。

それから彼と再び会う間がなかった。ボクは日本海岸のM市へ転勤になった。其処では寮に寝起した。同じ職場のものとの生活はボ

クに一種のプライドを与え、これを汚すことはなかった。此処ではボクは常に越中をしていた。此の頃はまだ赤線はあったのだが、寮から遠く飲み屋すら近くにはなかった。ボクの職場での仕事は他の同僚の飲をかう必要もなく酒からも遠ざからせ独りの生活を自然に作るようになって行った。

その夏、ボクは健康の爲にも毎日曜日同じM市の遠い海岸へ行った。名ばかりの海水浴場で人は少ないのだが、日本海独特の砂浜と澄んだ水の実に美しい処である。此処では小さい黒三角を巾着のようにモノをつつむだけにして専ら体を陽に焼いた。實際此処は人の来ない処で盆を過ぎると、まるで人がいないかのようになった。おかげでボクはその冬全くの裸で寝ても風邪をひかぬようになった。こちらへ帰任する迄ボクは毎夏そうして体を焼くことにしていた。

Kとは一夜の飲に色々と教えられたもののその後全く会わない。尤も手紙は時々くれる。Kはボクがこちらへ来る少し前に東京へ勤めが変り結婚した。円満に暮しているようだ。長く孤独の生活をしているのでKの事もそう気にならない。と云うより寧ろ友人的交際をする時間的余裕のない生活をしているボ

クは、恐らく一生独身で孤独の生活をするのだろうと思う。職業的環境が余りにも強く支配しているボクの生活は他人から見れば全く不思議に思われるだろう。悪友と云う友の育たない環境に、一日の殆どを過すので紅灯の巷をさまよう気にもなれず、時折楽器を奏でるかLPをきくのが関の山のボクの日常である。

ボクは心理学や医学を知らないが本誌の記事は色々の示唆を与えてくれる。これはKが読むようにすすめてくれたのだ。ボクの禪への執着は自分の肉体の羞恥と性器への好奇心から起っていると思う。我々の幼少の頃はまだ裸体の彫刻など全く見られなかったから西洋の様に男女の裸体を絵画彫刻で見狎れる環境に育たなかったから、逆にそれを暗示するものに強い関心を起したものだろう。

衣軍一氏は幼少の頃の村芝居で浪人が脚を蹴上げた際に着物の前がはだけ禪の前だれが見えどうかしたはずみに前だれが顔を赤らしてチリと覗く禪の縦帯に魅せられたと告白している。誰れしもこう云った記憶はあるに違いない。性器に対する関心の強いものは、これが禪に対する異常な執着とすりかえられるのである。禪姿を誇示するのではなく覆ってい

る性器を意識しての禪が見たいのだ。山本氏の如きは自分の軀体に感じる緊縛感を禪に求めていけるし、森氏は中身を意識した単なる被覆物としての禪なのだ。だから布でなくともよいのだ。(昆布で巾と長さの適したものがそんなに容易に入手出来るだろうか。単なる空想に過ぎぬのではないかとさえ思われるのだが。)イチジクの葉っぱだったら、きっとよいと思うのだが。

オシメも禪の変態だろう。然し本来の用となす排便や排尿をやらなければ意味がない。病的なアブならいざ知らず、多量の尿尿は漏れるだろうし不快臭をどうするのだろうか。ただ身につけるだけなら禪と大同小異である。ボクは越中を愛用しているが、越中は正にオシメに等しい。この夏頃だったか週刊現代の読者の投稿入選の文中にキスの最中に下着を汚すことを防ぐために禪をしていると安心だと云う記事を見た。これは女性からの投書で結婚後夫から交際中の苦心の告白として聞いたと云うのだったと思うが確かでない。

禪を強くしめると昔から云う臍下丹田精氣湧く感をするのは、男性的感覚を意識するからだろう。勇気、決断、突進と云った気概を起すのだ。しかし緊縛感には逆に加虐を催し又

悲愴美の世界

殉国処女譜

中 康 弘 通

先に「殉国」を某誌に寄せたとき、筆者は数多くの批評を受けたが、その中に

「今更ら戦争ものでもあるまい、もっと書くべきことがあるはずだ」

という忠言があった。もっともなことだと思ふ。今日、複雑な社会生活を営む吾々にとつて、昨日すらすでに歴史の一と齟である。

しかし徒らな感傷ではなしに過去を描くことは、全くの徒勞なのであろうか。「殉国」

は創作として発表したけれども、その中核となる烈女自刃の事実、先年筆者に寄せられた投書に基ずくものである。こうした投書の

数々が、筆者や他の研究家のもとに寄せられた中から、その志の最も壮にして、その挙の最も烈なるものを選び、録しておきたいと思う。元よりかかる自己犠牲の悲劇は今後永久にくり返さるべきではないけれども、また歴史の蔭に埋もれしむるに忍びぬ微意を汲み取って頂けたら幸いである。

(1)

強烈な夏陽が高窓に射す貧しい農家の台所に、二人の娘が顔を見合って坐っていた。洗いざらした野良着にも、じっとり汗が滲み出

ていた。古い柱時計が五時に近かった。

「千鶴ちゃん、こんな家でも住み馴れたとなったら捨てて行きたくないわ」

「じゃ涼ちゃんはどうするっていうの、みんな逃げるというのに」

「逃げるのも嫌、妾はここで死にたい」

「そんなに思いつめてるの」

妹の激しい語氣に千鶴は眼を見はった。

「そりやあ、お父さんもおッ母さんもここで土になんなすった、兄さんとして敗け戦となれば無事なはずも無いけれど……」

暗い顔になって姉は溜め息を吐いた。

「逃げて、逃げ切れると決まったわけだし、どことも知れぬ原っぱで、野垂れ死は嫌よ」

「いいわ、涼ちゃんはその気なら妾も……」

「千鶴ちゃんッ」

ひしと手を取り合って、二十二と二十、何れ劣らぬ娘ざかりの姉妹は、互に瞳と瞳を食い入るようなきびしい視線で見合った。

次の瞬間、互いの眼からじわじわと盛りあがるものがあつた。涼子がガバと姉の肩に涙の顔を伏せると、千鶴は、その波打つ背を泣きながら撫でたが、

「さ、刈谷さんが誘いに見えるまでに、ね」

さすがに落着いて促した。泣きやめた妹の肩を押して立ちあがると、千鶴は藁草履を突っかけた。乾いた足音であつた。

この開拓村の人々がソ連軍の参戦を知ったのは、つい今日の昼すぎで、直ちに日暮れを待って待避と決したが、身の廻りを整え終る時刻を夕刻として、隣り合う刈谷家の長女絹子が誘いに来ることになっていた。

しかし父母をこの開拓地で見送り、頼みの兄もこの春応召し、二人きりで近隣の助けを借りて来た帆船姉妹にとって、何ひとつ資産は無くとも、ものごとろつてから雨露を凌

いで来たこの荒れ屋をすら、捨てるには忍びなかった。逃げ切れるわけなし、ここで死にたい、潔きよく、という涼子の思いは、同時に千鶴の思いでもあつた。

坐り直した涼子の前へ、千鶴は出刃包丁をおき、自分は鎌を握りしめていた。

「刈谷さんが見えたとき、首吊りなんて見苦しい、といって薬もなし、姉さんは是で切腹します、涼ちゃんは？」

「切腹！ いいわ、妾も日本人らしく腹十文字にかき切つて死ぬ、……お先に」

思い切りよく妹は出刃を逆手に握った。

「待って、涼ちゃんの死にぎわを、とても妾見てられない」

「妾もよ、じやどうしよう、どうしたらいいの？」

野良着の紐を左手でまさぐりながら涼子が問いかけた。

陽焼けした顔が緊張し切っている。その覚悟定めた妹の様子を頼もしげに見守って、
「なア、涼ちゃん、妻はここで、あなたは隣の部屋で、どう、妾が声をかけたら、涼ちゃんも合図して、一緒に死のう」

流石に頬を硬ばらせて言った。

「ええ」

肯ずいて、もう一度、千鶴の手を涼子は確り握った。汗が滲む掌と掌であつた。

隣の部屋へ入るなり戸をピタリ閉め切った涼子を見送り、千鶴はゆっくり野良着を脱いだ。腰のものだけで坐り直すと、あわてまい、仕損ずまい、自分に言い聞かせ、農事に鍛えて堅太りに引き締った、白い胸もとから腹へかけて、しずかに撫でおろしながら下着を出来るだけ押し下げた。

「未だ？ 千鶴ちゃん」

隣りでも衣ずれの音はやみ、涼子の息を凝らす気配がした。

「じゃ、涼ちゃん、行くわよ、深呼吸ひとつね」

応えを待たず、千鶴は大きく息を吸い込み砕けよとばかり鎌の柄を握りしめた。

出刃は引き廻しにくいと突立てやすい。鎌は掻切るにはいいが突立てにくい。出刃を深く突刺して二の刃で咽喉を突けば、女の細腕でも死ねよう、と、妹に出刃を渡したのであつた。鎌の刃先を左の脇腹に当てがい、千鶴は息をとめた。左手で刃を押し

「えいッ」

掛声とともに突込んだとき、涼子も声を合せた。

思わず洩れる呻
きを抑えながら、
臍の下をギリギリ
と引き廻すと、隣
室からは、涼子が
悲痛な呻きを立て
た。可哀そうに、
と思う余裕もなく
ハッハッと喘ぎな
がら臍の右下まで
かき切ったとき、
力が抜けた。ガッ
クリと俯伏した千
鶴の、記憶の途切
れる寸前の耳に、
サツと水を撒くよ
うな音と、涼子の
新たな呻きとが、
届いていた……

刈谷絹子は未だ明るい夕光を浴びながら、
閉め切った帆科家を訪ねた。粗末な木戸を叩
いて、

「千鶴さん、涼子ちゃん」

応えはなくて、微かに人の呻きが聞えた。
ハッとして、直感的に二人の姉妹が自決し



たか、と絹子は木戸を開いた。踏み込むと血
の臭いが激しい。いつも貧しい茶ぶ台のある
辺りに呻いている千鶴の、小刻みに震える背
が妙に生白かった。

「千鶴さん、どうしたの」

叫びながら彼女は駆け寄った。かき切った

腹を抱くように俯伏していた千
鶴が、その声で意識を取り戻し
たか、真ッ青な顔を上げた。
「ああ、きぬ子さん、涼子は……
涼子は」

隣りの部屋を探るような視線
である。鈴を張ったように美し
い眼が苦痛に潤み、眉根が切な
く寄せられていた。頬が削げた
ように青白いのである。

絹子は意外に落付いて仕切り
の板戸を開けた。ここも蘇芳を
ぶち撒けたような血の海に涼子
が浸っていた。寄り添って抱き
起すと、もう息は絶えている。
くりくりと、いつも愛嬌ぶかく
動く瞳は閉ざされ喰いしばった
唇もとに苦悩が刻まれていた。
その頬の硬ばりを掌で撫でると

いくらか顔付きが安らかになった。可哀そう
に、苦しかったろうと思いやりながら視線を
落すと、涼子は充分に寛ろげた腹を、臍の真
下で真一文字にわたしたのち、鳩尾から臍の
右わきを通して切りおろし、更に心の臓を抉
ったと見え、青白い珠のように盛り上った乳

房の付け根に、刃は光りを没していた。

「立派だわ、涼子ちゃん、十文字に切ったのね」

その言葉が千鶴の耳に痛いとは気付かず、夢中で絹子は言った。

「口惜しい、死におくれて……きぬ子さん、お願い、妾も十文字に、切らせて……」

喘ぎ喘ぎ、血の気の引いた顔を捻じ向け、千鶴は哀願するのだった。

「えッ、ええ、手を添えてあげます、立派に死んで下さい」

もう助かるまい、是だけ手ひどく腹をかき切ってしまったているのだから、と思うと、絹子は吾ながら驚くほど落付いて、千鶴を抱き起した。

「うれしい……さようなら」

途切れながら別れを告げた千鶴は、辛うじて硬ばる手に鎌を取り直した。

己が手を添え臍の可成り右下へ深く突刺すと、一気にかき上げたとき、絹子は、何と、力の要るものかと思いつつ、左の掌に乳房の弾みを伝える千鶴の体を、しっかりと抱いていた。

曠野の落日が、カッと部屋の中に流れ込む昭和二十年八月十日の夕暮であった。

(2)

弓子が監禁されている部屋へ、暴徒の群れの首領らしい男が入って来たとき、彼女は蛇に襲われた小鳥のように震えた。

「おい、女、お前、親きようだいの命を救けたくないか」

意外にも男は、しずかに尋ねた。なまりの無い日本語である。思わず目を見はり、真意を解しかねている弓子の耳に、男は同じ口調で言った。

「日本人は、死ぬときは腹を切るというが、お前も腹を切って見せたら親きようだいを救けてやってもいい、どうだ」

「えッ」

弓子は腹の底まで冷えるの覚えた。動転した彼女の顔付きを見据えて

「いやだというのか、切腹出来ないのか」

きびしく男は言った。

「考え……考えさせて下さい」

息の弾むのを泳えて彼女は哀願した。頭の中が真っ白な紙になってしまったような空虚さを感じた。

「よし、あとで又来る、お前の決心次第だ」
見張りを残して男は出て行った。ドアが閉

まると次の瞬間、彼女はワッと、その場に泣き伏した。

(ひどい、ひどいわ、腹を切れ、だなんて、いくら日本人でも妾は女だもの、そんなことそんな恐ろしいこと出来やしない、いやだ、自分で自分の腹を切るなんて、あああ怖い……怖いああ、どうしよう、とても出来ないわ切腹なんて出来ない)

彼女は泣き続けた。声をふるわせ身をもんで泣いた。

(でも、若し、いやだといったらどうなるのだろう、両親も、罪のない妹や弟も、そして妾も……生かしてはおくまい……妾は女だから、ただ殺すということはあるまい、どんな目に合わすだろう、ああ、何故、戦争に負けたからと言って、妾たちがこんな目に会うのか、何故……戦争は済んだのに……、死にたくない、日本へ帰りたい、こんなところで死にたくない……)

彼女の背からも胸からも、冷たい汗が流れた。

(殺されるのと、自分で死ぬのと、どちらがましだろう、苦しいのは同じだ、恐ろしさも同じかしら?、いや、殺されるのはそれ切りだ、自分で死ぬ、それも腹を切って……ああ

怖い、でもいやだと言え……ああ、妾はどうしても切腹せねばならないのだろうか、ああ、お母さん、お母さん……」

そのときである、見張りの男が言った。

「いくら日本人だといっても、女で腹は切れない、せめて切腹だけは許してくれと、頼んでみる」

余りの哀れさに見兼ねたような声だった。

あるいは弓子のような年ごろの妹でもあるのかも知れなかった。びくっと弓子の肩が震え、そして、ゆっくりと顔を挙げた。泣き腫れて薄赤く染まる臉を手で払うと

「いやですわ、今更そんな恥さらしなこと言えないわ」

見張りの男の哀れむような眼に構わず言った。彼女自身に言い聞かせるようでもあった（そうだ、どうせ死ぬなら、いい、立派に腹をかき切って見せてやる。むかし習った村上義光の話みたいに、腹を真一文字にかき切って、日本人の腸を見せてやる……驚くがいい）むしろ見張りの男の慰さめに、決断を促がされたようであった。

「いいのか」

「ええ、家族の生命を保障してくれるなら、すぐ切腹します、そう言って下さい」

「まあ待て、もう直ぐ時間だ」

見張りの男が言い終ったとき、扉が開いたのであった。彼女の方をチラチラ見ながら、首と見張りの男が異国語で話し合うのを、もう他人ごとのように遠い気分、彼女は聞いていた。もとは日本人商社の応接室だった小部屋から彼女は連れ出された。廊下を歩きながら見張りの男が名前と年令を聞いた。

「河野弓子、十八才です」

今はもう何の悪びれもなく弓子は告げた。

（妾が死ねば家族は助かるのだ）

それだけが今の救いであった。洗面所で水を乞うて顔を洗うと、やがて導かれて会議室に入った。

部屋の中央に毛布が敷かれ、その上に無雑作に、軍刀が抜き身で横たえられている。うつむいて入って来た弓子の足がとまった。

（ああ、あの刀で腹を切らねばならない、あの刀で……）

おずおずと辺りを見る、男たちが椅子を連ねて見守っている。首領が顎をしゃくったので、見張りの男に肩を小突かれ、弓子は毛布に坐った。

「脱げ、着ているものを」

声は誰からか判らなかったが、弓子は夢中

でブラウスのボタンを外した。ゆっくり肩を抜いた。肌シャツも脱ぎ棄て、スカートのホックを外した。

震える手を差し伸べ、ハンカチで軍刀の刀身を巻いた。

（立派に腹を切ってみせる。思い切り切ってみせる）

それは祈りに近くなっていた。

刀の切先を三寸ほど残したまま、彼女は重い軍刀を逆手に執った。腹を撫でるようにして下着を押し下げ、臍の辺りまで露わすと、軍刀を両手で握り、しっかり息を詰めて構えた。しかし鼓動は早鐘のようである。喉も胸も波を打つように息忙しく、腹に力が入らなかった。突こうとして、腹に切先を近ずけるのだが、手が震え、突立てるに至らないのである。

（ああ情ない、じれったい、彼奴らに嗤われる、妾は日本の娘なのだ）

下唇をキッと噛みしめ眼を閉じた彼女は、もう一度腹に力を入れた。腹が円くなるほどの力籠ったとき、思い切りよく両手突きに左の脇腹へ刃先を叩きつけた。プツリ、刃は深々と刺さり、瞬間、声もなく彼女は前のめりになった。



（ああ、痛い、いたい、……何の、是しきのこと）

体を立て直した彼女は一と息入れて唇を結ぶと、グーッと両手の力を引き絞った。刃は徐々に位置を変え、臍下を一寸、二寸と右に切り割いて行く。文字通り割腹という言葉のあてはまるような凄烈さである。臍下まで来

たとき、呻いて弓子は血に染む左の膝を左手で強く掴み、苦痛を泳えていたが、また思い直して刃に持ち添え、体を左に、刃を右に捻じった。やがて、豊かな腹が二つに分れるほどかき切られて行った。右脇まで引き切って刃先を腹に留めたまま彼女はその場に俯伏した。

（ああ苦しい、気が遠くなりそう、……でも切った、立派に切腹したんだわ、是で皆が助かる、ああ、早く死ねないか……）

彼女は苦痛の瞳を正面に向けた。もう散乱する視線が、流石に息を吞んで見守る男たちの形相を捉えたとき、

「みず……みずを……」

と呻いた。

見張りの男が、湯呑みの水を、捻じ向けた彼女の顔の、はかなく開いた唇へ匙で注ぐ。

飲み干したとき、凄まじい痙攣が全身に走り、彼女はガックリ首を垂れた。

昭和二十年、晩夏のことである。

(3)

いよいよ明日は移動というので、仮兵舎の中はごった返していた。身辺を整理し、わずか二カ月にも満たぬとはいえ、仮に宿舎としていた学校の跡を清掃すると、もう夜も可成り更けていた。そのとき、

「白山軍曹」

同年兵の呼ぶ声がした。

「おおい、何だ」

白山が立上ると、手真似で彼は戸外を指

した。ああ、とうとう時間だ、と思った白山はゆっくり兵隊たちの間を分けて歩いた。

兵舎の外では秋の夜の冷氣の中で、軍属の大島純子が待っていた。

「済みません、ご迷惑をかけて」

白い頬が夜目にも匂うような純子は、白山と並ぶと肩までしかない、愛くるしい少女である。この春女学校を卒えて、直ぐ隊の事務を執っていたが、終戦後も、民間人として現地人の迫害を受けることを恐れ、軍と運命を共にしたいと言っていたことを、白山は知っていた。

「自分たちこそ済まぬ、こんなことになるなら……」

「何ごととも運命ですわ」

彼女は白山の言葉をさえぎった。

つい先刻、隊の本部に呼ばれて白山は中隊長から意外なことを聞かされた。女子軍属は復員軍人輸送計画に該当しない、よって現地に残留する、という指示があったというのである。軍の保護を失った女子軍属の運命は察知するに難くない。

「従って、大島純子は自決する」

短かく言い切って、中隊長は眼を天井に向けた。如何にも長嘆息する風情である。

「ハッ」

それで自分はどうなるのか、と審しげな顔になった白山に、中隊長は見苦しいことがあってはと思い、検分に誰か、と言うと、白山軍曹に見届けて頂きたいというのが、大島の頼みだった。最期の願いだ、聞き届けねばなるまい。

敗戦の後も、虚ろになり勝ちな兵の士気を明るく鼓舞した来た中隊長の頬が、心なしか暗くなっていたのである。

「自決なんて、考えてもいなかったのですけど……今日、自決を考えるように、と言われて……仕方がありませんわ」

今は諦め切った彼女の言葉が、白山の胸に浸みた。十九にしかならぬ少女が、避けられぬものと死を覚悟するまでの数瞬が、どのような心ゆらぎを伴うものであったろうか……と白山は傷ましく哀れに思いやった。

「で、どうやって自決するつもりだ」

惨い質問と知りつつ、心構えのためにも白山は訊ねた。

「妾、母から懐剣を身の護りに貰いました」

彼女は静かに応えた。宿舎は在留邦人の家だったのを、他の隊の女子事務員と合宿で使っていた。彼女の部屋は六畳である。

「他の隊の子はどうした？」

「もう先刻、毒を服しました」

純子の眉に悼まじげな陰翳が動いた。

「可哀そうだったわ、苦しんで……でも、暫らくでした」

二人は無言になったが、

「では着更えます」

衝立の蔭に彼女は蹲まった。かねて用意の死装束がそこにおかれていたと見え、忍びやかな衣ずれの音がやんだとき、純子は夏のセーラー服と紺のヒダスカートという女学生姿を白山の前に現わした。左手には懐剣があった。部屋の中央に端座した彼女は

「白山さん、妾、切腹したい、本で読んでのですけど、切腹する人は坐っているままで、介錯人が背後から手を添えて切らせるといふのがある、それをお願いします」

「切腹？」

白山は驚いた。終戦の日男泣きに泣いてものかげで腹を切り、苦しんでいた戦友の倅が浮かんだ。あの苦痛の多い方法を、女の身でそれも白山の手を借りて遂げたい、と純子は言うのである。驚いて見はる白山の眼に心もちはなじろんで頬を染めた純子の、覚悟定めた顔が映った。

「妾、白山さんを……前々からお慕いしていましたが、せめて死ぬときは、そのお方の手で最期を遂げたい……ね、お願い」

言ってしまった、却ってホッとしたような思いつめた眼の色があった。

「純子ちゃん……」

思わず純子の手を把った白山は、無言で大きく肯ずいた。小さく柔らかく、冷たい手であった。いつも明るく素直で、殺風景な隊に一つの潤いを齎らしていた可憐な少女が、よくよく思いつめた最後の願いなのである。

端座した彼女の背後に寄り添って、白山は座を占めた。躊躇いもなく純子はホックを外した。制服の下は腰のもののみで、直かに腹部を露わせるよう配慮した、死に仕度であった。その潔きよさに胸を詰らせながら、白山は手を伸べて懐剣の鞘を払い逆手に執った。

介添え腹を妨げまいと、乳房に両掌を当てがって待つ純子の体軀は、こうして見ると楚楚とした容姿に似ず、意外に豊かで抜けるような白さである。その左の脇腹へ背後から手を廻して切先を当てがった白山は

「いいな」

合図を待つように聞いた。流石に声もなく肯ずくの見すまし、グッと右手に力を込め

たが、乙女の肌は弾みを保ち、切先を撥ね返すかのように突き立たない。やむなく少し右へ切先を引いたとき、鈍い音と共に刃先は彼女の肌に喰い込んだ。

「いたいかな？」

痛いに決っていても、息をつめて苦痛に耐える乙女の風情に、白山は息を弾ませた。

「いいえ、ちっとも」

然し意外にもはつきり純子は応えた。

「思いつ切り、一気に掻き切って……」

健気さに胸を膊たれ、白山は、今は少しでも苦痛を早く終らせようと、右手の刃を力一杯引き廻した。キリキリの脛の直ぐ下を刃は切り進んだ。呻きを抑えて少女が身を硬ばらせる間も、深い血汐は忽ち溢れて、膝に、畳に進んだ。

「ああッ」

耐えかねて彼女が、腹を抑え、なおも姿勢を崩すまいとする姿に、涙ながら白山は介錯の刃を揮った。

終戦の秋、外地に駐屯していた部隊での出来ごとであった。

(資料提供者の方々の御意向を慮り、登場人物は総て仮名を用いて居ります)

以上、三つの例話を、当節流行の残酷もの

がたりとして読まれることを、筆者は欲しない。それにしても余りにも悼ましく、余りにも崇高な自己犠牲の物語だからである。

こうした、傷ましく美しい亡びの相を書き伝えることに筆者は些かの疑問は保つ。是らの犠牲が、今日から見て、何んな意義があるのか、という理論家の質問には、応答に窮せねばならないし、是らの犠牲を称揚し、そこに何かの意味を見出だそうとする思想家に対しては、筆者は、くり返してはならぬ犠牲として注意を喚起したい。ただ、あるがままのこの悲愴、悲愁を受け取って、感動の深さを心の底に保って行こうとする人にも、筆者の真意が理解されるのかも知れない。それは強いて主張し訴えようとするものではないが、そこから湧き出ずる感懐が、自然に未来図を描き出すであろうからである。

「殉国」を含めて四つの事例を筆者は、あるいはフィクション形式で、あるいはドキュメンタリーに記した。「殉国」では、ヒロインは屈辱から身を護るために死なねばならなかった。そのために切腹という厳粛な法式が選ばれた。今回の第一話では死は必然ではなかった。然し流刑よりも死を、死には切腹を以て対処しよう、と姉妹は、開拓で鍛えた精

神と肉体をいう惨烈な法式に堵けた。第二話は、死というよりも切腹そのものを強いられた娘の物語である。条件は家族の生命であり、恐らくは彼女自身の純潔である。受け容れられねばならなかった。いきおい法式は無念腹の形を取った。第三話では、死は避けられなかった。然し遂げ切れぬ恋の思い出を身みずからに印すかのように、彼女は介添え腹を選んでゐる。

此のほか、幾つかある例は概ね第一話に類するものである。というとういふ多くの実話が寄せられているかと見えようが、恐らく実際に当時遂行された例数と比較すれば、ほんの一部にすぎないであろう。勿論、人知れず切腹して果てた娘たちも少なくないであろうがまた、目撃者が遂行者のために秘匿して今日に至ったことも少なくないであろう。

先に永松浅造氏は「自決」を著わし、終戦

前後の自決者に殉難者の栄光を与えたいと努めて居られると聞く。筆者もまた、幕末草奔の志士さながらに殉難した是ら烈女たちの事蹟が埋もれてしまふことを痛歎するものである。本稿同様の当諸事例をご存知の方、本稿に就い筆者に同感の方、又は反対の方、殊に戦争を知らぬ今日の若い世代の方々の御意見を寄せ頂けたら幸いである。

(おわり)

「最新版」 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙(9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B 5	足の裏擦り責め	(竹野)
B 6	おへソいじめ大写真	(関谷)
B 7	剃いだバタフライ	(関谷)
B 8	貴方に捧げた裸身	(大塚)
B 9	乳房責め絶叫苦悶	(大塚)
B 10	無防備双手吊り	(絹川)
B 11	豊満臀部エビ縛り	(水本)
B 12	糸纏わぬ股間縛り	(水本)
B 13	全裸亀甲股間縛り	(関谷)
B 14	足踏付け二つ折り	(大塚)
B 15	尻突出しムチ打ち	(関谷)
B 16	手錠にもだえる	(竹野)

B 17	尻突出てエビ責め	(水本)
B 18	椅子開股鼻責触手	(梨花)
B 19	息もつがせぬ猿轡	(竹野)
B 20	投げ出した全裸	(関谷)
B 21	美しき尻部の露出	(絹川)
B 22	首絞めの悦虐境	(竹野)
B 23	後手柱縛り脚線美	(竹野)
B 24	強制鼻挾水吞ませ	(梨花)
B 25	苦悶にねじる裸身	(関谷)
B 26	責めに氣を失って	(関谷)
B 27	さアどうでもして	(関谷)
B 28	豊麗乳房膨隆縛り	(竹野)
B 29	投げだされた女体	(竹野)
B 30	裸身をくびる麻縄	(梨花)
B 31	強烈縛りに悦ぶ	(梨花)
B 32	全裸逆エビ片脚拳	(東浦)
B 33	踏みつけマゾ境地	(東浦)

B 34	すべてをさらけて	(関谷)
B 35	ムチ打ち失神寸前	(関谷)
B 36	クリップ鼻挾み	(絹川)
B 37	台上的マゾポーズ	(大塚)
B 38	吊られゆく美体	(絹川)
B 39	拷問に無惨な美貌	(梨花)
B 40	マゾ女性の表情美	(東浦)
B 41	喰い込む股間縄	(絹川)
B 42	灸責めに悶える	(梨花)
B 43	犠牲台の人身御供	(大塚)
B 44	美肌無茶苦茶縛り	(絹川)
B 45	裸身に立つ蠟燭	(大塚)
B 46	手枷足枷大写真	(四方)
B 47	鎖に悶える足首美	(柳初)
B 48	蛇責めに柔肌栗然	(梨花)
B 49	鼻の玩弄恍惚境	(大塚)
B 50	女囚菱縄さらし	(絹川)

浣腸漫記

某月某日

栗瀬長

某月某日

病院前行きのバス停留所にて。

バスは二十分おきにしか出ない。今しがた発車してしまったらしく、五分、十分と待つうちに停留所には十五人の程集ってしまう。午前十時という時刻は、これから診察を受けに行く人ばかりだ。殊に、小児科がよいと噂されるだけに、子供の手を引いたり、おんぶしたりした若奥さんが多いのが眼につく。

今も、生後一年位の赤ちゃんをおんぶした二十五位の若奥さんと、三つ位の男の子の手を引いた三十そこそこの母親と、恐らく病院で知り合った仲なのだろう、バス待つ間のつ

れづれにおしゃべりに余念がない。我が子の自慢、おしゅうとめさんの事、物価の上ったこと、女の話はしれている。その中、話は病気のことになった。

「奥様、お宅の坊っちゃん、便秘なさいません？。うちの子ったら、ひどいんですのよ。ほっといたら、二三日ありませんの。」

「うちのも、時々秘結しますわ。必ず熱が出ますのよ。」

「お宅、どうしていらっしゃる？」

「仕方ないですもの、浣腸してやりますの。もう、三つでしょ、この頃はいやがってあばれるんで、大さわざですわ。はじめはなだめ

たりすかしたり、おもちゃでつつたりでどまかしたんですけど、浣腸されると、やはり氣持が悪いんでしょうね、いやだいやだって、大変ですよ。」

「でも、浣腸って、あんまりしちゃいけないでしょ。」

「大丈夫よ、そんなに毎日するわけじゃない便秘の害の方が大変よ、可哀そうじゃないの浣腸してあげなさいよ。」

「だって、習慣になったら大変と思って、私一生懸命お腹さすったり、もんだり、果汁を作ったり、そりゃ大変なのよ。どうしても駄目だったら、お医者様、お呼びするんですけ

ど、あの太いのをやるでしょ、何だか見ててこわくって、可哀そうで——」

「しょうがない人ね、そんなことでびくびくしてちゃ。お医者様はグリセリン浣腸するけど、私達は薬局でイチジク浣腸買ってきてやればすぐよ。」

「大丈夫かしら、じゃ今度は、そうしようつと。」

「そうなさいよ。」

その中、バスが来て、この会話は終ってしまった。可哀そうにこの子達、そう度々浣腸されては、今に浣腸の味を覚えてしまうかも知れない。幼少時における性感覚は、肛門に対する或る種の刺激という、それが長じても潜在意識に残るということを世のお母様方に教えてあげたいものだが。

某月某日

会社の洗面所にて。

ジェントルメンとレディスと入口の違っているトイレだが、内側は壁で背中合わせになっている。こうした近代式トイレでは、設計上、必ずといってよい程、仕切壁の上部は低くなっていて、通風自在式だ。

今しも、蹲んだ私の耳に、お隣りのレディス側のひそひそ声がとぎれとぎれに入ってくる。

る。女とは馬鹿なもので、（これは失言）自分の方に人がいなければ、いやいても女同志なら平気らしいが、反対側につつぬけなものもお分りにならぬらしい。ビジネスをさぼっての時間つぶしにはトイレが最適らしい。話は下の事で恐縮だが、そこはそれ、マニアとして聞き捨てならぬ事故、御許し賜わりたい。

「今、あたしあれ、あの時って私きつと便秘するの。あんたは？」

「あら、あたし反対だわ、あたしは下っちゃうの、変ね。その代り、間が便秘なのよ。困っちゃう。」

「私、もう三日、じゃない四日もないのよ。あれで気持ち悪いでしょ、その上お通じないんだもん、気持ち悪くって、頭へカッカカキちゃう。」

「浣腸すればいいのに。」

「いやだ、あれ、恥づかしいもん。」

「どうして、自分でするんだもの、恥づかしいことなんかないじゃない。」

「そうじゃないのよ、にぶいわね。買うのがさ。」

「へっちららよ、そんなの。もじもじするかいけないのよ。緩下剤買うのと同じじゃないの。」

いの。「浣腸」って一言だけいえばいいのよ。消費者は王様よ。何も遠慮することないじゃないの。」

「ふーん、あんた、見かけによらず、すて腕ね。じゃ、買ってきてよ、お願い、ここで待ってるわ。」

「ウフ、世話のやける人ね、じゃ、待ってらっしゃい、地下室の薬局へ行ってくる。」

いやはや、とんだ事になった。事がこまに進展しようとは、想像だにしなかった。こくなれば、もう出るに出られない。ままよとばかり、こちらも持久戦に出ることとした。

三分、五分、長い。いくら近代的に設備されているとはいえ、トイレはトイレ、あまり気分がいいものではない。いくら、静かな午下りとはいえ、二三、人の出入はある。しかし、そこは厚顔無恥なお嬢さんだろう。他社の人ならば平気なものとはばかり、洗面台の前でねばっているらしい。やがて、

「お待ち遠さま。」

「シッ」

ときた所は、誰かレディス用の一つに入っているらしい気はいい。やがて、ザーツと水洗の音と共に、出て行くと、

「長いね、待ちくたびれちゃった。」

「人をお使にやらせといて何よ。地下の薬局
今日休みなの、それで駅前まで行ってきたの
よ。よっぽど感謝されなくちゃ。」

「あらあら、どうもおおきに。」

「さ、中で早くやっちゃいなさいよ。待ってたげるからさ。ほら。」

「まあ、二つ？」

「そうよ、一個位でよく訳ないじゃないの、つづけさまに二つやっちゃうのよ。二つで七十円、あとでもらうわよ。」

「うん、じゃ、一寸まってね。」

ボタンと戸が閉って、私の斜後に入った様子。今度は内と外とでのやり取りが続く。ごそごそ音がするのは、今、箱から出して、添付の針で穴をあけてるのだろう。手にとるように想像できる。

しばらく間、外では、可

愛いいベビーを口ずさみつつ、足で調子をとっている様子、こんなBGをかかえた会社こそ、いいつらの皮といった所、いや、それを

聞いている馬鹿顔がここにいるかと思うと、我ながらあきれた次第だが、やはり去るにはいささかしのびない。その中、プチッという、

水気を含んだ放屁の音、浣腸すると、腸の蠕動が激しくなるため必ずこの特有な放屁が出るのは経験者の等しく識る所。

「ウーン、ウーン」

というかすかな声は、言わずとしれた今や最高調という所。外の扉があいて、誰か入来、そして件のボックスをノックした様子。

「入ってます。」

外の女の子があわてて、しかもツンとすました声で中に代って、言っているのがおかしい。まさか誰も只今浣腸排便中とは、お釈迦様でも御存知あるまいという所だが、どう致しまして、こちらには委細全部御承知の方がいらっしゃるのだ。眼には見えぬのがちと残念だが、見れば恥漢となる故、これは見えぬ方が無難。ザーッと水洗の音。

「すんだ？」



「うん。アア」

「どう、気持よくなった？ スツとしたでしよう。」

「うーん、何だか、まだ下腹がつっぱるようよ。へんな気持。」

「よく、出きってないからよ、ことによるとすぐ又行きたくなるわ、二度出しちゃうとスカッとするわよ。」

「そうかしら。」

「あら、あんな空の浣腸器どうした？」

「そのまんま、流しちゃった。」

「あれ、うまく流れた？ へんなもの捨てるとつまっちゃうわよ。大丈夫？」

「大丈夫流れたわよ。」

「そんならいいけど。つまると、ビルの小使うるさいからなあ。さ、行きましょ、あんなりねばると、係長、うるさいから。」

おっと、この劇終り、となると、どんな子か一眼見てやろうと見るのは人情の常、あわてて、こっちもとび出そうとして、これは一大事、こちらを気取られないように、手前のをまだ流していなかった。立つ鳥後をにぎさずとばかり、急いで取手を押して、廊下に出てみれば、サボるのも要領いい代りに、退去もこれ又早い。後かたもなく消えてしまっ

廊下には、昼の弁当を下げに来た仕出し屋の小僧ただ一人、箱弁のおかもちをけだるそうにぶら下げて歩いてゆくだけだった。

某月某日

所用で建築学の先生を訪問した時の事だ。明晩行われるテレビ放送の打合せが長びいたらしく、約束の時間に戻られず、しばらくお待ちする。

この老先生にはすばらしく才媛の秘書嬢が居る。秘書といってもありきたりの女性ではない。レッキとした若奥様、といっても先生の姪に当る方で、東京女子大卒業後、夫君と共にフランスに留学の経験もあり、とても小生等足元にも及ばね次第。今更容姿などあげつらうまでもなく、こうした才媛は才色兼備するから不思議だ。もっとも正反対もないわけではないが。

身長は一六五センチはあろう。ウエスト、ヒップ、足の釣り合い、これは親からもらった筈なのに、日本人ばなれしているのも、髪、化粧と共に、やはりフランス仕込みなのかななどと何時も感心しているのだが。何も若奥様で秘書づとめをする必要もない筈なのだが、如何にせん、この気むづかし屋

の老先生、この方ではないとお気に召さないらしい。勿論、横文字ペラペラ、タイプOK、となれば、そうさらに居るものでもなく、まして気心知れているとなれば尚更である。私など、この秘書嬢ではない、ミセスと共に先生の前にいると、何時もコンプレックスに悩まされる。さすが今日は先生不在ともなれば本にかまれたこの書斎で一人待つ。秘書は勿論、隣室へ。

折しも春のこととて、緑の風を入れんものと、私は窓際に立った。丁度、隣室の、これも窓際で、奥様と秘書との話声が耳に入る。どうも人の話をぬすみ聞きする悪癖が私にはあるらしく、いや盗み聞きとは、敢えて手段術策を講じて聞こうとする場合と定義するならば、私の場合は自然に耳に入ってくるのをそのままの状態で、受動的にキャッチして、ここにこうして提供する、これは決して盗み聞きではないと断言して憚らないが、如何なものであろうか。

閑話休題。

「あなた、相変らず痛むの？」
「ええ、そうなんですの。困ってしまいますわ。」

「お医者様にかかって？」

「いいえ、それだけは——」

「だって、ほっておいたら、いけないでしょう。」

「でも、場所が場所だけに、いやですわ。」

どうもお話がおしとやかだけに核心がつかめないが、凡そ見当はついてきた。たしかにこれは聞き捨てならない。

「一思いに手術した方が、よいんじゃないかしら。」

「ええ、そうも思っただんですけど、やはり恥ずかしくって」

「ボラギノールでできないことないと思うんだけど。あなたのまだ脱肛するだけでしょ。」
「そうなんですの。でも、出てくると痛くて。」

「今の中に直しておかないと、厄介なことになるんじゃないかしら。」

「そうは思うんですけど。それにお通じの時が困ってしまいますのよ。だから、どうしても、我慢するでしょう、そうすると、今度は便秘して、尚更痛みますの。」

「お浣腸したら？」

「ええ、時々するんですけど、あまり具合よくありませんわ。お水だけ出てしまつて、あとから固いのが下りてくるんですもの、かえ

って苦しくって。」

「あ、それは、やり方がいけないのよ、私も経験があるから教えてあげるわ。あなたイチジク？」

「ええ、そうなんです。」

「おトイレで跼んだままするんでしょう。」

「ええ」

「だからいけないのよ。下の方にたまつたままだもの、すぐ出てしまつて、なんにもならないわけよ。それにイチジク浣腸は五〇パーセントグリセリン液だから刺戟が強すぎるのかも知れないわね。こうなさいよ、薬局で、ガラス製の浣腸器つていえば分るわ、それから、グリセリン、そうね、五〇グラム位の小罌うってるわよ。それ買つてらっしゃい。そうしてね、グリセリンを一〇グラム、ぬるま湯を、そうね、三〇グラム位ませるの、そうすると、二五%の薄いグリセリン液ができるでしょう。五〇%は濃すぎるわ。そして、必ず横になってするの、左を下に寝るんだったかしら。とにかく横になつてしなくちゃ駄目だわ。はじめは一寸やりづらいけど、なれればすぐ上手になるわ。そしてから、少しづらいつつ五分位我慢するのよ。液を薄くしとけば、そんなに刺戟しないから我慢できるわ。充分我慢すればする程、奥の方までよくしみ

で、後で、とても楽に出るの。やってごらんなさいよ。」

「そうね、それならよさそうですわ、やってみますわ。」

「あんまり便秘しちゃ身体に毒だし、第一痔によくないわ。」

「そうですわね。」

玄関のプザーがなった。先生のお帰りに相違ない。私はあわてて、何くわぬ顔してソファに腰を下す。

「やあ、お待たせして。テレビの座談会つてやつだが、ディレクターの奴、素人だもんでとんちんかんな話題を提供して、これでいけつていうんだらう、お話にならんで。説明してやるのに往生したよ、いやお待たせして失敬、失敬。」

後から、にこやかに入ってくる秘書。さっきの会話がまだ続くとしたら、もっともつとお待ち申し上げていたかった。

それにしても、彼女の秘密を聞き知った今日は、用件の途中にも、彼女のヒップのあたりが気になって、あつ、今夜、彼女はひそかに、あそこに浣腸器が、などと、誠に怪しからぬ妄想が雲の如くに湧き起つて、話に身の入らぬことおびただしく、我ながら、恥じ入った次第であつた。

『縛り過程の較差について』

——夏宵内外人同好者座談会より——

牧 高 志

出席者と環境の紹介

志摩 綺子……料亭のマダム・口八丁手八

丁で責めの絵画写真人形な
どのコレクションマニア、

独身（の由）、37才

結総 須代……小間物や「趣味の家」経営

者、被縛の賢妻として有名
（但伝説による）、25才

長 判寿……男性、業を子息に譲って隠

居、元庭師、同家に俗称お
菊の井戸が堀られふだんは
立入禁止、年一回供養祭あ
る由、62才

U・S・ロイン……日本風俗研究家、在日

20年、「CHANBARA」

「性の戯れと日本人」など
の著書あり、43才

資料提供と司会

牧 高 志

於……あけぼの亭

牧 今晚は——皆さん、よくお出で下さい

ました。私なりに申せば久方振りの司会を相
勤める訳ですが今回は一つ趣向をぐっと変え
まして御出席のかたがたも国際的でありどな
たもその道の異色ベテランばかりと云う……

従って世に云う純情家は一人もいらっしやら

ない（失笑）誠にすさまじい会となつて了い

ましたが、いずれにしましても某映画製作会
社のモットーにありますように読んで、観て

つまらない記事とならぬよう、充分面白おか

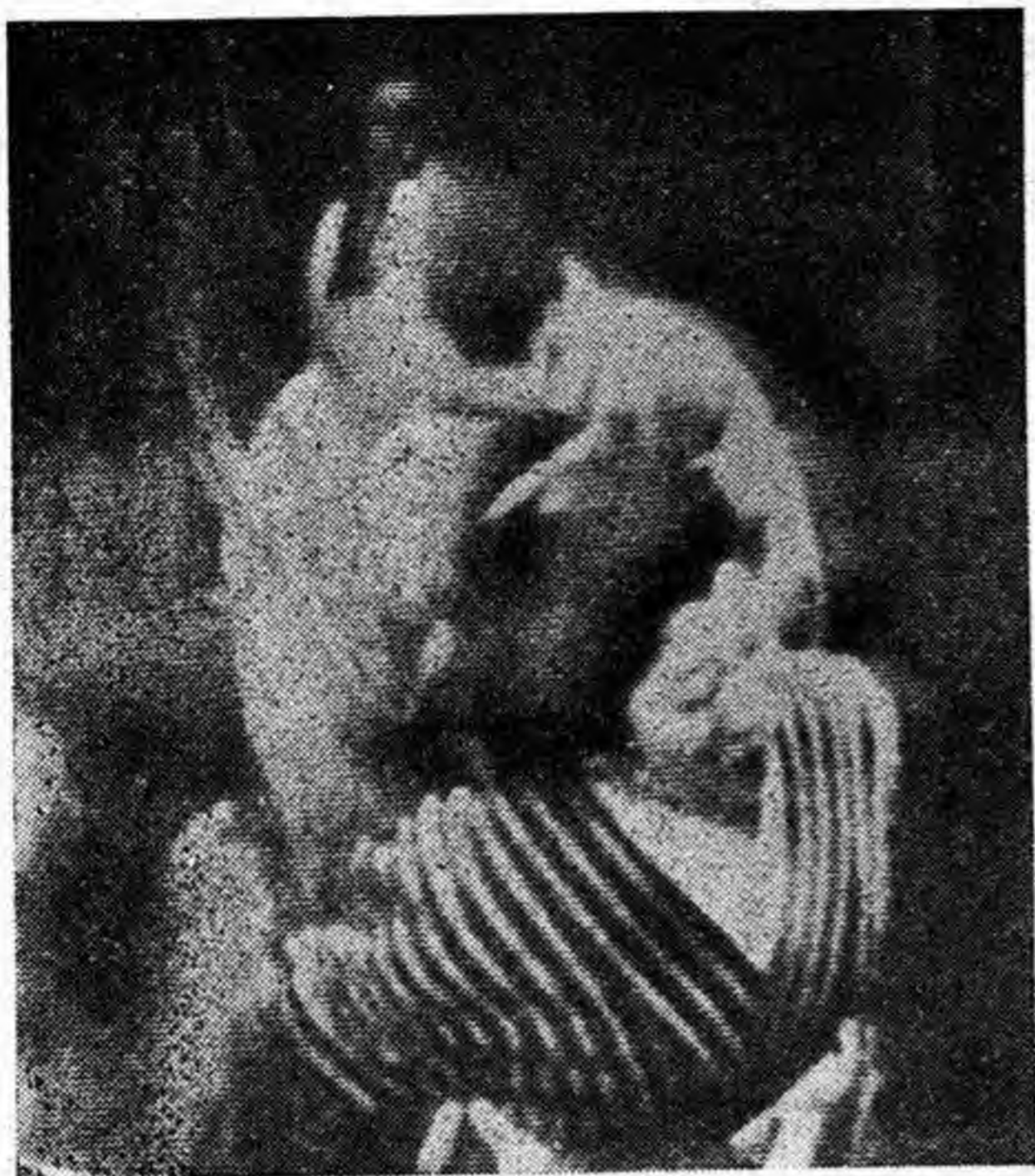
しくエレガントな責め、ムード味のあるエロ

をたっぷり盛ってお話を進めて頂きたいと思

います。御身分など前以てあらまし御紹介も
済みましたので、ズバリ本番と参りましょ

うか。

ロイン 牧さん、あなたが今、云われた純
情家……ですネ、それは女のひとを苛めない
タクマシイ男の人のことですか？



KRT「銭形平次捕物控」より

牧 雑貨屋の店先におる下った紐縄類を見て何んとも感じない人のことを指したつもりですけど……まあ心身共に安定した日本人とお考え下さればよろしいでしょう。

志摩 本番のハシリ序でに（……と平綴小紋の着物の膝を少し崩し）暑くて御免なさい。こんな恰好と歌麿師匠描くエレガントなものとの比較なんで御座いましょう、表題の

縛り過程の何んとかやると仰言るのは――。

牧 これを予じめ御披露して置くのをすっかり忘れて申訳ありませんでした。早い話が女のひとを縛る……女装であれば男だっにかまわないのですが、その場合色々な順序と方法がありそうということなんです。拙い作品ですが、それらのバラエティとしてスナップ写真を持参しましたから御覧下さい。

結総 この縞の着物の方はテレビなんで御座いましょう、何処か見たような覚えが……。

牧 長さん、拡大鏡で御覧にならないとお判りにならないかも知れません。つまらぬ慰み物なんですから……。

ロイン ワタクシの国にはチャンバラがありませんから、三度笠で娘さんを後手に縛ったりするようなことは絶対にしません。けどこれは東映の写真ですネ。そう思い出しました「旅笠道中」……。

牧 ふだんは余り気にしない事でも、こうしてならべてみると縛って行くメソッドが違っ

いるんですね。しかしどの道、女のひとが暴れないように、先ず真先に後手に両手首を縛って置くという段階は全く同じだということでしょう。

志摩 ……だって、そうしなけりゃ、肘鉄砲を喰らわせた上に噛みつかないとも限りませんもの。あたしなんか、いつでもこの手で……。

長 あっしのような年寄隠居のマスラオ共をからかって、あとで存分縛られるのと違いますか？（一同失笑）

ロイン この縞のキモノ（テレビのスナップ印画を指し乍ら）を着た女のひとは、非常にじっとしておとなしく縛られていますネ。外人だところはしていません、日本の女のひとの絶対いい処です。

志摩 もともと芝居の演技じゃありませんか。外国の芝居を見てないから較らべて物を云う訳には行かないけど、アチラでは文句付なのかしら……例えば十二分に断ってから縛るとか……。

結総 いくつか奇譚クラブでどなたかが云われたように、猿轡だけは東洋型というんですか、日本式のやり方の方が嵌める側でも噛まされる側でも、双方ともやり甲斐があつてよ

ろしいんじゃないでしょうか。

牧 司会の責任上あんまり私が音頭を取ってはいけませんが、この東映の「旅笠道中」で大川橋蔵が千原しのぶを、つきまとってうるさくて仕方がないので、つい仮事乍ら縛って地藏堂の内へ放り込むシーンは、スクリーンの上ではほんの十秒足らずの間で、アッとという間に済んで了う所作事なんですが、今数

KRT「銭形平次捕物控」より



カットに分解してみると一つの縛りの見本と云いますか、お手本みたいな「型」を示しているように思われるんです。

志摩 よく男の人は心易い女の人とみると後ろに廻ってこんな風にワッと口を塞いでいたずら半分に捻じ伏せて、縛ったりするモンですよ。

ロイン 万事待てない国民性だから即戦即決主義……いいですよ。ワタクシの

国のように人権じゅうりんだなんて問答しているうちに、反対に男の方がノックアウトされてサルグツワを嵌められるのよりは……（失笑）

長 年寄りの私が申上げるのも変ですが、どうもテレビの場面は殊更写實的に——こんな言葉は学者みたいになりますけど、女優さんの胸に縄をかけるのを避けるようですね。映画だと至極当り前のようなことが……だから、番町皿屋敷でも播州皿屋敷でも、縄目が前から見られないのは、それこそ、反写實的で困りますよ。

結総 やはり有名俳優だのスターでは猶更都合が悪く人気に障るんで

でしょうか。

志摩 処がそうじゃないのよ。近頃は世の中が進んで（一同笑う）自分から進んでむごたらしく縛らせスターがいるって話よ。またそう来なくっちゃ女が観ても面白くもない……例えばさ、「奇想天外な縛りと責め折檻」位な文句が、新聞広告に載っちゃってもいいんじゃない？ 映倫から文句が出るうちにその夕刊は売切れちゃうもの……。

ロイン それは、日本人が澱粉質ばかりではいかん、蛋白質に食生活を徐々に切り換えて行くのと同じで、いきなりバター臭くなる中毒しますね。女のひとを足の方から縛って行くような映画はまだお互い見ていませんから……（失笑）

長 足——と云えばこの両方の写真共、このままでは逃げられちゃいますね。重大なミスという事になりますかナ。

牧 恐れ入ります。事件の運びによってはそうならないとも限りませんが、公開性の演技では、この位の処がどうも限界のようですね。処で……このあたりで、そろそろ皆さん独得の持前をズバリ御披露願えませんかでしょうか。特に今日は最年配という名誉職でもありませんが、それこれプライベート乍ら最

高の大道具を持っていらっしやる長さんもいらっしやるんだし、いずれ奇想天外なお話も承われると思いますが……レディファーストという処で志摩さんから一つ……。

志摩 まあお口がお上手で本当に恐れ入ります。持前と仰言っても牧さんのカメラいじりと同じように、人形造りでも作る方の考え一つでどうにでもなるンですよ。ただこの座談会のようにやっている途中を比較するッという訳には行きませんが、女が女の人形を縛って行くうちに妙な気になるわねえ……つまり夢の中で自分に命令しているのと同じで人形が私で、縛る私が私好みに縛られて行く……と云った複雑な気持……だから人形の芯は作らせても他人様には縛らせないンですよ。但し門外不出、高額の観覧料を頂いても作品はお見せ致しません。

牧 あなたと結婚してもですか？ 是非拝見したいなア、独占欲はいけませんよ。

志摩 おまけに皆んな縛り方が違えてあるンです。飾って置くにも動かないから変化がないと困ると思ったものですから……そしたら、この間うっかりお馴染さんに一つ二つ見付かっちゃって、あたしの方が縛られちゃった。(一同笑う)

牧 結総さんは、今でも賢妻でいらっしやる？

結総 ……嫌やだわ、お名指しで。ホホホ

……、あれは俗名なンですよ。色々と変わった腰紐や時節外れを承知の上で緋縮緬の裾除などを飾って置きますと、すぐ気を廻わすお客様がきまっていますンです。先ン達でも仕入れ先の見本の祭礼用の豆絞りの

手拭、それにローソクの芯に使う白い紐をひくくめて店先きに置き忘れていたらすぐ御注進が飛んで……だから、うっかり繃帯も出来ませんのよ。ホホホ……。そりゃ夫婦ですもの、揃って障子に影が写ることってたまにはあるでしょう。また克明にゆうべは斯うだった、今晚は肌着にお腰一枚だったの、「趣味の家」の屋号が「縛りの家」に変わろうと、かまわないンじゃないでしょうか、よそ様の御主人に縛られるのと違うンですから……。

ロイン つまりローマにこの道が通ずればいいンでしょう。



KRT「銭形平次捕物控」より

だから日本の女のひとは世界一だし御主人と協力して、しかもエンジョイする能力を持っている……。

結総 処がホームマスコットにするから、あたしの赤いお腰を売ってくれと仰言るお客様がいるンですよ(失笑)

牧 ロインさん、飛んだ処に座談会の中心

が移りそうですが、このホーゼと縛りとの関連または見解はどうですか？

ロイン 愚なコト云わはる……（一同失笑）北極でオロラのカーテンが下る如く、縛りの重要なアクセサリであるには間違いないでしょう。ただお姫様を縛って水色のカーテンが出たらおかしい。危険信号の赤は若い娘さんの特権なんだから……但しこれ昔の時代劇の話ですよ今は違う……。

長 しかし、うちで毎年供養するお菊さんはいつまで経っても水色縮緬にはならない。

牧 一つその由緒からお話し下さいませんか。

長 これの動機と云うのはあつしの死んだ家内がキクと云う名前だったのにも依るんですが、もともと昔で云う大名屋敷の庭師の端くれだったものから、実はさる大家から譲り受けたものを勝手に改造したものでして、左様、葉がくれにテレビのアンテナが見えなければ、まあ本



東映「旅笠道中」千原しのぶ

式の皿屋敷同然の車井戸と見てよろしいでしょう。で、初めは冗談事で亡くなった家内に、お前がもうちょい若い腰元だったら、きつとこの井戸の中から陰火と共に出るよなンて、今で申すプレイ……どうもこんなハイカ

ラな言葉を口にするもんですから、お爺さんは若いなんて孫達にからかわれるンですが、そのプレイを御熱心の余り、近所の娘さんまでモデルにして供養したのがそもその病付きで、それからというものは旧盆——少し冷えますから今では新盆に入る前夜祭としてすっかり町内の名物になっちゃいました。去年は社務所の娘さんが進んでモデル……お菊にですが、になり、これはまた物好きな住職が僧侶で読経、有志の娘さん二三人が腰元衆として連座の上、ねんごろにお菊の霊を弔ってあとは一同涼しい芝生の上でダンスパーティーと云った具合……つまりお墓にお線香とお花を捧げるのを、今では町内で演って戴くと云うに外なりません。考えようでは有難いことですが、ただどうも肝心のお菊さんの役は懸賞付と云う訳にも行きませんし、正直な処なり手がないンです。今日は発表しないというお約束で四、五年分の供養祭の記念写真を持って参ったンですが、一昨年でしたか、囚人として本縄式で車井戸に吊るすのもよからうななんて、勿論毎年お菊を縛るのは少しずつ違わざるを得ないのですけど……これなどは夕方暗くなってからフラッシュを点火し乍ら、お菊を縛って行くサマを、撮って頂いたもので

す。矢張り縛り方も毎年進歩してますか？

志摩 それで、どなたがお縛りになるんですの？

長 情が移って手加減してはと、昨年などは荒物屋の熊さんに手伝って貰ったんですが流石の社務所の娘さんも、手首がスリむけて泣き出す始末…。

牧 この参考文献になりそうな貴重な写真は、是非その内お許しを得て発表したいものですネ。

結総 今年のお菊さん、あたしじゃ駄目か知ら？

志摩 あら……いいわよ、そしてあなたの御主人が青山何んとかになるのよ、それこそカメラ狂がウジャウジャいるから十把一からげで連れて行ってあげる。おまけにロインさんに、もう一冊本を書いて頂いたら、ベストセラー代りにあなたのお店の屋号も、序でに「お菊の家」と改名したら……売れるわよ、きっと。

ロイン お菊サン、必ず書き



東映「旅笠道中」千原しのぶ

ましよう。今のお菊さん、バンドで縛られてバスルームの中から、出て来るのと違いますか？（一同失笑）

牧 長襦袢がシュミーズに代っても垂らす髪の毛が赤く短くては、つや消しでしょうか

ら、恐らく今年は無理で、さしずめお噂通り結総さん当りに落ち着きそうですね。

結総 あら……困るわ。変な申出でしてお鉢が廻って来ちゃった、これじゃ縛られた悪妻になりそう……。

長 まあまあ、そんなに御心配にならずに四谷怪談のお岩さんと違い至極のんきなお色気のあるお菊さんですから、苦になりませんよ。ホラ近頃はナイロンレースの見るからに涼しく身体線の線の出る肌着が出廻っていますから灯籠の彼方から御主人の顔色をうかがい乍ら車井戸の上から見降すのも乙じゃ御座ンせんか、一つ同好者ばかりで仕組んでみますかな。

志摩 うるさ型の大人ばかりだから供養祭のビールは飲んでも、ああでもない、こうでもないとお菊を縛り直しているうちに夜が明けるんじゃない？都合により車井戸から出損ったお菊なソて余ンまり聞いたことがない。ローマへの道を急ぐんだったら縛り過程だの行程などの較差を、この際御遠慮申上げて置かなくっちゃ……

牧 手厳しいしっぺ返しで参りました。勿論その時はお仰言るまでもなく一切無条件降伏という処で先を急ぐことに致しましょう。

処で……閉会真際に御紹介して大変失礼とは思いますが、U・S・ロインさんの奥さんが突然お見えになりましたので一寸……大変お奇麗な日本人でいらっしゃいます。御主人の日本びいきを裏書きするように水も滴るよう

な和服姿は本当に羨しい御夫婦振りで敬服に堪えません。いずれ奥様を加えての集りは機会をみることにしまして、本日は久々の同好者座談会を限られた時間でしたが、開催することが出来てこんな嬉しいことは御座いませ

ん。新盆を前にして井戸を掃除したり色々とお決算を願う月でもありますので、どうか御健勝でお過ごし下さいますよう、ではこの辺で……有難う御座いました。

(文責——牧 高志)

ゴム・マニヤ通信

古村 俊一 (東京)
柴山 武 (徳島)

「ゴムマニヤの弁」の齊藤氏へ

古村 俊一 (東京)

過去久しい間、定期的に貴誌を拝見して多彩な内容の中に時折『ゴム愛好者』に関する記事が散在するのの一つの楽しみにしてきました。

総じてサディズム、マゾヒズム等の比較的普遍性のある異常心理については、貴誌に限らず数多くの関連書誌に記載されていますが、ゴム愛好者に関するものは、貴誌に限られているようであって、まことに稀少価値を持つ貴重な文献だと考えております。三十七年十二月号に齊藤氏の『ゴムマニヤの弁』が掲載されていまして、それに関連して、二、三私の感じたことを述べ

てみます。

私自身も又斯様な性向を強く持つものであり、嘗ては、この誠にいわれのない奇妙な心理が、人間精神のいずこにも根ざすことのない、従って又同じ情趣の心が、この世にあるとも思えないものと信じてきたものでした。貴誌に寄せられた数々のゴム愛好者の記事の中にも、この種の孤立感や当惑感がしみじみと感じられる事が多いのも、このためだと思います。

私は従来一般ゴム引衣料やゴムシートの卸商を家業としていたので、その後、ふとした偶然の機会から、数人のゴム愛好者を知ることが出来ました。その一人は少壮の物理学者であり、又一人は、練達の小児科女医であって、高度の知性と健全な思性の持主でした。

この知己により、私はゴム愛好の心理が世に例を見ない隔絶した異常なものではないことを知ると共に、夫々の愛好者達の教養、職業、或いは社会的地位とは全く関係のない普遍的な心情であることに驚いたものです。この感じは貴誌に散見するゴム愛好者の記事を拝見する度に、新たに思い起されるものです。

併し、その反面、広く一般社会から見れば、矢張り少数者の特異な性向であることには違いなく、ゴム愛好者ならざる人々との理解は困難であり、更に愛好者間の連絡等も意に任せず、極めてもどかしい心情を抱かれる事が多いのではないかと感じております。十二月号の齊藤氏の御意見は斯様な心情の代表的表現と思われ、さこそと肯かされました。

繰り返して申し述べますが、ゴム愛好心理に関して独特の地歩を築き得るのは、貴誌をおいて外にはなく、いわば貴誌は誠

に特異な、甘美な、そして秘やかな人工楽園を読者の前に初めて開陳したものと言えましよう。今後共これらの記事が、その他数々のマニヤに対する奉仕と同様に、出来るだけ豊富に載せられる事を私共ゴム愛好者達は切に望んでおりますが、この際特に次のような試みをやって頂くよう提案致します。

一、近い将来の貴誠に例えば、「ゴム愛好者特集」といったものを載せられ

ては。
二、その中には是迄の愛好者達の記事に度々引用される古い貴誌から、例えば古川裕子氏の手記などの再録することは出来ないだろうか。

三、成可く多くのゴム愛好者からの投稿を求め是れを集録したら。

以上、思いついたまま二、三の提案をしました。是迄の私の経験によれば、ゴム愛好と概括される心理の中には、(一)ゴム衣服と緊縛の結合を好むもの、(二)ゴム衣料と排泄物愛好心理とが結合したもの、(三)ゴム衣料の着用そのものを好むもの、などいくつか異った性向があり、夫々に応じたゴム衣料の形や質があるようです。

そして、各々がその特に好む点に於いてより深刻な、より甘美な、より洗練された

技巧やゴム衣料を求める心から、この方面の記事を貴誌に求めております。要するにこれ迄は余りに少数であり、余りに特異であると思われ、見做されていたために貴誌に於てすら比較的末流に扱われていたゴム愛好について、貴誌が認識を新にされ、優れた企画のもとに、この方面の指導に当られる事は極めて意義あることと考えます。

佐田春雄へ

柴山 武(徳島)

久し振りに読者通信に貴方の投稿を拝見したので懐しく思い投稿しました。私も貴方のいわゆるビーチボール・マニヤの一人です。従って奇クの主流派ともいうべき、縛り、切腹等には興味がありません。唯浣腸には多少関心がありますが、これとてもビーチボール等を利用した高圧空気浣腸のみに関心と魅力を感じるのみです。

奇クが広く、読者層を獲得する上から言って、多数の共感を呼ぶものを主にとりあげるのはやむを得ませんが、然し、その意味に於ても少数の他に共感を呼ぶことの少いビーチボールマニヤ(これは潜在的には少いとも思えますが)にも一頁か半頁を割愛して頂いてもよいのじゃないかとも思います。そして、

貴方の言われる如く、女性にそういうマニヤは居ないのかと思ひ、又ビーチボールの感触、弾力性そのものが、女性の肉体を思わせる上から、マニヤが男性のみに局限されるのも自然ではないか、とも考えられます。

十六吋位のビーチボールに全裸の女性が馬乗りにまたがった光景、又二人ぐらゐの女性が交互に投げ合い、ボールを中に奪い合う光景等は想像するだけで胸が高鳴ります。そんな写真が奇クに掲載されないものかと奇クを読む毎に思います。

更に又淋しいことには、最近市販されているゴムビーチボールがビニールボールにとって代えられ十六吋もの大きなゴム製ボールが入手できなくなったことです。

私は十二吋から十四吋にかけてのビーチボールを十数個集めて持っておりますが、十六吋のものは仲々見つかりません。なんとかして、大きなものを求めたいと思っておりますが、どなたか、お心当りの方はございませうでしょうか。心を同じくするお友達の方々と打ちとけて、お話する機会があったら、どんなに楽しいことでしょう。

以上のような悩み解決の手段として、貴方を中心に同好クラブを作っては如何でしょうか。御回答をお待ちします。

「告白」

悦 楽 の 園

平 伏 人

序 章

『果報は寝て待て』と言う諺が有るが、我々マゾヒストにとって此れ程馬鹿げた言葉は無い。自らの果報は自分の力で手にすべきで有って、決して寝て待つべきものではない。此んな偉そうな事を言う私も、つい此の間迄は他のマゾヒスト諸君と同じ様に独り悶々の情をかこつ、あわれな一人のマゾヒストにすぎなかつたのである。では、何故私が大多数の空想派マゾ諸君の中から実行派マゾとして脱皮出来たのであろうか。

長年の間マゾにあこがれ、其の実現を夢見て来た私は、或る日、ふとした事から、過ぎ去った二十数年前の夏の夜の事を思い出したのである。当時私は、十二、三才の小学校高学年の頃だったと思うが……。

一

すでにマゾの芽生を、十分に自覚して居た私は、単に空想の世界に遊ぶだけでは満足せず、何とか、此れを実行する機会を求めて自宅附近の路地をさまよって居ました。一時間近くも夢遊病者の様に、歩き廻って居た私は

向うから聞える若い二人の女性の話し声に、はっと我に返り、何か見えない糸に引かれる様に、つかつかと二人の前に歩み寄ると、其の場にペツタリと四ッ這いになり

「女王様、私は貴女様の賤しい奴隷で御座居ます。どうぞ、蹴飛ばして下さい」と引きつった様な声で哀願したのでした。今思い出しても、顔の赤くなる思いですが、其の時は本当に必死の気持だったので。しかし、此の後は小説の様なわけには行きませんでした。二人の女性は

「気味悪いから早く行きましょう」と言う

四ッ這のまま、期待にふるえる私を見向きもせず、逃げる様に闇の中へ消えてしまったのです。

此の第一回のしかも年少の頃の経験は、必要以上に、私のマゾを消極的にしてしまったのです。其の後、歳と共に、私のマゾは内攻し、日夜悶々の日を過す様になってしまったのです。映画館の婦人便所に入り、黄色い神水を、便器に口をつけて、すすったり、経血のしみこんだ、脱脂綿を家に持って帰り、其れを口にふくみ、クチャクチャかみしめたり……。

自分でも、此れで一体、良いのかと、自らが空恐しくなる様な思いも、一度、二度ではなかったのです。

しかし乍ら、マゾになやむ以外の私は、学校も社会生活も、きわめて健全な姿で送り、今日四十才を過ぎて、従業員一〇〇名余りを有する、小さいながらも、会社の社長と名のつく地位になり得た事は、不幸中の幸と言えらると思うのであります。

自分の生活が安定するに従い、私のマゾに對するあこがれは、又私を攻め始める事となつたのです。此の様な私に、大きな勇気をつけて呉れたのが、前に申し上げた、私の年少

時代の行動だったのです。あの時代でさえ、自分は、見ず知らずの女性の前へ、四ッ這いとなり、心の底からマゾの叫びをなし得たではないか、今の私に其れが出来ないわけがない。私は一人自分に言い聞かせると、むらむらとわく斗志を胸に秘めて、友人より知識を得て居た、都内の或るトルコ風呂へと足をはこんだのでした。

二

受付で、「お姉さん」とトルコ嬢から呼ばれて居る女性に、私は千円札を一枚つかませると

「一寸位の事で驚かない様な、気の強そうな子を世話して呉れないか」とたのみこんだのです。心得たもので、其の受付嬢は（一寸ポチャットとした、男好きのする女性でした）「かしこまりました、丁度いい娘が居りますから」と言うと、片目で、私にウィンクすると、チケットを持って先に立つのです。部屋の前になると、ドアをノックして、「千代ちゃん、お客様ですよ」と言うと、

「お客様に、ピッタリですよ」と言って、私のお尻を、いやと言う程つねり上げると、さつと行ってしまいました。私は、どんな娘か

しらと期待に胸をはずませ乍ら、ドアを開けました。

千代ちゃんと言う娘は本当にすばらしい娘でした。団令子の様な、丸顔の可愛い顔立ちに、十分に發育した、ボリュームの有る下半身は、一見アンバランスに見えましたが、其れが又何とも言えない男心をそそる魅力となつて居るのです。

私は言われるままに、着ている物を脱ぐと生れて始めて、むし風呂に入りました、箱の中から首だけ出した私は、次第に出て来る汗と共に胸の高鳴りを感じて来るのでした。

……一体何と言って切り出そうか……

私は其の事ばかり考え続けました。と、ドアの開く音に私は我に返りました。千代ちゃんが、用たしから帰って来たのです。

「あんた、気の強い娘って指名したんですって、い्यानなっちゃうな、此の前そんな男が来て、いじめて呉れて言うから、さんさんひっぱたいてやったら、お姉さんたら、其れを覚えて居たのね」と言うと、さもおかしそうに笑うのです。私は天からあたえられた、チャンスに思わず、しめたと思い、

「いじめて欲しいって男、一体どんなの？」とわざと、しらばっくれて、聞いて見まし

た。

「知ってるくせに、お客さん、ずるいわよ」と千代ちゃんは、相変らず可愛い顔をほころばせたまま答えます。そして、

「お客さん、気の強い娘が良いって、まさかマゾじゃないでしょうね、私は其んなの、いやよ」と千代ちゃんは、言います。しかし私はマゾの本能でしょうか、彼女が口で言う程に嫌がって居ないと察しました。こうなったら押しの一手だと、自分に言い聞かせると、

「お願いです、私は、貴女のおっしゃる様に女の方にいじめてほしいんです、マゾなんです。僕を奴隷にして好きな様にして下さい。其のかわり、チップは幾らでもはします」と顔から汗をだらだら流し乍ら哀願したので、私がチップを出すと言うので、彼女の氣持が動いたのでしょうか。だまされたまま、彼女は私の上衣のポケットから財布を取り出すと、

「あんた、幾らチップ呉れるの」と幾分荒っぽい口の聞き方で、私の方を、いたずらっぽく見るのです。

「其の中に五万円位入ってますから、好きなだけお取り下さい」私は、すでに自分がマゾの夢幻境に入っていくのを考じ乍ら、嬉々と

して答えるのでした。

「あんた、割方氣前が良いわね、じゃ、三万円だけ、もらっておくわ、其のかわり、思いきり、いじめてやる。」

そう言うのと、三枚の札を手にして、部屋を出て行くのでした。其れから五分、十分と時間が過ぎても千代ちゃんは帰って来ません。私はむし風呂の熱氣にのぼせると共に、尿意をもよおし、とうとうたまらずに、キャビネットの中に放尿してしまったのです。何とも言えない、臭氣と、熱さに氣も遠くなりそうになり、大声で、

「お願いです!! 出して下さい」と思わず叫んでしまいました。するとゲラゲラ笑う声と一緒にドアが開いて、やっと、千代ちゃんが入って来ました。

「なんだ、だらしが無いなあ、アレッ!! 粗相したわね、きたならしい!!」と言うと、ようやく私をキャビネットから出して呉れました。私はもうフラフラになって、風呂場のタイルの上に這いつくばってしまいました。千代ちゃんは、私を足げにすると、

「オイ、お前は、お風呂をよごしやがって、さっさと掃除をおし!!」と見違える様な高飛車な態度で私に命令するのです。

私は、四ッ這のまま。水をくんでは、むし

風呂の中につけ、一生懸命洗うのでした。其の間中、彼女は私の尻を蹴飛ばしたり、ぬれタオルで、所きらわず、私の体を打ちつけるのでした。やっと開放された私は、彼女の前にひれ伏して、

「御主人様、賤しい奴隷の分在で、お風呂をけがして、申し分け御座居ませんでした。どうぞ、御氣のすむ様に奴隷を罰して下さいませ」と申し上げるのでした。彼女はベッドに腰を下し、ひれ伏して居る私の頭に片足を乗せ乍ら。

「どうやらお前は、本当のマゾらしいな、じゃ、そろそろ本番といこうか」と言うとき室内電話に手をかけるのでした。

「お姉さん、やっぱり本物のマゾだったわ、そろそろ私の手に負えないから、お姉さんに渡すわ、後は好きな様にして」と言うとき、いたずらっぽく笑って、受話器を置きました。やがてノックも無くドアが開いて、受付の娘が入って来ました。私は、あわてて、立ち上ろうとすると、

「馬鹿野郎、奴隷のくせに立つ奴があるか、其のまま、這いつくばって居ろ!!」と言う受付嬢の最前とは打って変った怒声と共に、私



は、顔を、いやと言
うほど、ひっぱたか
れたのです。私は、
思わず、ひれ伏すと
「申し訳御座居ませ
ん、御許し下さい」
とおわび申し上げる
のでした。千代ちゃ
んは此んな私に対し
て、

「私は試験官よ、此
のお姉さんは、本当
は、此のお店のマダ
ム、光子様とおっし
やるんだよ、私の試
験にパスした奴だけ
マダムの奴隷になれ
るんだよ。有難いと
思つて良く御仕えす
るんだよ」と言う
「ママさん、さっき
の感、ずばり当りま
したわね」とマダム
に言う、私の尻を
ピシヤリとたたいて

部屋を出て行つてしまつたのです。其のまま
ひれ伏して居る私に向つて、マダムは、やさ
しく、

「あんた、今日から一週間、此の店に泊りこ
みで私の奴隷になつて見ない？。マゾなんて
言うのは、勇気を出してやつて見なかったら
意味ないわよ、思いきつて飛び込んで見るの
よ。私だって、今の様になるまでは、随分考
えたわよ。前の奴隷を首にしてから、本当は
もう二度と、此んな遊びは止めようかと思つ
たけれど、やっぱり駄目ね、どうしても奴隷
をいじめる味が忘れられないの、やつと奴隷
をさがそうと決心したけど、今度は適當なの
が居ないし、私はお金はほしくないけれど、
自分のお金や財産を目あての様な男とは付合
いたく無いし……。随分迷つたわよ。だけ
ど、お前はお金には目がくらまない位の財産
は有りそうだし、あんたを奴隷にする事に決
めたの、だけど、奴隷になるって、其んなに
簡単な事じゃないのよ。いやなら今から帰つ
ても良いのよ、だけど若し奴隷になる決心が
ついたら、今日から一週間、家庭も会社も忘
れて本当の奴隷としての生活を送つてみな
い？。其れで、お互に良かったら、其の時は
あんたも、私も、仕事にさしつかえない様に

土曜から日曜にかけて毎週二日だけ、お互のプレイを楽しみましょう」

彼女はベッドに腰を下したまま、足下にひれ伏す私を見下し乍ら、静かなやさしい口調でお話しになるのでした。私は何のためらいもなく決心しました。

「光子様、私は貴女様の御理解ある、御話で決心ができました。喜んで今日から一週間、貴女様の奴隷として、テストを受けさせて戴きます」と申し上げると、お許しを得て、会社へ電話をかけるのでした。

三

私が会社に電話を掛けて居る間に、光子様は部屋を出て行かれました。電話がすんで私は所在なく床にすわって居ますと、やがて光子様は、千代ちゃんに大きなトランクを下げさして部屋へ入って来ました。トランクを置くと千代ちゃんはすぐ部屋を出て行ってしまいます。私は光子女王様の御命令を待って床にひれ伏します。

「お前の名前は？」光子様は語調を変えて、おっしゃいます。

「ハイ、平と申します」私はうやうやしく御答え申します。

「よし、じゃ、これからお前を、平助と呼ぶ……平助!! お立ち」

私は、はじかれた様に立ち上ります。光子様は私の目の前でトランクを開けるのです。開かれた黒皮のトランクの中には、私が夢に迄見た、色々の道具が入って居るのです。よくしなう黒い婦人用の乗馬鞭、シェパード用の調教用の鞭、鎖、ロープ、等々、いずれも私のマゾ心をかきたてるのには、充分の品ばかりでした。その中から光子様は、皮の鞭の様な物を取り上げると、

「平助、此れをはめて御覧」とおっしゃって私の前に投げ出されるのです。私は其れを手にして自分の前に当てがいました。まるで寸法を取って仕立てた様に、私の股をグッと締め上げて、気持ち良い緊縛感が全身をくすぐるのです。

此れは一種の貞操帯の様なものでした。そして、革褌についた錠をガチャリとはめられ其の鍵は、光子様の手にあるのです。私は心身共に光子女王様の手に握られた、一匹の人格を失った、獣の地位に自分が落ちた事を知り、思わず其の場にひれ伏すのでした。其んな私に対して、女王様は平然とした態度で、「私がこの鍵を使わない限り、お前は自由に

用便も出来ないんだよ、お前が自分で望んだ奴隷の生活を十分にお楽しみ!! そして苦痛の中から、本当に快楽が得られるかどうか、自分の身体で良く知るがいい」とおっしゃると、手にした、乗馬鞭で私の背、尻を思いきり打ちすえて下さるのです。生れて始めて知った鞭の味、其れも情容しゃもない激しい、鞭の責に、私は思わず「ヒーッ」と声にならない叫びを上げました。

「馬鹿ヤロー、此の程度で、悲鳴を上げる奴があるか、私の鞭は、そこいらの、金で買われてサービスする様な、女の鞭とは違うんだよ、思い知るがいい!!」とおっしゃると、光子様は、尚も、私の尻を打ちすえるのでした。

やがて、鞭打にあきたのか、光子女王様は苦痛におののく私に対して、

「今日から、一週間、色々とお前をもて遊んでやるけれど、取りあえず、普段は、此の店のボーイとして使ってやる」と、おっしゃると、私に黒いズボンと、白ワイシャツを着る様に命じます。私はトランクの中に用意してあった、ボーイの服装を喜々として身につけるのです。驚いた事に、そのズボンの尻部は丸く切り取られ、ホックで其の部分をお

おう様になって居るのです。私は其の当て布を、女王様に着けていただき乍ら、かりにも小さいながらも社長と言われる我が身が、此んな姿で、トルコ風呂のボーイになって居るのを、若し、社員にでも見られたらどうしよう、と一寸不安にもなって来ましたが……否々、自分の求めた機会を、其れも夢の様な理想の世界に、何の理由で入らない馬鹿が居るか……私は改めて自分の決心を確認するのでした。

四

此の様にして、私の奴隷生活が始まったのです。私は先ず一時から開店する前に、お店の掃除をやらねばなりません、全部で十二あるお部屋を全部掃除するのです、此れは、私が奴隷として、光子様の所有物になる前は、各自、其の部屋の女の子の努めだったので、奴隷としての、私の仕事に、光子様があたえて下さったのです。タイルの上に這いつくばって、クレンジンを着けた、タワシで、ゴシゴシ、床をこする私に、時折、早くお店へ出ていらした女王様は、お恵みの鞭を下さるのです。一鞭毎に私は「有難う御座屋ます」と御礼を申し上げなければならぬので

した。

掃除がすむと、私はカウンターのの中へ入ります。此の中が私にとって一番楽しい世界なのです。なぜと申しますと、この受付のカウンターのの中には、光子女王様と、奴隷の私の二人だけしか居ないのです。カウンターの内に四ッ這になった私は、犬の首輪をつけられ鎖で床につながれるのです。私が奴隷となった日から、カウンターのの中の椅子は取り除かれ、光子女王様は四ッ這の私の背を椅子になさるのです、幸な事にカウンターのの中は、外からは全然見えないのです。やがてお客が来ると、各部屋に居る、女の子に、此の店の、マダムにかえった光子様は、電話でコールをされ、女の子は、受付まで来るとお客様をともなつて部屋へ消えるのです。時には私が、お客様を御案内しなければならぬ時があります。其の時は、

「平助!!

お客様を御案内おし」と光子様は鎖をはずして下さるのです。しかし、首輪は決して、はずして下さらないのです。うす暗いお店の中とは言っても、たまには、お客様に首輪を発見され、不思議そうな目で見られあわてて、ワイシャツのえりを立てる事もありました。カウンターのの中に帰った私は、再

び鎖でつながれ、御主人様の犬兼椅子としてのお努めを真心をこめて果すのです。

時たま、トルコ嬢が、カウンターのの上からのぞき込み、ゲラゲラ笑いながら、口の中のかみ残しの、ガムをペツと床の上にはき捨てて下さるのです。私は其れを犬の様に床に口をつけて、有難く頂戴するのです。始めのうちは此んなお恵みを下さる方はごくわずかな方達でしたが（本当は、千代ちゃんだけでした）私の奴隷二日目の閉店後、光子様が、お店の娘を全部集めて、私を紹介して下さってからは、もともとトルコ風呂に務める様な方々ですから、皆様大いに気を良くして、私をこき使って下さる様になったのです。では、どんな紹介をされたかと申しますと、皆を集めた光子様は、私をサロンの床の上に四ッ這にさせると、首輪についた鎖を、グイと引かれて、恥しさにうなだれて居る私の顔を、皆の方に無理に向かせるのです。あちこちから、クスクスという、笑い声が聞えます。私は自分の顔が赤くなるのをおさえる事が出来ませんでした。光子様は皆に對して、

「皆さん、不思議に思うでしょうけど、此の男を昨日から、此の店の、使用人として使う事にしました、但し、使用人の言っても、給

料をはらう必要の無い使用人です、つまり奴隷ね、何故この男が奴隷にならなければならなかったかって？そう、私の家に此の男が泥棒に入ったの、其れもよ、私のパンティばかりぬすんで行ったのよ。そして、隣の人につかまって、私の家につれてこられたの、私ね、よっぽど警察へつき出そうかと思っただけど、丁度御店が、人手不足でしょ。だから此のお店で思う存分、こき使ってやる事にして許してやったの、だけど可哀そうだから、一週間だけ使って、もし心を入れかえる様だったら少し位、給料をやってずっと使ってやろうと思うの、だから皆さんも、遠慮しないで、使ってやって、此の男は、頭をなでてやるより、蹴飛ばしてやった方が、喜ぶのよ」

とおっしゃると、私のズボンから当布を取り、裸になってふるえている尻にピシリと強い一鞭を呉れるのです。身に覚えのない事を皆の前で言われ、一寸、反抗的な気持になって居た私は、この一鞭に、自分の奴隷としての境遇を思い出し、思わず「有難う御座



居ます」と、申し上げてしまったのです。それまで、光子様のお話で一寸、気味悪そうにしていた、女の娘たちも私の此の姿が余程おかしかったのでしよう。クスクス笑うと、勇敢な娘は光子様の手にした鞭をかりると、私の尻を打ちすえて下さるのです。其の度にあわれな否、幸せな私は「有難う御座居ます。有難う御座居ます」と申し上げるのです。

此の様な事が有ってから、此のお店の中における私の地位は、完全に、光子様を始めとする、皆様方の奴隷になったのです。

五

三日目、四日目と、日を経るに従って私の仕事は、いそがしくなってきました。お店の方達の御命令で、お食事の注文に行ったり、皆様のパンティの洗濯をやらされたり、つかれたトルコ嬢の御身体をもんでさしあげたり、目の廻る様ないそがしさです。お客のチップが少なかったと言っては、尻当を取って、私の尻をピシリピシリ鞭打つ方

も一日に三人や四人ではありませんでした。此の様に、お店の皆様のきびしい、しつこくを受けて居る私にとって、ただ一つ物足りない事が有りました。其れは、お店の方々が私に対してきびしくしこんで下さるのに、光子女王様は、カウンターの中に居る私の背に、其の丸いお尻をお乗せ下さるだけで、奴隷の私に対して、おしかりの言葉一つ、めったにかけて下さらないのです。楽しみと不安が、重った日も、何時か過ぎて、とうとう一週間目の閉店がやって来ました、店の人々が皆帰った後、光子様は私を、あるお部屋へつれて行ったのです。（それは客室の一つですが）そして、私の首から一週間つけて居た首輪を取り、そして、此れも一週間はめなれた、革褌をはずして下さるのです。私は、首すじが、スツとすうすう寒く、腰の辺が、何かふらふらする感じがしました、此れも、一週間の習慣がそうさせたのでしよう。

「御主人様、一週間本当に有難う御座居ました。どうぞ、其のまま、私の体に、首輪、褌をつけさせて下さいませ」私は床にひれ伏して、御願い申し上げるのです。此んな私を



光子様は、やさしい笑顔で御覧になり乍ら、「平さん、遊びはもう止めましょう、人間、やっぱりけじめが大切よ」と、申されると私に、自分のかけて居るベッドを指さし、そこへすわる様に申されるのです。私は、久しぶりで人間として、光子様と同席したのです。しかし何か、物足りない気持は押えられませんでした。光子様は私の肩をやさしく、なぜ乍ら、

「平さん、私は貴男が一時の気まぐれで、奴隷になったのかと思ったのよ、まさか一週間も続くとは思って居なかったの、貴男の忍耐強さが良くわかったわ、きっと、社会生活でも立派な人と思うわ、私本当に尊敬する、だからこそ、もう此んな遊びは止めて、二度と私の前に現れないで、さもないと、私もだま

らなくなると思うわ、」とおっしゃると、用意してあった、私の背広を出して、

「早くお帰りなさい。そして、御元気でね」と言うと、私の手を強く握るのでした。私は本当の話、どうしようかと迷いました。しかし私のマゾに対する、あこがれは、直ぐ私に決意をあたえて呉れたのです。私はベッドから飛びおりると、床の上に四ッ這いとなり、

「御主人様、いやで御座居ます。私は、人間であるより、御主人様の家畜になりたいのです、私に其の様なおなさをかけて下さるなら、鞭のお恵をおあたえ下さい、私は一週間のテストの末、御主人様の本当の奴隷になれる事を夢見て来ましたが、御願いで御座居ます。私を見捨てないで下さい」と泣き乍ら哀願するのでした。其んな私を、悲しそうに眺めて居た光子様は、意を決したのでしょうか、口もとに残忍そうな笑いを見せると、スツクと立ち上りました。

「お前はよくよくの馬鹿者だね!! 私の気持も知らないで、ヨシッ!! 本当の奴隷の苦しみを思い知るがいい!!」と叫ぶと、御自分のズボンにさし込んで居た、なつかしい、乗馬

用の鞭を手にとると、ひれ伏した私の背といわず尻と言わず、ピシリピシリ、狂った様に打ちすえるのです。私の背中、お尻はたちまちのうちに、みみず脹れではれ上り、やがて皮が破れて、血が床をぬらすのです。私はあまりの苦しさに、

「お許し下さい、お許し下さい」と泣き叫んで逃げ廻るのです。しかし御主人様の鞭は私を追い続けます。

「どうだ、本当の鞭の味が、わかったかい、遊びじゃなくて、本当の苦痛がどんなものか思い知るがいい!!」御主人様は仁王立になつたまま、先から血のしたたり落ちる鞭で、私の首すじをグイと押えて、勝誇った様に申されるのです。

「これでもお前は、私の奴隷になりたいの」光子様は申されます。

「ハイ、私は自分の意志で、御主人様の奴隷になりたいので御座居ます。決して後悔は致しません」私はふるえる声で御誓いするのでした。光子様はだまって、うなずくと、身体に着けて居た、スラックス、ブラウスを御取りになり、

「ヨシ、其れじゃ、本当の奴隷にしてやる、そこのタイルに仰向におなり、奴隷の誓いの

さかづきをやるから。」と、おっしゃるのでした。

やがて、私の顔、身体は、夢にまで画いた光子女王様の御神水で、ぬれるのでした。私の口に入る、塩からいなんとも言えぬ、尊い味、それもつかの間、私の鞭に破られた皮膚は、御主人様の御神水で、ピリッとした、痛さでおおわれました。なんと言う痛さ、なんと言う、快楽、私は我を忘れて、タイルの上を異様な、ウメキ声をあげて、のたうち廻るのでした。

六

現在の私は、本当に幸福です、幸い独身だった私は、自分の住居を引きはらい、光子様と二人の秘密の場所を、都内の或るAマンションと言う高級アパートに求め、二人の不思議な住居として居ります。勿論光子様も住居を引きはらい、御一緒に住んで居ります。初めの約束だった、土日の一週二日間は、三百六十五日の悦楽の園に変わったのです。しかし二人の仕事は、其のまま続け、昼は私は会社、夜一時過ぎて、お帰りになる光子様に明け方まで、御奉仕するのです。従って私は午前中は休み、午後のみ、会社へ出るわけで

す。幸い社業も順調に行つて居るので、此れで問題はないのです。今、会社の自室で此の告白を書いて居りますが、私には、例の革褌が光子女王様の手によりかたく、はめられて居ります。ワイシャツからのぞく、手首は赤く、鎖の跡がついて居ります。御主人様の御神水を入れた水筒から、コップになみなみとついだ、黄色い尊い液体を飲みほしながら今日から先の楽しい生活を思いつつ、つたない筆を置かせていただきます。

皆様、どうか、勇気をもって下さい。三十年目にしてみえり来った、此の悦楽の園もやはり、勇気が、あたえて呉れたのです。

皆様の御健康を祈り、私の光子女王様に平伏しつつ、さようなら、マゾヒストの諸君。

(終り)

『マゾフオト三十態』

について

感光紙焼付にて三十枚一組五〇〇円にて分譲していただきました分は、都合によって中止いたしました。御希望の方には、印画紙焼付のものを三十枚一組二五〇〇円にて焼増いたしますから、御申込願います。略号は、従前通り(ま30)で結構です。

鼻のプレリユード

鼻の国

島 ヒ ロ シ

……己は眠った。そんな風にして、己は眠ったのだ。——と、途端、己は己自身を鼻の国に見出した。己は、鼻の世界に来ていた。己は鼻の国の、とある街頭を歩いていた。己の右手には細い鎖が握られ、その先は硝子織ののような透きとおった毛の、白いスピッツの首輪につながっていた。スピッツの、尖った顔先の鼻とその眼が真黒だった。己はスピッツを連れて鼻の国の道を歩いていた。

鼻の国の街道は、己のいつも行く、M町そっくりだった。左右にひしめき立並ぶ商店、往き来する人々、若い男女のアベック、楽し

げな小供づれの夫婦、孤独の老紳士、死面のサラリーマン（会社員）。天空をさえぎったジュラルミン製のアーケードに、無数の螢光灯を酷使して、昼間余剰電力の浪費で電力会社を援助しているのさえ、M町そっくりだった。

が、しかし、己の先入観は確乎たるものだった。（己は、鼻の国を歩いている……）己の信念はそれでよかった。（鼻、鼻、鼻、鼻……）己は小声でつぶやきながら、妙に森閑としたその道を、犬を連れて——いや、犬は何時の間にか、若い女に変わっていた。白い透きとおるようなその膚。ひざを曲げ、四つ這

いの姿勢でヨチヨチ歩くホワイト・スピッツ。己の右手の鎖は、その女の細いしなやかな首に頑丈な首輪をはめていた。鎖も太くなっていた。それが、二、三步あるくたびにとおった「犬」の、豊かな髪が真黒だった。

己は歩いた。白い透きとおった「犬」をつれて、鼻の国の街を歩いた。（鼻の国では、犬と女とは同値なのだ。イコールなのだ）なおも、己は歩きつづけた。

スピッツの鼻は尖っている。「犬」の鼻も高い。スピッツの鼻の頭はチンマリ上を向いている。「犬」のそれも、おんなじだ。スピ

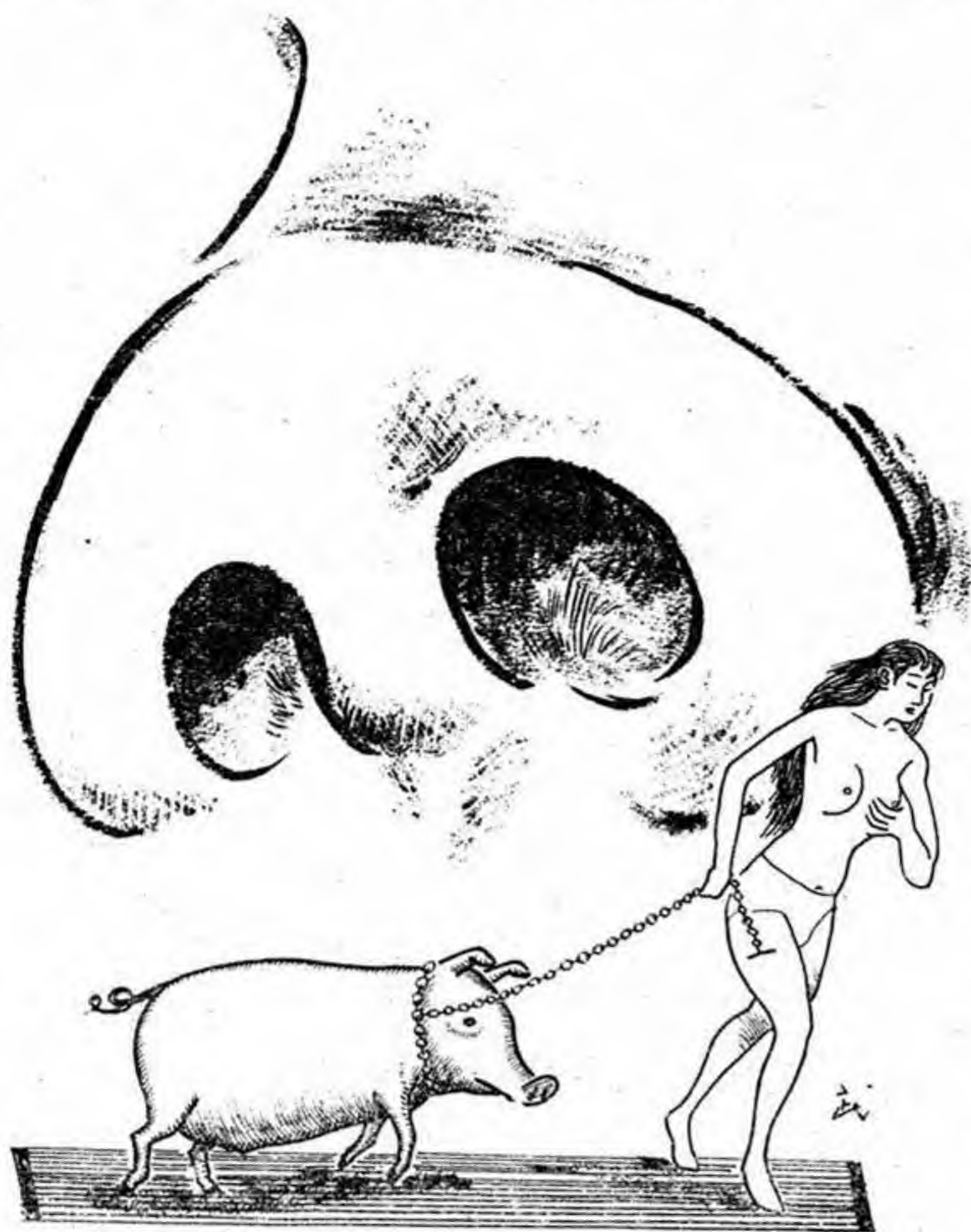
ツツの眼は真黒だ。『犬』のお目目も真黒だ。スピッツは鎖で促される。『犬』も、太い鎖で促される。——『犬』の顔はわが妻美也子そっくりだった。

犬の美也子は、促された。大勢の人群の中

で、太い輪鎖は波動をなして、休みなく道往く人は、そんな『犬』に、かまわず歩いていった。時たま見る人があった。が、その目はスピッツを觀賞する人のそれだった。『犬』を意識外にしていた。そして、傍へ寄って言った。「ちん、ちん」美也子の犬は、中腰になってそれをした。そして、涙を流した。

己は歩いた。鼻の国の道を歩いた。「鼻の国は、どちら？」人は黙って、己の往く手を指さした。己は歩き出

し、『犬』を促がした。と、己の右手には、何時の間にか鎖がなくなっていた。(美也子は？ 犬の美也子は？) 白い犬は、やはり、俺の斜め前を歩いていた。這っていた。(豚だ！ 犬の彼女は豚にならないければならないのだ。鼻の国では、女イコール犬、ナイコー



ル豚、なのだ！)

美也子の透き通る膚はやや赤味がかり、一回り大きく肥大していた美しい鼻だ。上品すぎる鼻では、豚にならない……。己は乱暴に捻りあげ、両つの鼻孔へ小型の線条を噛みこませた。この国では殆んど豚に施されている。原始隆鼻術なのだ。鼻も豚のそれにボウチョーした。極度に拡張した鼻孔は、すずしうに上向いた。脹くれ、上向き、ひろげられたその鼻は『豚』の美貌を浅ましくした。己は、その豚を短い木の枝で追い、ヨチヨチと歩かせた。『豚』の鼻は時々復元するので、己は手入せねばならなかった。「もう、かんにんして。かんにん……」と哀願するホワイト・ピッグ(白豚)のその鼻を、前以上に丹念に乱暴に捻り上げて、そのボウチョーを維持せねばならなかった。豚の美貌が、悲しげにゆがみ、絶望的な表情を表わす。美也子の鼻は、己の手の中で、悶え、苦しみ、痙攣した。再び豚

に変貌したその鼻は、己の右手の木の枝で、前進運動を開始、継続した。鼻をマッサージした掌は、長時間、その快妖感をもちつづけた。それは、小さい魔女と妖精を、一緒に掌中に握りしめた感じだった。稀有な高価な宝石類を、愛で、さすった後の感じだった。

「豚」は、こづかれ、もまれ、歩いた。美也子の鼻は、完全に、独立して歩いていた。白豚は、彼女自身のその鼻を呪い、嘲笑いながら、己に促された。

「豚」は歩いた。己と共に、鼻の国の街道を……いや、今はもう、道の両側のひしめき合った商店の整列はなかった。左右には、白い裸女の歓迎部隊があった。一列横隊にひしめき並んだ、白裸の美女の整列があった。プラカードを持ってる奴がいた。その板面のプリント（映像）が己の網膜に焼付いた。

○

己の心は雀躍し、白豚のお臀をこづくテンポを上げた。己は歩いた。速度をアレグロ（急速調）にし、プレスト（最高速）にした。裸女の整列の前を、己は歩きつづけた。

台上に、縛された裸女があった。彼女の傍には、タンポ槍があった。立札に何か書いて

あった。——小野小町を試されよ。

白裸の女隊の列は続き、己と「豚」は歩いた。又、あった。

巨大なしゃこ貝に、頭をはさみ込まれ、うごめく裸女。傍に曰く——アフロディテ（ヴィーナス）の還元。

又あった。曰く——へべの贖罪。

ネクタールを覆した、青春の女神へべ。そのへべは、酒神ディオニュソスに扮した女性に、はだけた胸のたま（乳房）から香しい液体をしぼりとられ、こじ開けられたその口には、白濁の、異臭を放つ粘液を盛んにたらし込まれていた。（彼ディオニュソスは、母親を火あぶりにされ、彼自らも、狂人扱いにされているのだ。へべは、その仇の娘なのだ……が、あの白い粘液は？ あれこそ、アンブロシアの神食だ）己は体をふるわせて、そこを通りすぎた。香液とアンブロシア（神食）は山程あった。

美女の歓迎の整列は、なおも続き、展示物は又あった。

淫売窟で数人の男たちに、変態的な仕込みを授けられている一人の田舎娘。曰く、——

Saint Virgin Maria の懐胎。

又、曼陀羅華という淫草で製造した怪しげ

な煙草で、多くの男女を夢中に有難がらせている一人の若僧。仏陀。など、など……

○

裸女の横隊は続いた。己は歩いた。美也子の白豚を……いや、今度は「牛」になっていた。鼻は美也子に還元して、己の後について歩いていた。カールした、アルキメデスの渦線も、なくなっていた。そうして前と違って膝を立てた四つ這い姿で、己の後に歩いていた。己の右手の木の枝も、何時の間にか、プラチナ（白金）のリング（小環）を一端に持った金鎖の細紐に変化していた。己は、その白金の小環を、美也子の鼻壁に装飾した。観念した美也子の雌牛は、苦い笑いで、豪華なアクセサリーをつけるオペラチオン（手術）を受けた。「牛」は、お臀を空に立て、顔をグッと正面向けて、活発に歩いた。その、可愛い高貴な鼻を、伸ばしたりちぢめたりしながら。品のよい、美貌の顔を滑稽に歪ませながら。（鼻と乳房は、共鳴体だ……）

○

己は歩いた。鼻の国の道を「牛」を牽きつれ、歩いた。

裸女の歓迎はなおも続いた。そして、プラカードも続いた。

花と蛇

(第四回)

団

鬼 六

浣腸強制

輝く絨のような天性の美肌をどす黒い麻縄でキリキリと後手に縛りあげられている静子夫人、その豊満な二つの乳房は、くびれるばかりに上下を麻縄がしめあげているのだ。座敷の中央には、ビニールの布が敷かれ、乳白色のきらめくような彼女を、その上へ突き転がすようにした川田は、控えている男二人に眼くばせをする。

床の間を背にしているのは、悪徳不動産屋

の田代、その両脇から、この座敷を取り囲むようにずらりと居並んでいるのは森田組の幹部や中堅である。これから始まる美女の浣腸図を肴にして酒を飲もうというのだ。

「嫌です！嫌、誰か、誰か助けて下さい！」

静子夫人は、ビニールの布の上で、自由のきかぬ身を激しく悶えさし、取り押さえようと襲いかかって来た二人の愚連隊の手から逃がれようとする。野卑な男達の真只中で、姿をさらしているだけでも気が遠くなるほどの辱しさなのに、後手に縛りあげられたみじめな恰好で、酒の余興に浣腸をされるなど、静

子夫人は、羞恥と屈辱のため、血が逆流する思いであった。

「じたばたすんねえ、大家の令夫人なら令夫人らしく、おとなしくするんだ」

二人の男は、泣き叫ぶ静子夫人を押さえつけると、うつ伏せに倒し、腰に手をかけて、肉づきのいい尻を無理やり上へ持ちあげようとする。

「奥さん、もっと、上へあげるんだ。へっへへ、全くだいいおヒップしてるじゃねえか」

夫人は冷たいビニールの布に豊かな両乳房を押しつけ、両足を二つ折りにして、尻を上

「これまでの概略」

天性の美貌の持主、静子は今をときめく実業家、遠山隆義の後妻に入ったが、隆義と先妻との間に出来た娘、桂子は手のつけられぬ不良少女で、葉桜団というズベ公のグループに入っていたが仲間の掟を破ったという事から私刑を受ける事になる。なお葉桜団は桂子の家の裕福な事を知って、桂子を監禁、その身代金を要求してきたが世間知らずの静子夫人は単身で桂子の身代金をとどけに行き、結果、静子夫人は桂子と共に葉桜団に監禁される事になった。葉桜団とたえず連絡をとり、この母娘誘拐の手

引きをしたのは、遠山家の自家用車運転手川田である。葉桜団に捕われの静子夫人は連日、ズベ公達のなぶりものになったあげく、裏切者の使用人、川田に肉体まで奪われる破目となった。その上、川田は、静子夫人と桂子を森田組という秘密写真製造団に売り渡してしまう。この森田組の面倒をひそかにみているのは田代という好色な悪徳不動産屋であるが、彼は、かつて、静子の夫、遠山に事業上のことで煮湯をのまされた事もあり、そういう腹いせもあって、静子夫人を森田組と一緒に徹底的に鬻りつくそうとする。

社長

森田は、ニヤリとして立上ると、夫人の豊かなヒップを二、三発平手でたたいた。

田代は、憑かれたように、それを凝視していたが、

「それじゃ折角の奥さんの美しい顔が見えないじゃないか。どうせ浣腸責めをするなら、もっと面白いポーズを組ませたまえ」という。

「俺がやってみましょう」

川田が引受けて乗り出して来た。彼は、二

人のやくざと一緒にあって、静子夫人の上体を抱き起し、その場に尻もちをつかせる。静子夫人は、ビニールの布の上に猿のようにちぢこまり、本能的に立膝を組む。美しい切長の尻尻からは真珠のような涙がとめどなく流れ、ふっくらとした白い頬を濡らしている。しかし、屈強な男達にかけられた一本の麻縄は、悶えれば悶えるほど激しく二つの胸の隆起を責め、背後にまわされた両手首をしめあげるようなのだ。

「何か長い棒切と、縄を少々持ってきてくれないか」

川田は、やくざ達にいった。

静子夫人は、再び激しく嗚咽する。これから、川田は自分にどのような屈辱的な姿態を強制しようとするのか、川田の残忍さを知っている静子夫人は身を震わせつつ、無駄とは知りながらも哀願するのである。

「お願いです。かんにんして、もうこれ以上ひどい事はしないで――」

しかし、川田はせせら笑うだけだ。静子夫人の前にしゃがんで、涙に濡れた夫人の頬をつつく。

「今更何をいってるんだ。お前さんは今日から森田組のものなんだよ。ここの親分や社長

へ押しあげた恰好にされてしまった。なめらかな背にねじ曲げられた肉づきのいい両腕、そして、その手首は、麻縄でがっちり交錯されているのだ。夫人は、美しい顔を畳に押しつけ、泣きじゃくっている。

「親分、こういうスタイルでいいですか」

夫人を押さえつけている男達は森田と田代の方を見ていった。静子夫人は、憎い田代と森田の視線を身体全体に感じて身悶えする。

「はっはは、早く浣腸してよとこの奥さん、お尻をもじもじさせていますぜ、どうです。」

さんの氣にいるよう務めなきやいけない。それとも、何かい、俺にここで恥をかかせようってのか」川田は、わざと凄んで見せて、繩にくびれた夫人の乳房の脇をひねりあげ、悲鳴をあげさせるのだった。

長い青竹と新しい麻繩を一人のやくざが持つて来る。川田は、それを受取ると、夫人の傍へにじり寄り、皮肉な笑いを口元に浮かべた。静子夫人は、一層、体を硬化させ、眼を固く閉じ顔を伏せる。必死にすくませている両腿が思ひなしか、小刻みに震えているようだ。

川田は舌なめずりをするようにいった。

「奥さん、そう何時までもおしとやかに足を縮めていちゃ具合が悪いな。さあ、いくらじたばたしたって無駄だ。観念しな」

川田は、一本の青竹を使って静子夫人を開股縛りにしようとするのである。



「嫌、嫌です、ああ、嫌」静子夫人は、川田が近寄って来ると一層体を硬くし、両腿をぴったり閉じ合わせて後ずさりする。

川田の目くばせを受けて、二人のやくざも川田に手伝った。夫人の両足に青竹の足枷をはめようとする。

「お願い、かんにんして下さい！」夫人の必死の哀願も、こうした野卑な男達の耳には、実に心地の良いものらしい。

氣の狂いそうな恥しさ、血を吐くほどの口惜しさ、そんな、静子夫人の前に、悪徳ブローカーの田代が近寄って来て、あぐらを組んで坐りこむ。それにならって、森田組の幹部連もわいわいと近寄って来て、静子夫人の周囲に陣どるのだった。

田代は、だらしなくよだれを流している。何時の日であったか、慈善パーティで豪華なイブニングドレスをまとい、妖精のように有名人と踊り廻っていた遠山財閥の令夫人が―絶世の美人だと知名人の間でもっぱらの評判だった静子夫人が―今は人間のくずの如き

愚連隊の鬨りものとなり、その光沢のある白い素肌を一本の荒縄で後手に縛りあげられているのだ。

「すばらしい。全くすばらしい」

田代は、何かにとり憑かれたようにつぶやきながら、身も世もあらずうち震える静子夫人を、むさぼるように凝視しつづけるのである。

静子夫人は、真赤になった顔をがっくり落し、すすりあげているだけ、卑劣な男達の好色と好奇の眼に全身をゆだねるより他に仕方のない状態だったが、川田は、そんな、哀れな静子夫人のあごに手をかけて、その美しい顔を無理やり、ぐっと正面にあげさせ、田代の機嫌をとるのだった。

「社長、これだけの美人はちょっと映画俳優の中でも見当りませんぜ。それにどうです。このオッパイの張りきりかた、色気のある腰つき」

川田は、片手で夫人の顔を押しあげながら勝手な事をしやべりつづける。

「け、けだもの！ 殺して、一思いに殺して！」

静子夫人は、ウェーブの軽やかかった絹のような感触の黒髪を激しく振って泣き叫ぶ。

「何をいいやがる。おめえのようないい女をそうむざむざ殺せるもんかい。それに遠山からまだおめえの身代金を受取っちゃいねえのだぜ。身代金は急ぐ事はねえ。おめえの、その美しい体で、これから充分かせがしてもらうよ」

森田が横手からそういった。

川田がつづいて静子夫人の頬をつつきながら、

「いいかい、奥さん。親分のおっしゃる通りだ。さて、いよいよ皆様お待ちかねの令夫人の強制浣腸の一幕を、お見せしなきゃならぬのだがね」

川田は、やくざの一人に命じて、天井の梁に一本のロープをつながせた。そして、ロープの先端を夫人の足枷となっている青竹の両端につなぎとめる。そのロープを上へつりあげれば、夫人は後へ転倒し、両足を嫌でも高々と上へかかげねばなくなる。

「さてと、用意は出来たぜ。このロープを上へ引っ張れば、どんな恰好になるか、奥さんわかるかい」

川田は、紅潮した顔を、必死に伏せている静子夫人を、のぞきこむようにしているのだ。

「社長、金をいくら積んでも、なかなか見られないショウですよ。記念に撮影しとこうじゃありませんか」

森田が田代に向っていい、乾分達が小型の撮影機を持ち出して来てライトの位置を計り出した。

静子夫人は、眼の前の川田に対して、絶叫するようにいう。

「川田さん、お願いです。そ、そんな事するぐらいなら一思いに殺して！」

浣腸される——聞くだけでも身の毛がよだつことなのに彼等はそれを刻明に撮影し、金儲けの種にする魂胆なのだ。そんなフィルムが、あちこちにばらまかれたりする事を思うと、静子夫人は口惜しいやら情ないやら、夫の遠山隆義の社会的な名誉もあったものではなく、いっそ死にたかった。また、現在の夫人にしてみれば、そんな事を考える余地もない。川田がわざとらしく、夫人の前に洗面器を置き、石けん水をぬるま湯でゆっくりとかし始めているのだ。

やがて、川田はガラス製の大きな浣腸器に石けん水を含ませ、ちらっと夫人の顔を見る。夫人の動揺する表情を、わざと観察しようとしたのだ。

静子夫人は、ハッと視線をそらし、再び、体を震わせ、一きわ激しく泣きじゃくる。「どうでい。奥さん、石けん水はこれくらいでいいかい。少な過ぎるなら、もう少し入れ

てもいいぜ」

と、川田は液を含ませた浣腸器を静子夫人の鼻先へ突きつける。夫人は固く眼を閉じたまま、血の出るほど固く唇を噛みしめ、全身



で、この屈辱と戦っているようだった。

川田は次にブリキ製の便器をとりあげ、これも夫人の顔に近づけて、

「便器の大きさはこんなものだがどうでい。間に合うかね」

夫人は、もうすっかり観念したのか、一言も発せず、美しい顔を横に伏せているだけだ。

「さてと。カメラの用意も出来たようだし、そろそろ始めるとするか。いいかい、奥さん。浣腸から排泄までを、この社長と親分にじっくり見て頂くんだけ」

そして、川田は、やくざ達に命じて、天井のロープをゆっくり引くよう命じた。

その時、廊下の方がさわがしくなった。

「何だ、どうしたんだ」

田代は、興奮して燃え立っている最中の体に水をぶっかけられた思いで、顔をあげる。もしや、救援者が——静子夫人は、一まつの希望を抱いて、ハッと眼を開く。

屈 伏

ドアを誰かがノックをする。

二、三人のやくざは反射的に立上り、ポケットからピストルをとり出した。

「誰だ！」

ドアの向こうからは、

「あたいよ。銀子だよ。遠山家のお嬢さんを連れて来たんだよ」

男達が内鍵を外し、ドアを開けると、銀子や朱美その他ぞろぞろと葉桜団のズベ公連が入って来た。

静子夫人は、望みの糸も切れ、再び、固く眼を閉じる。夫人の美しい長いまつ毛は涙で濡れ、切長の眼尻から、温い涙が一筋二筋と柔かい頬を伝わるのだった。むしろ男より残忍な女達の出現で、静子夫人はいよいよ救われようのない恐怖と羞恥の地獄へ突き落されてしまった感である。男達だけではなく、こうした不良少女までに死ぬよりも辛い姿を見られなければならない苦しさ。女にとってはそんな姿を目撃される場合、むしろ同性の方の眼にさす方が一層恥しいものである。再び、齒を喰いしる静子夫人であった。

数人のズベ公連に突き立てられるようにして部屋の中に入って来たのは、桂子で、これも静子夫人同様、黒ずんだ麻縄で高手小手に縛りあげられ、口にはきびしく狼轡をかまされていた。

「ほほう。それが遠山の娘かい。仲々可愛い

い娘じゃないか」

田代は、淫らな眼をしばたいて、震えている桂子を見る。

銀子達は、桂子を大きなリュックサックに詰めこみ、タクシーを雇ってここまで連れこんだ事を説明するのだった。銀子は、ふと、地獄の苦しみと戦っている静子夫人を見て、「あら奥さん、素ばらしい恰好にされているじゃないの。ふふふ、早速、浣腸されたってわけね」

静子夫人の周囲には石けん水の入った洗面器や空になった浣腸器が散乱し、一眼でそれとわかるのだ。

川田がいった。

「残念だったね。もう少し早くお嬢さんが来りゃ一緒に並ばせて、浣腸が出来たのに。まあいいや。とにかくお嬢さんも、ここへ坐らした。ママの排泄するところを見物させてやるんだ」

銀子と朱美が必死になって後ずさりをするうとする桂子が無理やり引きずって、田代が陣どっている隣へべたんと尻もちをつかせ、身動きの出来ぬよう素早く桂子の両足をあぐらに組ませ、交錯させた両足に縄をかけ、いわゆるあぐら縛りにしてしまった。

田代はニヤニヤ笑って、桂子の顔をうかがう。見てはならないものの前に無理やりひきすえられた桂子はハッとばかりに顔をそむける。すると、銀子や朱美が横手から、

「見なきや駄目だよ。本当のママじゃないとしても、あんたにとっちゃ、ママであることにはかわりはないじゃないか。しっかり眼を開いて見るんだよ！」

と、桂子の髪の毛をわしづかみにして、顔を正面に向けさせる。

彼等は静子夫人の羞恥が一層高まる事を計算して、桂子にもその哀れな浅ましい姿を目撃させようとするのである。

悪魔に等しい彼等が期待する、そんなみじめな姿を、露呈してなるものと、静子夫人は次第に激しくこみあがってくる下腹の苦痛を耐え切ろうとして、齒をキリキリ噛み鳴らす。顔中べっとり油汗がにじみ、静子夫人は天を念じるように一、二、三と数をかぞえ出すのであった。

「作者より」

転宅その他一身上の都合により、長らく御無沙汰しましたことをお詫びいたします。尚この機会に、ペンネームを団鬼六と変えまして、よろしく。

読者の告白

フェチシスト行状記

並原睦夫

私は二十八才の独身サラリーマン。フェチシストです。

一
昨年の春、社用で出張の帰りのこと、出張旅費を節約して、最後の晩は大阪の大きなホテルに泊りました。ボーイが私の大切な道具の入ったボストンバッグを下げて部屋に案内するとキーをのこして去ってゆきます。私はベッドの上にボストンの中味をとり出して、カーテンをしめると準備にかかりました。

大きな姿見の鏡の前で素裸になって、腰かけに腹ばいになりながら浣腸をします。旅先

ですのでイチジクの浣腸しかできませんが、三本もつめこみますと、午前中こらえていた尿意も手伝って、すぐに激しい下腹部の苦しみがはじまりました。

私は息をはずませながら、紙オシメを二組あてて、その上から特別あつらえの薄いピンクとビニールの二重になったパンティ型のオシメカバーを穿きます。ついで、その上からレースのフリルの沢山ついたナイロン・パンティ。そして黒のストッキング、オシメカバーの裾ゴムが太腿をびっちり締めている上に、赤いガーターを留めると、もうほっとし

て今にも洩らしてしまいそうな気分になります。私はまだまだだといいきかせながら、薄いピンクのシュミーズをつけます。

姿見に映った下半身は、すっかり女性に变身してしまいました。なごりおしく、その上に私のプレイ用の替ズボンをはいて、カットソーシャツにカーデガン。さあ出発！ 私はそっと廊下に出ました。赤いジュータンの上をゆっくりとエレベーターの方に向いながらもどこまで、この便意と尿意をこらえてゆけるか、気の遠くなりそうな、やるせない、そしてゾクゾクする感覚にふるえながら、エレベ

ーターにのりました。

きれいなエレベーターガールの横顔をながめながら（もし、このまま今、エレベーターが故障したら）と思うと、手にも背中にも汗が出ました。……私はガールの前でぶざまな姿をさらさなくてはならない……何時間も……：ケイベツした視線の前で。

明るいロビーに出ました。外人客も混えて人々がゆききしています。気のせいか、みんな私の腰あたりに注意しているように感じられます。中央のソファに腰をおろそうとしたとき、恥しい音がもれました。意志の力を越えて、少し洩れたようでした。そばで三人話し合っていた若い婦人が私をふりかえりました。その視線の中でグズグズと小さい音とともに、ひとりでに生温いものが洩れてくる感じは最高でした。

私は手がふるえてきました。あわてて立ちあがって、またエレベーターにもどりかける途中で、たまたまなくなつて、思わず立ち止ってしまいました。ついに一度にどっとセキを切ったように溢れ出ってしまったのです。私はオシメカバーを信じる以外にありません。エレベーターは三台とも上に上がっていて下りてきません。ボーイのそばで立っているズボ

ンの中に温いものが落ちてくるのがわかりました。これ以上はオシメも役立ちそうにありません。帰りの三階までのエレベーターの長かったこと。

小走りに部屋までかけて行って、カギを開くのに、手まどっている間にジュウタンに丸いシミをつけてぬらしました。浴室で鏡にうつしてみたらズボンは、ぐっしりと見るもムザンに濡れてしまっていました。その後、その美しい下着を汚してしまった罰に、私は浴室の中で、もう一人の私から、もっと恥しいオシオキを受けました。

二

今年の秋、やはり出張の帰りに、今度はH市という小さい静かな駅におりて、駅前の旅館に泊りました。奥まった薄暗い部屋に通されて、係りの女中が浴衣を持ってきました。

私はすぐに浴場に案内され、そこにいた三人の他の客の前で裸になりました。

愛用している女学生用の黒いズロースのまま、それもわざとユカタの上に括げておいて中に入りました。客の目がみんな、私の異様な下穿きの上にそそがれているのを横目で見ながら。しかし、誰一人自分の知った人はいない旅の恥というつもりで私は大胆でした。

何も悪いことをしているわけではなし、私は上って、わざとパチンパチンと音をさせてズロースを穿いて部屋に戻りました。ビールをつけて夕食をおわったあとで、女中にたのんで若い女のアンマを呼びました。私は女中のしいてくれたフトンの上で、さっきのズロースをぬぐと、ゴムズロースに穿きかえました。薄黄色のゴム布でできたパンティ型のオシメカバーです。風呂上りとビールで桃色になった大腿をびったりと締めつける裾口のゴムの感じ、裸の肌に直接ふれるゴムの感触。動くときゴボゴボと音をたてて、何ともいえない匂いがただよいます。

一時間近くもまたされて、陽気そうなアンマがやってきました。今日こそ、女性の前で私のぶざまな姿を露出させられるという喜びで一杯でした。型のとおり、首から腋へとマッサージをしている女の息を注意しました。すぐに女は異様な音に気がついたらしく思いましたが何もいいません。やがて腰をもまれる時がきたとき、私は一寸ユカタの裾を乱して、ゴムの裾口がのぞいてみえるようにしました。女は遠慮がちに

「御病気ですか？」ときいてきました。私はわざと悲しそうに、それでもわざわざ

ユカタの裾を開いて、目の前にゴムズロースで包まれた下半身をむき出してみせました。「何か、すごい言葉で冷かしたりケイベツされたみたい」しかし、私の口をついた言葉は「痔が悪くてね、出血するので」と、ボソボソと答えていました。

しかし、内心では、どう思っているかわか

女相撲熱戦譜

女素舞マニア

貴誌の御発展、心よりお慶び申し上げます。私も熱烈な女相撲マニアの一人です。

最近女相撲マニアの方が増えた事は大変喜ばしく思いますが、反面、女相撲の記事が少ないのは残念です。貴誌には多くの分野があるでしょうが、女相撲の潜在ファンも相当いると思います。もっと女相撲関係の記事を増し、是非女相撲特集の別冊を出して頂く様切望致します。

女相撲（又は女角力）の呼び方ですが、元々女相撲は普通の相撲と異ったニュアンスをもっていますし、女素舞は一寸違って面白いと思います。素舞は相撲の古事にも

りません。（オシメを当てた青年）……

「夏はムレますでしょう」と同情してくれま

記されており、女性のスポーツとして優雅な呼び名ではないでしょうか。しかし、あくまでも真剣味を欠いたものであってはなりません。全力を出し合っただけの取組でなければ興味を失います。

取組みも似かよった体格同士の相撲よりは、対照的な体格の女性の対戦が興味があると思います。決り手も押し寄りの平凡なものより手に汗握る熱戦、投げの打合いが良いと思います。私は長身の女性と肥満の女性の取組が好きで、決まり手は断然首投げに魅力があります。

元々首投げ、肩透し、素首落など首を攻

総ゴム張りのが多いというのに、どうして日本にはないのか」とか、「このごろはデパートで大人用のオシメカバーがよく売れるらしい」とか、勝手な話を楽しみました。

アンマが帰ったあと、私は宿願のプレイにかかりました。もう九時半すぎていて静かでした。私はフトンの上で足をひろげて、ていねいに浣腸します。イチジク五本。尿意もてきまして、腹がグルグル鳴りはじめ、しばらくのメリヤスのズロースをとり出して足をおしながら、もうそのまましかぶってしま

はうようにして電話口に出て、「急に腹痛の発作が起って苦しい」と、ほんとに、ときれとぎれに訴えました。フトンの中で必死にこらえている私の姿をみて、とんできた女中は、あわてました。「さっき、急に腹がせいて、ああ苦しい」おろおろした声で、二十五六の女中は、「お医者さん、お呼びしましょうか」とよびかけています。私は目を閉じたまま「ああ、下しそうだけど、めまいがする。……すまんけど便所まで、手をかして」女中の肩をかりて、ハアハア肩で息をしな

める手が好きで、この場合長身女性の方がこの手で敗れるのに魅力があります。長身女性が肩透しで四つん這になったり、首投で倒されたりしたら、たまらない魅力を覚える事でしょう。上背のある方が首投で敗れた例は大相撲にも大内山、朝潮、大鵬、豊山とかなり多い様です。又女力士の汗や体臭の匂う様な描写も必要です。それが女相撲をより実感的なものにし向上に役立つと思います。そこで私の描いている女相撲の夢を御披露したく存じます。

○ ○ ○

某月某日、直径十二尺の畳の土俵東より登場は肥満女性二十三才、小麦色で身長五尺一寸、体重十五貫、太い手脚、堂々たるアンコ型、強引な投技を得意としている。

西より長身女性二十五才、身長五尺、四寸、十三貫、色白ですらりとした八頭身、切れ長の眼の美貌の持主。両者向いあって四股を踏む。東の肥満女性、九文半位の指の短い巾広い足を上げてどっしり四股を踏めば、長身女性、十文半の指の長い細い足を上げて四股を踏む。

長身女性、色白だが脂足のせいか足の裏

が汗と脂でべとついて赤黒く汚れているのが印象的、入念な仕切り直し数回、愈々制限時間一杯、両女性は立ち上った。長身女性、組まれては不利と激しく突張って出るこの突張りに肥満女性、土俵際迄後退したが伸び上る様にして、長身女性の首を捲いた。長身女性嫌って首を下げて逃れ様としたが肥満女性、太い右腕で長身女性の首を深く抱え込んでしまった。

こうなると力に優る肥満女性が有利、長身女性は長身を折曲げる様にして肥満女性の腰に喰下ったが、肥満女性執拗に首投げを連発、右で強く首をしめ乍ら太い足を相手の長い足にからませ、強烈な首投げを打てば長身女性遂に力尽きて倒れて行った。

肥満女性も勢い余って右腋深く長身女性の首を捲いたまま折重なつてどっとのしかって組敷いた。相手の太い腕に首を捲かれて苦しそうな長身女性の表情。十文半の細長い足の裏が汗と脂で臭い匂を放っているようだ。肥満女性の九文半の巾広い足の裏と対照的。誇らしげに勝名乗りを受ける肥満女性、漸く起上り首うなだれて退場する長身女性。

が立ち上ります。もだえている間に、ユカタがめくれてしまつて、真白いズロースが見えて、女中は一寸変な顔をしましたが、そんなんではありません。真剣な表情で、私を抱えるようにして廊下へ。

「ああ、だめ、もう下してしまいそうだ」と私は何回も廊下にしやがみこみます。そのたびにグズグズ音がして、便が少しずつ洩れるのがわかります。「もうすぐですよ、しんぼうなさってー」やっと思所の入口まで来たとき、もうズロースは大部汚れていた。

つっかけを穿こうとしながら、私は全身の力をぬきました。ビリビリビリと大きな音がひびいて、女中はハッと私の顔をのぞきこんだ瞬間、私はついに、たえられなくなつて、そのまま一度にどっと排泄してしまつた。

「まあ、粗相なさつたの？」

ドロドロになつた便は、ズロースをとおして、太腿から足に流れ出し、タイルの床を一面に汚しました。私は興奮してガタガタふるえました。若い女性の前で赤ん坊のように粗相をしてしまつた男！ そばを通りかかった女中と二人がかりで、すっかり汚したユカタをぬがしてもらいながら、私は目を閉じ、立ったまま、心ゆくまで、プレイの成功を祝しフェチシストの醍醐味を味つたのだった。

手記

女相撲結成顛末記

岡 平 吉 夫 (東京)

昼食から戻って、ふと、若い課員の机上のスポーツ紙に眼がとまり、何げなくそれを手にして自分の席につく。紙面は大部分がプロ野球の記事で、私には全く関心のないものばかりで裏面下の求人欄に眼がいくと、ドキッとして我が眼を疑ったのである。

求人欄の片隅に

「健康と美容のための女力士、年令十六才以上、月収三万以上、五十名募集、面接日、五月二十五日(土)〇〇事務所」とあった。

責任者はRとあり、住所、電話番号も明記されている。

数日前、私は或るキャバレーで女相撲のシ

ョーをみたばかり、久方振りに女相撲に接する機会を得て、このショーのかかった五日間も通いつめたのである。

しかし、それは私の期待した激突や迫力があつたわけではなく、お座敷芸というよりも女相撲のまねをしたと云う程度のもので、眼先の変わった女給の客寄せに過ぎない。

それでも、私にとって何か得難たい企画として通いつめたわけである。それが兎にも角にも五十名もの多量の女力士を募集して本格的な女相撲を行うという企画がRという人によって実施されようというのであるから、体の血液が逆流しはじめたと云っても過言ではな

い。

直ぐその足で会社をぬけ出し、公衆電話に飛び込んだ。電話口に出たのは若い女の声である。私はためらいながらも女相撲の件にて御主人と話したい旨を告げると、電話口から大変鄭重な男の声が流れてきた。

実はこの種の興業を企だてる人は相当山師的存在として警戒をしながら

「私は大変女相撲のファンであること、後援会の結成がなされるのなら是非その一員に加えてほしい」旨を伝えたのである。が、相手は益々感激した模様で

「是非蔭ながらも協力していただきたい」

とのことであつた。

私はその言葉に勇気付けられ、面会を求めると、心よく道順を教え、

「話だけでもきいてくれ」とのこと、

最初は日曜日に出向く積りであつたが、一刻も待ち切れず、その足でR氏宅に赴く旨を告げたのである。

会社に戻り部下には緊急の用件で出張すると申伝えて、車をとばした。R宅は小さな普通の運動具専門店であり、何かそれらしいポスターでも掲げてあるのかと見たが、それは見当らない。

刺を通ずのはやはり躊躇したところR氏は笑顔で女子相撲準備委員長の肩書の名刺をさし出す。私は手みやげを差し出し名刺は不用意に忘れたことと、Hですと偽名を使った。

彼は非常に親近感を持った言葉で

「わたくしは女子の体育向上には相撲が最適のものと考えております。長年研究の結果、是非これを実現したいと思うのです。ただ世間の眼は大変誤解されやすいので本当にスポーツを愛する娘さん達を集めて、立派にこの事業を成功させたいのです。男女の関係は特に注意し、真面目に練習をさせ、立派な妻、母となる体を養成したいと思ひます」

五十を越したであろうか、R氏は大変楽しそうに語りはじめたが、女相撲の大義名分は長々と続く。

私は直感的に、この人は大変純情であり、決して想像していた興業師的考え方の人物ではないことを察知した。それで止まることをしらない長談義の言葉を切って、

「Rさん、大変結構な趣旨です。しかし五十名もの人々を集め人件費だけでも大変でございましたよう」

「はい、経費の点は相当の金持ち連中から出資したいと云う申し出があります。でも私は自分だけの力で、これをやってみたいと思っています。そして、近い将来は海外にも派遣して日本古来の相撲を披露したいと思っています。それは広く日本のためにもなると思います」

「貴方の趣旨はよく判りました。失礼ですが貴方一人の力で、それだけの経費を負担されるのですか」

「はい、まあ最初は出来るだけ節約致しまして、例えば最初稽古の一カ月は小遣い程度の給料を出して我慢してもらつて積ります」

と云う。話の合間合間に経費の点、稽古場の点が大分杜撰なものであることを察知し、

この事業の成功率は極めて薄いことを心配した。最後に

「Rさん、あの新聞広告で五十名もの人達が応募されると思われませんか、いや、募集広告はあるスポーツ紙だけなのですか」

「はい、先き程も申し上げました通り、最初出来るだけ節約しませんと……でありますから広告はあれ一回だけです」

私は瞬間、駄目だと思った。

しかし、R氏は自分の企画が大変すばらしいものであり、万善を期したものであるという確信は相当に強い模様のようなのである。

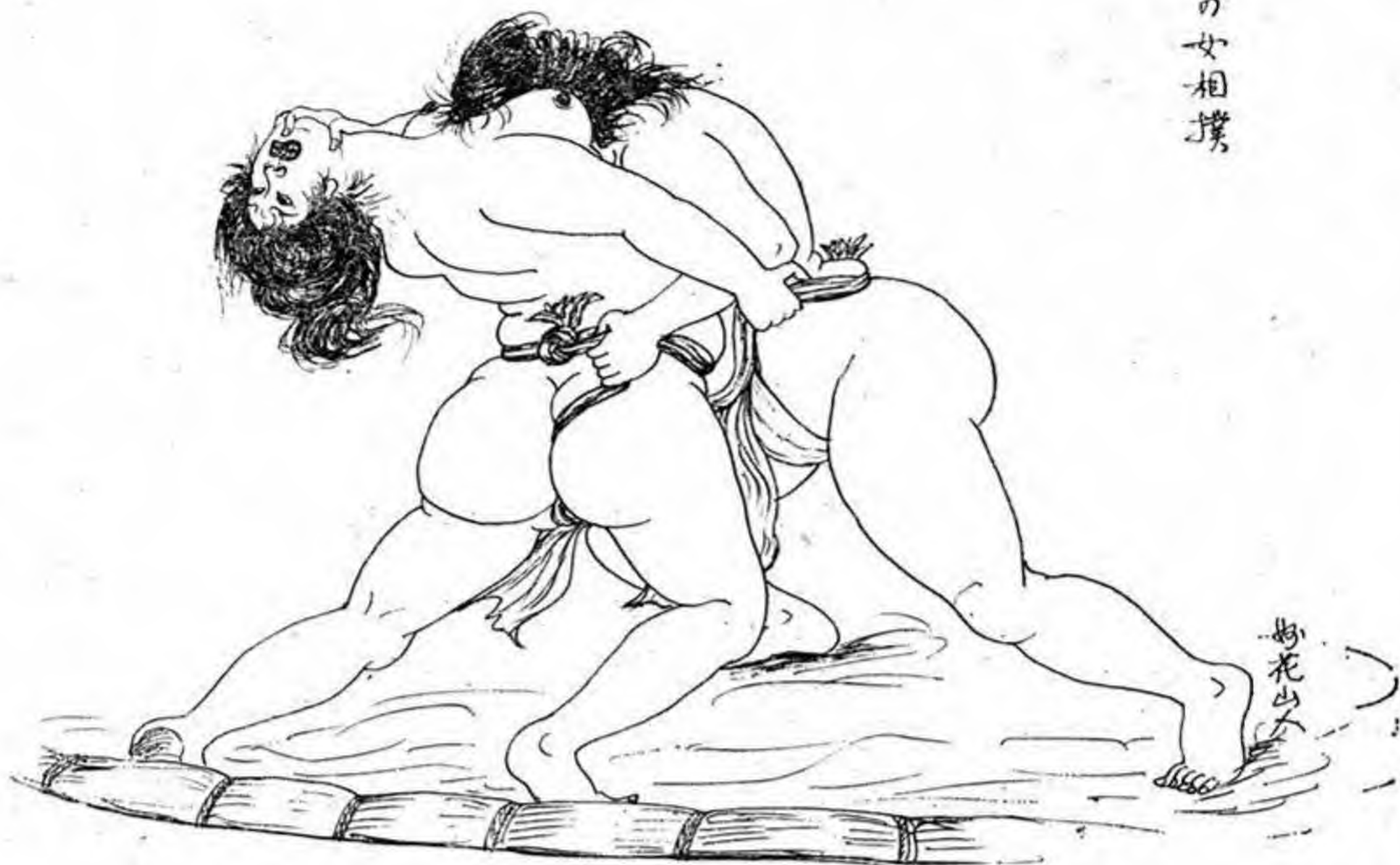
私は成功されることを祈って別れたが、どう常識で判断しても、それが軌道に乗るとは思えなかった。それから五月二十五日、面接日まで薬でもつかむ気持ちで心からこの事業の成功を祈ったのである。

当日は会社においても落着かず、何度となく××事務所に電話しようかとしたが思い止まった。と云うのは当日はR氏だけではなく、元関取〇〇関外二、三名の人達が立会うということであつたからである。

早目に帰宅し、自宅からR氏宅に電話を入れると、

「ああ、Hさんですか、駄目でした。失敗」

六尺禪の女相撲



す。一人しか来ないんです。

「それで、今後どうするのですか」

「一人じゃあ仕方がありません。諦めようと思います」

長年の研究としては意外にあっさりしている。私の全身から力がぬけていく。予期したとはいうものの、一縷の望みを、この日にかけたのだ。これで夢が破れたとは余りにもひどい。R氏より私の方が必死になって、再起の構想を促した。

「はあ、ではHさんのご意見を一度伺いたいと思います」

ここまでこぎつけるのに精一杯であった。翌日、私は会社を休んでR氏宅へ赴き、再三

にわたって失敗の原因を分析して説明をこころみ、実現可能な提案をしたのである。

それは、昨夜まんじりともしないまま考え付いた私の試案でもあった。

第一に プロとして発足するには、余りにも経費の点が不安定である。仮りに応募者があったとしても一定の職業を持った人々が三万円という収入に魅せられ飛込み、それが失敗に終わったからといって一カ月や二カ月で失業の浮き目をみせることは大きな問題であること、従って最初は日曜日等において一定の稽古をつませ相当の日当を支払うこと。

第二は 裸に禪というのは相撲とか柔道を好む女性でも、容易に踏み切れるものではない。シャツとパンツ従来の興行的女力士と同様のものから出発すべきこと。

第三は 四、五回程度稽古の後、日曜日等日帰りできる近県で興業を開催すれば、例えば失敗に終わってもR氏自身の負担も軽くすみ応募者にも迷惑がかからないではないか。

第四は 募集にあたって元女子プロ等の特定の人々に働きかけ、アルバイト程度と考えて参加を求めればよいのではないか。以上のようなことを力説したのである。が

R氏は余り気乗りがない様子であり、

「実はこの仕事の出発は友人Bから出たものです。それで今日まで約二十万ほど準備費用としてBに渡しました。家族は勿論反対だったのです。ただ私は子どもの頃から大変女相撲にひかれ、是非これを自分の手で、しかもシャツやパンツのない禪姿で実現したかったのであります。貴方のお話で大変結構であります。道楽をしたと思ひ二十万は諦めます」

私はこれ以上、説得するのは無駄であることを悟り、

「では、これにて失礼します」

と別れを告げると

「一寸お待ち下さい。貴方には大変ご心配をかけました。実は昨日の応募者の娘さんですが、十七貫位あります、千葉の娘です。身長も五尺三寸はありましょう、相撲が大好きだということです」

「しかし一人ではね」

「はい、それがです。収入は例えいくらでもよいから是非相撲をとらせてくれというんです」

「そうですか」

「それで今、思い付いたのですが、小田原に

私の知っている芸者がおります。芸者と申しまして、もう三十を越し、その上容貌もよくありません。それで私がこの仕事をしようと思つて、それに話したところ、私を行司か呼出しに雇ってくれというのです」

「ほう、それは初耳です」

「ええ、そうです。それでこれとあの娘さんと裸で相撲をとらせてみたいと思うのです」

「ええ？」

「いや、貴方が今アルバイトというお話がありましたので一度二人を取組ませてみたいと思ひました。折角ここまでやったのですからせめて相撲をとらせてみたいと思うのです」

「それは面白い」

立ちかけた膝をあらためて坐りなおした。

「貴方にも大変お世話になりました。ご一緒に御覧になりませんか」

「是非お願いします」

「費用はどの位出しましょうか？」

と云う。私は笑つて、

「それでは一人分は私が負担しましょう」

「いや、そんな意味ではないのですが、私も家族の手前、余り金は出せません」

「判っています。もう二十万も道楽をしたのですから兎に角、ここに三千円ほどあります

からこれを渡して下さい」

「Hさん、実は貴方の御住所を伺っていないのですが……」

「ええ、まあ、この次の日曜日、電話でお伺いします。出来ればそれまでに双方に連絡をつけておいて下さい」

自分の住所を知らせない無礼を心では詫びながらも、本来の私の立場を明かすことが出来なかった。

私は外へ出ると、どっと疲れが出た。何とか説得して女相撲会の発足を今一度促すための努力は水泡に期したが、それでも裸の女相撲を観戦することが出来ることは、収獲であると云わざるを得ない。今回はこの程度で満足しなければならぬと自分で自分に云いきかせるようにして足を急がせた。

次の日曜は、待ちかねたように朝の九時にはR宅へ電話をした。

「はい、双方とも連絡を付けて置きました。

次の日曜日、貴方の都合がよろしいと思つたのですが、小田原の芸者が、やはり土、日曜はかき入れ時とのこと、普通の日にしてくれと云うことです。誠に申訳ないのですが、金曜日です。その日に単独で決めてしまいましたが如何でしょう」

とのことであつた。事ここに到つては会社を体むのも止むを得ない。承諾の旨を伝えると

「それから困つたことがあります。まわしがないのですが、どう致しましょう」

と云う。R氏は次第に私を主人公にして、連絡係を務めるような云い方に変つて行く。好人物である。

「でもRさん、あなたは運動具屋さんなんだから、まわしの一枚や二枚は都合が付くでしょう」

「はい、相撲褌は一般の店では取り扱ひませんので困つてしまいました」

「今更、そんなことを云つたって」

「それでは六尺のさらしでも買つて参りましたようか」

「さらし？」

私はためらつた。折角の機会に六尺ふんどしで相撲をとらせることはあじけない。女相撲の楽しさは稽古まわしか、黒縹子の相撲まわしをきりつとしめあげて、両者が力一ぱいもみ合い、へし合うところに魅力があるのであり、さらしの六尺ふんどしでは迫力感も緊迫感も出るものではない。

「わかりました。私は何んとか二本用意しま

しょう。あなたは金曜日、前以つて千葉の娘さんを連れて用意しておつて下さい。私は一時頃小田原に着くようにするから、あなた自身駅まで出迎えに来るように」

と命令的な云い方になつた。電話を切つて褌を二本用意すると云つたものの、その当もない。母校の相撲部を訪れ、二本借用に及ぼうとも考えたが、男物では太過ぎるように思えるし、長さも問題である。

兎に角、褌の選定は相当慎重でなければ、幻滅を味うと考へながら思案に耽つたものである。が、やうと思ひ付いたのが着物の婦人用帯である。早速、帯しん二本、それに黒の化繊生地を求めた、四千元で少し釣り銭があつたように思う。帯しんは二つに折つてみたがやや太目であるので、三十センチ幅に切り二つに折つたが、丁度手頃のように思へた。

これを黒の化繊生地にぬいくるめれば立派な相撲褌が出来る。

しかしこの作業を誰に頼むか、まさか家内に頼むわけにも行かず、考へ抜いたあげく、会社の女事務員に何か口実を設けてミシンをかけてもらうことに腹を決めたのである。

この試みは案外面白く、出来上つた褌は厚味といい、感覚といい理想に近いものであつ

た。欲をいへば本物を女幅として使用させたかつたが、一度だけの利用では、これ以上の支出をする気にもなれない。

金曜日、私はボストン・バッグの中に二本の褌を入れて家を出た。が、いざ朝のひざしを受けて車中の人となると、その目的が異常にも思へたが、次第に劣等感、嫌悪感を抱きはじめた。女の相撲をみるために、あらゆる努力を続ける自分が不快でもあり、こんな目的を知つたならば世間の人々は、どんな罵倒を投げかけるであらうか。

眼を閉じ、意識的にこのような不安を除き女相撲の激突の情景を想像することに努めたのである。

駅にはR氏が約束にたがわず、出迎えに来てくれた。車で約十五分、とある古びた旅館に案内され、そこで始めて二人の女性に紹介された。

千葉の娘は松子といい、たしかに相撲でもとつて生活させたらよからうと思われる巨体ではあるが、顔立ちは、まだまだ子ども子どもしている。別に恥かしさとか、ためらいとか云う表情は見当らない。芸者と称する女は、染香といい身長は五尺二寸位はあろう。肉付きは余りよくない。容貌も人並以下で、これ

で芸者が務まるのか、その身のこなしからしても、それらしい感じは見受けられなかったが、これも別に当惑した面持はなかった。

私はR氏が無理矢理に納得させたのではないかと一抹の不安を抱いていたが、その様子もないので救われたような気持ちになる。

お茶をすすり、暫く雑談後、R氏の合図で相撲の準備にとりかかった。

さし出された褌を手にした二人の女性はずがに、ここでためらった様子をみせ、唐紙を隔てた隣部屋へ去って行ったが、直ぐ松子が顔を出し

「あの、締め方がわからないわ」

と小声でつぶやいた。染香も不満の顔付で「こんなことって、初めてだもの、わからないわ」

と云う。R氏は笑って

「わたしは手伝ってやる。染香から締めるから松子さんはそれをみてごらん、染香、着物を脱ぎなさい」

意外にR氏は落着き、事務的に命ずると、腰をあげた。私は興奮する気持ちを抑えようとしたが、ドキン、ドキンと心臓は早鐘のように打ち、膝がガクガクふるえる。

昼間のこととて外に客とてないらしい。静

かな空気の中で、着物が脱ぎ捨てられるかすかな衣ずれの音、まわしが締められる光景が手に取るように伝わってくる。突然

「フウフウフ……」

「こんな恰好になるの、いやだなあ」

「……」

「締め付けちゃあ痛いわ、女の肌って、弱いよ」

「さあさあ、この位しないとズルける。女の身体付き、褌を締めるのはむづかしいように出来ている」

こんな会話がコソコソと流れて来た。

やや、あつて上気した面持のR氏が戻る

「さあ二人とも出てきなさい」

私はハッとした。現れた二人の姿をみた瞬間、生つばを飲んだ。全裸に褌一本。

女相撲ファンならば誰しも求めていた肢体

である。ややあつてから冷静さをとり戻し二人をジッと観察すれば、松子の乳房は身体の割りに小さく、ただ肉付きがよいというだけであつて、それは運動によって鍛えられた美しさは全く見出されない。染香に至っては、ただ身長が人並以上というだけのもので、何んの取り柄もない。

「さあ、始めましょう」

R氏がせきたてた。松子は仕切りに入る。

染香はそれに従って仕切りに入るが、股は開かず、丁度徒競争のスタートの恰好である。

「えい」

松子が立てば染香も立ち上り四ツとなるが両股が開きがっぶり四ツとはいえない。

キャバレーの女相撲でもそうであつたが、素人の女の対戦は出来るだけ相手の身体を付けないとする本能的な意識があるのであろうか。

股も開くことを嫌い、尻を引いて、別に相手のミツを取ろうというわけでもなく、ただ二人の女体が相対するというようなものである。こんな恰好を二、三度繰り返しているうちにR氏もたまり兼ねてか

「松子さん、あんた、本当にやる気があつたのか」

語気が荒い。松子もムツとした顔付きで「わたし、こんなことをしてみたいと思ったの、でも相手の人が……」

「うん、染香、お前が駄目なんだ。真剣に、もっと真剣になきなさい」

「だってさ、どうすればよいのか始めてだもの判らないのよ、気持の問題じゃあないわ」いらだったR氏は染香を相手に実際に組ん

でみて、あれこれ指導に入る。松子はそれを見て、R氏の云われた通り再び染香と組む。「それ、足を掛けるんだ、それ上手を引けばいい」

と熱心に指導に及ぶ。

「Hさん、あなたも一つ、教えたらどうですか？」

私は笑って答えない。それだけの勇氣はない。勿論、取組んでみたい気持は充分あったが、二十分程、R氏のコーチのあった後、二人の仕切りから始められた。松子はR氏の教え通り立ち上がり両ミツを取り、それを引きつけ寄ろうとすれば、そのまま染香は部屋の隅に後退する。

こんなことを一時間も続けている間に、私自身馬鹿馬鹿しくなって

「もう、この辺でおしまい」

と声をかけた。R氏も期待に反したらしく「はあ、二人とも、この辺でやめよう、着物に着換えてきなさい」

二人は別に汗をかいた様子もなく、そのまま隣の部屋へ引き退った。救われた気持ちになったのは私自身であろう。

煙草に火を付け、一ぷくすると、ドッと疲労感が出る。快い疲労感ではなく、嫌悪感で

ある。何を思ってたかR氏は立ち上って隣室に入ると、入れ代わりに松子が出てきた。二人だけになって松子を見ると、何んの屈託もない。やや乱れた頭髮に手をあてて、窓辺を凝視する。

「あああ、疲れた」

と染香、R氏も後から続いた。小声でR氏が

「今晚、泊りますか」

「直ぐ帰ります」

「染香がつき合ってもよいと云うのですが」「冗談じゃあない。そんな目的は持っていないよ」私はムツとした。

旅館の費用も私持ちということ、これもすませ、一人そこを飛び出すと、いまいまいと云うか、不快の念にかられて、あれこれ思い浮べながら駅に向った。美貌で、均齊のとれた娘達が渾一本、全裸で、土俵上の激突もみ合い、へし合つて、押し付けられた乳房、ふんばった太股からは隠され筋肉が躍動する。女相撲ファンにとって、こんな光景が眺められればこれに過ぎる楽しみはない。

しかし現実の世の中では、とてもそんなことは認めないように思われる。考えれば女相撲行脚二十年、随分長いこと時間と金をかけ

て、これを求めた私ですら、その夢は果されなかった。

シャツとパンツの上に褌、それも若くなくてもいい、美貌でなくてもいい、兎に角、女体相打つ闘志がみなぎればそれでよいのだ、何んとか相手を倒そうとする必死の形相、その迫力が全身から発散されれば、美しさもあり、胸打つ感激もあるのだ。女相撲が、年に二、三度巡業に來た戦前の頃がなつかしく、その再現を願いながら小田原の駅に着いた。

伊万里 女相撲

相撲の発祥は豊臣秀吉の朝鮮征伐の折、旅情を慰め雄心の勃勃たるを偲んで始めたといわれ、女子の体格の良い者をして化粧まわしをつけさせ、土俵上に錦上花を添えたのが、その発祥とされ、呼出、行司等にいたるまですべて女性で行われ、堂々とした風格は、地方の草相撲等は遠く及ばざるところであります。〔伊万里市経済課〕

〔編集部注〕以上は、山口県豊浦郡の読者、伊東康雄さんから送られた「波多津女相撲士俵入り」写真と、土俵入、勝名乗、横綱同志の対戦、横綱の弓取式等の写真入りパンフレットから抜粋いたしました。

マゾヒズムへの孤独な願望

福田 久 文

ゆかたはまた取り去られた。女将は口を結んですうすうと息を弾ませながら、正座したわたしの脚と膝のあいだに幅の広い革バンドを挟ませると、首筋を掴んで押えつけ、二の腕と脇腹のあいだへ革バンドの両端を通してから、荷作りか、縄引きでもするようにバンドを引き絞った。止め金を止めると、前に置いた脇息に凭れて盃を口にする彼女の方へ足を向けさせ、仰向けに転がした。

わたしの眼のまえで長煙管の火口をガスライターの長い焰が嘗めている。時代物の黒い大きな長煙管。その吸い口は鋭く尖って銀の

地金が光り、雁首には彫の深い象眼が施されている。

女将は主人にたばこを勧める召使のように彼女に寄り添って、下司な微笑を浮かべながら煙管を差し出した。

「どれ、女将に奪られんように烙印押しとこか」

彼女は火口を下にして煙管を握った。女将は一言も言わず、脇息の上でわたしの足首の一つを両手で捕え、彼女が片手で今一つの足首を掴み、その足の裏に紫色の火口を近づけるのを、じっと見詰めている。近づく熱気に

わたしは堅く眼を閉じた。と、突然彼女の高笑いが増えて、熱気が去った。

「なんや、芝居だったか？」

わたしは硬ばらせていた手足を緩めた。

「さ、外したるさかい」女将はすぐ機嫌を直して猿轡を外しにかかる「ワン、ワン言うて尻を動かすんやで」

「何を言うか！ 黙れ！」口は渇れ、喉は渴ききっていたにもかかわらず、込み上げる怒りがまず女将への声高い一喝となった。「I さん（彼女の姓）、一体、あんたは何をするだ。恥を知りなさい」

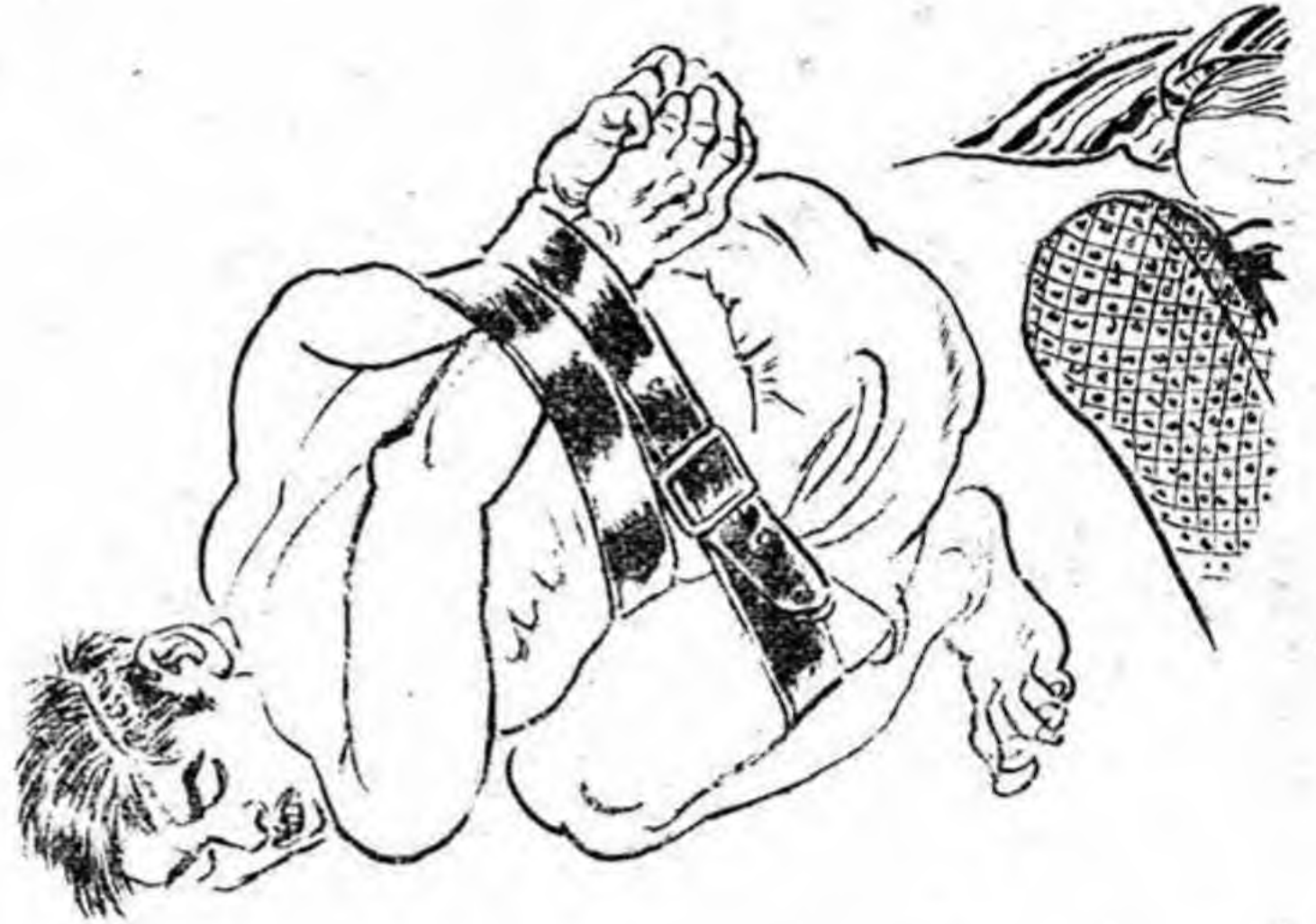
それから先は言葉にならなかった。女将が怒った表情を露骨に表わして立ち上り、荒っぽくわたしを引き摺っていくのを見ながら、「大きな声出しなさんな。女中でも来たら、恥かくのんあんたよ」と、彼女が言う。

女将の方は敷居の上にわたしを左手で抱き起し、煙管を受け取ってから口を開いた。尾底骨が溝に当って痛い。

「顔の割に口悪おまん」吸口がわたしの臀部を突く「ワン、ワン言うて、この瘡せたお

尻振ってもらわな、黙れしまへんねん」

再三度逆手に持って突き立てた煙管を左手に持ち直して、首を掴み、まだ冷め切っていない火口を脇の下へ差し込んだ。二の腕を捻じる女の、鼻孔は大きく開き、口は引き攣っ



て金歯が覗く。それは彼女よりも厭わしいサディストの顔だった。そのうしろにまたカメラを構える彼女がいた。

「ワンが嫌ならキャーンと言え！」憎々しげに節をつけ、一打ち、また一打ち、首を掴ん

だ手に力を入れて向う脛を打ち据えた。

「ほんばん顔して、しぶといな、この子は」頭を一つ煙管で叩きつけると同時に畳の上へ突き倒して彼女に声をかけた、

「意地でも言わしまっさ」

煙草に火をつけて火口に立て、横倒しになっているわたしの背中の中の手の指の間にわたしの先の方が嵌め込まれた。女将の片手がらおを挟んでいる二本の指を万力のように締めつけ、吸い口が今一つの手で女将の近づけた口へ入れられる。らおがゆっくり回転して火が皮膚に触れた。

「ちよっと待ち、また、大きな声出すがな。金で買った男

やないから傷つけん」といって彼女の表情に皮肉な微笑が浮んだ

「ねえ、福田事務官、お写真撮らせて頂きましたが、お父さまの会社へ伺いまししょうか？」わたしの慈父、著名な商事会社の世評高い

常務。その愛情を一身に受けながら、わたしは何ということをしてしまったのか。わたしの悲痛な眼の色が、にやにや笑っていた彼女にも通じたのであろう。

「お父さんに仕事のことと無理いうつもりはないんよ。あんたさえ素直にしてくれたらいいの。可愛いペットが吠えたりしたら気分壊すがな」

「わん」

小さな擬声がわたしの口をついて出た。彼女の言うままに行儀よく控えた体を後へやっただ片手で支えて、煙管を吸っていた女が、すぐ口を入れた。

「何や、聞えしまへんなあ、社長はん。煙管で尻尾でも付けな、こらあきまへんで」

二人の女は声を立てて笑った。酔った彼女の声がひととき高く残る。

ゆかたの袂に入れた片手で脇息に寄り掛かるルージュの口のサディスト。それは女体と化してゆかたを纏った悪そのものではなかったか。悪とは人の犠牲の上に快楽に浸ることである。そして快楽には二つの種類がある。一つは積極的に五官に快感を与えることで、排斥すべきことではない。彼女が有り余る自分の金で料亭の盃を干して快よく酔っているか

ぎり、彼女を蔑むつもりはない。しかし快楽には悪に属する今一つの種類がある。それは人の苦しむのを眼の前に眺めることだ。殴り合いの喧嘩や、火事に見入る野次馬の眼を思え。この快楽もまた日常茶飯のことである。これを敢えて求めて、みずからの手で人を苦しめようとするとき、悪はここに極まる。法律の制裁さえなければ、何の恨みもないものを、ただ自己の快楽のために肉体を毀損し、果ては鬭り殺しにもしかねない「悪」の恐ろさが、彼女の声と表情に漂い、わたしは全く制圧された。サジズムの対象としても、わたしは彼女にとって新鮮な果実だったに違いない。

やはり秋だった。彼女の古い屋敷の端の浴室へ連れて行かれるとき、庭一面の月明りと虫の音のなかに鯉の跳る音がしていたから。

枷として使える浴槽の蓋の上に首と両手を出して、底板のない湯のなかで宙に浮きながら、わたしはどんな代償を払ってもこの女と別れようと決意した。その眼前で、手紙の下書を拾って激怒した彼女が、わたしをK子に責めさせようとして、ひどい鞭打と中ヒールの蹂躪を加えていたのだ。K子は手錠と足錠

のついた不自由な体を動かして、水着姿の彼女の前に跪き、二十CCの注射器を手挟んだまま、手を合せて涙を流していたのに、彼女は冷酷に蹴り倒し、爪の下へ刺すために針を焼いた注射器がタイルの上に飛び散るのも意に介しなかった。始めから予定の行動だったのであろう。

男女の愛は愛しても必ずしも愛されるものではない。その寂しさの上に、嗜虐の限界を超えた肉体の痛みを受けて身を振り、浴室一杯に悲鳴を上げた器量のよい娘は、一体何をしたというのか。……Iさんの養女になるよりも、貧しくとも清らかな生活をした方がいいながら、どうしようもないマゾヒズムへの執着と豪華な生活に惹かれて、つい踏み切りがつかないのです。この苦しい心のうちを理解して頂ける福田さんのご友情に縋らせて頂いて、わたしも神を恐れ、悪魔を蔑む気持ちだけは失いたくないと存じます。きのう話して頂いたイエスと悪魔のお話は本当に恐しく悲しうございました——このK子の手紙がどんな懲罰に価するのでしょうか。

彼女はK子とわたしを結婚させようとする不穏な意図をひつこく持ち続けている。恐らくそれは天性のマゾヒストであるK子も、と

もに望んでいることであろう。あす多分彼女からわたしのことを聴くK子の瞳を想像すると、愛情に似たいたわりを覚えるが、K子に異性への愛情をもったことはない。しかし彼女に対しては、本格的なマゾヒストにはとてもなりきれないのに、彼女の満足のためには苦痛も忍んでやろうとする気持が確かにあったし、時として三人で旅行をし、人前で妻としてふるまうK子を見ると、魔がさしたように、彼女の不穏な計画のことを考えてみたこともあったのだが、嫉妬に狂うとたやすく育ちも教養もかなぐり捨てて、下賤な女になり切れるのをまのあたりに見ると、吐き気のような不快を覚えた。逢瀬が重なるにつれてあの情熱に捉えられているとき以外は敬意と女らしさを示すようになったことが、わたしを引き留めていたのだが、それが利口な手くだのように思われて来た。また、それよりもわたしに彼女への訣別を強いたのは、やはり精神の世界の「貴族」でありたいという汚しきれぬ希願だった。ただその希願だけを克明に綴って彼女の良識に縋ろうとしたが、ヴィットリア・コロナ（この詩を能くし、神を信じることできた未亡人が、ミケランジェロに出逢ったのは四十六才のときだった）な

らぬ彼女には理解を望むすべもなく、わたしの悪への親和力は「貴族」への意志を崩して余りがあった。すこし噎れていても彼女の誘いの声は塞ぐ耳に徹り、皮膚に小皺は見られなくても、その姿態と容貌はわたしの背ける眼を促え、身を竦ませる。神もなく、天分もなく敬愛する少女もない孤独な者に、この女から離れるすべはなかった。絶交を願う手紙はただ呼びつけられる日を早めただけだ。その日彼女の居間で縄目を受けて床柱に繋がれているK子の前で、手を背中へ廻しているわたしがいた。

重なった二つの親指の周りだけを釣糸が十重二十重に巻き付いたが、それは彼女の常の好みである。K子がかたわらに縛められているのも初めてのことではない。しかし、純粋な虐待を加えるためには虐待を享受できない状態に前以ってしておくのだという意味のことを彼女が言い放ったとき、始めてわたしはたじろいだ。予想される肉体の責苦のひどさよりも、この本末転倒を考えることのできる女の心に、落ちゆくものの眼前に迫る底知れぬどす黒い淵を見た。

じゅうぶんに疲れさせたわたしに鎖のついた犬の首輪を付けて引き摺って行き、縁側の

敷居の上に正座させると、鎖を鴨居に懸けて腰を下した。手の束縛が普通の前手縛りに直され、敷居と脚とのあいだに革バンドが敷かれて、それが膝のうえに置いた手首も一緒に絞めつけた。その手の上に一枚のメモが置かれる。新しく書き直されている折檻の口実、彼女の手になる奴隷の誓いである。

長じゆばんをつけた華やかな地獄の鬼は警棒と木槌を取ってマゾの亡者に責めかかる。始めは生のままの呻きの声を愉しもう、猿轡のいるほど嘖むのはあとの愉しみである——彼女に心を汚されてからすでに一年、その醜い手のうちは一つ一つ正確に読み取れた。たとえ読み上げても実感が籠っていないというに決っているし、第一そんなものを口にするつもりは毛頭なかった。彼女はよく知っていることだ。きょうもし「読めないから気の済むようにせよ」と言わせるだけで満足せず、敢えて父を持ち出すなら、わたしは奸計と強迫による虐待として告訴をもって威嚇するつもりだった。

「そう。やっぱりこれもおかしくって読まれへんわねえ。使わん口は詰めさせてもらいましょ」

小説じみたその言葉が厭わしかった。こう

いうことになるのを知りながら出て来た自分自身もそれ以上に厭わしかった。犠牲者の苦痛を柔げるムードの全くない虐待を詳しく書くことはセックスを露に示すよりも羞恥と嫌悪を伴う。ただ、これは「貴族」の誇りを捨てて汚辱の淵に身を投げた者の当然受ける刑罰だという諦感だけが唯一の支えだったと告白することはできる。

首が吊れるのを避ける力さえなくなったとき、彼女はやっと文字通り一服してくれた。責めあぐんだ疲れを癒すように、しばらく匂いの強い煙がうす青く立ちのぼる。それも束の間、その火を右の乳首に押しつけて、その

まま床の間のK子を振り返った。革鞭がすばやく手に取られて、K子の方へ延び、肉を打つ響きを上げた。

「眼開けんか！」また響く鞭の音、「援助まで受けて、よう一人前に秋風吹かした」

彼女も、K子も、またわたしも、ともに地獄の業火に滅ぶ哀れな存在に思われてき、涙を誘う透明な気分が皮膚の焦げる胸を領したとき、気が遠くなっていた。

気を取り戻したあともなお突き立てられるビタカルフルの針は、何回でもこの膚身を通れ。ただ、妻にだけは何も知れないことを。

なんという因果か、彼女からわたしを引き離

してくれた他ならぬその人のために、わたしは彼女の手に一層強く握られてしまったとは。

あるとき押し付けられた火がすこし下にならず、その創痕は今も残っている。彼女が嫉妬を鎮めて理性を取り戻すのは少くともきょうではない。いま眼前にわたしの結婚を知った眼の陰しさに触れただけで、二年まえの被虐の果てのあの寂しさに浸る思いだ。なにか天上の影がもの悲しげに地上に落ちてくるような静謐がある。

以上二節は昭和三十七年七月号に掲載された創作「住み慣れた地獄を立ち去るために」の九三頁上段後から六行目の前と九八頁中段後から三行目の前に挿入して頂きたい。

創作とはわたしにとってマゾヒズムへの孤独な願望を充すべき虚構であった。一人のモデルも、使用すべき一場の現実もなかったわたしにとって、たまたま古本屋の片隅で見出した自作の挿絵の女性は、二、三日勉強を手につかなくさせたほど強い印象を与えた。この補遺は七月号の一枚の挿絵が書かせたものであって、わたしの創作を直ちに掲載しておられた編集者と挿絵の画家に捧げたい。

☆賞金☆

優作	一篇に付 一万円	若干篇
秀作	一篇に付 五千円	若干篇
佳作	一篇に付 二千円	若干篇

懸賞（告白と手記と体験） 原稿募集

☆規定☆

一、真実味溢れる告白、どうしても発表してみたいという自らの手記、或は自分で体験された貴重な事実を盛り上げた体験記を広く読者の皆さまの中から求めます。文章の巧みさよりも、実際に体験されたもので

あるという真実の裏付のあるものが大切だと思ひます。従って必ず自作のものであることは勿論、未発表のものに限りまゝ。二、枚数には制限はありません。用紙も必ずしも原稿用紙でなくとも結構です。締切日も別にやかましくきめませんから、いつでも、どしどしお寄せ下さい。入選作は最近号に掲載の上、賞金をお送りします。応募原稿は読者原稿と区別するため第一頁に「懸賞告白」とお書き下さい。

〔告 白〕

オムツへの郷愁きょうしゅう

多 摩 宏

私はある日駅の売店で電車を待つつれづれの間にふと手にした奇クの頁をばらばらとめくる中に、S・A氏の『襦褌への幻想』を目にして、はっと烈しく胸をつかれ附近に多勢の人がいるのも忘れ、夢中になり活字を追うのでした。電車が来たのを知ると慌ててそれを求め飛び乗ったのでした。

永い間私はおしめへ対して異常な位の執着を抱いて居りましたが、それがあまりにも他に例を見ない不思議な性癖でありますので、人知れぬ悩みに悶々とした日を送って来ましたが、はからずも手にした「奇ク」で「襦褌への幻想」を読み同じようにおしめへ不思議

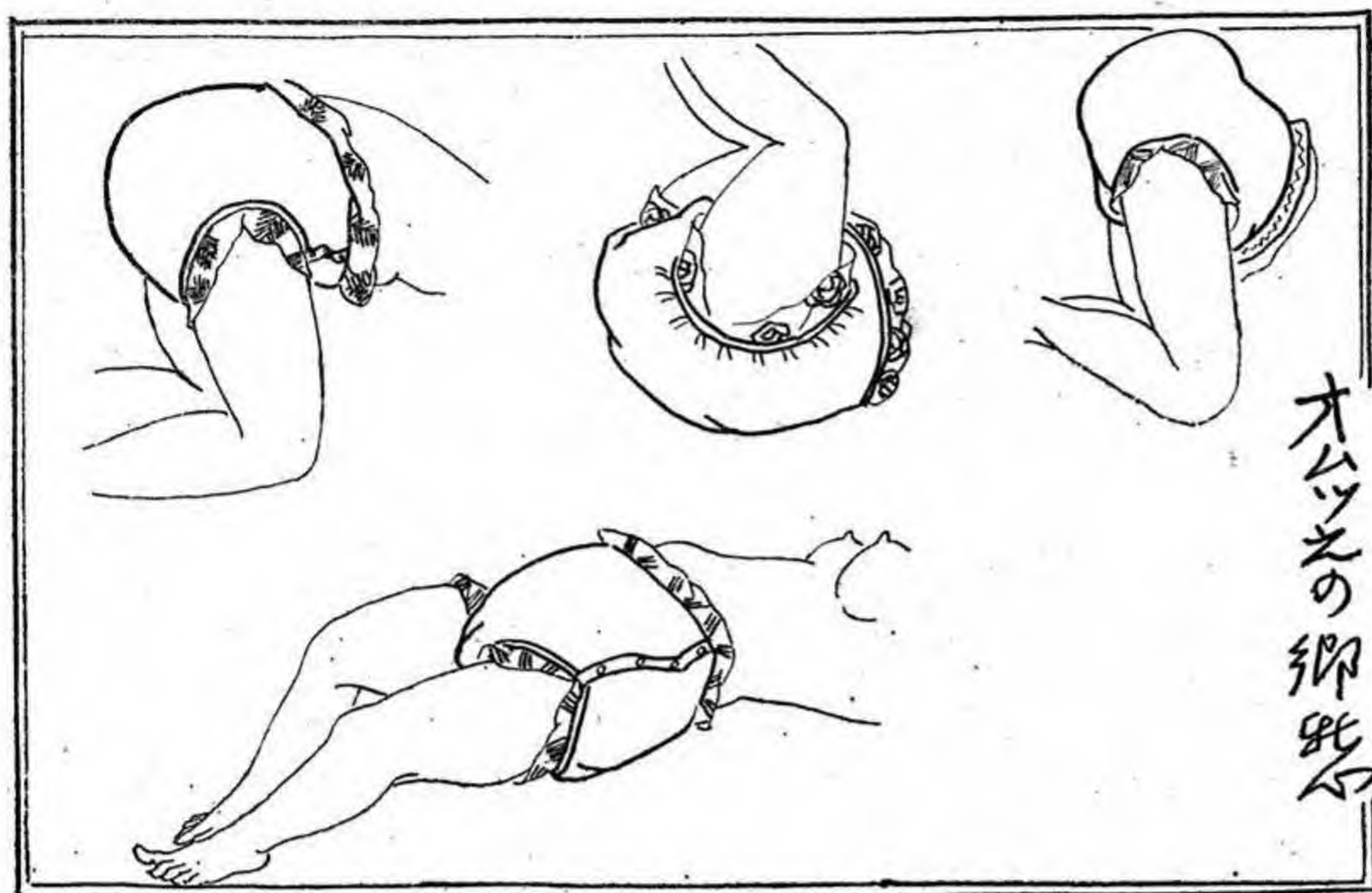
な執着を持っている方があるのを知り、なにか慰められるような思いになるのでした。

同氏は若い美しい女性にあの辱しいおしめを当てて、恥しさの為に身もだえする女性の表情にあくことなき喜びを感じられる——いわばS的なものを感じさせられました。私はそれと丁度対照的で、美しい女性におしめを無理強いに当てられ、それこそ死ぬ程の恥しい思いをしながら、それに耐えてゆくことに、一種の快感を味う——M的な要素を持っているのです。それにあの柔らかな、ふっくらと腰を包んだおしめの感触は何か仄甘い郷愁のようなものさえ感じるのは、確かに異常

な欲望と言えましょう。このようにおしめに対する不思議な執着を身につけてしまったのは三カ月近く過ぎた病院生活が原因でした。

私はこの恥しい人には言えぬ——それ故に永い間悩み続けて来た、おしめへ対して限らない執着を抱くようになった動機を「奇ク」の皆様にならに、あからさまに書いてみたいと思います。そして、少しでも私のこの奇妙な性癖に対して理解を持って下さる方があれば、それこそ私の悶々たる悩みは救われ、心から慰められます。

三年前にかねてより希望していたS大に入る為に受験勉強で無理をしてしまい、生来丈



オムツの郷愁

夫でなかった私は無事入学出来たものの、まもなく過労が原因で肋膜炎になってしまい、H病院へ入院しました。

かなり重症のためベッドに寝たまゝの状態でしたが、戦時中に父を失い、母が父の事業であった「薬局店」の経営に当たっていたので、私に付き切りにはなっていられず、病院の紹介で来た若い看護婦に一切の世話をを見て貰うことになりました。

その人は私より五つ位年上の一寸寂しい感じのする女性ですが、眸の綺麗な優しい人でした。

食事の世話をして貰うのはともかく、便器の世話までして貰うのは、馴れない病院生活の上に私が未だ若いせいもあり、本当に意志通りにならず一番嫌なことでした。

出来るだけ我慢をしてなるべく、その人の手をわずらわ

せぬようにと心がけましたが、それは思ったより苦しく辛いことでした。そんな風にして堪えている私に薄々感付いたその人は、「我慢なぞなさないでね。御病人ですもの一寸も恥しいことはなくてよ。」と度々そう優しく言うてくれるのですが、尚も我慢し続けている中にある夜、私は小さな子供のように、おねしょをしてしまいました。

洩した時は全然目覚めず、朝になり腰から下がびっしょりと冷くなっているのに気付いた時は狼狽してしまい、隠し切れるものではない事を覚ると、恥しさの為に身のおき所もない程でした。そして寝たきりの生活から解放され、野原で気持よく用を足した自分の姿を遠い夢の記憶の中におぼろに思い出すと、顔が真赤になってくるのでした。

午前中の廻診の時間が来れば、いやでも私の醜態を衆人の中に晒さねばならないので、意を決して死ぬ程の恥しい思いをしながら、おねしょをしてしまったことを告げると、「あら、あら困った赤ちゃん」その人は軽い冗談を言いながら少しも嫌な顔をせず後始末をしてくれました。私は何にかの間違いだと軽く考えていましたが、その夜になると又失敗するのではないかと不安な気持ちに襲われ

眠ることに一寸恐怖めいたものさえ覚えましたが、そのうち、いつか眠りについてしまいました。

昨夜私が抱いていた予感の如く、再び私はベッドを濡らしてしまい、重ねての失敗に今度こそは、なんとか隠しきってしまおうと、焦っている所へあの人は洗面の用意をして入って来ました。そして笑いながら「もうお目覚めね。今朝は宏さん、おねしよしなかった？」と問われると「大丈夫です」と咄嗟に言葉が出ず、ばつの思そうな顔をしていると、「今朝もしてしまったの？ 顔にそう書いてあるわ。当たったでしょう。」

私は顔を真赤にして黙って頷くと布団の襟で顔を覆うようにして、その人の視線から逃れようと思いました。

昨日のように素早く後始末をしてくれ、私のねまきの襟を合せながら「困った赤ちゃんですこと。今夜からおむつをしてねましようね。」とからかうのでした。

夕食が終りしばらくして一日の最後の検温が終ると、私位の病状の患者に付いている看護婦は大抵附添部屋へ帰ってゆくことになっていました。

いつもの様に検温をすませ部屋に戻る前に

その人は私に言うのでした。

「宏さん。きつとおねしよをするのは腰が寒くて冷えるからじゃないかしら。ですから今夜は暖くして上げましょうね。」

「え。そうかもしれないけど、もう大丈夫です。今朝はごめんなさい。」

「あら、いいのよ。そんなこと。御病人のお世話するのが、私のお仕事ですもの。」

「……………」

「でも少し心配でしょう。安心しておやすみになれるようにして差上げるわ。」

「……………」

「じっとしていらしてね。」

布団の裾をそっとまくり上げ、ねまきをはだけ始めたので、私はきつと腹巻きでもしてくれるのかと思っているとパンツまでおろしてしまいました。そして私の両足を持上げると腰の奥深くまで何にか布切のようなものを挿入するのです。何にをされているのか分かりませんが、おむつを当てているのだと気付いた瞬間、私は顔が真赤になり、烈しい羞恥の為に身もだえするのです。

やがて腰の部分は柔い感じのするおむつですっかり覆ってしまい、おむつかばーらしいもので、ぴっちり止めると忙しそうにねま

きの裾を合せてくれました。

「今夜からおむつを当ててねましようね。安心してお休みになれるでしょう。おむつをしてあるのだから、いつ洩してもいいのよ。」

恥しさの為に私は眸を伏せたまま黙ってこっくりをして見せましたが、それだけでも精一杯の思いでした。

こうして殆んど無理やりに、私は物心つくようになって初めておむつを当てられてしまいました。朝になるとぐっしりと濡れたおむつを、それこそ新しいおむつを当てて貰う時よりも尚一層恥しい思いに耐えながら、取り換えて貰うのでした。その人はこんな厭な仕事にも、私の思っている程に嫌な顔一つせず「まあぐっしよりね」とか「大きな赤ちゃん。」等と軽くからかいながら処置をしてくれましたが、その度に受ける耐え得ぬような恥しさに心がさいなまれることが一種の妙な喜びが続いていることを感じ出すようになって来るのでした。

美しい若い女性の前にあられもない肢態をみせ、羞恥心に身もだえながらも、あらゆる官能をじいんと刺戟してやまない異様な陶醉に浸るのです。又、腰のあたりをふっくらと柔く包んだおむつの感触も心よいもので、

甘えた気持も伴って、安心感に似た安らかなものが優しく胸をしたたと浸してくれるのです。

雨が二三日降り続いたむし暑いある日の午後、寝苦しさからふと目を覚ますと、あの人が窓の所に張った綱へおむつを干している所でした。綱にはとりどりの模様の浴衣で作ったおしめが沢山干してありました。今まで全然気付かなかったことでしたが、それは全部若い女性の着るような、麻の葉をあしらったものや、蛇の目傘の絵等の大柄の模様の浴衣で作られたものばかりでした。夜毎私の腰を包み、柔かな、あの妙な甘い感触をもって私を刺戟するおむつは、あんな模様をしていたのかと、今更のように思うと同時に、あんな派手な模様の浴衣を着る若い姉妹もない私の家に、その様な浴衣が沢山あったのが不思議に思えてなりませんでした。

呆んやりと干されてあるおしめを眺めながら、こんなことを考えている私に気付いたあの人は

「あら、おきていらしたの？ 雨ばかり降って厭ね……」

「まだ降っているの？」

「降っているわよ。でも芽吹いたばかりの青

い葉が雨に濡れて、とても綺麗よ。」

「……」

「おむつを干しちゃったので宏さんには見えないわね。お嫌、こんな所に干したりして……でも一寸我慢してね……」

「ね、それ僕の家から持って来たの？」

「違うわよ。だって宏さんはお母さまに、宏さんがおむつを使っているの言ったら、恥しがるだろうと思って、可哀そうだから黙って上げたのよ。——宏さんもお母様には黙っているのでしょう。」

「じゃ、それどうしたの？」

「私の……。宏さんに貸して差上げたのよ。ホー。」

「あなたも、夜は使っているの？」

「あらあら大変なことを言い出したのね。宏さんは……」

病状は次第に回復し体力も徐々ついてきてベッドから起き上れるようになり、軽い散歩まで許されるようになったのは、もう初夏の季節でした。

T市の郊外に建っている病院の附近は、ずっと麦畠が続く、燃えるような緑の木立にかこまれた農家の藁屋根が所々に点在し、明い

緑陰を作っている雑木林の丘の入口には、水の綺麗な小川が空の色を映して流れて居り、全くのどかな風光でした。

病院の裏手にある大きな物干場の間を抜けて柵の外へ出ると、小川へ続く一本の畠道があり、私達は夕方になると好んで、この径を歩きました。散歩が出来る程に元気になっても、あの人は相変わらず夜だけは私におむつを当ててねかせていたので、ある夕方洗濯物干場を通る時、とり込み忘れた私のおむつが風にはたはたとなびいていました。

あの人はそれに気付くと、お部屋に置いてくるからと急いで戻ろうとしたので、私も一緒に付いてゆきました。その夕方は一寸うすら寒いのでセーターを着てゆこうと思ったのです。私がセーターを着ている間、その人はベッドの上に今取り込んだおむつをひろげてたんでいるのを見ると、急におむつを当てて貰いたくなり、そしておむつを当てたまま散歩をしたら、どんなに素晴らしいかと思いました。

そんな私の気持を見透すかのように、その人は言うのでした。

「宏さん……。昨日みたいに途中でお手洗にゆきたくなると困るでしょう。今日はお腹の工

合はどうお？」

「え。あまりよくないけど——」

「——じゃ、散歩はとりやめ。もうお休みになる？ それとも、おむつをしてから散歩にゆきましようか——」

「……」

夕映えの赤い雲を映して雑木林の入口にある小川はゆっくりと流れ、透き通って見える水底には水藻がゆらゆらと揺れていました。

時折熟れた麦の穂を揺れ動かして若葉の匂いをのせた風が渡ってゆく、静かな初夏の夕べのひとときでした。

部屋を出る前にあの人に当てて貰ったおむつが腹部を柔かく締めつけるように、ぴったりと覆い歩く度にすれて、軽い音を立てるおむつかばいの音さえ、心よい響となって私の心に伝わってくるのに全く有頂天になってしまい、時々思い出したように少しふくらみ加減になっている腰のあたりに手をやり、その柔かな感触を楽しみました。

小さな石橋を渡ると、私達は柔かに萌え出ている雑木林の下草に腰をおろして休みました。

「宏さん。もうすぐ退院するのでしょうか。お

母様が今日、お見舞に来た時、言ってもらしたわ。」

「え。母に僕も言われました。僕も、もう大丈夫だと思えます。母はこの夏はどこか田舎へでもゆき静養しながら、少し勉強するようにと言っていました。」

「お母様と一緒にいらっしゃるの？」

「母は仕事が忙しいので、僕一人で行きなさいて言うんです。ですから母に言ってもやりませんでした。僕一人じゃ嫌だって——」

「あら可笑しい方。一人じゃ淋しいの？」

でも宏さんってお幸せな方。私羨しい。」

と、その人はぼつりぼつりと身の上話をしてくれました。両親に早く死に別れ、頼りにする姉妹もなかったので、伯父さんの所へ引取られ、そこで女学校だけは出して貰うとすぐに自活の道を立てる為にある国立病院の看護婦養成所に入り看護婦になったが、いろいろの点で条件のよい派出看護婦になったのも、やはり将来のことを思っていることであるとか——。そしてきつと一生結婚もせず、看護婦をしているかもしれないわと淋しそうに言葉をつむぐのでした。眸をあげると言葉を続けました。

「私も、宏さんみたいな弟が欲しいわ。——」

可愛いくて……。若しもよ、宏さんが弟だったら、私はどんなに生甲斐を感じるだろうな。」

「僕だって——さんがお姉さんだったら、いいな。でも嫌でしょう。こんな元気になってもおねしよしたりして、おむつを当てている弟なんかじゃ——」

「そんなことないわ。宏さんにそんな悪い癖をつけたのは、きつと私のせいよ。初めはあんなに嫌がった貴方に、おむつなんか当てたりして……」

「……」

「私ね、宏さんがお家にお帰りになったら、この病院の附属の、山の療養所へ行って働こうと思っていますのよ。お手紙を差上げますわ。きつとね。」

私達はしばらくの間、指を組んだまま黙って、静かに暮れてゆく茜色の空をじいと眺めていました。

黄昏の淡い光の中にあの人を着ている薄いクリーム色のセルの着物が、夕顔の花の様にぽっかりと浮いて見えました。

まもなく、この女性とも別れてしまうようになるのかと思うと、妙に悲しいものが胸に迫ってくるのでした。

家に戻ると入院前と同じ様な味けない生活が始まりました。母は仕事で忙しく外出勝で、私は年とった女中と二人でいつも家の中で呆んやりとしている日が続きしました。母がすすめてくれた田舎へも全然ゆく気にはなれず、第一入院中についてしまった夜尿癖が未だ完全に癒りきれず、時々失敗するので一人旅などは思いも寄らぬことでした。

母はそんな私を大変心配して、商売上種々の薬を取り寄せては私に試みるのでしたが、どれもが効きめはありませんでした。その中に自然に癒るから心配しないようにと、力づけてくれる母には心から感謝しましたが、おしめを当ててねなさいと言ってくれないのが私には物足りなく、と言って母へ自分からそれを言い出すのも面映ゆく、出来ることではありませんでした。

一人で秘かにねる前にあの人に貰ったおむつを当ててねるのですが、その後始末には全く困り、なにかにつけても思い出すのは、あの女性のことでした。そしておむつへの不思議な執着は断ち切れず毎に募ってゆき、病院での短かったあの女性と一緒の生活が、懐しく、夢の様な想い出となって私の胸をせつないまでに締めつけるのでした。

時々、何にかの拍子に若い母親におしめを当てて貰っている赤ん坊を見ると、それが羨しくて仕方ありませんでした。そんな光景を目にした時は一層におむつへの執着が高くなり、顔から火の出る程に恥しい思いをしつつおむつを当てて貰っている所を想像しながら、自分で当てると羞恥で熱くなった軀に冷たい浴衣の感覚が心よい刺戟を与え、カパーで腹部とももの部分がきつく締る恍惚感はいえようもない程私の官能をゆすります。

——然し本当の所、羞恥にもだえながらも美しい女性の手で、半ば無理強いにおしめを当てられると言うことに限りない喜びを感じるのは、私が完全なる異常者になってしまったからでしょうか。今では全くおむつの世話にならぬ日はない程に必需品になってしまいました。それが又案外手に入り難い物なので困っています。さすがに新しい浴衣を切り細まざいて作るのもったいない事であるし第一柔かな感じは幾回も水を通した古浴衣でなければ出ないものです。

種々の医学者や心理学の書籍を読み、この不思議な性癖を学問的に裏づけようと試みましたが、他に例を見ない私の異常な心理は、ありきたりの医学書や心理学の本では到底解

決を与えてくれることは出来ませんでした。

それがはからずも、「奇ク」を手にし、S A氏の「襦褌への幻想」を読み、又同誌の他の部分に出ていた二三の記事を読んでみて、私の探し求めていた書籍はこれだと言う感を深めました。永い間求めても、求めても得られなかったものに、やっとの思いで巡り逢えたこの喜びは限りない程に深いものです。

そして始めて手にした唯一冊の「奇ク」を読んだだけで、私が病院を退院した日を最後として別れ、その後全く消息を絶ってしまつたある一人の女性の心の中がなんだか、おぼろげながらも分かってくるように感じるの——私の思い過しであり、はかり知れぬ深い深淵のような人間の心に対して、思い上った奴だと「奇ク」の読者の皆様はお笑いになるでしょうか。

(完)

〔代理部だより〕○本誌旧号の中、復刊号の分(白表紙)は全部売切れになりました。

○悦特第一集、第二集、第三集、第四集、第五集(各一部特価一五〇円) S特第四集(特価一八〇円) 長篇悦虐小説「青い廃院」(特価一〇〇円)は在庫しております。

奇妙なお礼参り

大 中 忠

「ごちそうさま。」

芳子はお箸を置くと立ち上った。彼女は高校一年の可愛い少女だ。

「本の続き？」

洋子はそんな妹を見ながら微笑んで、もう二階に上りかかっている芳子に声をかけた。

「そうよ、とても面白いんですもの。」

妹の足音が二階に消えると洋子はテレビをつけた。ああ、やっと今年も終わった。それにしても今年のクラスは大変だったわ。洋子

は画面に注意も払わずに、ぼんやりとしていた。彼女は二十八才、中学校の教師だ。今年卒業したクラスには三人、どうしても手に負えない子がいた。彼女は内心、彼等が学校を出て行ったのに、ほっとしていた。

「御免下さい。三木先生、居らっしゃいますか？」

「ハイ」

洋子は返事をしながら時計を見た。八時過ぎていた。

「まあ、木村さん。」

洋子の声には驚きの表情があふれていた。

黒いセーターにスラックス姿で玄関に立った少女は皆からミツと呼ばれていた問題の多い生徒の一人だった。

「今迄先生に御迷惑ばかりおかけしたものですから、お礼に来たんです。」

言葉使いは丁寧だったが、それだけに何となく不気味だった。

「そう、上りなさいよ。」

洋子はあまり気が進まなかったが、ミツを招じ上げた。前に座ってミツは、洋子と同じ位の体つきをしていた。セーターを持ち上げた胸のふくらみこそ小さかったが、スラック

スに包まれた腰の辺りは、もうすっかり大人になっていた。湯呑みを出した洋子が熱い茶を注ごうとした時だった。

「お姉さん、助けて」

二階から唯ならぬ芳子の悲鳴が聞えた。洋子は驚いて久須を置くと立ち上った。その時いつの間に傍に来たのか、ミツが洋子の胸に鋭く光るナイフを突きつけた。

「木村さん、あなたは？」

「静かにしなよ。だから、さっき言っただろうお礼に来たって」

言葉つきもすっかり変っていた。

「動くとおッパイが切れるよ。座ってなよ。」
洋子は血の気がひいて行くのが自分でも判った。言われるままに元の座に戻ったが、二階が気になってたまらなかった。やがて二階から足音が聞えて来た。二人の足音らしい。

間もなく洋子の前に現われたのは、あわれな姿の芳子と、ミツと同じ問題児の一人、高木だった。芳子は散々抵抗したらしく、ブラウスが破れ、スカートもぬがされたままで後手に厳しく縛り上げられ、猿轡さえ噛まされていた。

「芳子ちゃん。」

洋子は思わず傍に寄ろうとしたが、左の乳

首に鋭い痛みを感じて元に戻った。

「おとなしくしなよ。言う通りにすりゃ、妹には手をつけないからさ。」

「本当に妹には手をつけませんね。」

洋子は覚悟を決めて言った。私はどうなっても、妹だけはきれいなままにしなければ。高木はその間に芳子を柱に縛りつけた。むき出しになった脚にも縄は次々と喰い込んで行った。

「じゃ良いんだね。裸になってもらおうか。」

洋子は、はっとした、お礼と言っても、せいぜいなくられる位だと思っていたのだ。教え子の前に自分の肌をさらすなんて、洋子は気が遠くなるようだった。

「駄目なら良いよ。妹になってもらうから。」

高木は矢庭に、芳子のブラウスに手をかけた。もう所々破れている布は、荒々しく高木の手に移った。芳子はまたたく間にパンティ一枚の姿にされてしまった。若々しい白い肌が皆の前にさらされた。柔い体に縄が深い窪みを作っている。まだ少女らしさの残っている清らかな体だ。高木はさらに残る一枚にも手をかけた。

「止めて、ぬぎますから」

洋子に叫びと同時に服をぬぎ始めた。高木

もミツも手を休めたまま、自分達の恩師の姿を見詰めていた。

洋子の肌はなめらかだった。水を落せばすぐにはじいてしまいそうに張り切っていた。男を知らない乳房は、固く美しい曲線を描いていた。パンティ一枚になった洋子は顔を伏せ、両腕で胸を覆ってうずくまった。白い背中が丸くむき出しになっている。

「あきらめが良いじゃないの。じゃ、手を後にまわして。」

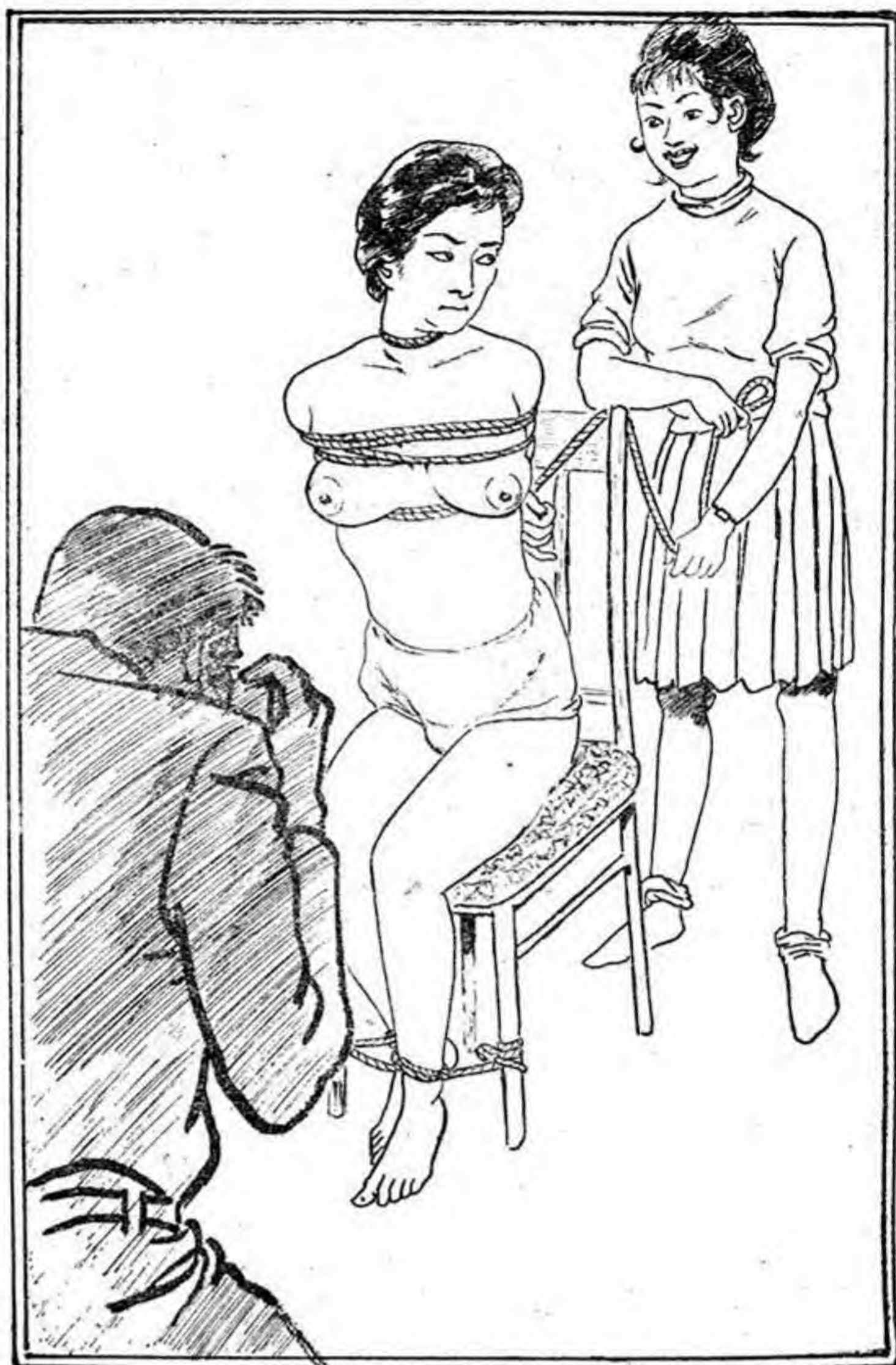
白い背中中で組み合わされた洋子の両手首にミツは手にした縄を巻きつけた。ミツの若々しい手が洋子の素肌にふれる。洋子は自分の豊かな胸に縄が喰い込んで行くのをじっと見ていた。柔らかな体に、縄は容赦なく喰い入って行く。うつむいていると自分の体が全部見える。白い肌だ。洋子は体を締めつける縄目に唇を噛んだ。

「さあ立って。」

ミツは後手の縄尻を引いた。洋子は不自由な体をよろめかせて、やっと立ち上った。均整のとれた美しい体だ。

「こりゃ見事だ。先生にしとくのは、勿体ないや。」

高木は無遠慮に洋子を見詰めた。教え子の



目の前に、こんな浅ましい姿をさらしている
自分に、洋子は嫌悪すら感じた。

「ではぼちぼちやろうか、ミツ、二階に連れて来いよ。」

「妹の方はどうするの？」

「そうだなあ、連れて行くか。」

「やめて、妹には手をふれないって約束よ。」

洋子は不自由な体をもだえて叫んだ。

「何にもしゃしないよ。姉さんの姿を見ていてもらうだけさ。大人になっても教師になんかならないようにね。さあ、先に行くんだ。」

ミツに縄尻を取られ洋子は階段を踏みしめた。白い太ももが薄暗い中に光る。

二階は芳子の勉強部屋になっている。芳子

は本を読んでいる所を高木に襲われたものらしい。床に本が落ち、その横にぬげたスカートがあった。

ミツは倒れていた椅子を起すと洋子を腰掛けさせ、上体をしっかり椅子の背に縛りつけた。丁度縛り終った頃、高木が芳子の縄尻をとって現われた。

「嘘つき、妹には手をふれないと言ったくせに。」

「嘘なんかつきやしないさ。姉さんだけ裸にしたんじゃ悪いと思ったからさ。何なら俺達も裸になろうか。」

「そう、良い考えだわ。」

ミツは簡単に言うと、さっさと服をぬぎ出した。高木も芳子を机の脚に縛りつけると、服をぬぎはじめた。二人共、もうすっかり大人の体をしていた。特にミツは、洋子と並んでも遜色のない体をしていた。むき出しにした乳房ははり切っているし、派手なパンティに包まれた腰も完全に成熟していた。少し色は黒いが若さが、それをカヴァーしていた。洋子の体には落着いた美しさがあるが、ミツの体にははち切れそうな美しさがあった。

一方、パンツ一枚になった高木の体も、た

くましく成長していた。筋肉が波を打っている。洋子は芳子の事を思うとたまらなくなっていた。姉妹二人だけの生活をするようになってからもう十年近い年が流れた。内気な芳子は自分の肌を見せるのを極端に嫌がった。姉にさえ肌を見せた事はなかった。それが他人の目の前に肌をさらし、体の自由を奪われるという状態なのだ。洋子は、妹の姿を横目で見た。芳子は机の脚に縛られたまま、縄目に体をゆだねていた。どうやら、気を失ったらしい。

洋子はむしろほっとした。これからのみじめな自分の姿を想像すると、妹が気づかない方がショックが少なくてすむように思った。丸い頬に、猿轡の布が深く喰い込んで痛々しい。高木は洋子の正面にカメラの三脚を立て始めた。ミツは膝まずくと洋子の右脚を椅子の右脚に縛りつけた。足首と膝の上を縛られるともう右脚は椅子から離れなくなった。洋子は自然と左足も、右足に密着させていた。その左足を離そうとするミツに洋子は激しく争った。

「手間をかけさせるんじゃないよ。」

洋子の両頬にミツの手が激しく鳴った。白い洋子の顔がたちまち赤く染った。それでも

洋子は脚から力を抜かなかった。「強情だね。あまり言う事を聞かないと妹に代ってもらおうよ。」

洋子に、妹という言葉は一番効果があった。洋子は唇をかみしめて力を抜いた。左の肉付きの良い太ももに縄が喰い込んで行くのを感じると、閉じたまぶたの内側に熱い涙が溢れてくるのを止めようがなかった。何という浅ましい姿なのだろう。生徒に学問を教える身分の自分が、今はこんな姿で恥しさを教えられてゐるのだ。

シャッターの音と共に閉じたまぶたにフラッシュが光った。同じ姿のまま二、三枚写される、ミツが近寄り、洋子の髪をつかんでうつ向いていた顔を仰向けさせた。頬に赤い指の跡を残した顔が露わになり、その頬に涙が筋を引いていた。又、フラッシュが光る。「さあ、記録は終わったぜ。サツに言ったりすると、この写真をばらまくからな。何も言わなけりゃ、決して誰にも見せないと約束するからさ。」

洋子の体の隅々迄を記録したフィルムがこの少年の手にある。洋子は黙ってうなだれるより他仕方がなかった。

「さあ、これからお礼をさせてもらおうか。」

ミツ、口をふさげよ。」

後に立ったミツはいきなり洋子の口の中に布を押し込んだ。何だか変った嗅いがする。反射的に吐き出そうとするのを、紐で押えられ、首の後で縛られた。もう声が出ない。気がつく、口の中に入れられたのは、洋子のストッキングで、押えている紐は芳子の黒い靴下だ。

洋子は椅子から解き放された。白い太ももに縄目の跡が赤い筋になって残っている。ミツは洋子の腕の縄目も一旦解いた。白い二の腕が痛々しい程だ。ミツは洋子の手を素速く前にまわして縛りあわせた。

「頼むよ。」

ミツは縄の端を高木に渡した。この二階は棟木がむき出しになり屋根裏部屋のような感じを与える。その棟木に高木は縄尻を通して引いた。洋子の腕が高く上り、一本の棒のようになつた。背中に肩胛骨の盛り上りが深い影を見せ、なだらかな曲線を作って腰のふくらみの間に流れていた。そのふくらみの上の辺りに突然ミツの手にした細いベルトが叩きつけられた。洋子は不意の責めに猿轡の下に悲鳴を殺した。白い肌に見る間に赤い筋が走る。続いて細腰に背中さらに乳房迄もこの

少女のベルトは責めた。

洋子は少しでもこの苦痛から逃れようと、不自由な体をもがかせた。しかしそれは、吊られた手を中心にくるくるまわるだけの効果しかなく、それによって苦痛はさらに加わった。洋子の体はたちまち汗で光り、背中一面は赤く染っていた。口の中につめ込まれた布はもうすでに、つばでぐっしりとぬれている。洋子は薄れている意識の中で鞭をふるう少年と少女を見た。彼等の体もすっかり汗でぬれていた。たくましく成長したミツの体が目の前に浮んでいる。芳子はまだ気づかないらしい。

一一

芳子が高校を卒業し、大学の寮に入る為に家を出てしまうと、洋子は二階に下宿人を置いた。今年大学に入ったばかりの娘だ。

あのいまわしい日から年月も過ぎ、洋子の心の中の苦痛は薄らぎ何か懐しくさえ感じるのに洋子自身も驚いた。あれから一年ばかりたった時、高木は、もう北海道に行ってしまうという手紙と一緒に、あの時の記録写真を送って来た。洋子はそれをすぐに焼こうと思っただ、何となく思い直して芳子の目にふれ

ない所に隠してしまった。

「行ってきます。」

階段を元気よく降りて洋子に声をかけると二階の下宿人路代は出て行った。今日は洋子の学校の創立記念日なので、久し振りにのんびりとしていた。

「行ってらっしゃい。」

洋子は活発な路代を見送ってから腰を挙げた。台所に立った時、ふと玄関の隅に本が一冊置いてあるのに気付いた。あんな所に何だろうと思って、洋子は手にとって頁をくつてみた。路代の本らしい。だらしないな、と思いつながら、机の上に戻しておくつもりで、本をぶら下げた時、一枚の固い紙が彼女の足元に落ちた。何気なく拾い上げ、目をやった洋子は、自分の秘密をのぞかれたような気がして、思わず足を止めた。しかしそれは彼女の秘密ではなかった。彼女の秘密と同じく、被縛の女体の写真ではあるが、それは洋子よりも肥り肉の路代の姿にまぎれもなかった。

路代は後手に厳しく縛り上げられ、うなだれていた。若々しい肢体が厳しい縄目さえもはじき返すようだ。素人写真らしくライティングも良くないが、それだけに余計迫力があり、黒い影と白い体が対象的だ。洋子はその

写真を見つめながら、ペツタリと座り込んでしまった。路代の姿がひどく美しいもののように見えた。今迄特別美しいとも思わなかったが、このように無防備な姿をさらしている、とても美しく見える。洋子はあわてて自分の写真を出して比べてみた。そして縛られれば自分も美しいのだと知って安心した。その夜、洋子は二階の部屋に路代を訪れた。

「路代さん、これ忘れてたわよ。」

路代は洋子のさし出された本を見ると顔色を変えたが、何気ない風でそれを受取った。

「ねえ、路代さん、その写真、自分で撮ったの？」

路代は本を両手でにぎりしめたまま、うなだれていた。

「心配しなくても良いのよ。ほら」

洋子は恥しさをこらえて、自分の写真を路代の前に置いた。

「まあ、お姉さんも」

「そうなのよ。貴女はいつから？」

「小学校の時です。」

路代は自分の同じ写真を見て安心したのか喋り出した。

「小学五年の時でした。真夏に隣の男の子に縛られたんです。その時、何だか体の中迄、

じんとするものがあって、それから、もう夢中になってしまったのです。」

「そうだったの。私はね。」

洋子は教え子に羞しめられたあの日の事を話した。路代は、うなだれていた頭を挙げ、目を輝かして聞き入った。

「それでどうなったの。」

「二人共手足を縛られたまま。生徒が帰っちゃったでしょう。ほどく迄が大変だったの。」

「妹さんにはショックだったでしょう。」

「一週間ばかり寝てたわ、それに私だって、その時は苦しくて、彼等を恨んだわ。だけど段々、又縛られてみたくなったの、不思議だわね。」

「本当に鞭打たれるなんて、素晴らしいわ。」

私も一度、打たれてみたい。」

「したげましょうか。」

洋子は段々、この娘が可愛らしくなってきた。自分も縛られたいけど、この娘も縛ってみたくて来た。

「本当？ 打って下さる。」

「いいわ。さあ、ぬいで。」

「裸で？」

「勿論よ。着たままじや、こたえないでしょう。私、縄を取ってくるから。」

洋子は階段を下りた。下の押入れから、干物に使う、麻縄や、ビニール紐数本を持って再び上に行った。路代は、すでにパンティー一枚になり、入口に背を向けてうずくまっていた。肉付きの良い背中が白かった。洋子は路代の前に回ると、両手首を前で縛り始めた。路代は、初めて他人に縛られる恥しさと喜びに白い肌を染めていた。

両手首を縛り終った洋子は、路代を立たせると梁に縄尻をかけ、路代の両手を吊り上げた。目の前に長く伸びた姿を見て、洋子は自分もこんな姿にされたのかと思うと、恥しさと懐しさがこみ上げて来た。肌は白くむっちりとした肉付きの路代は毛深かった。

「打つわよ。」

洋子は自分のベルトを手にとると、目の前の路代の背中に叩きつけた。ピシリと鋭い音がすると、路代は体をそらせた。白い背中にたちまち赤い筋が走る。洋子はベルトから感じる路代の肌の手ごたえにこうふんした。打っているのは自分だが、打たれているのも自分のような気持ちになって来た。続いて、吊られていた為の伸び切った太ももの裏側に打ち下ろした。路代の体が大きくゆれる。洋子のベルトは腰や肩も打ち、更に前にまわって、

打ち続けた。路代のくいしばった唇からうめき声もれたが、彼女の肉体はよくこの責めに耐えている。やがて彼女の白い肌は一面に赤く彩られ、汗が全身に吹き出していた。

洋子は一通り興奮の嵐が通り過ぎると、手を止めた。路代はぐったりとなつたまま両手首の縄に吊られ、荒い息をくり返していた。

「路代さん、大丈夫」

洋子は、路代を下に抱きおわした。両手首の縄目はそのまま。責めに痛めつけられた娘はぐったりと重かった。

「素晴らしいわ。」

「え？」

洋子は思わず聞き返した。

「打たれるの素晴らしいわ。体の芯迄しびれて来るの。」

「痛くない？」

「そりや痛いわ。だけど楽しいの。私の体、どんなになつてゐるの。」

路代は目を閉じたまま。その表情には喜びが溢れていた。

「一面に赤く腫れ上つてゐるわ。」

「そうなの、もっとして欲しい。」

「もう駄目よ、これ以上打ったら、血が出るわ」



「構わない。だけど今度は吊らないで。腋がとっても痛い。後手にして。」

この娘は生れながらのマゾヒストなのだ。

今迄、責めの喜びを体験しなかったのは、かえって驚くべきことだ。

洋子は路代の縄を解くと、体をうつ伏せに

した。路代は自分から両手を背中にもわした。その背中も、一面みみず腫れになっていた。

「私、自分の縛られた姿を、自分で見たかったの。」

路代は後手の両手を洋子にまかせ切ったま

ないものね。」

ま問わず語りに話し始めた。
「かと言って、他の人に写真を撮ってもらうことなんて恥しくって、とても出来なかったわ。自分でしか縛ったことがないの。それで、苦勞してやっとな、自分の写真をとって、自分で焼けるようになったの。色んな写真撮ったわ。」
後手の縄はふくよかな二の腕から豊かなふくらみを見せる胸にも喰い込んで行った。肉付きの良い体は縄目に激しい抵抗を見せていたが、素肌に縄目は深い窪みを作っていた。

「吊り責めと、磔、それに海老責めなんか、是非やってみたかったけど、一人じゃ出来

洋子は、路代が色んな責めを知っているのに驚いた。自分は唯、縛られたり打たれたりという漠然とした責めしか知らない。それ以外にどんなにして責められるのだろう。洋子はもう完全に路代にリードされているのを知

った。

「ああ、脚も縛って。両脚がぴったりひつくと、とても気持が良いの。」

路代は自分から両脚を揃えて伸ばした。丸いふくらはぎ、締った足首。その足首に縄は巻きついて行った。全体として太い足だが、締った足首と、真直に伸びた線、それに隙間のない両脚の合わせ目等から、みにくい感じは与えなかった。それどころか、むしろ、白い肌の生毛と相まって、肉感的な美しささえ感じられた。

洋子は、太ももの膝の上も縛り上げた。膝の裏側に深い窪みが見えた。むっちりとした太ももの所々に赤い筋がついている。その太ももが更に太くなった所に、たくましく、柔い脹りを持つ腰があった。女性特有の皮下脂肪と、肌理の細い肌で包まれたふくらみは、後々に大きな影を作っていた。

両手脚を完全に縛られて横たわった路代はもう、全く動けなかった。そんな路代の姿を見ながら、洋子はあの時の事を思い出した。あの時、先に縄を解いたのは洋子だった。脚の縄も解いた洋子は、妹の縄を解こうと向き直った。その時の気分が、今と全く同じだった。目の前に両手脚を縛り上げられたS女が

横たわっているのも同じだった。唯違うのは今の自分は服を着ている事、目の前の乙女が、芳子よりも肉付きの良い路代である事等だった。あの時芳子は、自由になっても、しばらくはぐったりとしたままだった。異性の前に肌をさらした事、今迄に受けたことのない縄目の恥しめを受けたことなどが相当のショックだったのだろう。しかし、幸い、洋子が責められている時は気を失っていた為、全く気づいていなかったらしい。洋子よりも肌の柔い芳子の縄目の跡はなかなか消えず、いつ迄も赤い筋になって残っていた。

「早く叩いて。」

縛り終ったまま、しばらくじっとしている洋子に、路代は不自由な体をくねらせて声をかけた。

「ああ、一寸待って。」

路代の声にベルトを取り直した洋子に、路代は再び声をかけた。

「気絶するといけないから、その前に見せたいものがあるの。バッグの中から鍵を出してその抽出をあけて。」

路代は体を反らして視線で抽出を指した。豊かな乳房が胸一杯に拡がったようだ。

「これね。」

洋子はベルトを置くと、バッグから鍵を出し、抽出を開けた。

「中に茶色の袋が入ってるでしょう。それを見て。」

洋子は袋を逆さにした。中からは手札型の写真が十枚余り出て来た。それを見た洋子は再び目を見張った。皆路代の縄をまとった姿なのだ。

「恥しいけど、お姉様なら良いわ。もし気絶しなかったら後でそんなに縛って欲しいの。自分で縛ったのだから、ゆるくて駄目なの。今見たいに強く縛られると良い気持だわ。」

緊縛の為丸い指先は、もう血の気がなくなっていた。

「胴は自分でも強く縛れるんだけど、手はどうしても駄目なの。」

路代は背中縛り合わされた手を動かして見せた。

写真の中の路代は殆どが正面を向き、中に横を向いて乳房に喰い込む縄目を強調したのもあったが、後手の縄目をはっきり見せたのはなかった。しかしどの写真も、被虐の白い女体が、全身に若さと喜びを溢れさせていた。それを見ているうちに洋子は教師という立場を忘れ、路代の若さがうらやましくなっ

て来た。洋子は写真を置くとベルトを手にした。その表情は今迄とは全く変わったものになってしまっていた。

「打つわよ。」

言うなり洋子は続けさまにベルトをふり下

ろした。あまりの激しさに路代は恐怖さえ感じた。手足の自由を奪われた肌に責めの嵐は吹きまわった。路代の白い柔肌は赤く腫れ、鞭跡の重なった所からは血がにじみ出て来ていた。路代は今迄に味合った事のない痛みと

体の中から湧き出てくる欲びに噛みしめた唇から奇妙なうめき声をもらしながら、白い体をくねらせた。その豊満な肢体に縄目はますます深く喰い込んで行った。

(終)

〔緊縛研究講座〕

縛り方教室

柴 利 好

『手首が腰の辺りにダラリと下って、背中にねじ上っていない(a図)：つまり高手小手でないのが残念』と云った風な読者の批評が専門誌である可きK誌上に未だに見受けられる。つまり高手小手とは手首が高々と背中の上部に吊り上げられた後手縛りのことと一部に誤解されているらしい。

高手小手の本義は何かと云えば、高手は上

膊部であり、小手は手首なのであって、高手と小手とは全く別の部分を指している。従って高手小手に縛ると云うことは、高手と小手とを縛ると云うのが正しいので、ここに偶々高いと云う文字が使われたために、この様な誤解が生じたのであろう。

高手小手に縛ると云うことは、手首が背中にねじ上げられていても、いなくても、両手

が後ろに廻っていても、いなくても差支えない。例えば両手首を胸とか腹とかの部位に合せて縛っても或は両脇に附けて胴部に縛っても、後ろに廻して腰骨の辺で縛っても皆小手縛りであり、肩からひじの間、つまり二の腕の部分を、どの様に縛っても高手縛りなのである。

この二つの縛りが同時に行われているのを

（縛り方教室）

称して、高手小手と云うのである。それ故、両手が背中に高々と肩口にとどく程高く吊り上げて縛られたとしても、二の腕が縛られて

いなければ高手小手とは云わない。それは単に「後手に高々と縛られた」のである。「高手小手に縛られた」と云うと如何にも繩をギリギリと厳しく縛り上げた様に感じられるが、その本来の語義から云えば、そう云う意味はなく只縛った部分を指示したに止まる。



A 図



B 図



C 図



但し手首と二の腕とを同時に縛ることは、それだけ被縛者の自由を拘束するのだから、この意味では手首だけ或は二の腕だけを縛るよりは厳重な縛り方であるとは云える。しかし縛り方の厳しさとは無関係なのだから、それを云うならば「厳しく高

手小手に」とでも表わすのが正しい。この場合、後ろに両手が廻っておれば「後手に」手首が背中に吊り上げられていれば、更にその様な表現が付加される可きである。

古川柳に「遣手婆、小手を許してふりにやり」と云う句がある。昔の遊女折檻を歌ったものだが、直解すれば「遣手婆が女郎の手首の繩だけを許して小便に行かせた」と云うことである。何の様な理由か知れないが一人の遊女が遣手婆に責められている。女は着衣のままか肌着の一つもつけていたものか或は全裸にはがれていたかは判らない。只はっきり云えるのは高手小手に縛られて責められていたと云うことである。そして折檻中に女が尿意を催したために手首を縛った繩だけを解いて用便させたが二の腕は、その間も縛られ続けていた訳である。

恐らく繩尻は遣手婆がシッカリ握ったまま引立てられたのではないかと思われる。折檻の場所は所謂「髪部屋」と称する責めに使われる仕置部屋だったのであろう。土間とか庭内なら態々用便に行かせる迄もなからうから。兎に角この一句は高手小手の語義について明確な解釈を与えてくれている。「高手小手」の外に縛り方の表現に「ガンジ

ガラム』と云うことが良く使われる。これは縄を沢山使った嚴重な緊縛を現わす時に使われている様だが、これを文字通りに解せば『雁字搦目』である。雁字と云うのは雁が飛んでいる姿が十文字に似ているところから、この言葉が当てられる様になったので縄が十字に交っている縛り方と解す可きである。つまり『荷物小包の様に縛った』と云う縛り方である。縦縛りが加味された縛りを云うのである。縦縛りと云えば直ぐ脗間縛りを連想する向もあるかも知れないが、これは脗間に縄を廻すことだけではない。要するに縦と横に目が交った縛り方である。グルグル巻きに幾段にも縄目を掛けられていても『ガンジガラメ』とは云わない。例えば前号復刊六五号の『山と谷』は単なるグルグル巻きであり、又高手にも小手にも縄が掛つてはいるが、手首と二の腕とを特別に縛っている訳ではないから『高手小手』とも云えない。

そこで両手縛りで最も望ましいのは『後手高手小手雁字搦目』と云うことになると思うが、この上更に手首を高々と吊ることが出来れば最高である。(b図)しかし、この様なポーズを普通の場合実際に求めるのは仲々六かしいことで何んなに身体を痛めても傷けて

も良い情況は現実あり得ない。それ故モデル使用の場合には、何うしても完全な縛りは不可能に近い。

例えば高手縛りを嚴重にして小手を背中にねじ上げて十字に縛ろうとすれば肩やひじを痛める。手首の縛りを嚴重にすれば高手縛りがおろそかになって、二の腕だけはキツク縛られても二の腕を胴体に密着させることが出来なくなる。(A図)この場合、二の腕と胴体との間が空いては面白くないものである。反対に二の腕の方を幾ら嚴重に身体に縛りつけても手首を縛った縄が緩んでいた腕の交点がヒジの方に寄っていては無意味である。(B図)

そこで一案だが二の腕を身体に密着して縛り上げた時、後手に廻した小手の取扱いを工夫してはどうか。従来はここで両手首を交叉して十字に縛るか縦か横にグルグル縛っているが、これを両手の十字交叉にこだわらず両手を深く組合せ。後ろに廻した右手首を左ヒジ先迄、左手首を右ヒジ先迄深く組合せる。組合された下腕部は真横一文字に重り合う。これを右手首と左ヒジ下、左手首と右ヒジ下を夫々縛り上げる。更に両手首の中間つまり横一文字に合さった腕の中央部をもう一ヶ所

縛るのである。(C図)

普通なら手首を一ヶ所しか縛られない下腕部を三ヶ所縛り合わせることでより、一層厳しい緊縛感を表現出来る。と同時に腕を深く組合せれば、それだけ二の腕は身体に密着せざるを得ない訳で、こうすれば上腕部を何んなに強くでも好きな様に縛ることが出来る。但しこの方法だと手首を重ねて十文字に縛ることが出来ない点で、それを好む向きには物足りないし、事実後手高手小手の良さは、手首を合せた縛り方の方が美しいに違いない。しかし少くともこうすれば本格的な高手小手縛りを充分に満足出来る筈である。この縛り方はかつて石井滴水画伯が良く使われたと記憶しているので新らしい創意によるものではないが、一度モデル嬢にでも施縄されて見ては如何かと思ひ附記して見た。

近頃野外縛りが割合盛んだが女の上半身を縛っただけで地面(芝生砂地)に転がしたり坐らせたりした例が多い。しかしこれに今少しリアルな感じを持たせて、逃亡防止の意味を加味し、これに若干の補縛を試みてはどうか。例えば上半身を縛るだけでなく下半身殊に足首を嚴重に縛れば絶対に逃げられない。足首に止らず膝の上下にも腿の上下にも縄目

が喰い込んでいれば尚更である。正座している場合には、地面に二尺位の杭を打込んで、それに縄尻を繋ぐと良い。縄尻はせいぜい短か目にした方がリアルに感ぜられる。悦特五号の格子なき監房において切角あれだけ嚴重に縛り上げているのだから、これに杭繋ぎを實行すれば完璧なあわれさが表現出来たものと残念に思う。同じ杭を使用するにも等身大の杭に縛り付けるのとは又格別の味わいが出ようと云うものである。是非実験して欲しい。

腕の三カ所縛りと関連して、注文を一つ述

べよう。これと同じ縛りを脚に施せば、海老責の基本が完成する。

両脚をあぐらに組ませて右足首と左膝、左足首と右膝を夫々縛り合せ、重った脛の中央部を巻き締めるのである。後手高手小手にされた上体を二つに折り曲げ、右膝と右肩を、左膝と左肩を密着して縛り、更に脚の中央の縄尻を頸に巻いて締め上げれば、完全な拷問の再現となる。(D図)

普通モデルにする海老責のポーズは両足首を一つに括った縄を首に回すか、上体を縛った縄で脚を縛る位でお茶をにごしているが、

梨花悠紀子逆吊り写真特集

大中判印画紙焼付
各集五枚一組 一〇〇〇円

第一集 略号(さか)

第二集 略号(させ)

第三集 略号(さと)

両足首括り逆吊り

逆吊りの女体折檻

手足逆宙吊り

足首を揃えて括られた縄を滑車に連結されて、足を上に逆さに吊り下げられた美女梨花悠紀子は、両手を背中

逆さに吊りにあえぐ梨花悠紀子に対して、更にあくなき暴虐の手は、情容赦なく竹の棒にて女体のあらゆるところを叩き、こじ入れ、踏みつけ激しい折檻を加える。美しい眉をひそめて必死に耐える美貌の彼女の凄絶にして、しかも美しい吊責めフォト。

両足首と両後手首を括った縄を滑車に連結して、じりじりと宙に吊り上げてゆく。顔胸、腹を下にして、足首と背中を上にして宙に浮いてゆく梨花悠紀子。柔肌には恐ろしい程縄がうずまって、吊責めの真価が鮮明な印画紙焼付によって發揮される。

本格的な縛りもやり方によっては実現不可能ではない。

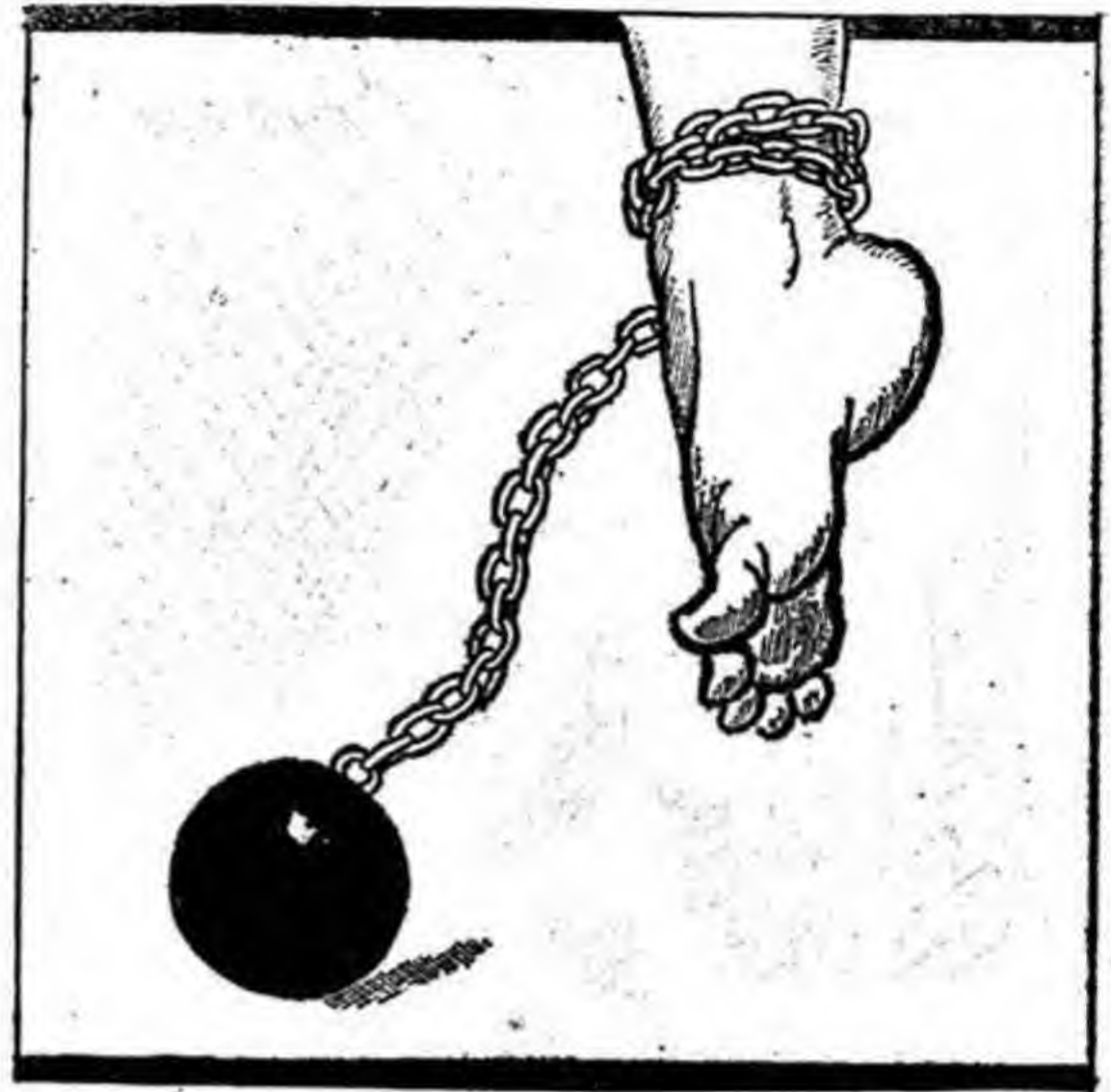
最初から高手小手に縛ってから上体を折り曲げると必要以上に被縛者に苦痛を与えるばかりで、肩と膝を着けるどころではないが、逆に膝と肩口を縛り合せた上で、高手小手縛りを行う。この場合、高手縛りの縄は、はじめから体に巻きつけておいて、後で締め上げると良い。

ウエスト縛りもあらかじめ胴に幾巻きか縄を巻いておいて、海老縛りが出来てから縄目を締める。これを初めからウエストを縛っておいて体を曲げようとするから海老責めの本当のポーズが取れない。これを無理にすれば血行が止って生命にかかわることにもなりかねない。

ということとは、それこそ拷問の価値があるわけだから、それは当然のこととて、このムツかしいポーズを実現しようとする処が、この縛り方のコツといえる。

但し、余程身体の柔軟な女性でないと、この縛り方によってさえも、理想を現実化することは困難ではあるが、もしモデル中に理解者があれば、これも是非共実現されたいことを願う。

(完)



長篇SM小説

宇宙のどこかで

△太平洋戦争の話▽

佐 治 麻 造

頭上に響き渡るベルの音が鳴り止むと、鉄扉が重々しく開いて婦人監視員が現われ鞭で床を叩いた。撃墜されて以来の悪あがきと、そしてきびしい訊問と拷問に疲れ果てた彼は、起き上がるのがとても辛かった。もう少し寝て居たかったが致方なかった。レモン色のブラウスに褐色のショートパンツ、そして白い運動靴をはいた金髪の婦人監視員は鉄扉の所で待ち構えて居て、よろよろと出て来る囚人達の腰の連鎖の中央に、片端からロープを通して珠数繋ぎにして追いついた。ただ広い倉庫の一隅の床に長さ三十米程の溝が十本並んで走って居て、二本宛が一米程の間隔に接近して居る。芋蔓式に二列に繋がれた三十八名の囚人達は、先頭から溝の端にしゃがんだ。溝をまたいでしゃがんだまま、二列の囚人の群れは、二本の溝の上

をそろそろと前方に揃って進む。彼も足鎖を両手で持ち乍ら水の流れる溝の上を、ぶざまな恰好で尻をゆすっていざった。婦人監視員が遠慮会釈もなくジロジロと見乍ら歩き回り、少しでも足を停める囚人の背や腿に革鞭を鳴らして叱りつけた。囚人達の都合にはお構いなしに一分足らずで溝が終ると、彼等は立ち上って、そのまま進み、天井から降るシャワーの中をゆっくりと歩く。シャワーから出ると床におかれた大きな洗面器の様なものの周りに三、四名宛群がって残飯を与えられた。全身を濡らせたまま床に坐って残飯を見た彼はみじめさに胸が熱くなった。しかし空腹には勝てず、手摺みで頬張ると胸がむかむかした。両手を動かすと固く嵌められた手錠が痛かった。

「おい、もっと喰べないと体が参ってしまうぜ」

七三七号が美味そうに食べ乍ら彼に言った。

「おい、頭をどけろよ」

後手錠のままの黄色な坊主頭が残飯の上にかぶさってガツついて居るのを軽く押しやり乍ら七三七号は更に指先で探って、崩れたコンビーフの塊まりを掴み出す。

「水はないのか？」

眼をつぶって何かを呑み込んだ彼は訊ねた。

「水なんかあるもんか。さっきシャワー浴びたる。あの時、一緒に飲んどくのさ。馬鹿だなあ」

七三七号は忙しく口を動かし乍ら嘲けた。壁の時計を睨んで居た婦人監視員が、露わな腿をゆすって鞭を床に鳴らした。追い立てられる一群に代って他の一群が鉄鎖を鳴らして追われて来た。一室分宛一まとめにされた囚人の群れが四つ、彼もその群れの一つに混って収容所を出て海岸の方へ迫られた。銃を肩に掛けた監視兵がいかにめしく立つゲートを通り抜けると海の香りが一しお強く匂って、白い作業服の男女が立ち働き、あちこちに熔接の青白い光が服の空気に閃いて、機械の騒音が強く弱く響き渡る。ここはポートダライの海軍基地工廠の一廊であった。

「でっかいのが入ってやがるなあ。今日もカンカン虫か」

追い込まれたドックの中で、七三七号が呟いた。ブラウスの胸ポケットから鍵を取出した婦人監視員によって、囚人達は漸く手錠を外して貰った。自分の手錠を腰鎖の左側に吊り、ロープから解かれると、手首を撫でる暇もなく労役が始められた。汚れない白い作業服の男がやって来て荒々しく指図し、それを受けた「E」印の連

中の言葉に従って、それぞれハンマーと小さなタガネを持った囚人達が艦底のあちこちに散らばった。

「アストレア型の重巡だぜ」

「そうかい。専門家だけあってよく知ってるな」

艦底の一角にとりついた彼と七三七号は、厚くこびりついた貝殻や錆にハンマーを振り下ろした。婦人監視員達は鞭を手に絶えず歩き回って、一五〇名程の囚人達の労役振りを監視した。ハンマーを振る腕が鉛の様に重くなり、咽喉の乾きで眼が昏む様になった、正午のサイレンが鳴り響いた。バケツで運ばれた残飯類と水を食ばった囚人達が、ドックの底にうずくまって短い休憩に一息入れて居ると、工廠の係員がやって来て婦人監視員達に何か言った。

「作業がおそいって言ってるぜ」

婦人監視員達がふかす煙草の煙を、羨ましく眺めて居た彼に七三七号が言った。

「全員お立ち！ 立って並ぶのよ」

動作のおそい連中は蹴飛ばされた。

「予定量だけ進んで居ないじゃないの！ 怠けると承知しないよ。鞭を当ててやるから、しっかり仕事をおし！」

四人の婦人監視員達は、片端から囚人達の背に胸に革鞭を当てて回った。呻き声があちこちで聞える。

「お前達まだだろ？ そら」

ブラウスに包まれた胸の隆起が躍って彼の胸に鞭が鳴った。

「ヒーッ」

呻いて身をよじった彼の眼に、大型拳銃を腰に吊ってドックの上から見下ろして居る婦人警備員のスカートが海風にはためくのが見

えた。

「鞭がまだなのは、もう居ない？ ああ、腕が疲れたわね」

「お前達、休憩はこれで打切りだよ。作業始め！」

再び苦役を始めた彼は足首の鉄枷の痛さに呻いた。散らばった貝殻や鉄片が足裏を責めた。

「痛いかい？ なあに二、三週間すりや固まって楽になるさ。足の裏だって靴底みたいにならあ。少し辛抱しろよ」

七三七号は簡単にそう言っ、艦底を叩き続けるのだった。夕やみが迫る頃、漸く苦役から解放された囚人達は、監房毎に並ばされた。

「何とか予定通り済んだわね。絶食は勘弁してやるわ」

艦首から四分の一程綺麗になつて居る艦底を眺めてE印達がホッと吐息をつき、続いて他の連中も安堵の声を洩らした。自分の腰から外した手錠を持った両手を揃えて待つて居る囚人達に、片端からその手錠が嵌められた。両手を背に回さねばならない重捕虜達は世にも悲しそうな顔をして居た。

「サンキュー・サー」

七三七号はもとより、あちこちでそう言う連中も居たが、彼にはとても言えなかった。彼の体はもう自分の体の様でない程疲れ果てて、立つて居るのが漸くだった。各監房毎にロープを連鎖に通されて一まとめにされ、ドックを出ると、直ぐ近くの足場の上で電気熔接の光が閃いて眼がくらんだ彼は思わずよろめいて膝をついた。走り寄った婦人監視員の鞭を背に受けて立ち上り乍ら、彼は無念の喚き声を制するのが漸くのことであった。投光器に照らされた夕暗の基地のあちこちの建物や構築物に爆撃の跡が残つて居るのを見た彼

は、重い足鎖を曳き摺り乍らせめてもの溜飲を下げたことだった。溝の上をいざり乍らの用便、そして痛い程のシャワー、残飯の食事恰かも獣の群でも取扱う様な流れ処理を朝と同様に受けた囚人達は各監房に追い込まれて床に打ち倒れて喘いだ。どこかの監房で絶え入る様な呻き声が断続した。

「また吊るされてるな。おい、さっき女の捕虜が四人程珠数繋ぎにされてるのにですれ違つたろ？ 先頭の若いのはいい女だったな」

七三七号はそう言つたが、彼は全く気付かなかった。

「女の捕虜達はずっと山手の収容所におち込まれてるよ。クラブや宿舎の雑役をさせられてる様だな。同じ所に収容して呉れないかなあ、ちくしょう！」

三、四日経つてその重巡の艦底の垢落しも今日で済むと言う日の午後のこと彼は婦人監視員に呼ばれてドックの外に連れ出された。「七三八号。ちよつと来るのよ」

今日の監視員は、彼が収容の処理を受けたあの赤毛の娘であった。腰から太腿にかけて、白いショートパンツがはち切れそうだった。腰の連鎖を鋏で打込まれて繋ぎ合わされて居る七三七号も労役の手を休めて一緒に出て来た。陽光に明るい突堤には一組の男女が寄り添つて立つて居た。プレスの利いた空軍将校の制服をスマートに着て制帽を小粋にかぶった長身の男の片腕を抱いてスラリと立つて居る婦人は、胸許を大きく開いた黒いドレスに灰色のハイヒール、肘迄掩われた片腕に黒いハンドバッグの吊革を掛けていとも楽しげに待つて居た。渋い光沢を放つ柔かなドレスや、暗紅色の幅広い飾り帯の端が海風を受けて、その曲線をえがいてはためいた。「来たわね。フッフ、私を覚えてる？」

地面を見詰め乍らショートパンツの娘に追われて近付いた彼は、婦人の声を聞いて全身が熱くなった。頭を起した彼の眼前に、彼を撃墜した婦人操縦士エリザベス・テラーの青い眼と紅い唇が笑って居た。

「先だっては、ひどい目に会わせて呉れたわね」

男の腕を放した彼女はハイヒールを鳴らして彼に近付き、真正面から全身を見回し乍ら言った。彼の両腕は思わず拳を握ってブルブルと震えた。

「お前の悪あがきの御陰でね、落下傘が流れて海に落ちてさ、塩辛い水を大分呑んだわ。その上によ『旋風』を手に入れた手柄も大分割引きされたの。一カ月はタツプリだと思ってた休暇がたった一週間よ。お礼を言うわ」

彼女は振り向いて男にハンドバッグを預けた。ドレスの背や肩も大きく開いて居て、なだらかな肩の上に肉付きのいい首筋が白く輝き、黒真珠のネックレスがまつわって居た。

「ちよっと鞭貸してよ」

赤毛の娘から借りた鞭に素振りをくれ乍ら白い歯をこぼして彼に近寄った彼女は、彼の腰の手錠に眼を留めた。

「ああ、それ嵌めて。自分で嵌めるのよ馬鹿！」

自分の両手に苦心して手錠を掛け乍ら彼の胸は煮えくり返ったが、所詮勝者と敗者、命令通りする他仕方がなかった。背に尻に胸に鞭が飛び、彼は悲鳴を押えかねて呻いた。

「両手を上にあげて……」

脇腹に一撃喰った彼は身をよじって喚いた。

「ギャーッ」

「ホホホ、そんなに痛い？ 次は腿の内側よ。脚を開いて……」
振り下ろされた鞭は吊鎖に当って鈍い音を立てたが、それでもその先端は左腿にピシリと鳴った。

「ヒーツ」

「鎖が邪魔ね。その吊鎖を握って横に寄せてね。フッフ、そう、そう」

青い眼をキラキラさせた彼女は、さも愉快そうに彼の腿の内側を前から後から鞭打った。ひかがみからふくらはぎにかけて二撃三撃を喰って彼は遂に膝をついてヒーツ泣いた。

「ネをあげたの？ それならちゃんとひれ伏して赦しを乞うのよ。したら赦したげるわ。アラ、此の下着、どうも具合が悪いわね」

鞭の手を休めた彼女は、黒いドレスの胸許からはみ出した白い下着を直し、薄いブラジャーのあたりに手をさし入れて工合を繕い、そして金髪のはつれ毛を撫でた。

「ホホホ流石に強情ね。では、もう少しヒーツ言わせて上げるわ」

突堤の端に蹴り追われた彼は、矢庭に海中に蹴り落された。意外に冷たい海水は忽ち全身の鞭痕に痛烈に沁みる。七三七号は突堤の端に腹這ってしがみついていた。裂く様な悲鳴を喚いて、海上一呎程の突堤にしがみついた彼の指先と手の甲に鞭が鳴り、踏みつけられ引きはがされた。手足に重い鎖錠をつけられて居る彼はしたたか海水を吞まされた挙句、漸く連鎖を引張る七三七号によって引上げられた。腰の鎖が肉にめり込む程強く喰い入って、彼はガボガボと水を吐いた。

「立つのよ！」

海水に濡れた尻に痛烈な痛みが走り、彼は死物狂いで立ち上った

ものの、眼はかすんで見えなかった。全身に焼けてを当てられて居る様な激痛に、もはや悲鳴をあげる気力もなく、唯喘ぎ呻く彼を眺め乍ら、彼女は、男に火をつけて貰った紫煙をゆっくりと吐き出した。

「どう？ もう一回鞭を浴びせて欲しい？」

がくりと膝を折った彼は、そのまま額を地面にすりつけて身もだえした。もはや、一刻も早く鞭から逃れたかった。

「お、お赦し下さいまし。お赦し……」

屈伏の哀願を聞いた彼女は満足そうに微笑んで、煙草の火を彼の頭に押しつけてねじった。

「ヒー」

「フッフ、顔を上げてごらん」

「おい、顔を上げるんだ」

彼女の言葉を聞取れなかった彼に、七三七号が注意してくれた。恨み骨髓に徹する婦人操縦士を見上げた彼の顔に痰が飛んで来てまともに当たった。

「これで気が済んだわ。さ、あなた、行きましょう。車は二号門へ回してあるかしら？」

預けたハンドバッグを受取った彼女は彼の頭をハイヒールの先でポンと蹴ると、男の片腕にすがって立去って行った。

「くそッ」

余りの屈辱に前後を忘れた彼は、矢庭に立ち上って彼女の跡を追おうとした。

「叶うことなら八ツ裂きにしてやりたい！ せめて……」

しかし腰の連鎖は忽ちぴんと張って、正坐した七三七号がずるっ

と四十センチばかり曳き摺られたが、引き留められた彼は、その鎖の先端で腰鎖を腹にめり込ませ上体を『く』の字に折って唯身もだえするだけであった。

「アラ、何を騒いでるの？」

振返った彼女は嘲笑を浮べて戻りかけたが

「おい、もういいじゃないか。おそくなるよ」

空軍将校の男に言われて踵を返した彼女は再び振り返ることはなかった。きらめく金髪の下首筋と肩の背の白さが彼の眼に灼きつき、彼は男泣きにおいおいと大声で泣いた。

「さあ、仕事よ。お立ち！」

赤毛の娘の鞭が肩に鳴った。外された手錠をうっかりして取落とすともたも鞭が胸に鳴り、彼は身をよじって呻いた。手錠を拾って左腰の金具に吊った彼はドックの中に追われ乍ら

「捕虜とは、こんなに辛いものか」

と流れる涙を止めることが出来なかった。

全身の海水が乾いて来て、鞭痕の痛さは痒さを伴って堪え難い程であった。耐え様がなくて洩れる呻き声も次第にかすれて来たが、労役の手を休める事は許される筈もなかった。真水で体を洗いだいと、どんなに切なく思っただけでも、南国の陽光は容赦なく全身を焼いた。堪らなくなつて艦底に潜ろうとすると、婦人監視員が容赦なく陽射しの中に引き出した。三度目に今度は赤毛の娘に見付かった彼は艦底を洗うホースの海水を頭から浴びせられてしまった。

「おい、大尉殿。鞭位でヒューヒュー言っただけや、みっともねえじゃねえかよ。え？」

工兵二等兵だった七一〇号が唇を曲げて彼をからかった。

「大きな顔して威張り散らしやがるけどさ、何だい、そのさまは！
将校の癖に、しっかりしろよ。ハハハ……」

駆け寄った赤毛の娘の鞭が七一〇号の脇腹に炸裂し、彼は身をよじった。

「自分の持場を離れて何をしやべってるの！」

続いて背に二つ三つ鞭を受けた七一〇号は、艦底にしがみついてヒューヒュー呻いた。

「ちきしょう！ あの小娘め。ああ、痛てえなあ。ヒューッ」

七一〇号は、立ち去る娘の後姿を睨みつけて恨めしげに呟いた。

「鞭は痛いからなあ。皆、鞭が恐ろしいもんだから、おとなしく働いてる様なものさね」

七三七号が誰へとも呟いた。

「あの婦人操縦士のエリザベスの奴をひんむいて、肌に鞭を思い切り当ててやったら、どんなに痛快だろう」

と考えると、彼は再び湧き上がる口惜しさ、無念さに歯がみし続けるのであった。

防空壕掘りや、荷役にも駆り出され、毎日々々激しい苦役に呻吟し続けて三カ月程が経った。友軍の爆撃のため荷役機械の半ばが動かないし、輸送船はきびすを接して入港して来るので、今日も囚人達は荷役労役を課されて居た。いくら運んでも際限のない重い木箱を担いで船艙と突堤の間を往復して居ると、ともすれば体がよろめいた。海に落ちてでも救っては呉れないのだ。突如、突襲のサイレンが鳴った。

囚人達の顔に喜びと不安の色が浮ぶ。空襲中は苦役からは解放さ

れるものの、どこにも待避等させては呉れないのだ。婦人監視員が声高く叫び罵り乍ら走り回り、囚人達を片端から一まとめにして行く。腰の連鎖を潜ったロープの両端の金具が附近の鉄柱に錠で結ばれ、囚人達の群れがあちこちに出来て行った。大抵なら後手錠を嵌められるのだが、今日は余程切迫して居るらしく、囚人達の処理もそこそこに監視員達も防空壕に駆け込む。

忽ち空は対空弾幕が張りつめられ銀翼がきらめいて爆弾が降って来た。ノイロンを注射されて居る彼、武林一郎はもとより、捕虜になる様な連中は皆命が惜しいらしく、声もなく震えおののいて居た。ロープの許す限り、思い思いの物陰に潜んで、歯の根も合わず見上げる囚人達の頭上に、精悍な単発機の銀翼の赤丸が舞った。

「旋風だ！」

思わず眼頭を熱くした彼の背後から地上掃射の機銃弾が頭上を掠めた。囚人達は恐怖の声を挙げ、その何人かは小石や鉄片を拾ってロープを叩き切ろうとし初めたが鋼線を芯にもつロープは切れる筈もなかった。

「俺達が居るんだ！ やめてくれ……」

囚人達の嘆きを吹飛ばす様に、遠く近く爆弾が落下し機銃弾が走った。あちこちで弾片や銃弾を喰った囚人が血を流してのたうち回る。恐ろしさのため殆んど失神した様になった彼は静まり返った周囲を見回し、そしてサイレンの音を聞いた。助かったのだ。爆撃下の地上に鎖をつけられたまま放置される恐怖は、これでもう何回目かと考え乍ら彼は大きな溜息をついた。あちこちに火の手と黒煙が見え、港内の艦船も十指に余る煙の柱を立てて燃えて居たが、眼前の突堤に横付けされた大型輸送船は無傷だった。死傷した囚人達が

トラックに積まれて運び去られ、再び苦役が始まった。攻撃された怒りに燃える監視員達の鞭が、容赦なく囚人達の肌に絶間なく鳴った。さしも大きな船艙も殆んど空になった頃、一台のトラックから十数名の囚人が降ろされ鞭で船艙に追い込まれて行った。彼等は女性性の捕虜達で輝く様なもの或いはパンツ一枚だけの姿、全身に鞭痕とマークがむごたらしく、鋼鉄の首環と鉄鎖で珠数繋ぎにされ、どこに送られるのかうなだれて船内に消えて行った。

その日は重捕虜達の『錠』が外される日であった。例の溝をまたぐ前に『錠』と後手錠とを外された彼等の殆んどはそれ所ではない様子であったが、タフな連中は喜びの声を挙げて溝をまたいだのであった。七一〇号は勿論喜んだ組の旗頭であった。シャワーを終えると彼等には再び『錠』が施されるのは当然のことであった。

「おやっ！ 何するの？」

七一〇号が情けなさの余りに、婦人監視員の指先を、また後手にされて居ない手で払いのけてしまったのである。その夜は七一〇号は壁の鉄環に吊られてしまい、半死半生の目に遭わされた。

「吊るすのはどれ？ 私、手つだいに来たのよ」

監房に追い込まれた囚人達を蹴り分け踏みつけ乍ら、赤毛の娘が眼を輝かせてやって来た。膝のずっと上の方迄まくり上げたデニムのズボンの中で腰やヒップがはち切れそうだった。

「私がね、ロックを嵌めようとしたら反抗したのよ。驚いたわ。此の七一〇号の奴よ」

殆んど言葉の分らぬ七一〇号は、その分厚い唇を大きく開いて、既に後手錠を掛けられた身をもだえひれ伏して哀願し続けた。何か苦しい罰が加えられる事は分るらなかったが、二人の婦人監視員達

は耳も藉さず、運び込んだ台上に七一〇号を追い上げて立たせた。壁際においた台の上方の壁面には鉄環が黒々と垂れて居る。七一〇号の後手錠の片手が外され、その錠がギリギリ鳴って少しすばめられて壁の鉄環を潜り、そして再びガッチリと嵌められた。不安におのく七一〇号の足下の台が無慈悲にも取り払われた途端、その歪ましい体が壁に沿って三十センチ余りずり落ち、苦痛の絶叫が監房の空気をつんざいて響いた。足が必死に壁のコンクリートをこすり懸命にまさぐる足指の下方六十センチ程に床があった。絶え間ない呻きと喚きの合間に、七一〇号の腕と肩の骨の軋みが聞える様だった。

「七一七号。これをつけておやり」

同じ連鎖に腰を繋ぎ合わされた七一七号は、坐る事も出来ないで震え乍ら立ちすくんで居たが、後手錠を片手だけ外されて渡された物を見て一瞬ためらった。

「ぐずぐずしてると、お前も吊るすわよ」

ビクリとした七一七号は、既に全身脂汗の七一〇号の前に回った。長さ四十センチ程のずっしりとした鉄鎖を、その一端についた細い鎖と錠によってぶら下げるのである。感付いた七一〇号が脚を閉じて拒みもがくので、更に一組の囚人が命令されてその両脚を開いて壁に押しつけた。

「勘弁しろよ、な……」

七一七号が低く呟き乍ら巻きつけて錠を掛けたのを、赤毛の娘が棒切れの先で突つき回し乍らジーンと検査をし、そしてぶら下がった鎖を下に引いた。

「ギャーッ」

喚きと共に七一〇号の口から涎れがダラダラ垂れた。

「お前も今夜は寝る事は出来ないのよ」

鎖仲間の七一七号は、低い方の鉄環に後手錠を通されて嵌められ、壁に背をつけて立ったままうなだれた。何の落度もないのに連座させられて罰を受ける悲しさに七一七号の顔が歪んだ。鉄扉の施錠の音がやけに大きく響き婦人達の立去る足音を聞いた囚人達は、悲痛な呻きをあげる七一〇号を眺めて可哀想に思った。傍へ寄ってその鎖を持ってやり、そしてその足の先を背に受けてやり度いと言う思いは誰も同じであったが、頭上を見回る婦人監視員の眼は鋭かったし、それに疲れ果てた我が身は他人の事等を構っては居れなかった。七一〇号の足先が更に下がり、絶え入る様な呻きが此の世のこととは思えない様に断続するのを聞き乍ら、彼武林一郎もいつしか寝入ってしまったのであった。

翌朝、哀れな七一〇号は、もはやビクリとも動かず一声も発しないで頭をガククリと垂れて死んだ様にブラ下がって居た。もう死んで居るのかも知れなかった。半ば開いた両眼は不気味に白く、くろずんだ舌をダリと垂れて、両肩の辺りは異様に盛り上り、そして一夜にして肋骨が浮き出たまま居る。足指は反り返ったままその下の床の上には垂れ流した汚物が溜って居り、見て居ると足指の爪の間の辺りから薄赤いものがトロリと細い糸を引いて滴たるのが見えた。

「もう死んだのかしら？ 案外だらないわねえ。ま、焼燬を当てて見れば分るけど……」

やって来た赤毛の娘が仲間の婦人に言った。

「昨夜の二時頃からよ、ウンともスンとも言わなくなったのは」

頭上に立った婦人監視員が、同僚の女性に対してはスカートの裾を押え乍ら見下ろして鉄格子の天井越しに言った。

「そうお。まあ、兎に角、一応の処置だけはしてやらなくちやね」手近の囚人が床の汚物を始末させられ、台がおかれて七一〇号の体が下ろされた。娘の靴で小突かれてもビクリともしない七一〇号の尻に、耳を掩い度くなる程非情な鞭が鳴った。

「全然感じないわね。お前、これを背負ってついておいで」

七一〇号の体は鎖仲間に担がれて運び去られ、他の囚人達はその日の苦役に追い立てられた。

「お前達もおとなしくしないと、あんな目に遭わせるわよ。分った？ 七三八号、皆にそう言っておやり！」

赤毛の娘は、囚人達の連鎖にロープを通し乍ら勝ち誇った様に言った。七三八号囚の一郎は、いつけ通り大声で通訳し乍ら無念の思いに咽ぶのだった。七一〇号はとうとう帰っては来なかった。

今日も船団が入港して来て、囚人達は荷役に脂汗を流した。武林一郎達が取りついた中型輸送船は被爆してデリックが動かない。架けられた広いタラップの斜面を、囚人達は往復して重い木箱を運び出す。港内には接岸を待つ船の群れがひしめいていて、監視員達は鞭を鳴らして督励するのであった。『婦人部隊用被服』とマークされた木箱を二人で担いで斜面を喘ぎ乍ら降りて来た一組の先に立った七三〇号が足を滑らせた。スコールが沛然と来て忽ち去る南国には珍らしく朝からの鉛色空が小雨に煙って居たので、濡れたタラップに足を取られたのだ。足鎖をもつらせてよろめいた七三〇号がタラップの端で倒れると、古い手摺は脆くも折れて七三〇号の体はタ

「箱は海に落としたんだね。あとで処罰するから兎も角仕事をやるのよ」

「お前達も何故早く立たないの？」

「おや？ 肋骨を二、三本折ったらしいわね」

その日は夜おそく迄、投光器の光の中で苦役させられた囚人達は

翌朝もいつもの時間に叩き起された囚人達は、毎朝の処理を這う様にして受けた。一郎の全身も鉛の様に重く硬張って、動かす度に彼は呻いた。此の体で今日も苦役かと思うと本当に泣き度くなってしまうた。

頭を黄色に塗られ、ロックをそれぞれ嵌められ乍ら彼等はオイオイと泣いたが、大切な軍需品を海中に落した罪は赦される筈はなかった。鉄の首環を嵌められる時、彼等の頬には大粒の涙が止め度なく流れた。

「ああ、なんてひどいことをしやがるもんだらう」

「大きな病院の地下室でよ、古い軍服を着せられてさ、体に銃弾を
射ち込まれたり、機械で骨をポキリと折られたりしてさ、新米の軍

医や衛生兵達の稽古台にされたのさ。火焰放射器が大火傷させられた奴も居るし、刀で斬られた奴も居たなあ」

直ちに手当を受け得た囚人はまだしもよかったが、定められた時間を放置された連中は、哀れにも大抵命を失ったのであった。

「それでも、二十人足らずが何とか助かったぜ。その中で元氣そうな俺みたいのが十人ばかりここに逆戻りさ。他の連中はどこに連れて行かれたか知らねえが、どうせ碌な目に会っちゃ居めえ」

すると、一郎の隣りで七三七号が呟いた。

「生体解剖だな、多分……」

「セイタイカイボー？ 何だい、そりや？」

七一九号が顔を床に摺り付けて掻き乍ら訊ねた。

「生ま身のままで解剖されるのさ」

「そんな無茶な！」

七一九号は声を震わせておののいた。

「皆、七一九号の話をよく聞いたかい？ 反則を重ねると、そんな目に会わなきゃならぬのよ。材料はいくらでも要るんだからね」

頭上から降って来た婦人監視員の残酷な言葉を七三七号が通訳し

囚人達は声を吞んで戦慄した。

「おい。そんな事してもいいのかな。国際捕虜取扱協定とか言うのがあるんだろ？」

「そんな事言ったってどうしようもないじゃないか。第一にさ、我が政府は自軍の捕虜に関しては、何の意思表示もする筈がないからな。諦める他ないな」

七三七号はヒステリックに言い捨てると鎖をガチャリと鳴らして寝返りを打ったのだった。

武林一郎が囚われの身となつてから半年以上経ち、友軍航空隊の空襲も次第に間遠くなつた或の日の朝、一郎達四名は、苦役に駆り立てられる他の連中とは離された。全監房から集められた五十名近くの捕虜達は今迄の手錠を外されるや否や、後手錠を鉄で打ち込んで固く嵌められた。両手首の鉄環はやけに重たくて、しかも環一個で連結されて居るために、両掌を外に向けて両手首を殆んど接したまま背後で垂れた両腕は、僅かに前後に動かせるだけだった。足枷、腰鎖、連鎖はそのままで二列に並んで囚人達は例によって鋼線入りのロープを連鎖の中央に通して十名位宛一まとめにされて追い立てられた。されるままになつて居るしか仕方のない囚人達は、不安の念におののいたが、連れて行かれたのは港の埠頭で出港間際の輸送船であつた。彼等が船艙の一隅に追い込まれて間もなく汽笛が鳴り、彼等を送つて来た二人の婦人監視員は伝票にサインを貰うと急いで下船して行つた。船艙では鞭を片手の海軍婦人部隊員二名が囚人達を立たせて、書類と照合し乍ら一名宛全身を点検し、そして細い鎖で首に番号札をつけて回つた。

「次はお前よ。頸を上げて……」

上体を曲げて差伸ばした首に鎖を巻きつけられ乍ら武林一郎はみじめな思いだった。彼の前に立った若い婦人の青灰色の制服の下から漂うわきがの匂いが、船艙の油の臭いに混って強く鼻を打った。便はそのまま垂れ流す他なく、日に二回、ポンプから猛烈に噴き出る海水が床を洗った。毎朝、四名に一個の割で与えられる洗面器の様な物から残飯類を食ぱり水を啜ると、それでその日はもう何もする事がなかった。手が使えない食事のみじめさに彼等は齒ぎしり

したが、飢渴には勝てず、婦人船員の号令を待ちかねて、先を争って頭を洗面器の中に突込むのであった。

五日目の朝食が浅間しく済んで暫くした頃、船内に唯ならぬ気配が流れ、鋭い声がスピーカーで喚いたと思うと船は大きく傾斜して転舵した。船倉の床でごろごろして居た囚人達が折重って壁に押しつけられた途端、激しい衝撃が船体を震わせ、暗い電灯がスーッと消え、船殻が方々で軋み、そして壁がはじけて裂け飛んだ。潜水艦の魚雷を喰ったな、直感した一郎は、次の瞬間渦巻く海水の中で後手錠の身をもがき乍ら、崩れ落ちた積荷の下敷きになって気を失ってしまった。ふと、気が付いた彼は、こわれた木箱に包まれる様にして海面に浮いている自分を見出した。七三七号との連鎖は途中で断ち切られて居て、長い間の鎖仲間の姿は見え、彼は唯一人うねりのまにまに揺られて居た。連鎖は切れて居たが、手錠足錠はビクともせず両手両足に食い入って居る。囚人達の中で助かったのは彼一人であった。彼が落ちない様に気をつけ乍ら頭を上げて見回すと船団は既に遙か彼方を避退中で、低速航行中の一隻の護送駆逐艦から下ろされたボートが数隻、附近を探し回って船員達を救助して居た。遠くの方で爆雷の響きが鈍く断続して居る。

「助けてくれえ……」

間近を漕ぎ行くボートに彼は必死に呼び掛けた。しかし双眼鏡でこっちを見て居たボートの指揮者が手を横に振って何か言うと、ボートは微かな嘲笑を残して去って行った。

やがて海原のうねりの中に彼は独り残された。こわれた木箱から放り出されかける度に、必死になって脚をからませ手の指を掛けて防いでいると、手錠でこじた両手首がすりむけて骨が疼いた。咽喉

が乾上って全身は海水でヒリヒリ痛く、彼の胸中には死を希う想いが微かに湧いては消えた。しかしノイロンの効果は薄れて来て居たとは言え、死なせては呉れない。容赦なく照りつける太陽と、身に施された鎖錠が恨めしかった。中でも後手に嵌められた手錠は本当に怨めしい限りであった。しかし彼は全く運の強い男であった。死闘数時間の後、もはや力も尽き果てた頃、近くの海面に浮上した潜水艦に拾われたのである。

「おーい、しっかりしろ！」

太い声の母国語が低い甲板上から聞えて来て、彼は安堵と嬉しさに泣かんばかりであった。しかし忽ち彼は自分の浅間しい姿を思いそしてきびしい軍律を想い起しておののいた。投げられたロープにすぎる術もなく、彼はやがて一人の水兵が縄一本になって甲板から身を躍らせるのを眺めた。

「おや？ 何だお前は……」

泳ぎ着いた水兵は一瞬不審そうな顔で眺めて手で顔をブルンとこすった。

「ああ、貴様捕虜だったんだな。馬鹿野郎！」

軽蔑の色を見せた水兵は、ロープを彼の足鎖に結びつけて合図した。木箱から引き摺り落された彼は水中深く沈んでもがき乍らしたたか海水を呑み、そして潜水艦の舷側をずるずると足から先に引上げられて行った。そして今度は頭から先に昇降ハッチの中に放り込まれ、やがて充電航走を始めた艦内で彼は艦長の取調べを受けた。

「お前は連合軍の捕虜となって居た友軍の一員だと思いが……」

「ハイ。そうであります」

「捕えられた時の官姓名と所属は？」

「海軍飛行大尉武林一郎、ラパール基地三〇二航空戦隊……第三分、分隊……長……」

彼の語尾は恥辱でかすれ、彼の体は直立不動の姿勢を保とうとしたが全身がわななないで頭は深く垂れてしまった。腰鎖の前から下に垂れて足鎖を吊って居る鎖が、肌に冷たく触れてチャラチャラと鳴り、彼は全身を真赤に染めて噁り上げた。

「こ、こんな姿で……」

「フン、恥かしいと言うのか？ 貴様は、当艦が撃沈した輸送船に積まれて居たと思えるが……。今迄どこに居た？」

「ワートダリンの敵基地の収容所に繋がれて居りました……」

「で、捕まったのはいつどこでだ？ フン、それで何だと？ 被弾して不時着して気絶したんだと？そして女にフン縛られたって？」

司令室に居合せた将兵も声を合わせて嘲笑した。

「そ、それから、その敵機を奪って帰れる所迄帰ろうとしたんでありますが……」

「もう、そんな事はどうでもいいんだ。あとで法務官にとっくり申上げる。ところで貴様は、帰還して法務当局に引渡す迄、当艦に拘禁する。軍刑法第三十二条だ。分ってるな」

覚悟はして居たものの、彼の体から力が脱けて彼の膝がガクリと落ちた。

「こら！ しっかり立って居ないか！」

艦長は鋭くビンタを当てると、彼の周りを回って調べた。

「戒具は鉋で留めてあるんだな、外してやれないでもないが、このままでもいいだろう」

艦長は主計兵を呼んで彼を引渡した。

「何か食わせてやれ。水も少し吞ませてやれよ。怪我はこれと云ってないな」

狭い通路を這う様にして、彼は炊事室の隣りにある拘禁室に連れて行かれた。拘禁室と言っても倉庫の片隅を鉄格子で仕切った一米に二米そして高さ一米位の檻である。そして就役以来使用されたことのない檻の中は食料倉庫に利用されて居て缶詰等が積んであり、また檻の上の物入れは被服庫らしかった。

「こら、ボンヤリしてないで手めえの入る所を片附けろ」

主計兵の上水は彼を叱りつけたが

「そうか。後手錠じゃ仕方があるめえ」

と舌打ちし乍ら檻の中をざっと片附けると、目顔と拇指とで中に入れと命じた。

錆びた錠前が漸く掛って彼は檻に閉じ込められた。無性に悲しくなった彼は、檻の床に顔を押しつけて、腹の底からこみ上げて来る嗚咽に肩を震わせて泣いた。

(未完)

『宇宙のどこかで』について

誌面の都合にて、五月号、六月号と二カ月に亘り休載いたしました。誌面が非常に限られておりますため、一回分を十何頁にも費すことは許されませんが残念ですが、一回分の分量を減少してでも継続して掲載したいと思います。いずれ増頁の機会がありましたら、その節は大幅に本稿の掲載量も増すことができるでしょう。マニヤの方々御愛読をお願い致します。

〔読者体験記〕

ある彷徨

—青春期の思い出—

岩崎 美佐子

私が其の人に会ったのは、高校を卒業した春、洋裁学校へ通い始めた頃であった。月謝を払う事で、其の学校に席のあるのを確める様にしか顔を出さなかった私は、毎日のほとんどをダンスホールに入りびたっていた。

其の一夏を風靡したカリプソが、まだめずらしく、流行を追いかける事を生がいにしてゐる様な私達は、そのカリプソ・スタイルで颯爽と町を歩いた。それでいて常連と呼ばれる人達の間でしか、踊られなかった程ウブなところもあった。桜の季節も終りに近づき、むっとした人いきれも感じられる日もあると

云う、晩春の或る日、私は行きつけの駅の地下にあるホールで其の人に会った。

たくましい筋肉質の身体と、浅黒い皮膚を持つ彼は、其の長身をシルバークレイの背広でつつんで居た。深く切りこんだ目が、暗く光っていた。私は彼は興味を持った。

始めて会った、あのホールでの一日の後、私達は、日毎の会う瀬を重ねた。そして、三カ月の後、彼は私の目の前から忽然と消えて行った。一言のことわりもなしに。去っていった彼に、私の心は、つくるうすべもない様に切りさかれた。

高いカリプソのリズムが、其のうす暗い酒場にあふれ、私に酒に酔う事をおしえた。ダンスのカウンターをすべるあの軽快な音に、朝迄の時間の使用権をかけて遊び呆けた。そんな生活が私には、なくてはならなくなった頃そのあろうべくもないやくざな世界に足を取られて、彼は去って行ったのだった。

唯一枚の名刺をたよりに、私の悲しみをみかねた母が、彼の家を、訪ねていった。「前科があるんだってね、それに奥様も、子供もいるんだって。」

母は、特有の、甘い語尾の上った口調で唯

「告白の始めに」

何故、この様なものを、はずかし気もなく書きつづるのか。

私自身にも判らない。若かった日の、それは私の無軌道な生活の一断面でもあり、私の悲しいサガ(性)の歴史でもあった。しかし、それは無軌道で奔放であっただけに、私にとっては楽しく、むしろ楽しいとさえ思える日々であった。

現在、私は退屈ではあるが、やさしい夫と幸福な結婚生活を営んでいる。私の心の中に縄を買いいたいという気持が起った時、私は夫との間に深い溝のあるのを感じる。その埋めることの出来ない断層が私をして若き日の生活を語らせたのかも知れない。文字を書くという習慣から放れて、もう三年余り、たどたどしいペンで、それでいて、私にとっては大変な努力で、書き上げた文章である。若し、今の私に平穏な退屈

そう云っただけであったが、私は、母の目の中に、いたわりと、おろかな娘に対する怒りを感じた。

私の生活は、荒れて行った。私は心では母にすまない気持で詫びながら、身体は心とは反対に、母の悲しみに反発していた。自由な

さと、過去に対する懐古の情とがなかったならば、きっと、この厄介な文章は綴らなかったろう。

尚、文中に出てくる「あっちゃま」と云う名は、私の事であり、高校時代のある日マンガの中から、アダ名をつけることが流行した頃、「アッチャニ」あのおませで、変に甘ったるい男の子が、私の印象に似ているとかで、つけられたものだが、いつの間にか、私が自分自身の事を呼ぶ時の呼称となっていました。

愚かで、気まぐれで、移り気で、そのくせ素直で、そして多情であった私の青春の日、それはマニヤと呼ぶには、余りにも稚い、青臭いものでしかなかったのだが、そのむきだしのものだけを取り上げると、全然、私としての私らしさが残っていないような気もするのだが、私がその中で生きた事は事実であり、ぬぐう事の出来ぬ傷なのだろう。

時間の獲得のためでしかなかった洋裁学校が、私の心の中でしめる其の地位が、其の時から一変した。デッサンにデザインに私は夜の一刻以外の全ての時間を没頭した。そしてそれと平行に私の夜の遊びは、ひどくなっていた。

深夜の酒場にクラブに、私は夜毎に盛り場の、其の変に不健康な青白い光の下を、徘徊した。しよせんぬぐい切る事の出来ぬ心の傷手のゆえに、私は刹那的な快楽を追っていた。愛欲の中へ私は、自分の心と身体を、とっぷりと浸してまひさせ様としていた。そして私はおじ様に会った。

私の父親程の年輩の彼は、一見もの静かな紳士であった。妻を此の二年程、郊外の療養所に入院させているという彼は、しかし、その外見に似ず、私を責める手は、はげしかった。

私は、彼によって「縄の味」をおしえられた。縄で縛られるということは、おちやっぴいの私にとっても初めての経験だった。それは、はげしいものではなかったが、私にとっては、この世に対する一つの大きな開眼であった。

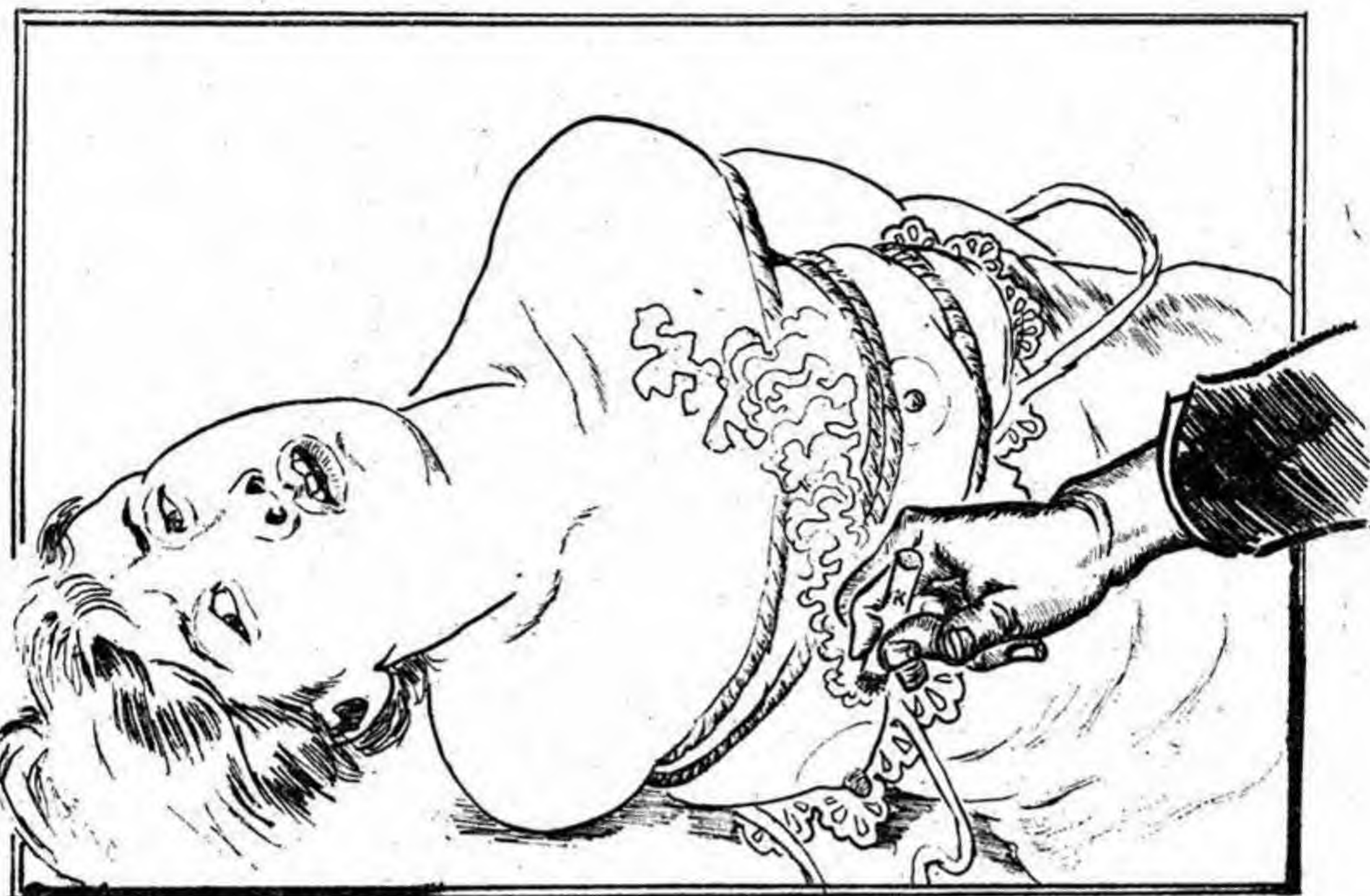
「いや、おじ様、あっちゃま、いや、ああ、やめて。」

彼の手に私の腰紐がにぎられると、私は、痺れるような期待とおそれとで逃げ回った。しかし、此の芝居気のたっぷりな小生意な娘は、甘い媚態で、彼の心を拒否する訳でもなく、受けいれるでもなく、遊びたわむれた。

彼はもう若い頃から、そういった女を縛るといったことは馴れているらしく、若い女を扱うテクニックには長じていた。決して手荒な事や乱暴な事はしなかった。しかし、細い女の様に白い指先からたぐられる紐の力は強く、所きらわずくすぐった。筋ばった指は、あく事を知らず私の全身に襲いかかった。

長襦袢の上で、そして、一越の絹のしなやかな長着の上で、私の身体に蛇のような紐が巻きついていて。幾すじかの腰紐や、色あざやかな伊達巻が、彼の手で、私の素肌を、かざっていった。赤や、ピンクの美しい紐がその絹特有のぬれた様なきしみで、私の身体を色どる時、無遠慮にのばされた彼の手が、そのはめこみの鏡のおおいを取る時、私は云い表わす事の出来ぬ感激にむせび泣いた。

後に回された手が自分自身の重さにしびれ、そこだけが油ののったほの白い太ももが、自分の胸を圧し、私はそんな奇妙な恰好のままで、放置された。私は次第に身体ばかりか心までが



彼に支配されているような気になった。

彼が私の生活の大部分を占め、彼なしては私の心の中がまるでぽっかりと穴が開いたような渴きを感じた。だがそれは遅かった、彼の妻に知れたあとであった。

私は中年のおじ様と同じに私達とは血のちがう、食物の好みもことなつた中国の女性の訪問をうけた。彼女は、肥満していた。切りこみの平坦な血の浮の感じられる。変に丸いつるりとした白い皮膚を持った彼女の手は、怒りでふるえていた。私は酒場で彼女に会った。

「あたし、あっちゃま。おば様誰？」

「Sの……」

私は、そこ迄聞いて情けなくもにげ出した。彼女の凄惨な形相がおそろしかった。卑怯な私は、自分の起した面倒さえも、自分で後始末をする事が、おつくうだった。後を追って来た彼女に細いヒールの歩みの遅さのために忽ち追いつかれてしまった。

彼女は私の衿すじをつかみ、もはや

大戸を落した盛り場のとある店先へおしつけていた。

私の方がいくらか上背があった。しかし私は、彼女の圧迫にあがらうべき闘志をうしなっていた。常の面倒くささと、何事が起るのかと云う所定めぬ好奇心と、彼女の夫をうばったと云う事実に対する後悔とが、私の心を満していた。

しかし彼女の手に、細い高歯の下駄がにぎられた時、私は恐怖心のとりこになった。

「人の事を馬鹿にして……このどろぼう女が……子供のくせに。」

その口ぎたなくはきかける言葉は苦にならなかったが、打ちおろす高下駄のうでの確さは、身にしてみた。その始めの一つが顔に当たった時、私は「勝手にしゃがれ」と思った。私は大きい声で、彼女の手の上下にあわせて、数をかぞえていた。

しかし、十も数えぬうちに、私は歯に当たった其れのために、口から血をふいていた。それでも彼女の狂乱は続いた。片足立の白い足袋が、ほこりによごれて地に着き、けあげた歯のするどさが、うすいストッキングを通して、私のももに痛撃をあたえた時、私の腰は地に着いていた。

意識のうすれる中で、二十の数を数え終る頃、私は、血のにおいに酔っていた。普段であれば、小指の先の細い傷にも、血のにじむ事で目まいを感じて、医者にとびこむ私は口から、鼻からあふれる血が、白いワンピースをそめて行く事に、どうしようもない、心のふるえを感じていた。

私が、血に酔う様になった始めであった。

私の被害は、ものすごかった。前歯がきれいに半分から折れていた。口びるがはれ上り、おしゃれな私は、鏡の前で泣き通した。錠をかけたアパートの一室で、ふとんの中にもぐりこみ、その中でさえマスクをはなさなかった。顔と身体の青あざがなおるのに、私は半月をついやした。

私と、おじ様の交友はこの日から切れた。

そして私は、私の心に痛手を与えて去った彼と別れて二年程の後、その学校のデザイン科で、ある程度の特技をうわさされる様になっていた。私は二十才になっていた。母の怒りへの反発は、これで消えた。私は、独立の自由を得た。

そして、そんな春、私はダンスホールで、又彼と会った。期待のない文字通りの偶然であった。

相変らずのあかぬけた長身は、もうそれだけで、私の心をうばっていた。私は彼の後を追った。仕事をすてた。我儘な一人娘として愛してくれた美しい母とそして父をすてた。彼との生活は楽しかった。昔日の冷たい仕打を取りもどすかの様に、彼は私をいつくしんでくれた。しかし私が持ち出したお金が底をつき、仕事を持たぬ彼との生活は、とどまる所もなく下落していった。

私は生れて始めて「ドヤ」と呼ばれる所に住んだ、横浜の高級住宅地である高台を背に伊勢作木町の朝迄続くネオンを前に、そこは暗い谷間であった。下級の外国船員相手の外娼や沖仲士と呼ばれる港労働者や、日雇労働者や、そして麻薬で貧血の感じられた皮膚を持った定職のない人達。彼等は、いずれも光に背を向けて住んでいた。個々に分けられた三疊の間は、夜具をのべると足のふみ場もなかった。

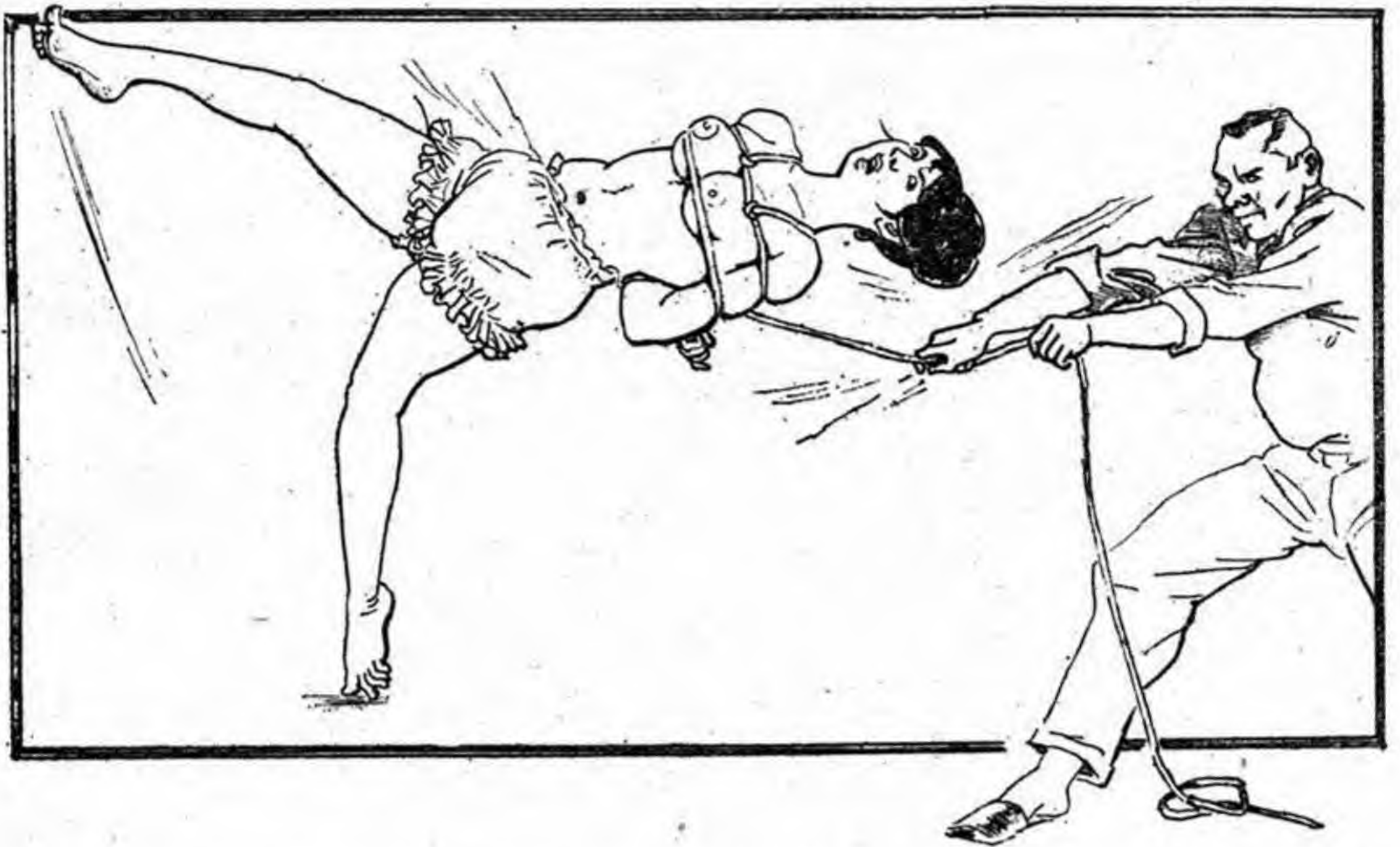
其の頃、彼の犯した罪は、私にとって知るすべもなかったが、警察に追われていた彼は私との生活をささえるべく、昔なじんだ、やぐざな世界に足をつけていた。私はつかの間の幸のために生きていた。すえた匂いのする其のドヤ街は、なじめ切れるものとは思えな

かったが、私は彼の居るという事だけで、幸福であったし、満足した。となりの部屋で、通りすがりの女の人が犯されていても、そのせつない悲鳴にさえも耳をかさず、光の高い午後、蒲団をかこんで花賭博をやっているという彼等にも、私の姿は奇異に写っていた様だった。

お金が出来る、クラブのテーブルを予約し、ハイ・ヒールのかかとでふみつけるにあまりにも惜しい様な豪華なジュータンの上を歩き、港の夜空の朝もやも真近いそんな光りをながめながら高台の高級ホテルに泊り、そして又一銭もない、すえた部屋で、夜通し裸電球の下でサイコロをふる、といったそんな生活にも私は次第に慣れていった。

生活の変動に抵抗力の少ない私は、どんな生活にも入っていける順応性が強かったのかもしれない。

しかし私は、そんな生活の明け暮れに、怠惰な情事に、そろそろあきを感じていた。同じ部屋で、およそ朝からその次の朝迄、顔を合わせていても、



彼の手がほんのささいな私の小指の先にふれてでさえも、心の引きしまるふるえを感じる程、彼の事が好きであったが、慣れ切った、変化のない快楽にはあきていた。

私は浮気をした。変に単純な心の動きであった。酒場の高い止り木で、ふとなりあったその人に、胸毛があったという簡単な理由だけで、私は見も知らぬ男と一夜を共にした。朝の光りが見覚えのないベッドに反射した時、当然の事ではあるが、私は後悔した。

車で帰った部屋の中に、ねもやらず暗い光をはなつ目が、赤くよどんでいる彼を見た時、私は血が自分を呼ぶ事を悟った。

嫉妬に狂った彼の手は、私が今まで知った彼のどんな時の手よりも静かであった。彼の平手が、私のほほで鳴った。そして返した手の甲が私の鼻をかすって通った。私は鼻血を出した。それだけでもう、私は興奮した。私は彼をもっと怒らしたいと願った。そして、もっといじめてもらいたいと願った。私の身体に知らされた皮膚の血がとんでもない時に頭をもたげて来たのだ。私はたち上った。

「あたし帰る。あっちゃま、お家に帰る」

の。サヨナラ」

「オイ、勝手な真似をして来て、それが俺に對するあいさつか！」

彼の足がまって、私は腰をけられていた。しきつめた夜具の上に、ぶざまにたおれた私は、しかし、彼を追いつめる事はやめなかった。

「あっちゃまの勝手でしょ、何をしたって」しかし、私の予期に反して、彼はそれ以上の攻勢に出なかった。

「誰と、ねて来たんだ」

冷たい声に、私は彼との生活の終りを感じて、ふっと弱気にたじろいだ。考えもしない事であった。

「ごめんなさい、少し、飲み過ぎただけなのよ。ママに聞いてもらってもいいわ。ね、ごめんなさい。」

私は反証のない謝罪の言葉を言い続けた。血の引いた顔を上げると、彼は戸を出て行った。外から錠のかかる音がして、戸がきしんだ。私は、夜具が自分の血の斑点でよごれるのを目で追っていた。そしてうつろな時が流れた。

戸をあけて入って来た彼の、衝動的な怒りの去った、落着きをみた時、私は空恐しかった。

た。彼の性格だった。怒りをおさえた青いほはは、その示す冷静さのゆえに、そのくり広げる行動の残酷さを物語っていた。

彼は無言のまま、私のスーツをはいていった。私はあがらうすべを知らなかった。私が夜具の上にはり投げるようにころがされてもその静寂はつづいていた。すつとのびた手が、私の下顎をとらえ上へ向かせた時、私の心に後悔の念が走った。

うすい皮膚のにじんだ赤いキス・マークが、それはのばされたのども、幼いふくらみをみせる胸乳の上にも、あざやかにされていた。決定的な浮気の証拠であった。細いロープを取り出した彼は、私の手を後へ回した。それは痛いという程ではなかったが、無言のその行為に、私は本能的な恐怖を感じた。

陽気で気まぐれで、自分の容貌や容姿に絶對の自信のあった私であったが、鼻をならして、機嫌を取るすべもない程に、彼の動作は緊張していた。

タバコを口にくわえて、火をつけた彼の目は、冷酷に笑っていた。私は自分を取りもどした。

「かんにんして、もうしないから、ね、あつ

ちゃま、かんにんしてー。」

彼は、そんな言葉を無視して私の腹をまくらにねころんでいた。そして、向きをかえると、私の身体の上に、その長身の重圧をかける様にして、どしんと尻餅をついた。背後に回わされた手がきしむ様な痛さで、彼の重さを私に告げた時、私は悲鳴を上げた。

「あつ痛い、あつあつい、痛い、かんにん、あつーッ」

彼の手が、口にくわえていたタバコをにぎり、私のキス・マークの浮いた胸乳におしつけられていた。あつかった。しかしそれはあつい等と云うものではなかった。

皮膚を焦す臭気が鼻につき、私は意識のうすれて行くのを知った。タバコは、私の白い胸乳の上でもえ、カサカサの灰をまきちらして、そして消えた。皮膚に残るヒリヒリとする痛さと、その臭気に私は泣いた、

彼の目は、相変らず冷たく笑っていた。私の足がぴんと伸び、指先に力が入り、それがいたずらに、空を蹴るような形になるのを、彼はながめていた。そして又、タバコに火をつけた。私の胸に三つの斑点が残った。それは乳首をかこむ様に、きたならしい灰を残したまま、消えぬ烙印のようなくぼみを造って

いた。

「当分痛いだろう、火ぶくれになるぜ」

彼はかわいた冷たい声音で、そう言っただけであった。私の身体の重圧はとかれた。うずく様な痛みが、なお執拗に私の身体

をとらえていた。

彼との生活は、其の後二カ月余り続けられた。彼の嫉妬の変形されたにくしみと、浮気で多情な私の彼によせる愛情の生活は、彼が獄舎につながれる迄続けられた。

(終り)

△編集部注▽筆者岩崎美佐子さんから、近影として一枚のスナップ写真を原稿に同封されてきました。誌上での発表は見合しておきましたことをお断りしておきます。

映画

「私は死にたくない」

について

遠藤 一



かって多くの賞を獲得した名画「私は死にたくない」、が再上映されています。

この映画に、「ガス死刑室」に於て無実の罪に世を呪い乍ら、殺される、女囚に、S・ヘイワードが紛している。

この映画に示された、彼女の演技は、私達「奇ク」愛読者、責マニヤにとって、みのがすことのできない映画で特に、鼻責マニヤ

にとっても、「垂涎おくあたわざる」傑作です。

ラストシーンにおけるガス室のせいさんな場面に、彼女S・ヘイワードが、若かりし頃、今は亡きゲイリー・クーパー等と「ポージェスト」で共演した純情可憐な娘役スターとして、その初々しさで燦いていたのが、見事に演技開眼し、あのガス室における、人間

の生への限りなく執着する表情を巧みに演じる凄まじいまでの迫真力は、責マニヤをきつと満足させてくれることと信じます。

毎号「奇ク」に登場されて、私達を喜ばせてくださる、モデル諸嬢にも是非見て戴いて今後の参考にされてグラビヤを一層充実させて戴きたいと思います。

接写で、たんねんに、たんねんに写されて全身から責められている、という動きをにじませて責マニヤをグンと魅きつけます。

その中でもガスを吸い込んで、苦しみもがく手の動きによって、一層画面が引き立って貴方のノドを唾がゴクンと飲みこむ音が判ります。これは僕の推理ですが、彼女S・ヘイワードは、ひょっとしたらマゾヒストではないかと思えます。

演技以上のものが、あの素晴らしい被虐感には出なかつたんじゃないかと……。

警察から刑執行場へ移されるとき、黒皮の巾の広いベルトに、前手錠をされた両手首に

鎖でつながれて、四、五人のたくましい男に囲まれて曳かれ行く女囚……。

皮と鋼鉄に自由を奪われて、追い立てられ歩く姿は痛々しいまでに、哀れさを見せて囚人の命を断つ、ガス死刑室に曳かれて行くのです。

いよいよクライマックス、*「ガス死刑室」*です。ここでも女囚は数多の男の中で、大男の看守にガス室に入れられ中央の頑丈な椅子にムリヤリ坐らされます。

黒い目隠しがされます。ガスを吸わされるのですから、目だけです。

美しい鼻がグッと反り返る程に、目かくしは強く締められます。

そして黒い分厚い皮ベルトで、豊かな胸に乳房は大きく盛り上って、腹にも、めりこまんばかりに強く、二の腕、肘、手首、足首、膝、太股と緊々と肉が締められます。身動きの出来ない様に、責マニヤはきつと興奮して大きく吐息をつかれる事でしよう。

そしてじっと息をひそめて喰いやる様に……。

幾度もこの映画を見た私にはあの場面の緊張にしばれる様になった感激は忘れられない。

全身の自由を緊縛によって完全に奪われた女囚の最期の姿——。

ガスを吸い苦痛に悶えのたうつ、死への物凄くも空しい抵抗が始ります。

その中で大男の看守が、美しい女性を天国

に送るにしのびず、惜しそうに女囚の身体に触れ、いたわりに似た表情で、その場を去ります。只一人ガス室に取り残され不安におびえる声のない女囚の心の動きを、カメラは心憎いまでに追いたんのうさせてくれます。

……やがて看守に執行の時刻が告げられて、ガス発生装置のボタンが押されると、女囚の足元が二〇糎位の直径でジリジリ開きます。股の下に吊るされていた球形の物体が、その穴に静かに下されます。

その穴の中にギラギラとした青酸が淀んでいて、その球がポトリと落ちると、やがて濃厚な重たそうな煙が女囚の両足に這い上る様にゆるやかに昇って行きます。

徐々にガスを吸い込んだ女囚は苦悶を現し始めます。

足を収縮する様に、ケイレンさせ、カメラは手にうつり、苦しみを手に現し、その手は椅子の肘掛をグッと握り、やがて爪を立て今にも爪が全部とれるのではないかと思うほどにバリバリと音をたてかきむしります。

死の間際が迫ってレンズは顔にうつり、ガスを存分に吸い苦しさに新しい空気を求めて大きく口を開く、だがその結果は青酸ガスを尚深く吸い込み、その苦痛を和げようと、身体を硬直させて、グーッとのを反らせ、その極端なまでに白く伸び切ったのど首、呑み込む唾が通るのがはっきり見えます。

そのノドから上へと静かにカメラが移動します。開いた口、そして鼻腔へ、この鼻の動き、この女囚の素晴らしい、高い鼻梁の鼻、この鼻の接写にゆっくり時間をかけてくれます。この役を決定した要因を鼻の素晴らしい人、と云う事だったと聞きます。

息を大きく吸う時に鼻腔が縦にグーッと大きくのびきり、吐く時に小鼻がゆれて、何んとも云えない、自分が実際にガス室で死刑にあっている女囚になった様に、大きく溜息が出ます。

又、一段と大きく吸い、長く伸びる鼻腔を狙うように接写が一だんと大きく鼻腔がうつります。鼻の内側の女らしく柔らかいうぶ毛の様なうっすらとした鼻毛がライトに透き通る様に見え、ずっと奥深く穴の奥が黒くかすんで見える所までも……。

ガスを十分吸って死の寸前になって来ますと鼻の中隔の筋肉を忙しく上下に必死の思いが感じさせられ、見る人の被虐感をそそります。

苦悶に揺らいだ鼻の動きもやがて静止して美しい豊かな元の姿に力が抜け去りガククリと眼隠しの顔がうつむき白いうなじをさらして印象的な哀れさが胸を打ちます。

今は哀れ、無実の罪に美しい女囚は消え、むなしく屍をガス室にさらし、涙をさそうのです。

絹川文代さんへ

モデルとしての美貌

逢坂太郎

もう随分長くなる。そう、貴女が奇クに初めて出られた頃から……。

僕が奇クの愛読者となったのは、貴女の写真を見た為でした。新刊は月一回の発行なので、もう貴女に接したくてたまらなくなりました。私は、しばらく古本屋をあさって奇クをさがし、貴女の写真を切り集めたものです。

今でも随分古い写真から、先達っての写真まで、僕の本箱の奥に納められてあります。特に僕の好きな写真は、昨年の八、九月合併号の第一頁のグラビアです。

あの時は一カ月も発行が遅れ、随分期待していただけに、喜びもいつもよりも大きく、

何度も何度もながめました。

大きく見開いた眼、肩に垂れ下った黒髪。着物の裾のほだけた脚、どれもこれも、僕の気持を和らげるのに十分であった。いつも裸で出られる貴女が、この時ばかりは着物をまとっておられ、どこか新鮮な感じを一層強くしたものです。

新鮮、この言葉は何んと興味のある、注意しなければならぬものでしょうか。貴女にとっても、貴女を写す撮影、構成の諸氏にとっても、否、奇ク編集者全員にとっても、大切な言葉でしょう。

人間というものは、新しいものへの関心を

持ちます。僕が奇クに関心を持ったのも、他誌にないものがある為でした。しかし、そうはいっても、いつもいつも同じものばかりでは、その関心も薄れてゆくものです。それと共に貴女に対しても、やはり、そのような状態に変わってゆきつつありました。

でも、あの写真を見て、真底から素晴らしいと感激したものです。もっとも、長い間の経験と知識とによって、一層充実されている貴女ですが……。

高い鼻筋、肩や脚の美しい線。我々読者を奇クから離れなくさせた人、と言っても過言ではないでしょう。それほど素晴らしい貴女で



も、非の一点の打ちどころのない、ということとは言えません。やはり、そんな貴女にしても、肉体的にやや難点が見受けられる。それは、全体の美しい姿態から見て、乳房がやや小さいということ。又、猿ぐつわをした時とはずした時の表情に、もう少し研究の余地が

あるのではあるまいか。

数年前の奇クのどの号を見ても、貴女がグラビアの大半を占めていた。(昔のグラビヤは今よりも数が多かったけれども)

黒紐で縛られたり、荒縄で吊られたり。果して、あの頃が貴女の全盛時代だったのだらうか？ それにして

は、貴女の印象に残る写真があまりも少いのは芸術性という面から見ても、そういえるのではなからうか。もっとも、お前なんか、芸術なんてわかるものか、と言われれば、それまでだが。

貴女もカメラの前に立たたれる以上、芸術的なものを創るということをお頭にしておられるであらう。否、念頭におかないまでも、ポーズ、ムードなどに

は細心の注意を払い、又少々の苦痛にも耐えておられる貴女に対して矛盾が多すぎるのは何故だろうか？

免も角、近年、「吊り責めが最も好き」と大宣伝によって、又哀愁を帯びたマスク、姿態で目ざましく抬頭された梨花悠紀子嬢、又小悪魔の様な水本茂美嬢、さらに二、三カ月前から紹介され始めた関谷富佐子夫人。その他大塚啓子、東浦ひかる嬢などの進出によりやや貴女の写真が少くなった事は認めねばなりません。

しかし、一方貴女も身体の発達に伴って、グラビヤにも他のモデル嬢とは違って安定してきた、という点では一番でしょう。

けれども『安定』ということのみで通用するモデル界ではないでしょう。おそらくモデル界でも我々と同等に否、我々以上に新興の競争の激しい所なのではあるまいか。その中で依然異彩を放っている点、貴女に敬服する僕です。

今まで奇クの為に色々な責めの方法、手段を得られ、その写真を多く我々に紹介されましたが実際、貴女自身この問題について、どう考えておられるだろうか？ 貴女も、『責められる』ということに関して好きでおられ

るのか？ それともアン・ライクなのか？
本には貴女にもマゾの傾向が多分にあると書かれていたが……。

しかし、僕の様な第三者から見れば、あの
ように厳しく縛られるのは、さぞ痛いことだ
ろうと思う。その証拠には、さすがの梨花悠
紀子嬢も、ある責めに対しては悲鳴を上げる
そう。その後、彼女は辛抱されたいらしいが
結局、貴女の場合も「辛抱」ということによ
り耐えておられるのではあるまいか。

もっとも、貴女にもマゾ精神が全然流れて
いないと否定しているのではないが……。
貴女の強烈な責めの写真が豊富な分譲写真
になっている割に、本誌グラビヤではあまり
お目にかからない。この点、僕ばかりでなく
絹川さんのファンにとっても不満としている
所である。切腹、鼻責め、亀甲縛り、股間縛
り、逆エビ責め云々。上げれば驚く程の責め
マニアの方法があるが……。

続くとは思われない、精神的、肉体的に見て
も、当然のことである。あと五年すれば、貴
女はどのように変化するだろうか。貴女も女
性である以上、やはり通俗的に「結婚」とい
う問題に逢着しなければならぬ時が来ると
思う。結婚と仕事、この両者の激しい葛藤の
末、新生活にふみ切る貴女が想像される。
貴女は奇クとは切っても切れない仲の人で
ある。ますます素晴らしい姿を、我々ファン
の前に見せてくれることを強く切望する。

〔新版〕袖珍女体緊縛分譲写真集

Y組六十集 大名刺判(6×6.5) 印画紙焼付

各組一枚一組(全部送料共)

一組	五枚	三〇〇〇円
二組	十枚	五〇〇〇円
三組	二十枚	一〇〇〇〇円
四組	三十枚	一五〇〇〇円
五組	四十枚	二〇〇〇〇円
六組	五十枚	二五〇〇〇円

Y1	全裸荷造縛しぼり	(大塚啓子)
Y2	乱れ黒髪裸見本	(大塚啓子)
Y3	観念した胡座	(大塚啓子)
Y4	見事な飾り物	(大塚啓子)
Y5	浴室股間縛り	(大塚啓子)
Y6	麗しの緊縛裸像	(愛川悦子)

Y7	逆十字後手縛	(愛川悦子)
Y8	裸身の捕われ人	(愛川悦子)
Y9	逆エビ後手足吊り	(愛川悦子)
Y10	全裸ねの縛り	(田中芳代)
Y11	なまめかしき緊縛	(花坂道子)
Y12	全裸フットンむし	(大塚啓子)
Y13	蒲団裏裸またぎ	(大塚啓子)
Y14	初々しき裸全身像	(岩井知子)
Y15	ヌード股間しぼり	(絹川文代)
Y16	全裸脚掌股間縛	(絹川文代)
Y17	セーラー後手縛り	(川辺砂登子)
Y18	庭園ヌード縛り	(絹川文代)
Y19	全裸全身自慢	(愛川悦子)
Y20	豊満双丘くらべ	(愛川悦子)
Y21	追いつめられた裸女	(愛川悦子)
Y22	退ましきヒップ	(愛川悦子)

Y23	大の字晒し	(絹川文代)
Y24	縛り正面正坐	(絹川文代)
Y25	胸のボリウム自慢	(愛川悦子)
Y26	麗人受難の巻	(益田房子)
Y27	もうこれで許して	(益田房子)
Y28	むしろれたスロース	(花坂道子)
Y29	全裸縛りの全身	(平野笑子)
Y30	鎮座する縛り女神	(平野笑子)
Y31	囚女後手縛り	(大塚啓子)
Y32	全裸強烈股間縛	(絹川文代)
Y33	ベッド縛りのポーズ	(絹川文代)
Y34	開股一番直線	(絹川文代)
Y35	縛り腰巻色模様	(絹川文代)
Y36	亀甲股間縛正面	(絹川文代)
Y37	全裸椅子またぎ	(田原美佐子)
Y38	妖艶闊のしぼり	(絹川文代)
Y39	椅子またぎ後手	(田原美佐子)
Y40	強烈後手首縛	(田原美佐子)
Y41	ハダカ縛り人形	(絹川文代)

Y42	濃艶ハダカ縛り	(絹川文代)
Y43	あられもなき開股	(大塚啓子)
Y44	全裸変形股間正面	(大塚啓子)
Y45	後手立木縛り	(村井知可子)
Y46	全裸後手壁ハリツケ	(愛川悦子)
Y47	全裸寝台羞恥責め	(花坂道子)
Y48	振袖令嬢後手責め	(花坂道子)
Y49	長襦袢後手しぼり	(花坂道子)
Y50	ワンピース縛り	(花坂道子)
Y51	手吊り裸身の乱舞	(絹川文代)
Y52	柱縛り観念の図	(絹川文代)
Y53	不行儀姿態の美	(絹川文代)
Y54	カメラに晒す全裸	(大塚啓子)
Y55	緊縛女体の開陳	(絹川文代)
Y56	膨隆突出した臀部	(絹川文代)
Y57	前手錠全裸像	(大塚啓子)
Y58	股間縛開股の絵	(絹川文代)
Y59	聖壇のさらし者	(絹川文代)
Y60	エビ責めの表情	(絹川文代)

最新代理部分讓品案内

女体緊縛フオトの部

一、//大の字//逆さ吊り

大中判印画紙 三枚一組 四〇〇円
略号(つり) モデル 梨花悠紀子

二、立木//宙縛り//

大中判印画紙 三枚一組 四〇〇円
略号(くた) モデル 梨花悠紀子

三、凄惨//乳房責//

大手札印画紙 三枚一組 二五〇円
略号(とい) モデル 梨花悠紀子

四、//妊婦の緊縛//

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号(にむ) モデル 某女

五、//全裸の仕置//

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号(すお) モデル 東浦ひかる

女体切腹フオトの部

一、血紅女体自害

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(ひち) モデル 大塚啓子

二、女体切腹マンダラ

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(あま) モデル 甘木春子外

三、悲愴女体自決

四、哀艶女体割腹

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(ひい) モデル 大塚啓子

五、凄惨血紅女体立腹

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(かさ) モデル 大塚啓子

六、苦悶切腹表情

大手札印画紙 五枚一組 五〇〇円
略号(せく) モデル 梨花悠紀子

フェチ・フオトの部

一、バンド着用フオト

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(めい) モデル 梨花悠紀子

二、バンド着用の縛り(後手)

大手札印画紙 四枚一組 三〇〇円
略号(めろ) モデル 梨花悠紀子

三、バンド着用の縛り(前手)

大手札印画紙 四枚一組 三〇〇円
略号(めは) モデル 梨花悠紀子

四、女性の六尺褌

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(ろく) モデル 大塚啓子

五、ゴム・マニヤ

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号(こむ) モデル 梨花悠紀子

六、メンス・バンド

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円
略号(めす) モデル 梨花悠紀子

七、ゴムカバー着縛り

大手札 三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(かは)

八、脱がされたバンド

大手札 二枚一組 二五〇円
梨花悠紀子 略号(めに)

九、アテゴムの猿ぐつわ

大手札 二枚一組 二五〇円
梨花悠紀子 略号(めほ)

特殊趣向フオトの部

一、絞首処刑

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号(こう) モデル 絹川文代

二、変態強盗侵入

大手札印画紙 十二枚一組 一〇〇〇円
略号(こと) モデル 絹川文代

三、和洋争闘場面

大手札印画紙 六枚一組 五〇〇円
略号(らり) モデル 田中芳代 外

四、裸女争闘場面

大手札印画紙 十二枚一組 一〇〇〇円
略号(らし) モデル 田中芳代 外



僕は三、四年前から、酒やタバコのかわりに奇クを唯一のなぐさめ、生命の泉としてゐるかくれた愛読者ですが、今度初めてお便りします。貴誌を古本屋でこっそり買い求めておりますが、貴誌が売り切れの時は古本屋の主人も最近には僕の好みを知っている様子で、他のSM誌をわざわざ奥から出して来てくれます。しかし貴誌程レパートリーが広く新しいアイデアとセンスがいっぱいの本は他にありません。貴誌は全ページ僕の興

味を引きつけますが、つっこんで言えば絵でも物語でもあまり現実離れしたもののや血を流すようなものより、楽しむプレーを描いたものが好きです。昨年十月号の黒川先生の絵「曲馬団の少女」や「華麗なお仕置」の様なカレンな少女やおさげの女学生が責められているものにハッと心をうばわれます。そういう点でも梨花悠紀子さんは僕の理想的なモデルですが、ただ一つ注文をつけますと、もう一寸うぶのような表情、又体内では被縛の喜びを秘めながら表情には抵抗の様子があらわれているようなポーズで顔を上に向けている状態でのサルグツワは首を前に折ればダラリとゆるんでしまうのではないのでしょうか。顔を少し下に向けた状態でサルグツワが頬にくい込んでいれば本当にすき間のない緊縛感が出るのではないのでしょうか。幼い頃一度だけ近所の女の子を責めた事がありますが、成人した今となつては（現在二十四才）女性とのプレーの機会がありません。長野方面の方のお便りはあまり見かけませんが、同好の女性の方、お互いに楽しく語り合いませんか。（長野市緑町八朝日

奈生V

KC誌編集部の皆様方、誌上から拝見致しまするに相変らず張り切つて居られる様子、私の最大の慶びとする処であります。とか何とか勿体ぶつた言い廻し方で書き初めました、小生KC誌昭和二十八、九年頃からの愛読者です。但し生来の筆不精並びに小心な性格なので、投稿させて頂くのは、今回が初めてです。今後共宜敷く自分でわが性向を分析すれば、Sが8、Mが2位かなと思います。当年とつて三十二才、結婚後三年家族は妻一人、娘一人、但し妻はM的要素なく、私の結婚当初の飼育方法の誤りが今以って最大の痛恨事です。そこへ行くと関谷富佐子夫人の様な、完璧とも言えるベキマゾヒスティンをめとられた御主人が、うらやましくなりませぬ。関谷夫人と言えば、当初編集部塚本様宛に、西宮甲東郵便局、局留にて連絡され、その後も阪急西宮北口駅にて待ち合せされ、又プレイもその近辺で行なわれた由誌上で拝見致しましたが、小生もその近辺に在住致して居ります関係上、一層の身近感を覚えて居ります。御主人さまへ、御差支えな

ければ、又塚本様にも差し障り御座居ませんとの事でしたら、塚本様のアシスタントとして、プレイの御手伝いをさせて頂ければと、日毎夜毎空想しては、一人楽しんで居りますが、如何なものでしょうか……。四、五月号には、「関谷夫人緊縛撮影の実際」の記事が私の期待に反して全然なく、KC誌に対する興味が、半減致しました。六月号には載る事を鶴首期待して居りますので、期待を裏切らない様、何卒宜敷く御願ひ申し上げます。又、五月号の巻頭グラビヤですが、我々オールド？ ファンには、悦持に既に載つた写真の焼き直しには閉口致します。それよりも、関谷夫人、竹野ひろ子、東浦ひかる嬢の、未発表の新鮮なる写真を掲載して頂く方が遙かに喜ばしい事なので、誠に口憚ったい申し分ですが、今後この点に御留意の上編集して頂き度く存じます。ではKC誌の尚一層の御発展を祈つて、これにて擱筆させて頂きます。（西宮市八中野義広V）

新潟の石山正枝様、貴女の通信文を拝読し、何かしら救われた気持ちです。一種の郷土意識から来るのでしよう。私の住所は同県南魚

沼郡塩沢町なのです。アブの道を解する異性が此の雪深い土地にも住いしておられたと言う事が私にはコロンブスの新大陸発見に似た心境をもたらしただけでしょう。貴女は女相撲の理解者との事、そしてプレイの為の密室をお探しの事、私の自宅をお借し致しました。私は貴女と同年生といます。そして現在祖母と二人唯この馬鹿でかい旧地主の旧家に居ります。貴女のお相手をする女性が見つかりましたら、何時でも御利用下さい。特に、土蔵の広間は外部へ一切音の漏れの心配がありませんから。私はサジストですが、アブ歴五年位でしょうか、私達アブ愛好者の日常生活での精神衛生、正常社会における私共の存在意識及びアブ劣等視への反論等々、一応自分としての考え方が整いましたので長岡市などで、貴女との話し合いの機会を持ちたいと思ひますが如何なものでしょうか、きつと議論百出して楽しいひとときとなるでしょう。貴女からの幸福の便りをお待ちしています。(新潟県八棟早正美)

石山正枝様、五月号の通信文を拝見しておしつけとは存じますが

お呼びかけ申上げます。貴女は女同志のお相撲に大変な興味がおりなのに、お相手をする女性の友人が居なくて御不自由の御様子、私でよろしければ喜んでお相手させて頂きたいと思ひます。誰も居ない場所でも力一ぱい投げるか投げられるか勝負を争うことが出来ればどんなに楽しいでしょう。私は現在田舎町の美容院で美容師見習をして満十九才の女性で、身長一五六センチ、体重は四十八キロです。体格の点では貴女に幾分かないません。今から五年位前未だ私が女子中学生だった頃、直ぐ近所に三つ年下の男の子が居ましたが、私とは遊び相手がよく冗談半分に相撲をとりました。年下で身体は小さくても矢張り男の子ですから、私より強く殆ど私が負かされて、投げ転がされるのです。時にはそれだけでは終らずに寝技の組み打ちになって馬乗りに押え付けられたことも再々です。私がくやしがつて跳ね起きようとじたばたすれば、「女のくせに未だ手向いするか」と言つてギューギュー押え付けるのでした。中学校を卒業してからは流石に恥しくて私もそんなあられもないことは出来ませんが、ふとした折りに

書店で「K誌」を見てギョツとしました。何とまあ女が女を捻じり倒して馬乗りに跨った挿絵が載っているではありませんか、それ以来私は毎月「K誌」を見なくては気がすまなくなりましたし、女同志の相撲や格闘に魅力を感じる様になりました。それでもこんな恥しいことを友人に打ちあけることも出来ず、困っていました。所貴女の通信文を拝見して何となく親しみを覚え、おたより差上げる次第です。是非一度お会いしてお話をしたり人知れず思い切りプレーを行つてみたいと思ひます。どちらが強いかは分かりませんが、私は貴女と力の限り争うことが出来るのでしたら、勝敗は問題でなく負かされても勿論本望です。真白い素肌にグリーンの褌をきりりとおしめになった美しい貴女からズデンドウと投げ転がされるのもさぞ素敵でしょう。でも正直に言えば、私は唯投げ転がすだけのお相撲では、あまりあつてなくて物足りない気がしますから、貴女さえよろしければ寝技で馬乗りに跨つて押え付けて頂きたいと思ひます。それでも私は力の続くかぎりには必死になつて跳ね返そうと手足をばたつかせ烈しく抵抗をするでしょう。

う。そして遂に力つきて、お強い貴女に完全に屈服して見たいものです。「K誌」には女が女を組み敷く場合は「押え込み」をするに限る様に書いた記事が見受けられますが、私にも「押え込み」で組み敷いて頂けないでしょうか、貴女のむちむちした柔い内股の間にギューッと顔をさみ込まれて五十一キロの体重で喉首を絞められる、考えただけでも全身がぞくぞくします。お店で私と同じ位の年頃の娘さんにパーマをかけたたりセツトをしたりしている時、私はふつと奇妙な錯覚を感じることが再々あります。つまり椅子にかけさせるかわりに板張りの床の上にうつぶせに押し伏せて、背中の上にむんずと両脚を拡げて馬乗りに跨つたまままでパーマやセツトをしている気になるのです。「いやや苦しい、放して」等と言う所を両膝で腕を踏み敷いたりして、終るまでは絶対に起こしません。こんなことを空想していますと、とても楽しくて、ついうっかり仕事の手順を間違え、ハツとして赤くなることも再々です。それでも相手の娘さんは私が変なことを考えていたことなどには夢にも気付きません。貴女も一度私のお店にパーマ

をかけにいらっしやいませんでし
ようか、その時は本当に貴女を馬
乗り組み敷いた姿勢で特別念入
りに綺麗いにセツトをして差上げ
ましょう。人に知られては、それ
こそ大変ですから、本名を書くこ
ともはばかられますので、誌上に
御返事が頂けたらこんな嬉しいこ
とはありません、ではごきげんよ
ろしくさようなら (草野久美子)
石山正枝様

○ 長年強い「マゾ」を胸に密めて
もんもんの日を過して来た僕は奇
クを読んで心は心のうさを晴して居
りました。そして読者通信で大勢
の方の声を聞きもしここに僕の心
の中をさらけ出させていただけ
ものならと通信文を書いた次第で
す。僕は先天性の強度のマゾでい
まま「宇宙のどこかで」を特に
熱を入れて読んで居ました。現在
三十五才になる僕の願いは、まだ
幾らか子供っぽさが顔に残って居
る位の年若い男性に依って飼育さ
れたいという事です。縛られて何
一つ身動の出来ない身体を思いつ
く限りの事をして、又暴力に依っ
て好むと好まざるとにかかわらず
御主人の命令通り忠実に動く奴隷
に教育していただきたい。御主人

として僕を教育して下さる方が居
りましたら直ちに出勤命令を下さ
い (東京都大田区八中山正夫)

○ 貴社編集室の皆様には益々御活
躍のことと存じます。小生、昨年
初めに書店の店頭でフット見たのが
奇クでした。その内容に小生のイ
メージにピッタリしたものを発見
した時のうれしさ、毎月号が楽し
みになり愛読しております。読者
通信欄の皆様の中にも私のイメ
ジとピッタリした方が度々おられ
ますが、親しく語り合い又プレイ
をしたいと思っていますが、小生
の居住している処とは余りにも遠
路の為、いまだ実施出来ること
ができず残念に思っています。とこ
ろ四月号、読者通信欄に小生の居
住する所に近い方が、又同好の志
の方の希望がかいてありましたの
で今回貴社様の御力添を賜りまし
てその方とお会いしたくお便りさ
して頂くわけでございます。名古
屋市千種区の寺島美千代様がピッ
タリの同好の志です。小生も同市
内南区に居住いたしています二十
九才、身長一六七の会社員です。
小生も寺島様と同様に浣腸とオシ
メとオシメカバーに大変なノスタ
ルジャを感じています。というの

最近版分譲品案内

バンド開股 略号「はこ」

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

ナマのアテゴムもあらわに、
月経帯をびったりと肌に密着す
るように着用して、両股を大の
字に開いて、バンドの中心部分
を大寫しでごらんになります。

バンド責め 略号「はん」

大手札 五枚一組 五〇〇円

モデル 東浦ひかる

後手にひしひしと厳しく縛ら
れた豊満な女体は、メンスバン
ドを無理矢理つけさせられて、
手当てをする部分をさらけ出さ
せ、両股を八の字に開かせられ
る。脱がさせられた月経帯が股
のまわりに散乱していても自分
ではどうすることも出来ない。

バンド足挙 略号「はと」

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

月経帯を穿かされ、あからさ
まにアテゴムを見せるのさえ恥
しいのに、男の手で片足を高々
と無理に真直上に挙げさせられ
るのは、耐えられない恰好であ
る。縛りなしの片足挙のポーズ
を強要する触手。

目下着用中

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

メンスバンドを自らの手で穿
きつつある様子を前後からキャ
ッチした。

夫人の表情

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

いろいろの事情から口絵には
発表できない関谷夫人の素晴し
い悦虐の表情をとっておきのネ
ガから特別提供します。一回の
撮影に僅か数ポーズか撮影でき
なかつた際のムチ打ちに悶える
夫人のすべてがこの三葉のフオ
トに集約されています。

若妻の切腹

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 甘木 春子

お臍の下に、ぐっと刺し込ま
れた短剣の刃先が皮下脂肪に突
き刺った有様をフォト化した切
腹マニヤとそのパートナーに
よる若妻の介添切腹。豊かな下
腹部を男の手によって切り裂か
れる若妻の被虐のポーズ。自ら
の手は用いずに他人の手によっ
て切腹させられているといった
介添切腹の新作。

は小生十九才の時、腸の病気をい
たしました折、高熱のために自分
の意志で排泄が出来なくなりまし
た折附添のきれいな看護婦さんが
「まあ、大きな赤ちゃんね、赤ち
ゃんはこれからママさんのすると
おりにしましょうね」と言いなが
ら、部屋をでて行きました。小生
はその言葉の意味がはつきり飲み
込むことが出来たのがその夜のこ
とでした。九時就寝の時、何やら
風呂しきにつつんできてニコニコ
しながら、「やっ」と赤ちゃんの着
物ができたわ、何んだか解る」と
言いながら包を開きました。中か
らでてきたのはオシメ、オムツで
した。きつとユカタをほどこいて作
ったのでしょう、可愛らしい花柄
でした。それにゴム製のオムツカ
パーも有りました。そして私の耳
もとで「ジット、オトナシク目を
ツブっていてね、赤ちゃんになっ
たのだから、ママさんがするなり
になるのよ」と言い乍ら素早く浣
腸をしてオシメを当ててくれたの
です。その時の小生の気持、経験
した人なら充分察して頂けること
と存じます。その後高熱が下る迄
オムツと浣腸のオセワになりました
た。それからオムツに関する記事
小話は何べんでも奇クの中で読み

返し、すぎし日の事を思い浮かべ
て居ります。苦心してオシメカバ
ーも一枚やっとな手に入れました。
扱て甚だ勝手なお願いで申訳けあ
りませんが、通信欄を通じて同好
の近辺の志寺島さんにぜひお合
したく、ペンを取りました次第で
す。自分本位に申して済みません
がお会いください。(名古屋市八
林竜一〇)

寺島美千代様、奇クファンの皆
様初めてお便りさせて頂きます。
美千代様四月号の呼びかけ大変嬉
しく拝見致しました。僕はSM両
方ですので、ギリシヤやローマ時
代の主従のように女主人の忠実な
奴隷となつて主人様の思う様に使
われ又責められて見たいと思つた
り又一方では自分が主人となり女
奴隷を自分の思う様に使つて見た
いなど、想像しながら毎日を過し
ています。豊かな臀部にひきしま
ったストラックス、その動きと共に
見える流動美と言いたい尻の線、
思わず妄想のとりこになっている
自分。そんな貴女を縛つて浣腸出
来るなんてまるでユメの様です。
是非是非僕にその役を言いつけて
下さい。と言っても僕はまだ九州
に住んでいます。でも、大丈夫で

す、昨年の十二月に一カ月名古屋
へ出張で行きました。僕は二十二
才の青年です。僕を奴隷として使
つて下さる女性の方のお便りも、
お待ちしております。(大分県佐伯市
八宮川健二〇)

編集部の皆様、毎日お忙がしい
所御苦勞様でございます。私は「
奇ク」を二年前から愛読していま
す。フオトも全裸ものや浣腸のフ
オトを多くして下さい。全国の皆
様私と同好の女性の方々からお手
紙をいただきたいと思つて居りま
す。私のマニアは浣腸類と責めで
す。浣腸なら、なんでも強い方で
す。空気、水、食塩、グリセリン
などで全部高圧です。グリセリン
と食塩で高圧浣腸は三〇〇〇C
は平気です。これは本当です。嘘
ではありません。近頃の女性の方
私を浣腸して下さい。又お好きな
様に責めて下さい。(和歌山市八
安藤健一〇)

初めてお便り出させていただき
ます。私は大変内気な為、私の胸
に秘めた誰れにも知られていない
心の秘密を勇気を出して奇クの読
者にだけでも知っていただこうと
思い発表する次第であります。そ

の秘密とは実に恥しい事なのです
が、私は御婦人の和服の下着であ
るお腰(桃色や赤色の柔い肌ざわ
りの綿ネルで仕立てられた)に異
常な愛着を持っています。これ
れは生まれつきかもしれないが
多分私の十三才の時に田舎で体験
した出来事が主因を成すと思われ
るのです。その体験というのは、
その頃二十三才ぐらになつていた
私の従姉が多分肌襦袢かお腰でも
仕立てる為であったのでしよう。押
入より取り出した桃色の綿ネルを
私に手渡し机の上に持つていつて
くれと言いました。そして信ちゃ
んネルは柔く暖くて気持が良い布
でしようと言われました。これは
何げなく言つたと思うのですが、
私にはこの時の綿ネルの手触りが
忘れられなくなつたのです。そし
てその時から先ず綿ネルの布その
物に心が引かれ始めたのです。私
が思春期を過ぎ異性に心が引かれ
るようになった時分私は内気な為
女友達も無かつたため私は遂にお
腰に興味を持つようになつてしま
つたのです。私が十八才の頃、前
記の従姉が一カ月ほど私の所に滞
在した時の頃です。ある日私が一
人で留守を引き受けた時従姉の部
屋に入つて見ると従姉の締めてい

た桃色の綿ネルのお腰を見つけたのです。私は家にだれもいなかったのので、勇気を出してそのお腰を自分の肌に直かにしめて見ました。そのお腰は大変柔いそして十分起毛された桃色の綿ネルで仕立てられてあったので、その肌にぴったりと吸いつくようその感触は私を桃源の里に誘い恍惚として、しばし茫然としていました。私はそれいらい柔い毛の多い桃色の綿ネル仕立のお腰が欲しくてなりませんでした。私の母は洋装でしたし、又女姉妹もなかった。私の家には綿ネルの布一片すらありませんでした。しかし私はあの感触が忘れられず私は呉服店で白いネルを買いました。(本当は桃色が欲しかったのですが、それは、恥しく買う勇気が出なかったのです) 私はそれを家人に見つからぬようにして夜寝るときそれを締めて寝ました。このような時、奇クを古本屋で手にした時その中に私と同じような体験を持っている人がいるのを知り大変心強く思いました。それ以来奇クを読んでいますが、このごろの奇クはサドばかりで少しも面白くありません。たまには私のようなお腰フェチシストの告白特集も出してほしいも

のです。おそらく他のお腰フェチシストの皆様も同じ考であろうと思われまふ。さてここで私の恥しい願いを奇クの女性読者に言いたい。それは一度奇ク読者の女性で綿ネルのお腰をされている方と文通したり、又お腰を分けていただいたり、又綿ネルの布の選び方などを教えてほしいのです。私は女の方の締めた柔い綿ネルのお腰を手にしたくてなりません。もしこの希望をかなえてくださる人がいましたら、是非お知らせ下さい。誌上を通じてでも直接でもかまいません。(西宮/K・N生)

○

皆様今日は。私はしばらく日本に住んだ事のある西洋人です。国の大学で日本語を勉強したのに、下手であります。どうぞ、お許しになって下さいませんか。奇譚クラブがみつかった。よろこんでいます。私は小さい時から色々のマニヤがありましたが、気の毒に一人でやって来ました。私の国では、私達が自由にこんな雑誌を買ったり読んだりするのは許されていません。ある大市で内々に色々の本とか写真とかもろろ事が出来る。うだった。私は見えません。その訳で奇譚クラブなどがあ

る事をほとんど知らなかったのです。子供の時から女の下着、ナイトガウン、全服に大変強いしゅ味がありました。別にブラジャー、ガードル、くつ下、それと一緒に少しゴムマニヤをも持っていました。ある時は私が十人の女の人の為十分に服を持って一人でプレイしました。自分の口にさるぐつわをはめたり(ゴム海水帽で世界一を作られる)、全身を縛ったりしました。しかし皆さんはご存知どうり、一人でそんなプレイはあまり面白くなりません。ですがこの色々な事をしてほとんど熱狂してしまいました。けっこうしましたけれども、家内はそれについて聞くと大変おこりました。今まで、本によると一人で一緒に生活してはいますが、このプレイの出来ないのはとてもはがゆい気持です。はがゆくてたまりません。それからパット奇譚クラブが現われて来ました。この数年前から来ていた悪い気持はもうすぐ去ってしまうかと考えています。多くの方々は同情しているのを見て大よろこびしました。写真はすばらしいと思うし、そしてゴムズロース、くつ下を身につけるのは、どんなに良いかんじでしょうか。うつくしいモ

デルをこの目で見たようになります。ですからペンを取って書いています。だれか上級、とても心のいい女性に会いたいと思ひます。互に縛ったり、いろいろ服を着たり、プレイしたりさせていただきたいのです。ただ安すく(しかし熱心に)遊たいのです。私は一メートル八十センチ、七十三キロの三十才ぐらいの男性です。ざんねんに若い時は禿げてきましたので、多分上から見られるとユル・ブリーンナーと似ているかも知れません。(じょうだん) 実に、だれかかわいい二十才から二十五才ぐらいまでの女の方に色々教えていただきたいと思ひます。私は本心に傷をつける事も、苦しみをさせたくはありません。同情しているお嬢さんがいましたら、連絡して下さいませんか。もしこのまじい手紙は六月号にあればすぐ出来るでしょう。こう言う風にしましょうか。多くの外国人は神戸の港川神社を見物しに行きます。私も行きあなたを待ちます。六月六日(木曜日)午後三時ごろ、英文新聞を取って、神社内で居て下さい。その新聞の前面の上で「プレイテクス」という言葉を小さく書いて下されば私ははっきり分る

と思います。私の話しかけるのは「あなたは英語をよめるか」としましょか。(雨でしたら神戸国鉄駅でもいいでしょう)その次の木曜日に行く事が出来ると思いますから、どの日もいいでしょう。私にはプレイするには所はないから話合いで準備します。また、この下駄な日本語をお許し下さい。この小さな手紙を書くのは

二十時間以上かかりました。(神戸のTEX)

○

メトミのファンの皆さん、これからの季節はメトミを楽しむ最適な気候となりました。面白い通信を送り、ファンを楽しませて下さい。岡平さん、その後、貴方の提唱された後援会は如何されましたか。大変虫のよい話ですが後援会

が結成され実際に日程表が手に入るのでしたら是非ファンのために今一度発表して下さい。私の知人も、それを蔭ながら待つて居ります。編集の皆さん、メトミのために特集号又は小冊子でよいと思いますが、機関誌の発行を考えて下さい。最初はガリ程度でもよく会員制にすれば次第にそれ専門のファンが集まると思います。大勢の

○

私は奇譚クラブの熱愛なる読者の一員です。私の家の近くの森にもすっかり初夏の気ざしが訪れて来ました。春は一年中で一番よい季節です。奇譚クラブと共に我青春を初夏の訪れの喜びをしみじみと味あつて居ます。

限定版 特別号

案内

第一弾

緊縛フォト・アラベスク

略号「あらべ」 定価五〇〇円

本誌の黄金時代のモデル嬢の素晴らしい緊縛姿ばかりを集めた句うばかりにあでやかにも美しいフォト集です。全巻二十六項目、七十七葉に亘り、文字通り表紙から裏表紙のハシに至るまで、すべて緊縛女体のむせかえるような、むんむんするムードで埋めました。まだお求めにならないマニヤの方は、是非コレクションの一端にお加えになって、その妖美のエキセントリックをお味下さい。

第三弾

緊縛写真グラフ集

略号「グラフ」 定価五〇〇円

絹川文代、大塚啓子、愛川悦子、桜井葉子、等の本誌で育てたベテラン・モデル嬢の活躍による最も優秀にして鮮明、且つ魅力的な緊縛艶姿ばかり百十五態を集録した「グラフ」です。誌面いっぱいには所狭しと盛り上げる大型グラビアの迫力は、きつと皆さまを、この妖しい異常美の縛りムードの中へと誘い込むことでしょう。女体緊縛マニヤの皆さまに自信を以ておすすめ出来るグラビア・フォト集です。

第四弾

緊縛フォトと緊縛画帳

略号「別特」 定価五〇〇円

三十六葉に及ぶ四馬孝描く粒選りの傑作画集のケンランたる陳列に加えて、本誌の発掘した新人モデルである、四方清美、花本京子、柳初子、山路ミヨ子、館典子、熱海容子、前本妙子、浜千代子、大井小夜子、加茂良子等の新鮮な悦虐姿態と加賀利江子、藤田節子、萩千恵子、桜井葉子、絹川文代、大塚啓子、須川令子などの代表的ポーズによって味をつけました。どうぞ御一見下さるようおすすめします。

さて、この度お初に便りを申し上げる次第ですが、何卒私めの希望と、果しないマゾヒズムの夢を叶えて下さる世の女主人並びに女王様方よ、どうか一度御交際願いたくお便り致したのです。貴誌六月号「読者通信」にて、三原康子様のお手紙有難く拝見致しましてもう矢も楯もたまらず無性にお便りしたい康子様にお逢いしたいと言う気持ちに襲われてこうして筆をとって居ます。私の空想の百分の一つも私の希い通りになれば、真に幸せであります。私は自分で気がつき始めたのは高校時代で、マゾ的な兆候が現われ始めました。女主人様に使われている幸多き世のマゾ男達がほんとにうらやましく思われます。もう胸がときめき、顔がほてり、小説や映画や、ふと街で見かけた何気ない女の方の動作や言動によって激しく、又はほのかに私はマゾの楽しさを感じるのです。バスの中、電車の中なども女の方の足の美しさに見とれてしばし夢の中の感じがいにひたるのでした。美しい、そして私より大きく長いおみ足や、尻で蹴とばされ、踏んづけられ、殴られ、むち打たれ、そして足を長い間ハイヒールをはいてらして、むれて、臭

い、におうあし、おみ足を心ゆくまでペロペロとなめまわしたいのです。それも無理矢理口中へ足指を押し込まれ、ハイヒールのつま先や、かかとで踏みにじられたら私はもう気が遠くなる程幸せで生きがいを感じます。なおプレイのやり方、種類などは、まだまだ書き尽せませんが是非やって頂きたいのは、私が寝る時も私の顔に女主人様のきれいな足をのせて眠りにつきたいのです。何時もこの様な事ばかりを妄想致して夜毎日毎私の様な者にお目を掛けて下さる女主人様の出現を心からお待ち致して居るのです。何故、私にこのようなマゾ傾向が現われたか分りませんが、幼少の頃の環境、又は家庭の影響や、自分の性格に依るものと思われまます。ですから自分には、まともな妻など来てはくれないと思ひます。従ってサド女性と豊かな夫婦生活を営みたい事は切なる願いであります。どうか哀れな私を助けて下されば私は救われます。日夜一人で悩んで居る図は醜いものです。長々と乱筆にて大変失礼しました。三原康子さんを紹介して頂く日を夢にみてお待ちしております。よろしくどうぞ、お願い致します。ではさようなら。

（東京△TS生▽）

私は三十才の男子会社員です。最近の「奇ク」で京都の梅川さん東京の津沢秋子さんのゴムマニアの記事を拝見し私と同じようなプレイをされておられるのに驚き、又興味深く読ませて頂きました。私も羽二重でゴム引の婦人用レインコートとブーツ（勿論ゴム製で婦人物に限りまます）を用いていました。が、津沢さんの記事を読んでから太腿のつけ根まであるゴムの長靴をはいてみました。が、腿にふれるゴムの感触の素晴らしさに思わずウットリとしてしまいました。然し黒色のものしかなく表面につやのないのが物足りません。赤や青の色物で、表面に光沢があつてヌラヌラとした感じがしたらもっと素敵だろうと思ひます。今用いているレインコートは津沢さんの仰言るように薄くて量感がえられにくいのですが、梅川さんのように重ねて着れば可成り量感がでてきます。裸になつて着ると全身の肌にじかに触れるゴムのヌメヌメとしたタッチ、むせかえるようなゴムの匂いにウットリとして全身の力が抜けるような幸福感にひたるのです。最近ではこのレインコ

ートを着ている女性は全くみられなくなりましたが、以前これを着てフールドを真深にかぶった若い女性を見ると、ふるいつきたくなるような魅力を感じたものです。それで私はいつも、もう一着のレインコートと真赤なブーツをもてあそびながらプレイをすることにしています。しかし最近ではもっと強い刺激的な方法として複数でプレイをすることを考えています。私が今しているような恰好（レインコートを着て長靴をはいたままで机に向つて居るのです）をお互に見せ合うのはとても恥しいことですが、それだけに素晴らしい刺激が得られると思うのです。例えばホテルの一室で夫々自分の好きなレインコートとブーツを身につけ向い合つて椅子に腰をおろし、お互いこれまでのプレイの様子を話し合うのもよいでしょうし、音楽に合わせて二人でダンスを楽しむのも素敵でしょう。体をピタリと密着させて踊っているとお互の体温でじつとりと汗ばんでレインコートがヌメヌメと肌にまといつき、ゴムの匂いにむせ返るようになるでしょう。あるいは津沢さんのゴム椅子のようにパートナーがゴム椅子の代りをするのです。先ずパ

ートナーが椅子に腰をかけレイン
コートの裾をひろげて太腿をつけ
根まで見えるように出します(勿
論長靴で覆われたままです)。そ
の他、まだいくらでもプレイの内
容を豊富にする方法もあるでしょ
う。そこでゴムマニアのグループ
でこのようなプレイをしたら素晴
しいと思うのです。勿論完全に趣
味だけの附合にしてお互の身分は
絶対に秘密にしなければなりませ
ん。好きなパートナーと、あるい
は次々とパートナーを変えながら
夢のような一時を過ごすのです。

集まる場所は一応国鉄環状線桜の
宮駅下りホーム(天王寺方面行)
の中頃ではどうでしょうか。毎週
木曜日午後七時三十分頃にお出下
さい。お互にゴム引のレインコー
トを見せ合いながら確かめるよう
にしたらいと思います。例えば
「梅川さんですか?」などと呼び
かけて頂ければよいのです。勇気
を出して集って下さい。(大阪八
小川一夫)

○ 五月号の坂本和子様、お便り拝
見致しました。近くに奇クを愛読

し理解しプレイを楽しんでおられ
る同好の人のあることを知り非常
に嬉しく思いました。小生現在二
十六才になりますが、数年前より
偶然の機会に奇クを知り以来秘か
に愛読し、今迄漠然と思っていた
自分の性癖のことを学びとりまし
た。初めのころはMでしたが、や
がてSに興味を感じ現在はMS半
々と言うところです。過去幾度と
なくMSを求めて街をさまよい歩
きました。やはりアブノーマル
を本当に理解する様な人に恵まれ
ずに終わりました。近ごろでは己れ

のアブの欲求を忌憚なく話し合え
る同好者があつたら、どんなに素
晴しいかと考えております。貴女
の体験談等も是非知りたいと思
いますし、「奇ク」やその他いろい
ろな資料の交換も行いたいと思
います。毎週水曜日七時頃泉佐野局
五四九番の所にいつも居りますか
ら御都合次第に一度電話下されば
幸甚です。奇クファンとして貴女
と真面目に親睦をはかりたいと思
います。(泉佐野市八犬塚弘)

○ 大阪府泉佐野市の坂本和子さま

◆強烈マゾ絵画

//巨臀に屈伏する//

B6版感光紙焼付

四枚一組

五〇〇円

春川ナミオ画

略号「まか」

人間トイレ

洋式トイレの中、美しい女御
主人の御用便の下に仰向けとな
って人間トイレの使命を果すコ
プロマニヤの天国の図。

人間椅子

遅ましい豊満な臀部が男の顔
の上にデンとのっかって、全体
重で押しつぶすと痩せた男は今
にも押し潰されそう。

臀部に潰された顔

洋椅子の上に仰向けになった
Mの顔の上に、ぴったりと大き
なお尻を据えた娘のニヤニヤし
た誇らしげな表情

太股に埋れたM男

男の首はポリウムのある女の
両脚に跨がれて、その間に埋れ
てしまい今まさに窒息寸前の恍
惚境にあえいでいる。

滝れい子画 八娘と娘の斗争場面画

女体血斗『女が女を降伏させるまで』略号

A5版感光紙焼付

七枚一組

一〇〇〇円

○若々しい肢体のはちきれそう
な健康美の二人の娘が組んずほ
ぐれつのあられもない死斗を繰
りひろげる女体美絵巻を滝れい
子さんの麗筆によって絵画化し
て頂きました。

○激しく相争う二つの美しい女
体、やがて、一方が力つきて屈
伏し勝者の大きな臀部の下に首
を顔を下敷きにさせられ、涙に

どうか御一見下さい。

貴女の御便り拝読させて頂いていただきました。僕は二十一才の奈良市に住むS・M半々の男です。せひ貴女との交際お願いしたいのですが……又貴女の文章の中にもありましたように、女性の下着にすごく関心を持っております。僕のアイディアとしてはまずM側の立場から言いますと、裸にされた僕が後手に縛られ無理矢理に女性のパンテイヤーや下着で猿ぐつわをさせられた上、尚体には女性のパンテイヤーや下着（スリップ、ブラジャー、ネグリジェ等）メンスバンドなどを着させられた上で体中が感じられて縛られ、尚股間縛りにされ又胸や首、顔の上に女性の豊かな尻をどっかとおろされて息も絶えだえに許しを乞う……と言うのがMとしての僕の最高の願いです。せひ僕の女王様になって下さいねお願いします。一方Sとしてのアイデアは梨花悠紀子嬢のように全裸又は好みによっては下着一枚や衣服を着けたままでもよいのです……そのような女性を後手に縛り上げ猿ぐつわをかませた上で後手吊り、エビ責め、メンスバンド責め、股間縛り、逆吊り、浣腸責めなど相手の好むようにしてあげ

られると思います。全国の三十五才以下のS・M・ホモの女性の方で僕とプレイをして下さる方は非お便り下さい。少々遠くても出向いて行きますし、もし来て下さる方は旅費の一部なりとも援助させていただきますから……。（奈良市八三笠弘）

三木さん、浜田さんのコンビの写真は、又ヒットと思います。一つだけ大事なことをアドバイスします。それは三木さんが責め役で浜田さんが責められ役だと思えますが、この微妙な空想の世界を、二人の役をさかさにしてぶちこわされないように。絹川さんや、梨花さんがマゾ男を責める写真も私とはもともと反対だったのですが、このコンビの逆転は、色々の空想を二重にこわしてしまいます。銭形平次がおどけ役をやって、八五郎が謎ときをやる物語りが一つでもまじっていたら「捕物控」は一度に読者を失なったでしょう。三木さんのポーズや表情は責め役としてうってつけです。こういうにくくしい程、漂々しい責め役のムードと写真を追うにつれて昂めて行き、それを眺める男に「こういう女こそ責めて見たい」という

いわば反語的な得がたい気持をさそうタレントだからです。勿論浜田さんの責められ役の上手さがあるから両々相まってそうなるのですが、くり返し、役をさかさにして私たちの夢をこわさぬ様にお願ひします。（花田一郎）

五、六月号鼻責め写真、秋山、斎藤さんの鼻に就いての読者通信は興奮を止め得ません。又「剃刀と美女」の未亡人と十九男の心理がピッタリ理解出来ます。尤も、マゾの私が未亡人の立場となります。私は鼻と剃刀にとりつかれた男で、かねがね同感の方に呼びかけようと思っていた時に貴誌を手にして感激しました。私の剃刀と鼻に就いての陶醉症状を略記して皆様の御手紙を待っています。又このテーマにて写真と記事を載せて下さい。沢山な同症者が名乗りを上げて下さればうらやましいと思います。私は台上に仰向けにされて、鋭い刃で彼女に顔を剃って貰っている。外人型の綺麗な孔の鼻のもつ二十三才の彼女はサド気多く手の平で激しく顔を押し引っぱって逆剃りを繰返し、尖った爪の指を口中に押込み乍ら私の唇を無茶苦茶に引っぱって鋭い刃で痛

い程逆剃りする。終始逆剃りばかりです。親指の指平で私の鼻を頭の方へクローツと押上げたり、左右へ捻り寄せて光る刃物を当てる時彼女も目が輝いて綺麗な鼻孔から熱い鼻息が私の耳元で私の血を嵩らせます。無抵抗のまま仰向けになつて、思うままにいじめられている私は緊張して身体中ほててきます。ひげの濃い私は、綺麗な彼女に鼻を弄ばれて、剃刀の鋭い刃を受けるのが病み付で、彼女も又私の心理をよく心得ながら自らも快感を抱くのです。顔にカブセた蒸したオルの下に右指を入れて私の鼻をジワジワと、あるいは激しく、あるいは悠っくりと突き上げたり捻ったりして次には唇や顔の内側を爪で引掻かれる時の感触が四六時中頭の中から去らず、このごろ夢遊病者の様になっていきます。そして又彼女の所に通うのです。皆様の鼻責めに関するお便りを期待し、様々な責め方を研究したいと思ひます。（東京八湯谷照夫）

○ 五月号は室井様の女性輝美の讚仰に始め、女対女の決斗、生首マニアにはもり沢山な久しぶりのおくり物でした。通信欄では前川様

の通信に接し、又私へもお呼びかけ下さり嬉しく存じてをります。仕事の都合でこの通信が少しおくれると思いますがよろしく願います。口絵の切腹画では四馬孝氏の「刺し違え」が、よかったです。先月の「女城主の最期」程迫力はなかったですが、互に咽喉笛を刺し貫いて果てんとする二人の女性の姿は美しく描かれていたと思います。今後は一人や二人でなく、女白虎隊のように時代物の女性の集団自決のようなものを描いてみて下さい。室井様あこがれのふんどし一つ、奥女中達の屍の山の中で静かに腹をかつさばいて果てんとする京の局のこれ又、ふんどし一つの凄艶な姿とか、落城迫る城中での奥方を中心として互に刺し違え、あるいは腹や、乳房をかき取って果てて行く女中達の集団自決の模様などは是非実現してみたいものです。室井様の女のふんどし姿へのあこがれの一文は同じマニアである私にひしひしと胸に迫って来ます。それにふんどし一つの裸女の血斗図こそ奇クにとっては格好の題材と思えるのに、未だ実現が不十分なことを嘆いておられる前川様の一文と共に私も声を大にしてこれの実現を叫

びたいものです。室井様、川下様前川様、その他同好諸士のお便りをお待ちします。(女斗彦)

この頃、マゾ女性が次々に現われ、Sファンとして嬉しいことです。今まではグラビアとか、小説にてなぐさめてきましたが、一度でもいいから若い女性を思い切り責めてみたいと思っているサド男です。思い切り責めるといっても、吊りとかムチ打ちの様に過度の激痛の生ずる様な責めでなくて後手に縛り、乳房を責め、又アヌス責めを施してみたいのです。経済的には役立ちませんが、貴女の信用又は意志に反する様な行為は致しません。M女性からのお便りお待ち致します。真面目な気持ちでM女性求めておるのですから、ひやかしいはいいです。誠意を裏切る様な行為はお互いにしないという約束致します。会って頂けたら、お互いに理解できると思います。貴女よりのお便りあり次第、くわしいことはお話し致します。編集部の皆様早く読者通信に載せて下さい、お願い致します。最後に奇クの発展を心より期待しております。(東京八かずふみ)

大好評！浣腸特集

浣腸マニア東浦ひかるの真摯的浣腸フォト、圧倒的人気の東浦ひかるのポーズをくらして下さい。

浣腸実施中

略号

(かみ)

大手札

三枚一組

三〇〇円

モデル

東浦ひかる

強制空気浣腸

略号

(かく)

大手札

三枚一組

三〇〇円

モデル

東浦ひかる

百CCの浣腸

略号

(かな)

大手札

三枚一組

三〇〇円

モデル

東浦ひかる

浣腸責の極

略号

(かむ)

大手札

三枚一組

三〇〇円

モデル

東浦ひかる

特選緊縛フォト

強烈エビ責

略号

(えひ)

大手札

三枚一組

三〇〇円

モデル

水本 茂美

ゴム衣緊縛

略号

(みす)

大手札

三枚一組

三〇〇円

モデル

水本 茂美

全裸の羞恥

略号

(みる)

大名刺

五枚一組

三〇〇円

モデル

田原美佐子

全裸後手縛

略号

(みに)

大名刺

三枚一組

二〇〇円

モデル

平野 笑子

股間しばり

略号

(みと)

大名刺

五枚一組

三〇〇円

モデル

絹川 文代

寝台の全裸

略号

(みほ)

大名刺

三枚一組

二〇〇円

モデル

平野 笑子

全裸股間縛

略号

(みへ)

大名刺

五枚一組

三〇〇円

モデル

絹川 文代

私は、二十七才のバーのホステス。年の割にはお客様に若く見られるのですけど、それもその筈、だって、もう十年近くもこんな楽しい『男いじめ』をやっているんですもの。お店では、なんだかんだと威張っている男を足の下に土下座させて、ヒイヒイ泣かせる面白さ。何よりの若返り剤だと思いますわ。この奇巧の読者通信は毎号楽しみにしているのだけれど、マゾの皆さん、ずい分空想好きの様ね。本当はお尻で顔をふさがれたら窒息してしまうことよ。私の犬には最高二分、余り気安く「お尻の下に敷いて下さい」なんて言わない方がいいわよ。マゾの男一人一人に本当のことを思い知らせてやろうと思うのだけれど、いろいろの事情もあるからね。今の犬にあきたら、そのうち新しいのを見つけてるつもり。でも、今いじめをやっている犬は、なかなか変わったこともやるから、当分可愛がってやるつもり。せいぜい夢ばかり見ていなさい。そのうち、判るから。又お便りするわね。（東京都品川区八山内洋子）

私儀、貴誌の熱愛読者です。女体切腹文学の愛読者です。貴誌の

女体切腹写真の熱愛者、毎月の貴誌の出版が、何よりも生甲斐にさえなっています。さて、礼讃の言葉はこの位にして、注文を一つ、女体切腹のモデルを、もう少しふやしていただけたらと思っております。第一、絹川嬢のが割に少い。大塚啓子嬢の写真も、顔、素顔をもっと見せていただきたいと思えます。だけど今月号の大塚嬢の手記「いけにえの幸福」は楽しい。珠玉の短篇と驚きました。切腹の写真の感想にふれていないのが残念。第二、ダブル切腹、これが一時でピタッと打ち切りになってしまった。これは惜しいことです。もっと分譲写真でよいから発表して下さい。今月号の女体自決「刺し違え」はこの意味で前進を意味します。第三、妊婦の切腹写真が一時も早くほしいものです。色彩画の切腹（勿論女体）がほしいのですが、何とかありませんか。第四、女体切腹愛好者の親睦団体がほしいのです。喫茶店（東京）と契約して、連絡ないし話し合いの場所がほしいのです。浅草に「猯奇」というバーがあります。貴誌に關係ありますか。この様なバーか喫茶店を貴誌は広告に載せてはいかがですか。貴誌に一般広告

三条春彦画

極彩色印刷

時代物責絵巻

画帖

詳細解説付 八枚 一組 三〇〇円 略号「時代」

のないのが、貴重な存在ですが、多角的発展という意味で、これらの方向を開拓されるのも（難しい問題ですが）一策かと思えます。例えば貴誌に住所氏名を登録した者に月一回、今月はあのバーに行ってみろという風に連絡するので、それが大変ですから、貴誌上に何んとなく広告という形式でもよいから喫茶店の名前を掲載する。登録者には登録の時、その旨書面で規約を渡す。登録料として一年五百円位入会金の名目で徴収する。後は貴誌はノータッチで、これはと思われる喫茶店に貴誌を送付してあげれば、貴誌を買い損ねた様な場合大変たすかります。我々はそこで楽しく遊べます。喫茶ガールにも、それとなくわけのわかる人も一人二人居る事でしょ。我々同志には、氏名厳秘の方が楽しいと思います。誌上で読者の賛否を問われては如何ですか？お互いには分らないようにして下さい。（長浜良一）

大変御無沙汰いたしました。私佐川奈津子でございます。その節は全国の津々浦々から熱心なマゾファンのお手紙をお寄せ下さって本当にお返事のしようもない程で只々驚きいるばかりでした。いくら、私でも、一度に数十人の方から、奴隷にしてくれと言われても困りました。あれから、三人の奴隷志願者を選び出して、只今使用中ですが、沢山の中から選り出されただけあって、一応私としては満足しています。人手不足の折柄、このような奴隷男を使っていることは、大変当を得ているようで面白いアイデアだと、喜んでおります。選に洩れた方々には、お気の毒でしたが、無報酬で女の人に酷使されてもいいということが徹底したら、案外、多くの人から注文があると思います。私も時たま、お友達に話すが、誰も、本気にしないで冗談だと思っ

いますか、だって。げんに私の家には三人もの新しい飼いの殺しの派出夫がいますのよ、と、いったっ

【最新版分譲品案内】

相撲 略号

大手札 五枚一組 五〇〇円

モデル 東浦ひかる

雲斎の相撲をほちきれそう
な若々しい裸身に締め込んで正
面、背面、側面、或は両股を開
いた蹲踞の姿勢など、相撲を
締めた娘の裸姿をあますところ
なく皆さまの眼前に晒した女
体。フット。従来の六尺から一
歩前進した狙いの趣向。

吊り打ち 略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

両手を鴨居に吊られた全裸の
関谷富佐子夫人。これこそ夫人
の待ち望んでいたムチ打ちのポ
ーズである。眼前に無防備でさ
らされた豊満な臀部に激しく炸
烈する革ムチ。吊り縄をねじる
ようにして悶え、泣き、哀願す
る夫人の被虐の表情。全くこれ
こそサドフットの圧巻である。

裸女血闘場面写真

大手札 五枚一組 五〇〇円

略号(らは)

モデル 絹川文代、大塚啓子

て誰もわかってくれません。いず
れ、奴隷男の生能について御報告
して、お礼にかえたいと思います

黒フンドシをきりりと締めた
二人の裸女が、必死になって渡
り合い、遂に倒れた一人に対し
て脇差でもって咽喉元に止めを
さす凛々しい姿を血紅を使用し
て写真化した夢幻的な美しさと
惨酷美溢れるフット。勝誇った
美女と血を流して倒れる可憐な
乙女との血斗交響楽。

介添切腹 略号

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 甘木春子 外

切腹マニアの読者の提供によ
る野外切腹フットの第二弾、柔
肌を切る方も切られる方も痺れ
るような恍惚境の中でプリプリ
と切りさばかれてゆく切腹プレ
イのシーン四カット。

股間縛法悦境裸身 略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 絹川文代

素晴らしい美しさと均整のとれ
た肢体に厳しく黒縄が喰い込む
全裸の股間縛。足の指先に至る
まで溢れる色気を漂わせたとっ
ておきの秘蔵品。入手して絶対
悔いのない完全無比な緊縛フ
ットをどうぞ。

が、今のところ、男たちをいじめ
るのが面白く、それに三人の奴隷
たちも仲間があるので、愉快らし
く、私を女王様として競争で仕え
るので、文章の書く暇も気持も起
ってきません。夜がおそい商売な
ので、余りペンを持つ機会がない
からでしょうか。久しぶりのお便
りで御挨拶を申し述べました。(大
阪市八佐川奈津子)

○
古老の昔話に女相撲の色々な様
子等聞かされて幼いながらの空想
をする様になってもう二、三年。
一度実際に見たいものだと思っ
ていた処、友達より佐賀県伊万里市
に伝統的に存在する、女相撲があ
ることを聞き、先頃訪ねてしまし
た。市の観光課へ、その旨申し出
た処、快く応じて色々話してくれ
ました。その大要は「伊万里市
波多津に伝わる女相撲は、秀吉征
韓の旅情を慰めるため始められた
もので、当時より四百年の伝統を
誇るものであるが、現在は若い女
子等が集団的に大都市へ就職する
ようになり、力士の数もめっきり
少くなり、年中行事としては開催
されておらず特別の市の行事等の
時の余興として少数の力士に依り
僅かにその面影を止めている」と

語られました。この様な傾向はプ
ロ、アマを問わず全国的なものだ
ろうと思うと、女相撲ファンとし
て淋しきこと限りなしです。東京
の村田武子様、A子様、新潟の石
山正枝様、現在まさに消えなんと
する女相撲の灯火を後世に伝える
継承者として、どうぞ現在の気持
を失わないで下さい。奇ク誌上を
拝借して、心からお願ひ申し上げま
す。知り合いの女性に女相撲につ
いてのこの様な気持を話した処、
ある程度、力の入った思いきった
プレイが出来た迄は女性ばかりの
中で稽古に励まないと恥しさが先
に立ってうまくゆかないだろうと
の事でした。一人は二十八才の奥
様で、もう一人は十九才のBGの
女性で二人共大の相撲ファンで北
葉山、栃光のファンです。相撲は
巾五寸、長さ七尺の晒を買って
きて袋縫いにし、片方の端を二尺
五寸位残し立褌に当る処とし、残
り部分に長さ四尺五寸、巾二寸五
分の帯芯を入れて全体をミシンで
刺したものを着用しているそうで
す。変った稽古相手をほしがって
いる様ですので、村田さん、A子
さん、石山さん、友達になってあ
げて下さい。東京の岡平様、日夜
女相撲ファンの為に御奮闘下さい

まして有難うございます。会員制でも何でも宜敷いのです。虫の良いい話ですが、女相撲開催の為御奮闘をお祈りします。同好者の便り待ちます。(山口県豊浦町八伊東康雄▽)

○ 小生は三十五才のS男性、奇クを愛読いたして早や十年になります。この年月、妻とはいろいろとプレイは致しておりますが(妻はMではありません)一度変ったMの女性と心ゆくまでプレイ致したく、今まで読者通信欄に目を通しておりましたが、M女性の方が大阪近辺と指定される方は案外少く住所その他なかなか思うようには参りませんでした。どなたか、私とプレイをしてみようと思えるM女性の方はいらっしやいませんか。貴女の御希望通り海老貴、乳房責、吊り責め、股間縛りにして差し上げます。そう考えただけで小生の思ひは、早や貴女を全裸にして施したあらゆる緊縛の姿が浮かんで消えてゆきます。是非我と思わんM女性の方、遠慮せず名乗りを挙げて下さい。心から御待ちしております。(大阪市八馬場弓夫▽)

貴社益々御隆盛の段お喜び申し上げます。私は梨花悠紀子さんの大のファンで、彼女が貴誌に登場して以来、毎月欠かさず貴誌を購入してしております。グラビヤ・フォトで彼女の姿に接するのを唯一の楽しみにしております。ふと街で見かける娘さんの中でも、梨花さんは一きわ目出った近代的美貌の、誰かの言われたように有馬稲子か誰かに似ているくらいです。このような美しい娘さんが、縄目にもだえている姿が、目の前に見ることが出来る編集部の方々が羨ましいです。私達は只誌上の写真で眺めているだけです。梨花さんの熱烈なファンになればなるだけ、一度お逢いするだけでもお逢いしたいと思わずにはいられません。縛られて下さったこの上の幸福はないのは勿論ですが、私は、グラビヤを眺めながら、いつも、そんなことを考えたり、又自分の手で彼女にあらゆるポーズをとらして、特写している夢を描いたりしております。(山口県下関市八南都庄作▽)

○ 病後養生のつれづれに読み始めた奇クですが、病いは癒えつつある現在、今度は奇クに病みついて

ままならぬこの世ならず、ままならぬ我が身に驚ろいたりあきれた。さて、僕の病気は胃潰瘍の手術をした事です。たぶん多酒多飲の結果だろうと思いますが、手術後二年近くも半病人の態で過さねばならなかったとは、ずいぶん不運な目にあったものです。然も、人生青春の真盛りです！その間、時折り買い求めて読んだ奇クは、僕をある時は慰め、ある時はいらだたせて夢とも幻ともつかぬ界を彷徨させました。そして今、酒を断たされて、新しく登場したのは言う迄もなく女体。奇クファンの貴女達が僕を虜にした。今思えば、入院中の出来事はどれを取りあげても貴女達を狂喜せずにはおかない事ばかりでした。毎日注射針の雨、手術台のはりつけ、ガス麻酔、鼻孔から胃中の迄通される細いゴム管、舌をかまさない様にくわえさせられるゴムの塊、縦一文字の二十糎近くもの切腹、決して身を起す事の出来ない程、腹部よじって縫い合わされた無残な縫糸の波、もうろうの意識、浣腸、導尿、その他赤児さながらの諸々の取り扱い、小さなベッドの軟禁の世界。ああそして一生消える事のない腹部のこの傷あと。如何で

東浦ひかる強烈縛特集

第一集 略号(うら)

後手吊り足挙げ縛り

大手札印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

第二集 略号(うり)

一二つ折りエビ責め

大手札印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

第三集 略号(うる)

足挙げ椅子責め

大手札印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

す？ いくらか貴女達の御気に召したものがありませんか？ 処で本人である僕はといえば、その時全く生死の谷間を迷よっている気持で、残念乍ら、現在感じ得る様なすばらしい情感にひたる事は出来ませんでした。ただ、浣腸の時だけは、あの苦るしさの中に羞恥のあまり顔の赤らむ思いでした。そして、入院時の恐怖から一日も早く逃れ去りたいと思っていたはずが、体力の回復と共に、当時の残虐な場面の数々が、奇クに載せられた写真や記事と重なり乱れて日々追憶を新たにしています。だ

大好評！ 妊婦緊縛秘蔵写真分譲

ここに分譲いたします妊婦写真は、読者有志の提供になる二十二年の美貌の若妻をモデルとしたものであります。本誌上に広告以来圧倒的なお申込が未だにあとを断ちません。膨満した便々たる腹部は正に妊婦マニヤ垂涎のものであります。緊縛マニヤにとっても、決して見逃すことの出来ない逸品といつて過言ではありません。是非一見をおすすめいたします。

○妊婦の股間縛（九カ月）

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

児玉昌子 略号（にふ）

○妊婦の股間縛（六カ月）

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号（にと）

○妊娠八カ月の股間縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

児玉昌子 略号（には）

○妊娠八カ月の縛り

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

児玉昌子 略号（にあ）

○妊娠五カ月の緊縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号（にこ）

○妊娠前のスード縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号（まさ）

○妊娠初期の

緊縛とヌード

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号（ぬろ）

○以上の各組の詳細なる解説は六月号、五月号、四月号、に発表してあります。尚、四月号には瀬沼氏の「妊婦の写真を手に入して」という通信も寄せられています。

が、何んと快よい追憶だろう！

新しい生命の蘇りは貴女達の肉体と共にやって来た。限らない欲楽の饗宴も貴女達が居ればこそだ。

貴女達が例えSでもMでも、女体

耽美者の僕には一向構わない。この世で最も美しい曲線とは、女性

の肉体以外に何があるだろう。貴女が苛めて欲しいというなら存分に

に苦しめるだろうし、貴女が奉仕を望むなら、ひざまづきもしよ

う。要は僕は貴女達をこよなく愛するからだ。僕はいつもいつも、

貴女達がいつ迄も若く美しくある事を祈っています。水野淑子様宛

の通信記事を見て驚きました。残念乍ら僕は、この二、三カ月奇ク

を購入してないので彼女がどんな記事を書かれたか知りませんが、

余程大たんな告白をされた事は通信欄の反響を見ておのずと察

せられます。彼女宛の通信記事の活字迄が歓喜と興奮に打ちふる

えているようですね。きつとすばらしい、すばらしい女性なのでし

よう。今後は僕も奇クの各号を欠かさず読みますから、この胸の高

鳴る通信記事をまたまた何卒。伊集院様オミソによる排便とは、卓

抜なる思いつきですね。沢田女王様、女王様と御呼びしなければ今

にもムチが僕の頭上に飛んで来そうですね。数少ない貴女様の様な存

在はさだめし世の男奴隷志願者達を狂喜させずにはおかぬ事でしょう。

私の若さと美貌を誇り守るため」とは大変気に入りましたね。僕とて若い美貌の女性を十二

分に満足させたい気持は一杯ですが、残念乍ら、貴女に負けず劣らず

の絶世の美貌の持主（本当です）なので、足蹴にされてもし歪

んでしまったら、それこそ大変、その上この細い腰をへし折られたら……さあさあ鎖につなげられないうちに急いで逃げだそう。悪しからず女王様（京都八早瀬伸一）

○ 青葉薫る大変に良い気節になっ

てきました。貴誌の皆様が相変らずの御活躍嬉しく存じて居ります。私は貴誌が最近に取り上げら

れた生首シリーズ（特に女の生首）に深く敬意を表する生首マニアで

す。昨年の十二月号の「女武者の討死と生首」の資料に時には貴誌

をとり出し読んで楽しんで居ります。私も切腹マニアであり生首

マニアであり、自分と妻と二人、小生が切腹を家内が介錯人になり

又妻が一糸まとわぬ裸身で切腹、小生が介錯人になって妻の細首を

パッサリと言ったプレーを楽しんで居ります。幸いに小生がDPやですのでセルフタイマーで写真を撮ると、妻の首をモニタージュでさらし首にして楽しんで居ります。写真も数葉ありますので近々貴誌に送り、出来れば貴誌のグラビアに出して頂きたいと思ひます。又同志があれば妻の首を他人にパッサリ(勿論プレー)といった所を楽しんだり写真に写したりしたく思つて居りますが、なにしろ田舎故そんな同志もなく残念です。名古屋附近で同志がありましたら御紹介下さい。又貴誌に望むことは女の切腹も結構ですが、介錯人の無い切腹など意味がないと思ひます。女が切腹をする後に刀をふりかぶった男(女でも良い)等。又荒むしろに引きすえられ、前には首穴があり(又は穴は無くとも首桶でも良い)青白い細首を差し伸べていまかいまかと待つ女、後にたくましい毛づねを出した男が刀を引さげて立つ。だんだん刀が上にあがりやがてエイッ!と女の首が血しぶき上げて飛ぶ。首の無い女の死体特に下半身のけいれん等を組写真で写したらさぞ生首マニア(又切腹マニアたちが貴誌に通じる)切腹マニアたちが貴誌に

拍手をおしまないでしょう。私はこうした組写真を撮そうと思ひ妻をモデルにほぼ完成しましたが、貴誌の美しいモデルたちだったら、どんなにかすばらしいでしょう。勝手なことを駄筆で書き並べましたが悪しからず。生首シリィズを毎号でも、続けて頂くことを希ひます。(岐阜県恵那郡八水野弘)

東京の三原康子様、六月号で貴女様の一文、胸おどらせて拝見致しました。高校時代、男の子の顔をスカートの中に入れられたとか、スカートの中に漂うかぐわしい芳香にむせんだ、その男の子がうらやましい限りです。又、男性をトイレの代りに使つてみたいとお言葉ですが、実際に女王様のお尻の下敷になつて、人間便器になりたいと願う男性は意外に多いのです。小生も出来れば、その一人なのですが、今のところは一寸実現不可能なので、せめて貴女様が御使用済になられたちり紙でも恵んで頂ければ、どんなに素晴らしい事でしょう。かぐわしいかおりを、鼻一杯に吸ふことのできる自分を夢みつつ、この一文を捧げます。(京都八・S・T生)

●本誌最近号在庫案内

本誌の最近号は左記の通り在庫しておりますから、お申込次第急送申し上げます。ここに記載した以前の号は、全部売り切れです。送料は当方にて負担いたします。

昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

御指導下さい。素直に絶対においてつけには背きません。それからサディストの女性の方とも、ぜひおつきあいしたく思います。やはり、私はマゾヒストなので、

よく思いきりいじめられて、屈辱的なめにあわせられたくてたまらなくなります。どんな、むごい、口では言われぬような恥ずかしいめにあわされても、絶対に泣いた

りこばんだりしないつもりです。(危険なことはいやですが) 奴隷にされたり、生きた壺として使用された方がいいです。思いきりいじめられたいと思います。そして

最後にそつとあやしてほしいと思います。外国では断食して抵抗する捕虜には肛門から栄養食を注入して死なせないようにしたり、フランスでは風邪薬で肛門から挿入

【新版】女体緊縛コレクト・フォト集

E組八十選 大手札印画紙(9×13) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ(愛川)
E 2	仕置を受ける裸身(大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌(愛川)
E 4	ムチに耐える美肌(関谷)
E 5	豊臀と豊胸しぼり(愛川)
E 6	捨身の後手観念像(大塚)
E 7	足から眺めた裸身(水本)
E 8	全裸エビ責尻強調(関谷)
E 9	ハリツケられた娘(大塚)

E 10	強烈後手高手小手(愛川)
E 11	責め抜かれた疲労(梨花)
E 12	逆エビにもだえる(大塚)
E 13	拘禁された美囚女(大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛(愛川)
E 15	海老責に泣く足首(大塚)
E 16	両足吊りの短黒髪(愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘(大塚)
E 18	美しき全裸股間縛(大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ(関谷)
E 20	ベッドにもだえる(関谷)
E 21	身体中に強烈な縄(愛川)
E 22	放置された海老責(東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる(東浦)
E 24	ローソクで責める(大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ(絹川)
E 26	足指先に漂う媚態(関谷)
E 27	後手吊り正面裸像(関谷)
E 28	嚴重な高手小手縛(東浦)
E 29	女体の全部を晒す(愛川)
E 30	激しいムチ打の果(関谷)

E 31	若肌も縄にくびれ(東浦)
E 32	投げ出した脚線美(絹川)
E 33	脐中心の腹部緊縛(梨花)
E 34	セーラー服の哀歓(梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部(関谷)
E 36	仰向けの囚女の女(梨花)
E 37	制服の女学生縛り(梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻(関谷)
E 39	痛打にくねる裸身(関谷)
E 40	乳房に加える金具(大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔(大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む(大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身(梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶(大塚)
E 45	敷布の上ののびて(絹川)
E 46	鼻いじめのアップ(梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄(東浦)
E 48	縄にくびれる裸身(東浦)
E 49	椅子に晒された女(大塚)
E 50	脐そうじをされる(大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う(絹川)
E 52	火のついた煙草責(四方)
E 53	踏みつけられた胸(梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘(大塚)
E 55	手足猪吊りの美態(絹川)

E 56	囚女の美しき緊縛(絹川)
E 57	諦めた観念全裸像(水本)
E 58	縄にもだえぬく姿(絹川)
E 59	黒髪を吊られた女(大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ(絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身(竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す(竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目(大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会(絹川)
E 65	野外の後手宙吊り(梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中(四方)
E 67	室内の後手宙吊り(梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態(梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ(大塚)
E 70	足の裏ハネ操り責(梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み(竹本)
E 72	野外の逆さ吊り責(梨花)
E 73	梯子責にあう美女(梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる(梨花)
E 75	娘十六縛り加減(花坂)
E 76	踏みにじられた顔(大塚)
E 77	逆エビに反る足先(大塚)
E 78	両手吊りのお仕置(絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻(梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像(大塚)

する薬があるとのこと。そのような色々な肛門遊戯を他人の視線の中で、又、他人（特に年長の異性）に強制的にさせられたら素晴らしい事でしょう。そして又自分も人にしてやりたいと思います。（東京都杉並区八春野敏次V）

メトミファンの皆様、お元気ですか。私はKK誌の愛読者ですが最近メトミファンの皆様からの投書が多く掲載され、嬉しい限りです。尊敬する雪崎京人、円山景三両先生が執筆を断たれてから大分経ちましたが、是非共健筆をふるって下さい。また連続フォトなど三月に一度程度は是非のせていただければ、沢山の皆様から好評を得ることでしょう。お願い申し上げます。（東京都下谷ハU・BよりV）

○ 小生は女褌マニアであり、いつの間にか貴誌ファンになってしまいました。小生が女褌に興味を持つようになったのは、七、八年前浅草の見世物で素裸に褌をつけた女相撲やS劇場にて褌を締めた女剣劇などを見てからです。特に印象に残っているものは、横浜のC劇場にて見た女剣劇で、日本髪に

着物姿の昔風の女が刀を持って仇討ちする劇なのですが着物の下には素裸に白の六尺褌を下腹部にキリッと締め上げて、大いにその褌美を振舞うシーンと着物をまくり上げて下半身は褌一つとなり、大の男を組み伏せ大胆にまたがったその時の褌美たるや、とても美しく魅力を感じ、未だに眼中より離れようとはしません。このようなものを時折見ている中に女褌マニアになってしまったようです。日本の女性が六尺褌を上手に締め上げた、その姿はどんなパンティ姿やビキニスタイルよりも美しく思えてなりません。色々と書きましたが、今後共貴社の発展をお祈りすると共に、貴誌に大いにこのたぐいの写真記事等を掲載される事を望んでいます。（女褌ファンU生）

○ 全国の奇ク愛読者の皆さん、はじめに読者通信に仲間入りさせていただきます。昨日、五月号を購入し、読んでゆくうちにペンをとることを決心した次第です。私は技術者なのですが、仕事をはなれば皆様と同じ奇クの愛読者なのです。もう奇クの魅力にとらわれてからかなり月日がたちますが、

分譲品御注文の栞

○代理部の分譲品は、すべて前金にて御注文願います。直接販売並に代金引換はしておりません。
○御送金は、現金書留（封筒は一枚三円にて局で売っています）、小為替、定額小為替（小額のときは御便利です）、振替（用紙は郵便局に備えてあります）、切手代用（五円、十円など小額のもので絶対に紙にはりつけないで送り下さい）等を御利用願います。
○御注文品は、雑誌では何年何月号、或は略号の付してあるものは略号、フォト類はすべて略号をお書き下さい。（品名だけですと略号との対照に手間をとりますから略号だけお書き下さい）
○送料は日本国内に限り当方にてすべて負担させて頂きます。外国便は実費御負担願います。
○局留にて御受取り希望の方が最近大変ふえてきておりますが、左記の点御留意願います。御注文の際、お受取りなられたい郵便局名（特定局でも可）とお名前とを御連絡下されば、当方では御指定された局宛発送します。別に局からは通知がありませんから、到着している日頃を見はからって、その

局へお出向きの上、お受取り下さい。局での郵便物の留置期間は十日間です。十日を超過すると差出人に返戻されます。お名前は仮名にても差支えありませんが、認印（市販されている）の必要な郵便局もあります。
○御注文の宛先は阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社です。（今度郵便局からの通達で、必ず私書箱番号を明記するよう依頼されましたので、私書箱第十四号とお書き願います。）
○フォト類は原則として密封の上第一種便（封書扱）としてお送りいたします。但し大型にて破損の虞れあるものはアテ紙をした上で第五種便にてお送りします。雑誌はすべて第三種便です。
○尚、御注文の際、若し第二希望品がございましたら添記頂けますと、万一、分譲中止、品切などの時迅速に処理できて助かります。
○分譲品の新しいものは毎月新版案内として掲載しておりますが、御希望の趣向がありましたら、お申出下されば幸いです。
○宛先は、必ず楷書ではっきりとお書き願います。（肩書きがありましたら、それも忘れなく）
○金額にして五千円以上まとめ御注文の節は、金額に応じて優秀フォトのサービス品を贈呈させていただきます。

次号(八月号)は六月二十五日に発売いたします。

その最初は学生時代に運動部にいた時、合宿練習の夜、悪友の一人がもち込んできたのがはじまりでした。でも今では悪友どころか、彼に感謝したいぐらいです。最初のうちは奇クに出ている縛られた女性の写真や画に心を躍らせていた私でしたが、もともと画をかくことの好きな私なので見様見まねで縛られた女の人を描きはじめてました。編集部にて二、三枚送りましてので奇クに載せていただけましたので奇クに載せています。私の体の中にはSの心とMの心が半分ずつ住みついていて美しく美しい女の人を縛り上げる夢をペンにあらわしたすぐあとで、その女性のほげしい復讐にあえぐ自分を想像してしまうのです。でも今日まで女の方と(男性とも)プレイした事があります。ただ一度、あるバーのホステスとプレイできそうなチャンスがあったのですが、私に勇気がなく、得がたきチャンス逃がしたのが残念でなりません。次にそのバーへ行った時は彼女は店をやめたあとでした。以来、チャンスにめぐまれず、専らペンを走

らせることで満足している有様です。私は男兄弟の中に育ったためか女性の持物に心を奪われます。特に、衣類にはよろこびを感じます。美しい和服は素晴らしいです。最近の洋装の色彩豊かな下着類にはわれを忘れてしまいそうです。坂本和子様、あなたの下着が風にはためいているなんて全くだいすね。私も未熟者です、奇クを教科書にして二人で勉強しませんか。まだ中学生の頃に従姉に無理やりに女装させられたことが一度あります。その後学生時代にもパーティーの余興に女装したことがあり、忘れられない思い出になっております。どうか全国の奇クファンの経験ゆたかな皆さん、SについてもMについてもよろしく御指導いただけることをお願いします。特に京都近郊の御婦人の方の御協力と御指導のいただけたことを祈っております。連絡先は奇クに知らしておきます。(京都市八中根克彦)

泉佐野市の坂本さん、奇クで貴女を知り、是非文通したくてこれ

を書いていきます。小生も奇クを見始めてからまだ一年位、古本屋で何げなくとり上げたのが始まり、以後ずっと、奇クを愛読しています。小生、中学時代に小説家を志し、数編の自作品を持って上京して誰かの弟子にでもなろうかと決心した時もありました。又、その気持は奇クを見る前までずっと持っていました。奇クに投稿してからその気持ちは一ぺんに吹き消されてしまいました。というのは数カ月前、通信として二度のったきり、世の中はうまくゆかないものと痛感しました。貴女も何か書こうとなさっている旨、素晴らしい事だと思ひ、今からその作品に期待しています。体験談から書かれることも賢明な策、御成功を祈っています。寮の窓の外には多くの下着が陳列されているとの事、でも貴女のが大部分を占めているんじゃないですか？寮の外を通る者もきつと驚いていることでしょう、それとも喜んでいるかな？どちらにせよ、我々観ることの出来ない者は空想でしか許されないので残念……。貴女が書店で奇クを買う時勇気がいらませんか？小生は少々必要とします。近頃になつて表紙もよくなつて来ましたが、以前は随分困りました。人が居ないのをよく見はからつてからポケットのごみと一緒に金二百円を出すのは今でも変りません。別だん人が居ようと居まいと気にかけることもないのですが、やはり……。何かいい方法はないものかと考慮中、聞けば寮生活も随分楽しいらしい、貴女もきつと幸福な毎日を送っておられることでしょう。その日々が続くことを切望してやみません。黄色い口ばしの青二才が貴女の御返事をお待ちしております。(京都八青二才)

読者の方々の強い要望もありますので、各地に於て各種趣向の方々の会合を催したいと思つております。この種の会合、座談会、展示会、撮影会などに会場を提供していただける読者の方がございましたら、編集部まで御一報賜れば幸いです。恒久的なものでしたら尚有難いですが、臨時的なものでも結構です。暫くモデル志望者の募集を行いませんでしたが、気候もよくなりましたので、大々的に撮影を実施したいと考えます故、モデルとして御希望の方がございましたら、お申出いただきたくお待ちいたします。(編集部)

新版分讓品案内

分娩後縛り

略号

(につ)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 児玉 昌子

妊婦のヌード縛りと股間縛りとでファンの大好評を博した児玉昌子さんの分娩後の豊満な乳房や臀部、縮小した腹部を、あの妊婦フットと比較して頂くために、ここに特別提供いたします。

分娩後股間縛

略号

(にて)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 児玉 昌子

分娩によって縮小した腹部は股間縛によって更に痛々しくくびられていく。しかし、さすがに乳房だけは豊かに息づいて、経産婦の貫禄を示している。妊婦の頃の腹部と分娩後の腹部を同じ児玉昌子という女性によって具さに比較して下さい。

相撲褌着用

略号

(すま)

大手札 11枚一組 一〇〇〇円

モデル 大塚 啓子

素裸になった啓子嬢が相撲褌を股に当てて締めてゆく有様を順を

乳房いじめ

略号

(とき)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

ぶっくりとした東浦嬢の乳房は何重にも掛った縄で一層ふくれ上っている。この乳房に加えられるいたぶりの数々。ヘヤーブラシで紅の乳首が無惨に痛められる。

六尺褌

略号

(ろい)

大手札 五枚一組 四〇〇円

モデル 東浦ひかる

蒲団に悶ゆ

略号

(なき)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

悦虐の果て

略号

(なみ)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

椅子エビ責

略号

(おき)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

六尺褌縛

略号

(ろは)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

東浦の切腹

略号

(えん)

大手札 五枚一組 四〇〇円

モデル 東浦ひかる

浣腸シリーズ

略号

(れち)

大手札 12枚一組 一〇〇〇円

モデル 梨花悠紀子

弓吊り責め

略号

(つき)

大手札 二枚一組 二五〇円

モデル 梨花悠紀子

手足宙吊り

略号

(つた)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 梨花悠紀子

強烈エビ縛

略号

(もい)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

乳房責の苦悶

略号

(もろ)

大手札 二枚一組 二〇〇円

モデル 関谷富佐子

全裸ムチ打

略号

(もた)

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 関谷富佐子

六尺褌の女

略号

(くろ)

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 関谷富佐子

強打に泣く

略号

(むち)

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 関谷富佐子

レインコートの拘束

略号

(いろ)

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 大塚 啓子

ゴム布に包まれて

略号

(こま)

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 梨花悠紀子

狙われた和装の娘

略号

(ねい)

大手札 12枚一組 一〇〇〇円

モデル 愛川 悦子

裸女縋帯!!面

略号

(ふく)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

今月の新版分譲品

足挙開股責

略号
(あけ)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 梨花悠紀子

辻村隆氏の手によって高々と天井近くまで引き上げられた片足。これ以上は開けないという程まで真一文字に裂かれた両の太股。分譲品用として特に撮影したSマニヤ待望の股裂きフォト。

猪 吊 り

略号
(いの)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 梨花悠紀子

両手と両足を一緒に一つに括りまるで四つ足の動物を釣り下げるようにぶら下った梨花嬢。全身を無防備の中に放置して、浣腸、擦り等々あらゆる責めの触手にさらしている吊り責の法悦境

苦悶の裸身

略号
(くせ)

大手札四枚一組 四〇〇円

モデル 関谷富佐子

色気の漂う肉づきのよい若妻が両手を鴨居に釣られて逃げるこ

の出来ない裸身をさらしている。張り切った肌に炸烈する激しいムチに全身を締めねじめるように悶えさす関谷夫人、苦痛に耐えかねたその甘い表情は、悦虐にむせび泣く感極ったエクスタシーか。

バンド晒し

略号
(はと)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

アテゴムのボタンも鮮かにメンバンドを穿かせられているが、悲しくも後手に括られているため手で掩ってかくすことすら出来ないで、只徒らにあらわなバンドをさらしているばかり……。

バンド見せ

略号
(はみ)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

自らの手でズロースを脱ぎバンドを穿くことを命ぜられた娘は、羞しさに真赤になりながらも、男の目の前ではき替えた。自由のきく手でアテゴムを触りながら恥じらいを見せた月経帯のムスメ。

責め衣

略号
(せめ)

大手札三枚一組 三〇〇円

読者提供になる特製の責め衣を無理矢理着用させられて緊縛されハチ切れる柔肌を盛り上らせた奇妙なポーズの連続。

踊り子緊縛

略号
(りこ)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 絹川 文代

キャバレーフロアーで、ほんさつきまで踊り狂っていた踊り子が控え室へ帰ってきた途端、後手高小手に縛り上げられて安楽椅子の上で開股しはりにされているその惚々とする脚線美。

イルリガートル

略号
(いるり)

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

モデル 梨花悠紀子

一〇〇〇CC入りのイルリガートル、挿入便器、オシメ、オシメカバー等にとりかこまれて、自らの手でイルリガートルの嘴管から多量の薬液を注入し、激しい便意にもだえ苦しみながらオシメを当ててカバーを着用するに至る連続場面をキャッチしました。

太い浣腸器

略号
(かふ)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

普通ガラス製浣腸器といえは二十CC、大きくとも三十CCであるが、これは又一〇〇CCという馬鹿でかいシリンドラーを握って自らの手で浣腸を施すという、浣腸マニヤひかるの浣腸ポーズ

エネマ挿入

略号
(えね)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

中央のゴム球を握ったり放したりすると一端の嘴管からは激しい勢で水や空気がほとばしる。他端を浣腸液のコップに入れると忽ち悪魔の管と早変わりするのだ。エネマの嘴管を挿入するに至る二枚のフォトと挿入し終った一枚のフォトの組写真。

月経帯責め

略号
(つけ)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 梨花悠紀子

黒メリヤスの月経帯をはかせられて、あさましくも当てゴムをむき出しにされた梨花さんが、ロープでぐるぐると高手小手に縛り上げられ、もう無茶苦茶にゴロゴロと蒲団の上をころげまわされる。

「今月の新版分讓品」

○女体争斗場面十二態

大手札印画紙 十二枚一組 一〇〇〇円

略号「おん」

モデル 春日ルミ、愛川悦子

代表的なサジスチン春日ルミ女史がバーのマダムという忙しい仕事の寸暇をさいてモデルとして登場。野性的な肢体の持主、愛川悦子嬢を相手に、組んずはぐれつの激しい争斗場面。互いに相手の急所を攻めて完全に屈伏させた上、尻の下に敷いてしまおうと全力をつくして争うシーンの数々。

○オムツの股間しばり

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号「むく」 モデル 東浦ひかる

口には頬もくびれよと厳しい猿ぐつわ、ゴムのオシメカバーの半ばはずれかけたボタンの間から浴衣地のオシメがむざんにものぞいている。胸から腹、そしてカバーの上からの股間縛り。荒々しい男の足で踏みつけられて喘ぐひかるの豊かな裸身。

○強烈責め、被虐の果て

大手札印画紙 五枚一組 五〇〇円

略号「りお」 モデル 梨花悠紀子

完全に飼育し終えた梨花嬢が吊責めやエビ責め、逆エビ責めなどにも満足せず、被虐の

終局点として誠に強烈きわまりない縄目を、全身くびれきってしまう程施され、男の手でさいなまれ足で踏みつけられ、感極まって嗚咽の叫びを挙げた数コマを生来の天性による被虐モデル梨花悠紀子の代表的ポーズとして紹介します。

○乳房いじめ

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円

略号「とお」 モデル 大塚 啓子

乳房の上下に紐をかけて、ねじり上げ締めつけ、豊かな乳房をむっくりと盛りあがらせて可愛い啓子の苦痛にもだえる顔を見る。

○強制浣腸三態

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号「きか」 モデル 絹川 文代

臀部を高々ともち上げて髪ふり乱して浣腸のポーズを無理矢理にとらされた後手しばりの文代嬢に対して、もろもろの浣腸器具が男の手によって悪魔のように襲ってくる。

○激痛！逆エビ責め

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号「きえ」 モデル 大塚 啓子

後手縛りの縄と両足首の縄とが若々しい女体がしなう程締めつけられて、その連結した縄をぐいぐいと持ち上げられる。全身は背中を二つ折りとなり、さすがの啓子嬢もその激痛に、うううと呻めきながら目に涙をためて

許しを乞う全くトリックのない迫真的な強烈な逆エビ責めのシーン四態。

○美貌の裸身に縄目

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号「きん」 モデル 絹川 文代

絹川文代の美貌にきっちりかまされた豆絞りの猿ぐつわ、一糸まとわぬ麗身に黒ずんで手垢に汚れた縄が厳しくまといつき、しなをつくって悶える表情と全身のうねりとを刻明に描写して絹川文代ファンに捧げる。

○腰元吊り責め

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円

略号「こり」 モデル 村井知可子

高島田に矢張り、白足袋姿の腰元が、一人の武士のために庭の木に、後手縛りのまま高々と宙に吊り上げられ、刀の鞘を縄目にこじ入れられて折檻される時代劇映画の一場面の如き華麗にしてロマンな被虐シーン。

○腰元間諜の拷問

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号「こく」 モデル 村井知可子

昨日までは腰元として御殿に仕えた身も、今は敵方の間諜として、庭の樹に縛りつけられ、情容赦なく白状を強いられる哀れな一人の乙女に過ぎなかった。刀を手にした侍は、庭に晒された可憐ないけにえに対して、嗜虐的な興味をもって拷問の手を下すのだった。

四馬孝画

浣腸責絵画

女体浣腸図絵

原画原寸大複写

B4判
各一枚 二〇〇円

先般、四馬孝画伯を煩して「女体浣腸嗜虐場面」(か6)を
発表しましたところ、幸いにしてマニヤの方々の共感を得まし
て相当数のお申込みを頂きました。ここに更に趣向を変えて八
枚の場面に腕を揮って頂き、華麗にして嗜虐味たっぷりな女体
浣腸図をお届けすることが出来ました。原画の味をそのままに
迫力を以て皆様のお手元へお届けするため、原画と大じ大きき
に複写しました。八枚一組全部まとめてお求めの節は、特に送
料共に一五〇〇円に割引いたします。

一、女学生

略号「かき1」

セーラー服の可憐な少女、嗜
虐的な養護教師二人に便秘を直
すためだといって、太いガラス
製浣腸器で無理矢理に浣腸され
る。上半身と足首とを縛られた
少女は、今や治療という域を超
越して、二人の男女の教師によ
って、激しい浣腸責めを加えら
れることになるのだ。

二、看護婦

略号「かき2」

美しい見習看護婦が若き医師
の実験台となって、医院の一室

で浣腸を施される。部屋の柱に
両手を縛られて抱えさせられ、
右足は柱に、左足は挙げて壁に
括られ、真白く可愛いヒッチ
を晒したまま、強烈な浣腸液を
ガラス製浣腸器によって、次々
と注入されるのである。

三、ヒマシ油

略号「かき3」

数度にわたる浣腸によっても
女が飲み込んだダイヤは出て来
なかった。今は最後の手段だと
押さえつけた口の中へ、ドロド
ロとしたヒマシ油を浣腸器の先
へとりつけたゴムの管によって
注ぎ込む。嘔吐を催しそうにな

る油剤は、彼女の意志に反して
腹の中へ流れ込んでゆく。

四、空気ポンプ

略号「かき4」

清純な乙女が捕われの身とな
って、ズベ公の手によって腸の
中に空気ポンプから空気を強制
注入されようとしている。自動
車のタイヤに空気を入れるその
ポンプは、強い力で乙女の腸内
にシュッシュと激しい勢で空
気を送り込む。やがて腹部は張
りきるばかりに膨満することだ
ろう。

五、逆吊り浣腸

略号「かき5」

両手と両膝を開いて竹に括ら
れ、両足首を吊るといふ逆さ吊
りのポーズで釣り下った美しい
女体。嘴管を受け入れる臀部が
丁度目の高さで待っている。老
人は、恐怖の浣腸器を手にして
負圧の腹部に対して強制的な注
入を行おうとする。口を開けて
この酷い仕打ちに耐えようとす
る八等身の娘。

六、大の字浣腸

略号「かき6」

二本の檣の棒に、両手と両足
を文字通り大の字に縛り上げら
れて高々と空間に吊り上げられ

た女体。今や彼女の腹の中のも
のを余まらず便器の中へ排出さ
せてしまおうと、太い浣腸器の
中へ、たっぷり薬液を吸い込
ませて、サジスチックな楽しみ
を噛みしめながら、菊花の中へ
注入してゆく。

七、強制洗腸

略号「かき7」

これから、お前のお腹の中を
すっかりきれいに洗滌してやる
うと、若い女は処置台の黒いレ
ザーの上に坐らせられ、両足首は
高々と天井から下った縄に釣ら
れた。イルリガートルから流れ
てくる薬液は、彼女の口から腹
の中へ注ぎ込まれる。胃と腸に
充滿した液体は、洗面器の中へ
吐き出させられ、再び注入され
るのである。

八、リスリン浣腸

略号「かき8」

三日間の排便を禁止させられ
た女の腹部は、ぶっくりと大き
くふくらみ、革のベルトで胸か
ら脚を縛られ、片足を宙に吊ら
れて、恥しいリスリン浣腸を拒
む術とてない。溜りに溜った彼
女の便は、激しい勢いで体外に
噴出するものも、今や時間の問題
となった。ああ、その目ざまし
い光景よ。

(昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別扱承認雑誌 第一二二号)

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、思ひ出話、或いは読者相互間の交歓文通、応答などをお寄せ下さい。誌面の許す限り、つとめて掲載いたします。